
IS いとこが如く

鎧竜機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS いとこが如く

【Nコード】

N7589V

【作者名】

鎧竜機

【あらすじ】

関西の龍を義親に持ち、そして一夏とはいとこの関係を持つ女才リ主こと郷田真夏がインフィニット・ストラトスで送る義理？と人情？の物語……

真夏「主人公であるウチをよろしゅーお願いしまっせ」

プロローグ「行き成り自己紹介や！」（前書き）

勢いで書いてしまった二作品目です。プロローグだけですが見ていただけると嬉しいです。感想待ってます。

プロローグ「行き成り自己紹介や！」

行き成りやけど、初めまして〜ウチの名前は郷田真夏五才こしたまなかや！

自分とおとんでアパートで暮らす二人家族で将来の夢はおとんとたこ焼き屋をやる事なんや。ウチの事についてはあと後お話するやと思いますからまってな〜。

まずは幼稚園のお話からお送りするで〜、ほな本編スタートや！

ここは幼稚園……そこは元気な子供達を通う活気ある場所、そこに

……

「いつちゃん！行くで！」

「おう！」

二人の子供がボールで遊んでいた。

「見ててや、これが真島はんの奥義！」

「ま、まってまなちゃん！そ、それは無理だよ！」

「え？駄目なん？」

「う、受け止められないよ……」

「でも打ち込む！それがウチの極道や！」

「怖いよ!？」

五歳児にしては恐ろしい単語を放つ女の子は足を思いっきり振り上げ……

「必殺！神室キック「パシッ」あいた!？」

突然、後ろから叩かれ、声を上げる女の子はその場で蹲る。後ろには中学校の制服を着た女性が立っていた。

「何、一夏を虐めているのだ？真夏は……」

「千冬姉ちゃん！」

「ち、ちー姉ちゃん……」

ポコッ

「はうつ!？」

「姉と呼ぶのを許した覚えはないが？」

「あつあつ……」

「ち、千冬姉ちゃん、それ位いいんじゃない……」

「はあ……一夏、迎えに来たぞ」

そう言って男の子一夏に近ずいて手を取る姉の千冬、

「うっ……」

「ほれ、行くぞ」

千冬は真夏の手を取って歩き出す、再起動した真夏は千冬に言う。

「あれ？千冬はんがウチを連れて帰るちゅう事は……おとんはまたこ焼き屋やるか？」

「ああ、またおやっさんにしごかれてるらしいぞ？」

「そうなんか？ウチもはよう腕磨かんと！」

「そうだな」

クスツと千冬は笑い、両手に弟と妹分を連れて家に帰る。

「おとんに認めてもらったら真っ先に千冬はんといっちゃんに食べさせて上げるで！」

「そうか、楽しみにしていよう」

「俺も楽しみにしてるぞ！」

「うん！任せてな！」

そう言いウキウキしながら家路に着く三人の姿は家族その物であった。

千冬はまず一夏を先に家に送った。真夏と一夏はまたねと言って別れその後に真夏の家であるアパートへと送った千冬はその時偶然、

「あ！おとんや！」

「ん？おお、真夏かいな」

「どうも、龍司さん」

そこにいたのは厳つい風貌の男がいた。真夏の父親だ。その姿はたこ焼き屋の格好である。

「何時もすまんのぉ、千冬の嬢ちゃん」

「いえ、弟の一夏も真夏には遊んで貰っていますから」

「さよか…そや店で作ったたこ焼きがあんねんこれを一夏にでも食わせたってや」

「何時もすいません」

「ええんや、ウチの娘も一夏とツレしてくれとるんや、助かるで」

「はい…」

「？、（なんやち姉ちゃんのおとんの見る目が妙に色っぽい様な……気のせいかな？）」

そんな事を考えていると真夏の父親が近ずいて来て

「よっ」

「ふあ!？」

真夏を肩に抱き上げる。真夏は少し驚いたが嬉しそうにして父親の頭にしがみつく、

「世話になったな。ほなまた」

「はい、また真夏の送り迎えの時は呼んでください」

「助かるで」

そう言つて千冬は帰り、あとに残った二人はアパートの自分たちの部屋へと帰る。

「今日は楽しかったか？」

「うん! いっちゃんが何時もウチと遊んでくれるから楽しいで!」

「さよか、そりゃよかった」

楽しそうに喋りながら真夏は父親の頭に抱きつく、

「こら、前がみえへんやろ」

「えへへ、堪忍やで〜」

「ふんっ……」

真夏の父親は少し憂鬱しそうにもどこか嬉しそうだった。

「今日ご飯は何や？おとん」

「たこ焼きや」

「今度の具は？」

「からしや」

「なんやそれ！？バツゲームやないか！」

「冗談や。今日はわたみんな家の牛煮込みや」

「ホンマか！？」

「そうや」

「楽しみや！はよ帰らな！」

「そやな」

そう言つて父親は真夏の頭をわしやわしや撫でて微笑む、

「さてまずは……」

「おとんとお風呂や！」

「言ってる側から先に風呂かいな……」

「駄目なん？」

「ええで、先に風呂にしょか」

父親がそう言うと言夏は嬉しそうにしてまた抱きつく、

「よっしゃ！はよいこか！」

「急に元気なりおった……」

少し驚く真夏の父親は歩く速度を上げる。

紹介が遅れたが、真夏の義親であるこの男は名は郷田龍司、元近江連合直参郷龍会二代目会長。「関西の龍」の異名を持ち、神室町と呼ばれる町で伝説と成った極道の一人である。今は『たこ三味』の定員で、世話になっているおやつさんと龍司と娘の真夏の二人だけだ。

「おとん！はよはよ〜！」

「へいへい……」

疲れてそうな顔をしている龍司、だがその顔は幸せそうだった……

…

ブローグ「行き成り自己紹介や!」(後書き)

真夏「二作品目か……頑張らな!」

千夏「あたしはどうなるんだ……」

真夏「かめへんかめへんって、作者は頭悪うけど体力あるで?」

千夏「だといいんだがな……」

「話や!」「神室町でカラオケや!」(前書き)

プロローグだから二話じゃない!?一話上げました!感想待ってます。

「話や！」「神室町でカラオケや！」

ここは、知る人と知る神室町………そこで一組の若い男女が神室町を歩いていた。

「どや？いつちゃん！神室町ってええ町やろ？」

「そうだな。良い町だ」

「せやろせやろ」

真夏と一夏だ。二人は家から電車で五分のところにある町、神室町に来ていた。

五才で電車に乗って御出かけとか最近の子供進んでいる様である。

「それじゃさつそく神室町へ繰り出しまひよ？」

「おう」

そう言つて真夏は一夏の手を握る。

「え！？ま、まなちゃん？」

「ん？どないしたんや？」

「い、いや、なんでもない（ま、まなちゃんが俺の手を！？）」

「そか、ほな行くで」

そう言つて真夏は一夏の手を引いて神室町を歩く、その二人の姿はとても仲良しであった。

視点・「郷田真夏」

ウチはいつちゃんを連れて神室町を歩いてんねん。

いつちゃんはウチが手え握ると顔を赤くして驚いた表情したんや、なんでやる？

「いつちゃん何処へまずは何処へいこか？」

「そつだな……どこかお勧めはあるか？」

「そやなあキャバク……やなくてカラオケとかオススメやで？」

あ、危なかったで……ウチが一度キャバクラに間違えて入つてしも
うた事を気づかれるとこやった……

「？キャバ……なんだつて？」

「な、なんでもないねんいつちゃん！忘れて！」

「?、おっ」

「ふう……さて、気を取りないしてカラオケに行くで〜!」

ウチはいつちゃんを連れてカラオケへ向かう。「GET TO T
HE TOP!」を熱唱するでえ!

視点・「織斑一夏」

俺はこのちゃんに連れられてカラオケ店の個室に入る。カラオケ店の店員は目を丸くして俺達を見ていた。そりゃそうだ。俺達見たいな幼いお客、しかも二人だけ来てるんだ。驚くのも無理はない。普通五才でカラオケなんて行かないしな。

「きょ〜「いえい!」おか〜「いえい!」ら、Try again
〜」

てか上手いな…このちゃん、ノリノリだし、自分も人の事を言えないが…

「別れを告げよう！いゝいゝいゝ！」「つもゝいゝいゝ！」のトラウマへゝゝ」

もしかしてこのちゃんって前にもカラオケいったのかな？

「ラメ色した 輝くShinningGate」！

お、そろそろ終わりかな？

「ラゝラ、ラゝララゝララゝ……」

おおう、良い声だ。

「ラゝラ、ラゝララゝララゝ……」

終わったか……

「ふう……美声や……」

自分で言うな。

「お疲れ、次は……」

「いつちゃんの番や！」

「ええー…やっぱ歌わなきゃだめか？」

俺は嫌そうにするとこのちゃんは少し顔を曇らせる。

「なんやん、ウチだけ歌わせといて自分は歌はへんの？」

「いや、だって恥ずかしいし……」

「何が恥ずかしいんや？」

「……………」

「いつちゃん？」

「…………下手だったら…恥ずかしいから……」

俺は少し小さい声で言う。うう…………これを言うのも恥ずかしいのに…………

「…………へッ」

笑われた！？鼻で笑われた！！

「わ、笑ったな！千冬姉にも笑われた事無いのに！」

「いや、それは何時もの事やん」

そうだけどね！じゃなくて！

「笑うなよ！」

「あははは、堪忍やゝ、でもいつちゃん」

「……………なんだよ?」

「あん、いっちゃんそないな拗ねんといてえなあ。ウチが悪かったさかいに」

「……………ああ、で?」

「うん……………いっちゃん、歌う事は恥ずかしい事やないで」

「え?」

「それにいっちゃんが言う様に恥ずかしがったら「羞恥心」歌ってる人達に失礼や」

いや、それは違う気がする……………

「……………話を戻すで?」

自分から言っただんろ……………

「歌は自分をさらけ出す事や、貯めたもんを出す為でもあり、自分を表現する為でもあり、そして、自分の想いを他者に伝える為にもあるんや。まあ、ラブソングが良い例やな」

「他者に想いを伝える為……………」

「そや、普通に言うだけでは伝えにくい事でも、歌で伝えれば自然と伝えたい人に自分の想いを伝えられるんや。それが歌なんや。歌は時として人救う事が出来るんや。銀河を救ったように……………」

おいこら、アニメを急に持ってくるな。せつかくの良い話がアニメに染まって来たぞ。良い歌だけど、

「そう言う訳で、いっちゃんは恥ずかしがらずウチにいっちゃんの聞かせてほしいねん……」

「俺の……歌を？」

「そや、ウチいっちゃんの歌、聞きたいねん！」

「……………」

俺の歌……か……

「……………わかった」

「ほんま？」

「ああ」

「後で、アレ無しってのは無しやで!？」

「嘘はつかないよ」

「よっしゃあ!さっそくいっちゃんの為にチヨイスするで!」

まなちゃんが急に真剣な顔から溢れんばかりの笑顔を俺にふりまき、カラオケの端末を手にとって曲を入力する。

「まったく…良い笑顔して…」

俺の声が自然と漏れていたのか、まなちゃんは俺の方を向いて、

「ん？いつちゃん何かいうたか？」

「い、いや、なんでもないぞ？」

「？、そか」

まなちゃんはそう言って再び端末とにらめっこをするそんなに真剣に選ぶ事か？

「おっしや、これで行くで！」

どうやら決まったらしい。俺は歌う為に立ちあがる。

「いつちゃん、準備は？」

「何時でも」

「行くでえ！Machine Gun Kiss！スタートや！」

曲が流れる。俺は体を自然体にして楽にする。そして、歌は流れる。だが俺はこの時ちゃんとイントロを確認すべきだった。だってあんな恥ずかしい歌だったなんて思いもしなかったんだぞ！

「いや〜どエライ楽しかったなーいっちゃん！」

「……………そうだな」

「な、なんや、まだ怒ってるん？」

「全然……………」

カラオケで歌を歌い終えて俺達はカラオケ店から出る。
俺は少し顔を赤らめている。それもそのはず俺事織斑一夏五才は、
あの歌は早すぎたと言っ事だ。

「い、いっちゃんウチが悪かってん…だから仲よろして欲しい…」

「怒ってないって……………」

「おこつとるやん……………」

「怒ってない」

「怒ってる」

「怒ってない」

「怒ってる」

「怒って……て、なんと言わせる気だ!？」

俺ははループから脱出し、声を荒げる。その声にビクッと真夏の体が強張る。

「やっぱり…怒ってるやん…嘘つき」

「いや、だから……はあ、悪かったよ…」

「いつちゃん？」

俺はため息をついて諦めた言っ様な顔をして真夏を見る。
そんな怯えんなよ……

「真夏、俺はもう怒ってない。本当だ」

「ホンマに？」

「本当だ」

「嘘やない？」

「嘘じゃない」

「そ、そか…よかった…」

真夏は胸を撫で下ろす様にしてふう〜と息を吐く、

「そろそろ帰ろう。真夏、母さんに心配させちゃう」

「っ……………そ、そやったな。はよ帰らんと……………」

ん？どうしたんだ？真夏のや…っ…あ、

「わ、わりい……………」

「いいねん、気にしとらんし」

「でも……………」

俺は言うてはいけない事を言ってしまった。

真夏の前では龍司さん意外の家族の話は禁句だったのに、

「ええねん。ホンマに気にしとらんし…大丈夫や」

「……………ほんとにゴメン…」

「だからええって……………ホンマに気にしとらんから……………」

バカだ俺は……………なんて真夏の事を考えずに口に出しちゃったんだよ……………

俺は前に真夏の家にお邪魔した時はかなり泣きそうになった。考え
ても見る？

行き成りデカイ男が出迎えたら誰だって驚くぞ。

最初は強盗かと思ったけどそのデカイ男の肩にちょこんと座った真夏を見て、え？知り合いつて思ってたやっと思つて警戒が解けたんだ。この事を真夏やその父親である龍司さんの話すと、

真夏は爆笑、龍司さんは少し肩を落としていた。悪い事しちゃったか……？

でも一番驚いたのが……

（俺と真夏がまさかいとこ…とはな）

そう、そうなのだ。俺と真夏の母親が姉妹で、俺の母さんが姉で真夏のお母さんが妹だったのだ。この時、俺も真夏も驚いた。何故分かったかと言うと真夏の前の名前が俺と同じ織斑だったからだ、まだある。真夏と俺は生まれた病院と誕生日が同じだったのだ。気づけよ俺の両親……そんなこんなで真夏の過去を真夏自身から聞いて竜司さんが真夏を擁護施設にたこ焼きを寄付した時に会つて意気投合、結果として竜司さんと養子縁組をして晴れて名字を変えて親子になったのだ。意気投合つて……漫才じゃないんだからさ……でも……

（なんで……真夏の両親は、真夏を捨てんだろう……）

そうなのだ。何故真夏が養護施設にいたのは、両親に捨てられたからつて聞いた。

その時に真夏は一瞬悲しい表情をしたような気がして、俺はしまったと思つた。

（はあ……千冬姉ちゃんに何時も言われているけど、俺ってそんなにデリカシーが無いのか？）

うーん、治そうとは思っているのだが、どう直せば……

「いつちゃん」

「ん？なん「ムニツ」だ？」

俺は真夏に行き成りほつぺたに指を押し付けられた。

「な、なんだ行き成り……」

「名前」

「え？」

「名前、まなちゃんゆってってゆうたろ？」

「へ？、あ……」

そうだった。つい昔の呼び方で呼んでいた。だが……

「なあ、そろそろ……」

「約束破る男は嫌いや」

「うぐっ」

そこまで言うか……しかたない……

「……まなちゃん」

「はい、よくできました」

そう言つてまなちゃんは俺の頭を撫でる。こら、子供が子供を子供扱いするな。

「はあ……帰るぞ？」

「うん！」

そう言つてまなちゃんは俺と手を握つて駅に向かう。何と言つか……

…今日は疲れた。

俺はそう思いながらも楽しそうにしてまなちゃんと手を握りながら家路に着いた……

「話や!」「神室町でカラオケや!」(後書き)

真夏「いつちゃん楽しかった?」

一夏「ああ、楽しめたぜ!」

真夏「よかよか」

作者「二人目の鈍感ヒロイン……千夏さんと被らない様にしないと
…」

「二話や!」「ストリートファイトや!」(前書き)

真夏「二話でたで〜見とつてや!」

龍也「なんで俺が……」

沙紀「まあまあ」

「二話や！」「ストリートファイトや！」

ウチはまた神室町に出向く為、電車に乗って駅に着き神室町を歩いてるところや、

「タツちゃん、きょうは何処行こか？」

「だからタツちゃん言うなって言っただろうが……」

今ウチはタツちゃんと一緒に神室町を歩いてるんや、

「ええやん小さい事気にしとつたら器の小さい男に見えんで？」

「やかましいい……」

タツちゃんはめんどくさそうに頭をボリボリかいているう。

ちなむにタツちゃん言うんわ右京龍也つちゅう名前や、出会いはウチが……あゝなんや、チンピラに絡まれている時に颯爽と現れてチンピラをボコつてウチを助けてくれてんねん。

あんときはかつこよかったでえゝ…………

それからやるか、神室町に行つてはタツちゃんが暇な時に一緒に遊んでんねん。

それにおとんと同じ龍の名前があつて気にいっとるんや！

「はあ……何処行きたい？」

「お菓子」

「行き場所聞いてんだよ！なんでお菓子をねだるの選択に代わって

「んだあ!？」

「ええやんお腹すいたし、ジェラテリアにでも食いにいかへん？」

「だから行き場所を聞いてるつつつてんだろぅがあああ!!!」

「タツちゃんは何故か顔を青くして小走りでウチを引っ張る。

「言ってくればウチが……きや？」

「なんやタツちゃんたまつとるんか？ウチで発散するう？」

「五才のガキに欲情するかああああ!!!」

「タツちゃんはまた叫ぶ、ホンマタツちゃんからかうとおもいでも、少し経ってからしかめっ面のタツちゃんをお手で繋いで神室町を歩く……そしてタツちゃんと手を繋いで歩いていると何故か周りから声がして来てんロリコ……やら警さ……やら聞こえてたけど……なんだったやろ？」

「なんや野外からウチらを見ながら声が聞こえんで？」

「あ、ああ……俺には聞こえなかったが……」

「うっん、聞き間違いやろ……」

「そんなことよりさっさと行くぞ」

「タツちゃんは何故か顔を青くして小走りでウチを引っ張る。ちょータツちゃん！」

「た、タツちゃん、そない強く引つ張らんでも…」

「んあ？ああ、すまん」

そう言つてウチの歩幅に合わせて歩いてくれるタツちゃん、やっぱり
タツちゃんは顔に似合わず優しいわあゝ

「えへへ」

「なんだよ急に」

「なんでもないでゝ」

「そうかい……」

少し呆れる様な顔をしてはニヤリと笑つてウチを神室町に連れてく。
今日も神室町を歩くでゝ！とその時、

「あら？まなちゃんじゃない」

「ん？」

「あ！さっちゃんや！」

ウチは名前を呼ばれて向くとさっちゃんがいたんや、
タツちゃんとも知り合いでただならぬ関係やとウチは睨んでいるん
や。

名前は工藤沙紀、ウチはさっちゃんと呼んでんねん。

「さっちゃんもお出かけ？」

「いいえ買物よ。龍也君の後輩がまた試合で無茶をしちゃってね」

「なんやまたタツちゃんの真似しようとして怪我したん？」

「当たり前」

「たく、よええのに俺の真似するからだ」

「タツちゃんそう言ったらアカンって、タツちゃんに憧れてドラゴンヒートに入ったんやで？それにタツちゃんの後輩や。自分に憧れて入った子なんやほんとは嬉しいやろ？ん？」

ウチがそう言つとタツちゃんはほんのり顔を赤くさせてそらしてポリポリ頬をかいていた。ウチとさっちゃんはそれを……

「さっちゃん」

「まなちゃん」

ウチらは互いの名前を言つて、

「「照れてますね？」」

「照れてねええー！！」

「「きゃー」」

ウチらはタツちゃんが叫ぶと互いの手を取り逃げた。
それを見て追ってくるタツちゃん、

「待てやコラアー!!」

「いややゝ照れたタツちゃん可愛かったでゝ」

「うんうん、龍也君も良い顔するねゝ」

「てめえらああああー!!!!」

小走りで走るウチらを追いかけるタツちゃん、ホンマタツちゃんからかうとおもろいでゝ……
でもウチはその時追ってくるタツちゃんを見ていて前を見なかったんや。そのせいで……

ドンッ!

「きゃっ!?!」

「まなちゃん!?!」

ウチは誰かとぶつかってしもうたらしくて尻もちをついてしもうた
んや。

「あいたた……す、すんまへん」

「まなちゃん大丈夫?」

「だ、大丈夫平気や」

ウチはさっちゃんに手を差しのべられて経とうとするけど、

「おい」

パシッ！

「いつ!？」

「な!？」

「あたつといて詫びを一つせえへんのか？このガキ……」

ウチと当たってしもうた男の人は……ガタイの良い大男やった。いかにも格闘家って感じや、

「聞こえんかったか？ガキ、詫びの一つも……」

「捕まえたぞ真夏う！」

「ちょ!く、首根っこは持たんといて!服が伸びてまう!」

「ちよつと龍也君!乱暴だよ!」

「うるせえ!このガキがいけねえんだろ!」

「子供の言った事じゃん!」

「せや!大人げないで、タツちゃん!」

「たっちゃん言うんじゃねえええええ!!」

急にタツちゃんが叫んでウチの首根っこを掴み持ちあげる。
言葉を遮られた大男はこめかみをピクピクさせてみていた。

「おい……」

「た、タツちゃん…ホンマに伸びてまうってこれおとんに買っても
らった大事な服なんや…だから…」

「っ……わかったわかったからそんな悲しい顔すんじゃね
えって」

タツちゃんはそう言うのと静かにウチを下ろして、服を直してくれた
んや。

ホンマに優しいで…タツちゃんは……

「おい……!」

「ん?」

「あ、まだいたんだ……」

ウチは話をしている近くにいた大男の存在にやっと気付いた。
てかさっちゃんそれ酷いで……

「なんだ?このおっさん……」

「ウチが走ってた時にぶつかってしもうた人や」

「そつだ！さっきまなちゃんの手をはたいたでしょ！？なにするのよ！」

「うるせえ！詫びを入れろっていつてんだよ！そのガキが俺に当たって……」

「おい……」

男が喋っているとタツちゃんが低い声で男に言う。

その声はさっちゃんに連れて行って貰ったドラゴンビートで見たタツちゃんの姿やった……

「なんだガキ……ヤル気か？」

「ガキ相手にイキがつてんじゃねえよおっさん……」

二人が睨みあう、今にも喧嘩が始まりそうや、て！

「あ、あのウチが悪かったです……だから喧嘩は……」

「うるせえ！ガキはスツこんでろ！」

ゴッ！

「きゃっ！！」

「まなちゃん！？」

「！！っ」

ウチは男の人に殴られ、吹っ飛ぶその時ウチはガードレールに当たってしもつておでこから血が出る。

「うつう……」

「まなちゃん！大変！血が出てる！」

「真夏っ！」

「ふん、てめえのガキだったか」

「てめえ……！」

タツちゃんはウチが血を出してしゃがんでいる姿を見て男を睨む、

「俺のガキじゃねえが……」

タツちゃんはウチを一瞬見た後に再度男を睨んだんや。

「俺のダチに手え出した事をテメエ自身に詫びさせてやる！！」

そう言つてタツちゃんは構える。男はそれを見て鼻で笑った後、自身も構え臨戦態勢を取る。

「行くぞオラア！」

「！っ」

男は先に仕掛けたて来た。あの構え……

「ぼ、ボクサーや……」

「龍也君！」

「任せろお！」

タツちゃんは力強くさっちゃんの声に答え、自分も仕掛けた。

「オラア！」

ブンッ！

「おせえ！」

タツちゃんは右のストレートを避け、左手のフックを炸裂させる。

バキッ！

「ぐふあ！」

「まだまだ行くぞお！」

次にタツちゃんが繰り出したのは右のボディープローから左のストレート、

ボゴツ！バキィ！

「グツ！ガツ！？」

「弱えぞテメエ、そんなんで俺のダチに手えだしたのか！？」

ババキツ！

「がはぁ！」

「タツちゃん……凄い……」

「あれが神室町の狂龍…右京龍也の…本当のファイトよ」

タツちゃんの姿をポ～と見ているさっちゃん、なんや恋する乙女やんか……

ウチが見ているのをハッ！と気づいて顔を赤くするさっちゃん、ん～つぶやなあ…「ふら…」…あれ？

「ま、まなちゃん！？」

「あ、あはは～…すこし血い流し過ぎたわあ………」

あ、アカン…ボーとするで…どないしよう……

「終わりだあ！！！」

「ひ、ひいいい！！」

男は殴られまくり、ところどころから血を出しながら怯える。
そしてタツちゃんのヒートが溜まり……

「ヒートアクション発動や！」

「ちょ！急に元気に！？」

ここで言わなきゃ何時言うねん！

「絶技・バンカーナツクル！」

「死ねやボケエ！！！！」

タツちゃんの腕から放たれた強烈なエルボーが……

グシャッ！！

「がはああああ！！！！」

男の喉に食らいつき、吹っ飛ばした。

ドサッ！

タツちゃんは相手が起き上がらない事を確認するとすぐにウチの側までよって来てウチを抱き上げた。

「龍也君？」

「病院に行くぞ！怪我は大した事ねえが出血がひどえ！」

タツちゃんは焦りながらウチを運んで行こうとすると……

「まだ終わってねえぞ！！！」

「「！？」」

血だらけに成りながらも立ち上がり、片手にナイフを持って突っ込んでる男にタツちゃんは動けない。

「クソッ！」

「龍也君！？」

タツちゃんはウチを守る様にして構える。アカン！それじゃあタツちゃんが刺されてまう！

「う、ウチを捨ててはよう！」

「黙ってる！」

ウチの言葉をかき消す様に叫び男を見るタツちゃん、もう駄目や！ウチはそう思って目をつぶると……

「ありやりや…子供相手に刃物は不味いつしょ？」

「ああ！？「バキィッ！」ぐほぁ！？」

男は横から来た強烈なパンチを食らい。今度こそ気絶した。
タツちゃんは横やりを入れた相手を見て……

「あ、あんたは……」

「いやゝまさかまなちゃんが血を流しながら王子様に抱かれているのを見てね。それにピンチだったし」

「ハッ余計なお世話だ……」

「そりゃ失敬、伊達さんを呼んどいたから、もう平気だよ」

そう言つとパトカーのサイレン音が聞こえてくる。

「うっう…し、駿…ちゃん？」

「大丈夫かい？まなちゃん」

そう言つてウチの近くによる駿ちゃんはウチがの血い出してる所を見て顔を歪めた後、すぐに気持ちを切り替えて、

「スカイファインランスに行こう。すぐそこだから医療キットもあるし」

「ああ、わかった」

「お願いします」

「お世話かけます……」

「ははっ
いいっ
て」

そいつでタツちゃんはウチを抱えたまま駿ちゃんの後を着いて行く
タツちゃんが駿ちゃんの言う事を聞いたのはウチの容態を見ての事
やもしれへんな。

(おとんになんて言おう...) (うううう)

ウチはそれが心配やった。ウチのおとんは心配性やからなあ……
そのせいでタツちゃんにおとんを紹介した時睨みあいが一時間は続
いたで……ホンマにあれば堪忍や……

こうしてウチらは騒動を終えスカイファインンスで治療して貰ったんや。ちなみにウチの怪我は血いは多くでとったけど幸い傷も残らず完治するって花ちゃんが言ってたんやそれを聞いたタツちゃんとさっちゃんとはホツと胸を撫で下ろしたん。ホンマお世話かけますう……駿ちゃんや花ちゃんにも迷惑かてしもってウチは罪悪感でいっぱいになつてもうた……

治療を終えて駿ちゃん達にお礼を言った後、さっちゃんの買い物に付き合ったりたっちゃんやさっちゃんのラヴな展開を鑑賞したりと痛い出費はあったんやけど今日は満足した一日やった……

ちなみに、この後タツちゃんはマツポの伊達はんに少しこの小僧を借りるぞ？ていつてタツちゃんを連れて行つたんや。その時タツちゃんは、俺はロリコンじゃねえええええ！！！！と言つて叫んで
はったけど……

ロリコンってなんや？

視点・「織斑千冬」

私は今学校の帰りの道を外れ、ある店に行く為向かっている。

「……………」

私の前を歩く歩行者達は引きつった顔で道を開けていく。

多分、私の目は刃物の様に尖らせている事だろう。一夏にも怖がられて少し傷ついたので治そうと頑張っているのだが……

（どうしても……龍司さん意外に笑顔を見せられない……！」

龍司さん限定と言うのは幸いしたが、何故私は笑えない！？

真夏は怖がらず普通に話してくれるが、未だ一夏は怖がってあまり話してくれない。

クッ！このままでは私と一夏の間には亀裂がっ！

「うつむ…どうすれば…」

「——ん？なんや千冬の嬢ちゃんやないか、またたこ焼き買いに来てくれたんか？」

「へ！？」

しまった……私は考えていて目的地の店に着いていた事を気づかなかった。

その上あんな素っ頓狂な声を龍司さんの前で上げてしまった……うう、恥ずかしいところを見られてしまった……

「どうしたんや？」

「な、なんでも！なんでもないです！」

「さ、さよか…そや、ワシが作ったたこ焼きがあんねん。食うてくか？」

「は、はい！喜んで」

なんとタイミングがよかったのだろう。まさか龍司さんが作ったたこ焼きを食べれるとは……！

私は龍司さんの店のまでまで行って龍司さんのたこ焼きを器に乗せ終わるのを待つ、

「出来たで」

「あ、ありがとうございます」

私は龍司さんに手渡しで渡されたたこ焼きを受け取る。

「熱いから冷ましてから食うんや」

「は、はい…」

私は少し冷ましてからたこ焼きを食す……

こ、この味は！私はたこ焼きの味に顔を驚かせる。

「やっぱり気づいたんか…嬢ちゃん」

「このたこ焼きに使われているのは宗名産谷のタコですね？しかもミズタコ……」

「さすがやな千冬嬢ちゃん、そや…北海道の宗名で取れたミズタコや！」

さすが龍司さん！タコの事は誰よりも理解している。

「心地よい歯ごたえが持ち前のミズタコを生地の中にいれた具が閉じ込められる事によってミズタコの甘みが閉じ込められ倍増し、応えられない美味しさになる…… このたこ焼きにかけられているソースがまた美味しさを倍増し、たこの淡泊な甘味を一層引きたててます！」

私は龍司さんの作ったたこ焼きの味を解説した。

「そっかい。ほな作ったかいがあつたわ」

龍司さんに言われ、ハツとする。な、何をしているんだ私は！これじゃまるで料理番組の女子アナではないか！！

「す、すいません…美味しすぎて我を忘れてました……」

ま、また恥ずかしい所を見られてしまった……

私の顔は今トマトの様に赤くなっているだろう。

は、恥ずかしすぎる……！

「ん？なんや千冬嬢ちゃん顔赤いで？熱でもあるんか？」

そう言つて龍司さんは私のおでこに手を乗せて熱を測ろうとする。

「へ？あ、えつと！そのお……」

今の状況が上手く飲み込めず、私は口下手になってしまっていた。
い、行き成りは反側です！

「な、なんや、また顔がタコ見たいに赤くなつとるで？」

「あうあう……」

クツ！何故だ！？何故こつも龍司さんに触れられているだけで動揺する！？

「病院行つた方がよさそうやな…連れてこか？」

「だ、大丈夫です！ぜ、ぜんぜん平気ですから！」

私は声を張り上げて言ってしまった。

ま、また恥ずかしい所を……

「さ、さやか……でも無理はいかへんで？」

「ほ、本当に大丈夫です……心配かけてすいません……」

ぜ、絶対龍司さんに変な女性とわかれてしまった……
ど、どうすれば……

「まあ、本人が大丈夫って言うんなら良いんやけど、無理はせえへんようにな？」

「はい、ご忠告ありがとうございます……」

はあ……なんで私は龍司さんを前にしてこんな醜態を……

「ホンマに大事はないんか？なんや一人でブツクサ言っとるが……」

「え？あ……えつと……」

またやってしまった！？クツ、どうしたと言うのだ織斑千冬！
何時も通りの冷静さはどうした！？

「え、えつとですね……その……」

「ふむ……今日は早く帰った方がよさそうな」

「あ……」

「それにそろそろ一坊が家に帰るところ？はよ帰ってやらんと」

「はい……………」

もう少し龍司さんと会話をしたかったが、一夏を一人家に待たせる訳には行かない。帰るか……

「お、お邪魔しました……………」

「おう、また買ってってな」

龍司さんに別れを告げて家路に着く、うう……………何故私は龍司さんの顔をちゃんと見れないんだ……………

織斑千冬14歳、恋多き年頃であった……………若干ジジコンに成りかけてはいるが……………

「二話や！」「ストリートファイトや！」「（後書き）」

龍司「こんガキヤア！ワシの娘に何怪我させとんじゃあああああつ
！！！！」

龍也「ケジメつけたんだからいいだろうがあああああつ！！！！」

真夏「二人とも喧嘩はやめてえなあ！！」

沙紀「龍の名を持つ人って、血の氣が多いわねえ……」

三話や！「ホールインワン……やと！？」（前書き）

真夏「そう言えばおとん」

龍司「なんや？」

真夏「前に来てたあのスーツの男の人ってだれなんや？」

龍司「ああ、ワシが前にいた組の弟分や」

真夏「おとんの弟分？何しにきたんやろ？」

龍司「それは後でな。本編初めんで」

真夏「そやったわ！始まりや！」

三話や！「ホールインワン……やと！？」

ここは森や草花、そして砂浜や池がある広い平原……
そこに二人の男と二人の若い男女がいた。

「……………」

その若い男女の少女は真剣に自分の真下にある小さなボールを見つめる。

手には棒状の先にヘラのように広がった物が付いている。

「……………」

「……し、真剣だな。まなちゃん」

「どんな事でも真剣に取り組む、それが真夏ちゃんのええ所や」

「ですね。にしても凄い集中力だ……」

少女である真夏を見て感想を言う少年と棒を肩に担ぐ眼帯の男、そしてスーツ姿の男は少女を見守る。そして……

「……………！！」カッ！

少女はカッ！と目を見開いて棒状物を思いっきり振り上げ、

「貰ったあああああっ！！！！」

行きよいよく振り下げ真下にあるボールを打つ、

ガッ！

棒はボールに当たり、ボールは呼んで行く……そうこれは……

「ホールインワンや！！！」

「子供の腕力じゃ無理だよ！？」

「いや、見てみい！あれはもしかしたらいけるでえ！！！」

「これは行くか！？」

ボールはじょじょにゴールである旗が刺した穴に飛んで行き……

コンッ！

玉は旗に当たり、そして！

コロコロ……

入らなかった……

「なんでや！？良い感じやったのに！！！」

真夏はその場で地面をゴルフクラブで撲殺する。その度にクラブが悲鳴を上げていたが……

「ま、まなちゃん！落ち着いて！」

「せやで、そう簡単に入ったらタイガーウッズが泣くでえ？」

「むー！」

「まあまあ落ち着いて、まなちゃん」

少年である一夏と秋山と真島と言う。この眼帯の男は東城会若頭補佐、直系真島組組長の、真島吾郎である。そしてスーツの男は前に怪我をして血を流していた真夏を自社に招き怪我の治療をした恩人である。神室町で消費者金融「スカイファイナンス」を営み、キャバクラ「エリーゼ」のオーナーも務める男、それが秋山駿その人である。

「悔しいわあ、なんで入ってくれへんのや？」

「俺達じゃまだ無理だよ」

「む……」

「まあそお落ちこまんでもええで？ウチらかて無理やし」

「そつだよまなちゃん、俺らでも普通は無理だよ」

「せやけどなあ……」

真夏はどこか納得できない様子で飛んでいったボールを見つめる。

「じゃあ次は俺の番だな」

そう言って自分のピンを地面に刺して構える。

「お！次は一坊か、頑張りや」

「頑張れよ。一夏君」

「はい！」

「いつちゃん頑張って〜！」

「任せろ！」

そう意気込み、一夏はゴルフボールに集中する。
そしてクラブを握りしめて思いつきり振り上げる。

「せいっ！」

一夏のスイングでボールに当たり、ゴールのある芝生へと飛んでいく。

「行きますね」

「せやなあ…もしかしてホールインワンやったりして」

「まさかあ」

「せや、駿ちゃんの言つとおりや。入ったら頑張ったウチが泣くで」
そつ三人が言っているとボールは段々ゴールへ近ずき、そして、

「ロンッ！コロコロ……」

「へ？」

「なん……やと……？」

「こ、これつてもしかして……」

「ホールイン……ワン！？」

一夏のボールは見事に穴に入りホールインワンを成し遂げた。
それを見て驚きながらも一夏を祝福する真島と秋山、

「すごいやないか！一坊！ホールインワンやでホールインワン！」

「いやゝまさか一夏君がホールインワンをだすとは……やるじゃないか！」

「あ、いや……えつと……えへへ」

一夏は二人に惜しめない拍手をされ照れていた。だが真夏は……

「……………」

「……………、？、まなちゃん？」

「ん？どしたんや真夏ちゃん？」

「どこか具合でも悪いのかい？」

三人が心配そうにして俯いた真夏を見ると真夏はその声に反応したのか、顔を上げる。

「……………」

「ま、まなちゃん！？」

「ど、どしたんや！？目えに涙たまつとるでえ！？」

「だ、大丈夫かい！？まなちゃん！！」

三人は目に涙をためて耐える真夏を慌てる。

「……………ちゃんのこと……」

「え？」

「いつちゃんのこと……」

「い、一坊がどないしたんや？」

「いつちゃんのお……」

「ま、まなちゃん？一夏君がどうして……」

秋山が言おうとしたその時、真夏は大声で、

「いっちゃんのアホー！ー！、ウチが初めて取るおお思っとなのにー！ー！うわあああんっ！ー！」

そう言っで真夏は泣きながら走り去っていく。それをポカーンと見てた後に再起動した三人は、

「ま、まなちゃん待つて！これは偶然で……てっ俺が狙って出来る訳ないだろ！？」

「そやで真夏ちゃん！一坊が出来たんは偶然や！せやから落ちつきい！」

「言う前に追いかけてませんか！？もう見えなくなりそうですよ！」

二人はハツとして真夏を追跡する。誤解を解く為に張りながら真夏を説得するが、

「付いてこんといてー！」

「まなちゃん違うんだ！本当に偶然なんだ！」

「真夏ちゃん一旦止まってくれや！ワイもう疲れたでえ……」

「はあ、はあ、……自分も……もう限界です……というか五歳児で五時間全力で追いかけたのに二人に追いつけないなんて……」

歳とつちやつたな」と落ち込む二人をしり目に一夏は真夏を追い続ける。

「いっちゃんなんて嫌いや〜!」

「だから落ち着けええええっ!」

二人の闘争劇は十五分にわたって続いたと秋山と真島は後から語る。子供の体力には適わないと言ってた二人だが、一夏と真夏が異常なのだと後に知る二人であった。

「うわああああああん!!」

「俺は無実だあああああっ!!」

まったくもって元気な少年少女である。

四人はゴルフ場を後にし、一夏は真夏の誤解を解いて神室町へ戻る。そこで四人はスマイルバーガーで食事を取っていた。

「むー…ウチがホールインワン出そう思ったのに…あんまりや…」

そう言いながら角煮バーガーを食べる真夏、

「いや、だからワザとじゃ……」

スマイルチーズバーガーを頼んで、まだ拗ねる真夏のご機嫌を取り戻すべく説得する一夏

「真夏ちゃんええ加減機嫌直したってや」

マグロバーガーを頼んだ真島が一夏を援護し、

「そうだよまなちゃん、一夏君のアレは偶然だったんだから」

そう言ってキングスマイルバーガーをほおぼる秋山達に入れ、真夏は……

「……………せやなあ。何時までウジウジしてたら皆に迷惑やなあ……」

皆に言われて機嫌を直す事にした真夏は角煮バーガーをほおぼる。

「ふう、よかった」

「せやなあ、まあ真夏ちゃんも何時かは出来るで？」

「そうそうまなちゃんも何時か出来るって」

「そやなあ…ウチも何時かは一発で入れたるで！」

その意気や！と真島に言われて元気を出す真夏、四人は明日の出来事や今日の話で盛り上がる。すると真島がある事に気づく、

「そついや真夏ちゃん」

「はい？」

「その額の包帯はなんや？」

「え？いまさら気づいたんか？」

「遅いですよ…真島さん」

「そうですよ。なんで気づかなかったんですか？」

「や、やかましい！わ、わしは真夏ちゃんが気にしとるう思つてあえて気づかないふりをしとったんじゃ！」

（（嘘だ！））

一夏と秋山は考えがシンクロした。

「そつやったんか？ごーちゃんおおきに」

そう言つて真島に微笑む真夏、その笑顔は神室町の極道共の癒しである。

「お、おう…か、かまへんって」

少し恥ずかしそうにしてそつばを向いた。

「なんやごーちゃん照れとるん？」

「て、照れてへん！な、何言つとんじゃ真夏ちゃん！？」

「顔赤いで」

「お、おっちゃんをからかうもんやない！」

「フッフ、堪忍や」

（あの真島さんが照れてる……）

（なんでだろう…なんか心に引っかかる様な感じが……）

秋山は真島の姿を内心驚き、一夏は真島と真夏が仲良く話している所を見て何故か心を揺さぶられた。

そんなこんなで会話が進み、真島は真夏に怪我をさせたチンピラがいると分かると、

何処からともなくショットガンを取り出し、いてこましたる！と叫んで三人が必死こいて止めたと言う。

「何処のチンピラじゃああ！風穴あけちやる！」

「お、落ち着いてください！」

「ごーちゃん、もう過ぎた事や！せやからその散弾銃しまっという

「！」

「ま、真島さん！それは不味いつすよ！？」

「おんどりゃあああああっ！！！」

今にも撃ちだしそうな真島をなんとか止める事に成功し、四人はスマイルバーガーを後にした。

「帰り道に気を付けるんやでー」

「一夏君、真夏ちゃんをちゃんとエスコートしてね？」

「はい、任せてください」

「駿ちゃん、ごーちゃんほなまた遊んでや〜！」

一夏と真夏は秋山と真島に別れを告げて家に帰る為に電車に乗り込み、

「いっちゃん今日はおもろかった？」

「うん、初めてゴルフしたけど、楽しめたよ」

「うんうん、いっちゃんが楽しめてよかったわ〜」

そう真夏は言う。一夏も真夏や大人たちと遊べて楽しむ事が出来た様である。

「ホンマ……楽し……かった……で」

「まなちゃん？」

「うん…」

「テッ」

「え！？」

一夏は驚く隣に座っていた真夏は瞳を閉じて一夏の肩に寄り添う。

「ま、真夏？」

一夏は慌てた事で真夏を昔の呼び名で呼んでしまつが当の本人は……

「すう……すう……」

「ね、寝てる？」

一夏は真夏が疲れて眠った事が分かり、がっくりした様なホットした様な複雑な気分だった。

「ま、いいか…まだ家までは遠いいし」

一夏は真夏をそのまま寄り添うままで寝かせる。

「お休み…真夏」

「うん…すう…すう…」

二人は電車に揺られながら家路に着いた。一方昨日真夏と行動を共にしていた龍也と沙紀は……

「龍也！三人分追加や！」

「お、おう」

「声が小さい！返事もへいや！」

「へ、へい！」

真夏のおとん事、郷田龍司が世話になってる師匠であるおやつさんの店で働かされていた。

「いや、真夏がいるとよく売れるが沙紀がいるともっと売れるのう」

「いえ、それほどでも！」

「クソ、なんで俺がこんな目に……」

何故かと言うと龍也がいたのに真夏が怪我をしたと言う何と言うか理不尽なケジメを付けられたのである。店を開いているおやつさんは定員がぎょうさんおるのはええ事やと言って龍也と沙紀に働いて貰っているのである。

「しゃべつとらんと、はよたこ焼きを袋に詰めんかい！」

「言われずとも！」

そう言つて龍也は素早くタコを箱に入れて袋に入れる。

「出来ました！」

「千三百円になります」

「ありがとうございますー！」

龍也はそう言つてお客にたこ焼きを渡すバイト戦士、

「なんや龍司が連れて来た若いもん筋ええやないか」

こりゃ後継ぎが増えるわと言つて嬉しそつである。

「コイツはまだまだですわおやつさん、もうちつと使えるようにせんと」

「俺は十分出来てるだろ！？」

「やかましい！おんどれの腕はひよこ以下や！」

「なんだところあ!？」

「やる気かああ!？」

「ち、ちよつと龍也君!龍司さん落ち着いて!」

「かかか!まるで親子や!」

龍也と龍司は互いに睨みあい。一触即発に成りかけたがおやっさんのどなり声で収束する。

今の光景は祖父に怒られる息子と孫である。沙紀はその光景を見ていいなあとどこか羨ましそうであった……

「二階堂、覚悟は出来たかな？」

「覚悟はとつの昔に出来とるわ……」

ある二人の男が部屋で話していた。

片方はスーツの男、もう一人は白いスーツで顔は少し外人ぽかった。

「君の兄貴分の説得は無理だった様だね？」

「ああ、仕方あらへん兄貴に目え覚まさせる為に兄貴の大事なモン取ってこなあ……」

「ふふふ、外道だねえ……」

「なんとも言え、DD……」

DDと名前を言った二階堂は神室町を一望できるビルの窓から神室町を見る。

「ここが……おんどれの墓場や…桐生一馬……」

そう言つて二階堂は行動を開始した。そして神室町で起こる惨劇が幕を開け始めた……

三話や！「ホールインワン……やと！？」（後書き）

龍也「クソ！なんで俺が怒られる！？」

沙紀「喧嘩したからでしょ？もう……」

おやつさん「龍也は今はまだまだやがちょっとすりや光るかもしれへんのう」

龍司「あのガキがですか？」

龍也「がきじゃねえ！」

龍司「ふん、噛みついてる時点でガキやワシ見たいにクールに返すんや」

龍也「お前がクールって言葉使っとクールが汚れる！」

龍司「なんやとお！？」

龍也「やんのかあ！？」

沙紀「また始まった……」

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」（前書き）

谷村「なあ俺の出番まだか？」

真夏「まーくんの出番は次や、我慢しい」

谷村「はあ、麻雀しながら待つか……」

真夏「また伊達はんはに怒られるで？ウチもやるけど」

谷村「お、真夏ちゃんもやるか？今度は負けないぜ？」

真夏「フフ、お手柔らかに」

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」

「スウ……スウ……」

ウチは今、家で朝を迎えてんねん、まだ寝てはりますけど……

「スウ……んう……スウ……」

今日は気持ちのいい朝でウチはまだ起きる気配はないねん。けどウチの家には生きてる時計がおんねん、それは……

「コケツコツコー！」

「んむう？」

「コケーコツコツココケー！」

ウチの朝を告げる時計事ピーちゃんが起こしてくれるんや、このピーちゃんやけど前におとんと海へ行った時に会ったんよ。確かくれた人は……とったどー！言うた後にウチにピーちゃん持たせてそのまま海へドボンっていったんや。まあそれからやな……ピーちゃんにはいろいろ役立ってくれて卵は産んでくれるし朝は起こしてくれておおだすかりや。さてピーちゃんも起こしてくれはったしウチも起きるえ、

「グガアー……グゴォー……」

「相変わらず大きい音やなあおとんのいびきは……」

前まではこの朝に鳴り始めるおとんのいびきで起き取ったけど、ピーちゃんの方が若干早いんよ。

「さて、おとんの朝食作らな…」

ウチは蹴飛ばされたおとんの掛け布団をおとんにかけて直して台所に向かう。今日は何にしよう？

「うーん昨日はスクランやつたから今日は目玉焼きと大豆のパンを作って……パンにかけるんは納豆でええな…後おとんの大好物のキウウリの塩ずけでオツケーやな…」

ほな、そうときまればさっさと作ったるで、

視点・「郷田龍司」

「んんっ……？」

なんや朝起きたらええ匂いがするで、それに……

「なんや頭がところどころ痛い様な……」

ワシは痛む頭を抑える。その時ワシの目の前に、

「コケーコツコツコ……」

「……………ピーかいな」

「コケツコー！」

なるほどな…またお前がワシの頭突いたんかい。

「なーんでワシだけ頭突かれるんや？」

「コー…コケ！」

「いや、言ってる事分からんわ」

「コオー……」

いやそない落ち込まれても……そやった！

「おいピー、真夏はどうしたんや？」

ワシと一緒に布団に寝てはったはずやけど……どこや？

「コケコケコツケー！」

「お、おい何処へ行くんや？」

ピーは走って台所の方へと走って行きよった。なんや真夏は台所におるんか？

「……ほな行ってみるか……」

ワシは体を起して台所へ向かう。そこに小さな料理人がいたんや。その料理人は手際よく目玉焼きを焼いてその後オーブントースターが焼けたのを確認した後に、ワシがよう使つとるお椀に納豆とネギにからしに後醤油を垂らして料理を作つてた。

「あ、おとん起きたん？」

「あ、ああピーに突かれて起きたわ」

「またピーちゃん？もうピーちゃんには鳴いて起こしてって言つたはずなのに……まったく悪い子やね」

「コケエ……」

頭をガクンとさせて謝るニワトリ……なんで人語が分かるんや？

「まあええわ、鳴いて起きんおとんも悪い子なんやしな」

そりゃあ……まあ、そうなんやけど、

「おとん、料理出来たんやから座つてな。ウチは後ピーちゃんのご飯作らな」

「おう、わかつたで」

何時ごろやるか…ワシの為に真夏が料理作ってはるんわ……

「真夏何時もすまんの」

「かまへんて！ウチが好きでつくつとるさかい。おとんには感謝してるんや…ウチが施設で一人ぼっちの時に養子にするう言ってくれた事、嬉しかったんや…」

「真夏……」

泣けてくるで…ホンマ、ワシはええ娘をもろうたでえ…せやけど…

「あ、おとんウチい直ぐにトラちゃんとこに行かなアカンねん。せやから今日はピーちゃんと二人で食べてな」

そう言つて身支度をして玄関のドアを開けて出て言つてもうた。
…なんでや…なんでなんや…ワシの娘の料理は…

「ワシだけのもんやーーーーー!!」

そういつても真夏にはきこへんかった。ワシは一匹と一緒に寂しい朝食を迎えた。あ、この大豆のパン美味いで……

真夏は家から出て神室町近くのアパートに向かっていた。

「トラちゃんも最近食事が偏ってきたし、ウチがちゃんと管理せんとまた体重増えてまうしなあ」

真夏はトラちゃんと言う人物の朝食のメニューを考えながら歩くと、

「お、もう目的地に着いたで」

正確には龍司におねだりで勝ち取った自転車に乗って家から十分の所に目的の家がある。

「ええと…鍵鍵つと…あつた」

真夏はアパートの二階へ駆け上がり、そのアパートのドアを開ける。

「トラちゃん！今日も来たでーて、うわ！酒くさ!？」

「あゝ頭がいたいわあ…うん？なんや真夏ちゃんかいな」

「真夏ちゃんかいな…じゃないで！なんやまた酒飲んだんか!？」

「そやでえ…兄弟が飲み行こう言つとったから……気持ち悪…」

「ちょ！ウチの前で吐かんといて！今水用意しますから!」

そう言つて真夏は部屋に入りコップを洗つて水を注いでその人物に水を差し出す。

「ほらトラちゃんこれ飲んで」

「おおきに……」

そう言つた後にゴクゴクと飲み干す男はプハアと言つた。

「よかつた少し顔がよくなつたで」

「生き返つたで…ほんとに世話かけるで真夏ちゃん…」

「ええつて、とりあえずウチは料理作つたるから台所借りるで？」

「ええでゝ美味しいもん作ってくれや」

「フフ…任せてな！」

そう言つてトラちゃんと言う人物の部屋に置いてあるエプロンを着て台所へと向かう真夏、

説明が遅れたが、このトラちゃんと言うのは冴島大河であり東城会直系冴島組で真島と同じ組長である。

『真夏ちゃんの姿を見てると…靖子を思い出すな…』

冴島は亡き妹の姿を真夏に浮かべていた。

『ホンマによう似とるでえ……アカン、涙でてきそうやわ…』

慌てて目をこする冴島、その時台所から真夏の声が聞こえる。

「トラちゃん！手え届かんから手伝ってえな〜！」

「おう、今行くで」

そう言つてフラフラと立ちあがり台所へ向かう冴島、そして真夏の近くによるとその体を抱き上げて物を取らせる。

「取れたか？」

「取れたでー」

そう聞いて冴島は真夏を下ろして自分も調理に参加する。

「あ、ウチがやるで」

「ええつて真夏ちゃんだけにやらせたら悪いし」

「でも……」

「二人で作った方が早く出来るやん」

「ん〜そやね！」

「ほな作るか」

「了解や！」

二人は並んで料理を作るその姿は、26年前に失った光景を思い起

こさせた……

視点・「郷田真夏」

「頂きます」

「召し上がれ」

そう言つてウチはトラちゃんに味噌汁とご飯を器に入れてトラちゃんに差し出す、

「おおきに」

受け取ったトラちゃんは先にご飯を食べてその後味噌汁で流し込む、

「もう…トラちゃん、ご飯は逃げへんからゆっくり食べるんやで？」

「ん？おおすまん」

そう言っただけ食べるペースを落とすトラちゃん、

「お？このシヤケ美味いで……」

「自信作や、どんどん食べてなあ」

「おう」

そう言っただけシヤケにパクツクトラちゃん、なんやこいつしてると……

「まるで料理を作っただけ旦那さんに食べてもらうてる主婦やなウチって」

「んぐう！？」

ウチがそう言っただけ急にトラちゃんが声を出す。なんや？

「と、トラちゃんどうしたん？」

「！…！？」

「と、トラちゃんまさか喉お積まらせたん！？」

あ、アカン！はよ飲み込ませんと！

「と、トラちゃん！はいお茶！」

「！……んぐっ…ふう…死ぬかと思ったで…」

「だからゆつくり食べれって言うたんや…」

「いや、今のは真夏ちゃんが……」

「なんや？言い訳か？仁義貫くトラちゃんか？」

「い、いや…そうじゃなくて」

「もう…トラちゃんはいけない人やなあ…」

「……………すんまへん」

まあええで、とりあえず助かったんやし、

「次からゆつくりで…ええな？」

「わかったで」

うむ、いい子や、ほなウチも……

「ほなまたな」

「て帰るんか!？」

「せや、ウチいのご飯は他で食べんねん」

「いや、ここで食べばええと思うんやけど……」

「うゝん他の人も食事が偏ってるんや見にいな」

「あ、いやちょっと待ちなはれ！」

そう言つてトラちゃんはウチの腕を掴んだはいいけど昨日の飲みすぎで足元がフラフラのせいで…

「あー！」

「きゃあー!？」

ドンッ！

トラちゃんは倒れ、ウチを押し倒す形で倒れてもった。

「……トラちゃん？」

「な、なんや?」

トラちゃんは少し顔引きつかせる。

「トラちゃん……」

「お、おう」

「朝ヤルうんは早いぞ?」

「へ?」

「もっタツちゃんに引き続きトラちゃんまで…アカンてっ?」

「ぶっ!??ち、違う!そうじゃ……………」

「なんや?リクエスト?上から?それとも…………下?」

「だからちゃうって!」

「えっじゃあどっからや?」

「せ、せやから「なにやっとなねん…………」へ?」

「ん?あ、ごーちゃん」

玄関のドアには真島のごーちゃんがおった。

「兄弟…ウチらの約束…忘れたんか…?」

「い、いや待て兄弟!約束って……………」

「真夏ちゃんは……………」

「…………ウチは?」

「東城会の共有癒し財産や……………!」

ジャキツと何処からともなくショットガンを取りだすごーちゃん、
いや、ウチが共有って…………

まあそれはともかく…多分ウチとトラちゃんは顔を青くしておるや

るな……

「ま、待て兄弟！落ち着け！俺は何もやつとらん！」

「そ、そやでござーちゃん！ウチはただ冗談を言っただけで……」

「何が冗談や！どうみたらその体勢が冗談に見えるんやああああ！
！??？」

駄目や…完全にキレとる……。

「兄弟い！」

「だから落ち着けえええええっ！！！」

「ほ、ほなウチはおいとましますう……」

ウチはトラちゃんとござーちゃんの仁義なき戦いを見ることなくその場去った。

え〜と後は……だいちゃんやな、だいちゃん六代目になってから胃に穴が開くう言うつったから胃に優しい朝食にせんと……

「トラちゃんござーちゃん、ほなまたな〜」

ウチは小さい声でそう言っってトラちゃんの家を後にする。

「きょうだああああいいいいいいっ！！！！！」

「おおおちいいいいいいっつっつっつっつうけえええええっ！！！！！」

無駄に派手なバトルやな...これって...

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」（後書き）

二階堂「ワシはこの小説でも小物かい……」

真夏「いや作者が言うには少し変更らしいで？」

DD「どんなだい？」

真夏「それは……わからへん」

二階堂「まあ気長に待つわ」

五話や！」「伊達マヨラーや！」「（前書き）

真夏「ちー姉ちゃんのおとんの見る目がなんやごつつう色っぽいんやけど……いっちゃんなんかしらへん？」

一夏「そ、それは……（言えない！行ったら千冬姉ちゃんにシバかれるー！）」

五話や！「伊達マヨラーや！」

ここは真夏と一夏が通う幼稚園、そこでは運動会が行われていた。

「え〜と次は……龍司さんと千冬姉ちゃんが出場する綱引きだ！」

「おとん！気張ってな〜！」

そう、次は父親や母親が出場する競技、綱引きである。そこに……

「ほな頑張るか？千冬嬢ちゃん」

「はい！（龍司さんと一緒に綱引き……勝たねば！）」

そう意気込み、普段着の千冬は燃える。普段着である龍司も娘が見ていると言う事もあってかつこ悪いところは見せられないと思い、本気を出す。

「なんやちー姉ちゃん燃えとるなあ」

「あ、ああ…あんなに燃えてる千冬姉ちゃん初めてだ」

二人は龍司と千冬が何故ああまで燃えているかが分からない。だがヤル気があるないいいかなあという事で二人はスルーした。

「もうすぐ親御さん達の綱引きが始まりまーす！競技に出る人は綱のどこまできてくださーい！」

「出番や…行くでえ！」

「はい！」

親御さん達が行く中、ただならぬオーラを纏う男女に後ずさりしたと言っ。

視点・「織斑一夏」

俺が通っている幼稚園で真夏のお父さんと千冬姉ちゃんが親参加の綱引きに出場する為グラウンドの真ん中に行く。というか、

「この幼稚園の運動会って本格的だな……」

「せやねえ。ホンマやしかも場所を移動しての運動会やし」

そうなのである。普通は幼稚園のグラウンドでやる物なのだが、ここは違う。

なぜなら東城会が経営する幼稚園であり、真夏が通う事もあつてか設備やら資金面が豊富であるのだ。

俺の両親は少し引きつっていたが……

「お？始めるでえ！おとん！ちー姉ちゃん！頑張つてー！」

「龍司さん！千冬姉ちゃん！がんばれー！」

そう俺達が応援すると、二人はこちらを向いて手を振る。聞こえた様でよかった。

「それでは皆さん、綱をもって用意してくださいー！」

幼稚園の組長……じゃなくて園長が準備を進める。

その声に従つて父親達と千冬姉ちゃんが綱を持つ、そして……

「よーい………」

「そつこつで片あを付けたる……！」

「手加減はしない……！」

ここはスルーしよう、うん。

「ドン！」

「「うおおおりゃあああああっ！！！！！」」

俺達の応援がいけなかったのか、千冬姉ちゃんと龍司さんがあり得ない力で……

「「「「「ア」……………ッ!!!!!!???」」」」

相手側の父親達は鳥になった……人間ってあんなに飛ぶんだなあ……と現実逃避しているとドサドサッと大きな音を上げて父親達が地面に沈んだ。

「アンタ……………!!」

「あなた……………!!」

「おと……………さん!!」

「パパ……………!!」

相手側の母親や子供が駆け寄ってきた。もうこれ戦争だよ……

「あ……………真夏ちゃんのお父さんに一夏君のお姉さん？」

「は、はい……………」

「お、おう……………」

冷静な声で千冬姉ちゃんと龍司さんと呼ぶ組長……じゃなくて園長が二人に歩み寄り……

「やりすぎです!」

「すみません……………」

「すんまへん……」

園長に怒られて謝る二人に俺達は……

「おとんは好きやけど、加減は覚えて貰わんと……」

「……そうだな」

はあ、とまた溜息を吐く俺達、ほんと……千冬姉ちゃんは影では優しいんだけど……

そんなこんなで幼稚園最後の運動会が終わり、皆は帰って行った。

視点・「郷田龍司」

ワシの娘の真夏が幼稚園で運動会が行われると聞いたんで弁当を作
って来たんはええんやけど……

「なんで東条会の身内がおんねん……」

しかもこの幼稚園を東条会が経営しとるって……東条会は何がしたいんや？

「？、おとん…だいちゃん達となんかあったん？」

事情を知らない真夏が不思議そうにしてワシを見とった。

「なんでもないんや。気にせんでええで」

「そか、ならええんやけど……」

少し顔を伏せる真夏、なんや？ワシ間違った事言ったかいな。

「どしたんや？真夏」

「……おとん」

「あ？」

「おとんの腕奪ったんは……東条会の人やったよな……」

その事かいな……腕の事だけは話してもうたからなあ。

「ワシはその事はもう気にしてへん。せやから真夏が思い悩む事は無いんやで？」

「でも、ウチい……」

「真夏」

ワシは真夏の名前を呼んで抱き上げる。

「おとん？」

「腕え無くなつた事で気づいた事や得たもんがあるんや、せやからワシはこれでええと思つてんねん」

「おとん……」

「ワシは極道抜けてカタギに成つた事で真夏に会えたんやしおやつさんにも会えた……せやから、ワシはこの生活手に入れたん思うと腕の一本も安いもんやと言えるんや」

「おとん……！」

真夏はさっきまで沈んだ表情をしていたが、ワシが真夏にあえてよかつた言つと花が咲くような笑顔になつた。

「せやから真夏が気にすることはないんや」

「おとん、わかつたで……ウチはもう気にせえへん様にするわ！」

「ええ子や……」

そう言つて真夏の頭を撫でる。ホンマにええ娘をもつたで……ワシは……

「ほな千冬嬢ちゃん達と帰るか？」

「うん！あ……でもその前に組のお手伝いせえへんと」

「……………ほどほどにせえよ…それと終わったらすぐに帰るんやで?」

「うん、わかったで」

そう言つてワシらは千冬嬢ちゃん達と手え繋いで帰る。なんや急に子供が増えた様で楽しいもんや。

せやけどなんでか一坊が千冬嬢ちゃんと手え繋いで欲しい言つ取つたけど……まあ、別にええでっていったら千冬嬢ちゃんがタコ見とおに顔赤くさせとつたんや……なんでや?

一夏と真夏の幼稚園最後の運動会が昨日終わり、
またまたまたここは神室町に三人の男性と幼い男女がいた。

「谷村! まあた真夏ちゃんと一夏を麻雀に連れていきやがつて!」

「いいじゃないですか伊達さん、大人の楽しみを知る権利は子供だ

つてありますよ?」

「五歳児に麻雀教える刑事が何処にいるんだ!?!」

「ま、まあまあ伊達さん落ち着いて……」

「てめえもだ!城戸!どうしてお前まで子供二人と麻雀やってんだ!?!」

「……………すみません」

「あははは……い、いけない事だったんだ……」

「ま、まあまあ伊達はん……まー君もたけちゃんも反省してますし……」

「へーい反省してまーす」

「ほんとすみません……」

「役一名は全然反省してないだろ!?!」

「楽しかったんやからええんとちゃう?」

「いやその歳で楽しんじゃいけねえだろ!?!」

伊達さんの突っ込みがさえる日だった。

真夏、一夏、谷村、城戸の四人は一夏に麻雀の遊び方を教えるついでに賭けをしたが結果……城戸の大損であった。

「と言うか初心者に負けるって……」

「す、すいません」

「ああ、いいんだ。弱かった俺が悪いし……」

「あ、そうや後でみなはんで牛井食いにいかへん？」

「そうだな行くか……」

「俺もお供するっす」

「あ、俺も」

「待て！まだ話は……」

伊達が話そうとするが谷村はスタスタと松屋のある方へと歩いていった。

逃がすものかと伊達もその後を追う。

「あゝんまー君待ってえな！」

「置いてかないください！」

「ちょ！二人とも待ってくれ！」

置いてかれた三人も早歩きで谷村の後を追った。
少したってから松谷に着き、各自席へと着く一行、

「俺は牛井並で」

「俺も」

「俺もそれで」

「ウチも！」

「俺もだ。あとマヨネーズ」

「」「マヨネーズ!？」」「」

真夏と城戸と一夏の声が上がる。伊達は牛丼の他にマヨネーズを頼んだのだからそりゃ驚く、

「ん?なんだ?」

「え、え」と……」

「ま、マヨネーズを……」

「何に使うん?」

「何って、そりゃ……」

「お待たせしましたー!牛丼並五人前です!」

そう言っつて定員が各自の席へ牛丼を置いていく。

「お、来た来た!冷めねえ内に早く食おうぜ」

「え……あ、はい」

「そ、それじゃ……」

「いただきます…」

三人は気になったがお腹空いているので検索は後にした。
そしてその直後、あり得ない光景が伊達のところで起きていた。

「マヨネーズ」

「ブフツ!？」

「ゴホツ!？」

「うひゃあ!？きじゃない!!」

一夏と城戸は口の中に入れた牛丼を吹き、伊達の隣にいた真夏が巻き添えを食らった。

「だ、伊達さん!？」

「何故牛丼に!？」

「うええ〜ん…服にかかってもうたあ〜…」

二人は驚き伊達を見る。一人は今にも泣きそうだったが、

「ん？これが俺のスタイルだ。美味いぞ？食うか？」

「遠慮します」

「お、俺もいいです……」

「二人とも酷いでえ……」

ゴメンゴメンと真夏に謝る二人、だがここで谷村が動いた！

「すげえぜ伊達さん、美味しい牛丼が犬の餌に昇格だあ」

「んだとコラアツ！？」

（（うわゝまた喧嘩になる……））

「フキフキ……」顔を吹いている

伊達は立ちあがり谷村を睨む、だが谷村はそんな事お構いなしに牛丼を口に運ぶ、

それに怒ったのか谷村に掴みかかろうとしたが……

「お、落ち着いてください！伊達さん！」

「そうですよ！他のお客さんに迷惑が！？」

「離せ！コイツいっぺん痛い目にあわせねえと！」

「まあまあ伊達の旦那落ち着いて……」

「おめえが喧嘩フツかけてきたんだろぅがあー！！！」

うがー！と伊達が怒り、それを必死に止める一夏と城戸は心底疲れ

た表情で店を出たと言う。

「ん」牛丼美味しいでえ」

その光景をとりあえず他人のふりをしながら顔を拭き終わり、食事に専念する真夏、

こうして一騒動は何とか収めた一向は谷村は伊達に怒られながらもイヤホンで競馬の状況を聞きながら警察署に連れて行かれ、城戸は新井のところに戻ると言って真夏と一夏が残された。

「……ほな皆を見送ったし、ウチらも変えるか？」

「そうだな…まなちゃん俺の家で遊んで行かないか？」

「ええで、いこ！」

そう言つて真夏は一夏と手を繋いで駅へ行く。

だがその後ろから野球帽の男が真夏達を見ていた事に二人は気づかなかった。

その人物はスウと身を隠し、姿を消した……そして、ついに神室町に惨劇が始まるうとしていた……

ここは神室町から離れている路地、

千冬は今日曜の休みを利用してここ龍司とおやつさんがいるタコ三味にいた。だが客としてではなく、

「嬢ちゃん！三人前追加や！頼むで！」

「はい！」

何故かタコ三味のアルバイトをしていた。

龍司も何故千冬がたこ焼きに興味をしてめしたのか今一分からなかったが、

自分と同じくたこ焼きを好きになってくれたと言う事で良しとしていた。

毎回言うが、真夏や沙紀や千冬がアルバイトや手伝いとして来た事で店の売上がウナギ登りなのは言うまでも無い。

「龍司さん出来ました！」

「早いやないか、千冬嬢ちゃんええ腕しとるで」

「あ…ありがとうございます！」

千冬は龍司に褒めれた事を嬉しそうに微笑む、それは真夏もある千冬の親友すら見たことない笑顔だった。

「その調子で頼むで」

「はい！」

そう言つてタコを回して焼く千冬、そして今日の売上も上々の内に店じまいとなつた。

ある日のウサギ……………

「なんで！？なんで束さんの出番が無いのかな！？」

それはOF THE ENDの最後で活躍します。

「長いよ！？」

我慢してください。

「酷いよー！！」

こつして神室町で起こる悲劇が近づいて行った……

五話や！」「伊達マヨラーや！」「（後書き）

束「ちーちゃん…束さんの出番が無いよ」……」

千冬「もう少し待ってる…」

束「ぶ」…ちーちゃんは束さんよりもあの厳ついおじさんが大事なの？」

千冬「そうだ」

束「即答！？酷いよ」……」

千冬（ハア…我が親友ながらメンドくさい……）」

作者「苦勞が絶えないのは、どこのssでも同じですね千冬さん…」

六話や！「始まりは突然にや……」（前書き）

真夏「うゝん……」

一夏「どうしたんだ？まなちゃん」

真夏「うゝん……」

一夏「まなちゃん？」

真夏「……ウチの名前に龍を入れるの忘れてもったらしい……作者が」

一夏「入れたかったんだ……」

六話や！「始まりは突然にや……」

ここは夜の神室町……夜になると普段昼は閉めている店が開店する時刻、そこに幼い少女と男がいた。

「さあ夜の神室町に出発や」

「大丈夫なの？まなちゃん……」

真夏と秋山が夜の神室町に繰り出していた。

普通はこんな夜中に男が少女とお手て繋いで歩いていたら補導されかねない筈だが、

ここは神室町…犯罪ウェルカムである。

「大丈夫やおとんには友達と一緒に行くゆうつたし、おとんも今日は夜まで営業するっていっとつたしな」

「そうなんだ…じゃあ良いかな？」

秋山も神室町の雰囲気と常識に毒され判断意識がマヒしている様である。

伊達に極道達が銃刀法、傷害、チンピラは窃盗に後ドンパチにエトセトラエトセトラ……

「せや！行くでえ」

そう言つて真夏は秋山と手を繋いで犯罪臭をプンプンさせながら歩く、ここは神室町……常識にとられない町である。と少し歩くと目の前にフラフラのオッサンが姿が見える。

「うつゝ……うつゝ……うつゝ……うええええええええっ！！！！！」

「おっと！？」

「うひゃあぁっ！？」

真夏と秋山の前で……お察し下さい……秋山は真夏を庇うようにその男の横を通り過ぎる。

オッサンはその場で膝をついて高い酒を地面に出していた。心配になって真夏が駆け寄ろうとしたが秋山に止められ、神室町では珍しい光景だから平気さと言って真夏をその場から連れて行く。

これが日常茶飯事なら今頃神室町はゲ○の町に成っている事だろう。

「平和だねえ……」

「び、びつくりしたで……」

「かかって無い？大丈夫？」

「へ、平気や。なんとか……」

そう言つて二人は気を取り直して町を歩く光輝くネオンが町を照らし真昼の様な明るさを保つ、店の前では売り子や接客員が客を店へと誘う光景が見られる。

ここは神室町…普通は良い子は寝る時間である。と後ろから大声が聞こえた。

「秋山さん！」

「ん？」

「ほえ？」

秋山は名前を呼ばれ後ろを振り向き、真夏も何事かと思い後ろを向くと……

「サイの突進や」

「違うわよ！」

「な……花ちゃん」

二人は声をかけた人物を確認すると真夏はどうしたんやろ？言い、秋山は心あたりがあるようでバツが悪そうだった。この女性は秋山の会社、スカイファイナンスの社員こと、花である。真夏と花は一年前に知りあったと言う。だが真夏が言うには昔の花と今の花とはかけ離れていると語っている。

「はあ……はあ……何やってるんですかもう！約束、忘れちゃったんですか！？」

「え、え……と……」

「約束う……？」

「集金ですよ！集金！今日こそちゃんとやるって社長言いましたよね！？」

「い、言ったかなあ……？」

「もう！私、こんな体調なのに町中探しまわって……熱もほら、三十七度ですよ！？」

そう言つてカバンから温度計を取り出し計った熱を見せる。

それを秋山の背中にへばり付いている真夏が食い入るように見る。

「ほとんど平熱じゃない」

「ホンマや……」

「微熱ですよ！いいんですか？私倒れちゃっても社長だけでウチの会社やってけます！？」

「やってけ……」

「ウチがおるで？」

「まなちゃんは黙ってなさい！！」

「ほい」

真夏はそそくさと秋山の背中に隠れる。

「……無いよね。うん」

「だったら自分のケータイくらい持ち歩いててください！」

そうスカイファイナンスの社員である花は言つて秋山にケータイを渡す、

花は少しカンカンであつた。苦勞が絶えない花である。

「以後、氣をつけます……」

「夜遊びはお預けかいな……」

「ゴメンね？まなちゃん」

「もう社長はどうしてこうまなちゃんに甘いんだか……」

ブツブツと口うるさく言う花に秋山はヤレヤレと言って集金へと向かった。

真夏も夜遊びから集金の手伝いに変更して秋山達に付いて行く。その姿、ギリギリ親子である。

「まあええか……それじゃ張り切つて集金へゴッ！」

「ゴッ」

「はあ二人してふざけて……もう」

花は疲れた様にして二人の後に続いた。その時、

「ん？」

「どうしたの？まなちゃん」

真夏は目の前を横切る野球帽を被る黒ずくめの男を見ていたが秋山と花は気づかなかつた。

「ん…気のせいや、何でもないで」

「そっか…じゃあ行こうか」

「うん」

「社長、早く行きますよ？」

「ああ、直ぐ行く」

そう言つて真夏の手を取つて歩き始める。その後神室町最初の事件が始まつた……

場所を代わり、ビルのエレベーター前で野球帽を被つた男がエレベーターを待っていると、後ろから声を掛けられる。

「失礼ですが…どちらさんで？」

「……………」

男は答えない。そしてこのチンピラ風の男に悲劇が起こる。

ここは神室町の一角の事務所、そこに靴を磨く極道がいた。

「おお、親父の靴まだまだあるからな」

「「「ウツス！」」」

その組長のものである靴を磨いていた。

組長は雑誌を読みながらエレベーターを監視しているモニターを見ていると、

組の一人が野球帽を被った男の肩を掴んで振り向かせると……

「!？」

突如モニター内で野球帽の男が組の男に掴みかかった。

そして組長が慌てて組の者に言う。

「おい！カチコミだ！」

そう組長が言い、組の者たちは慌てたたく立ちあがり、

「おい、明りを消せ！守りを固めろ！」

そう言っ守りを固め、部屋の明かりを消した。

「「「……」」」

チーンッ♪

エレベータのドアが開き、その乗っている男の姿を確認すると、見えるのは組の一人の男だった。
しかし…………

ドサッ！

組の男は血を流しながら倒れ伏し、その後ろからカチコミをしに来たと思われる男が立っていた。

そして数秒後、我に返った極道達が一斉に…………

「…………うおおおおおっ！！！！」

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

持っていた拳銃で男に発砲した。男は撃たれながらも直立不動して立ちつづけ、そして頭部へと銃弾が命中する。男はこれには溜まらず体勢を崩しかけたが、まだ立ったまま顔をだらんとさせていた。そして野球帽の男はゆっくりと顔を上げ、目を開く。

「……………」

その目は不気味に赤く光っていた。その後組の者たちの惨劇が始ま

った。

視点・「郷田真夏」

「んで？誰から集金するんや？」

「え〜と、確か……ん？」

秋山が立ち止まる。それを見て真夏と花も止まる。

「どしたん？」

「いや、なんか人だから……」

「おい、アレ……鉄砲の音じゃねえか？」

「ヤダ……警察に届けた方がいいんじゃない？」

秋山達は野次馬の声を聞きその銃声の音がする方へ目を向けると……

「……………この銃声……密造銃の銃声音が複数……それに正規品の銃の音も混じってはるな……」

「なんでそんな事を分かるの？まなちゃん……」

「前にごーちゃんに撃たせてもらうたんや」

「あの人は五歳児に何を教えているんだ……」

呆れる秋山に真夏は不思議そうにして見つめている。もう真夏は普通の五歳児では無くなっていた……突如四階の窓ガラスが割れ、そこからスーツ姿の男が堕ちて来て……

ドサッ！

野次馬はポカーンとしていたが、直ぐに悲鳴を上げてその場から少し離れた。

「あ、あははは……こりゃ、集金どころじゃないよね……」

「駿ちゃんって事件体質なんかな？」

「……………それはまなちゃんもじゃない？」

そんな事無いで？と言いながら見ていると堕ちて来た男が立ち上が

ろうとしていた。

そして騒ぎを聞きつけた警官が堕ちて来た男へと駆け寄る。

「退いてください!」

「道を開けてください!」

そう言ってやっと男の元へと駆け寄る。

「これで解決やな」

「そうだといいいんだけどね……」

「二人とも!見学はそのへんにして早く集金に」ぎゃあああああ
っ!?!」へ!?!」

花が二人に喋っていると警官の悲鳴が聞こえて三人は悲鳴がする方
へと視線を送る。

「しゅ、駿ちゃん!」

「おいおいマジかよ……」

「な、何で警官が噛まれてるの!?!」

そう、堕ちて来た男が警官の喉元に噛みついていた。もう一人の警
官はアタフタとしていて何も出来なかった。野次馬はその光景を見
て悲鳴を上げながら逃げ、足元に男と一緒に堕ちて来た拳銃を蹴る。
そして蹴られた拳銃は秋山の足元へとやって来た。

「ん？」

「お、マケドニアシューターやん。ええ趣味しとるでえ」

「それどころじゃないでしょ！？」

真夏の言葉に突っ込みを入れる花、そして男は警官を解放してもう一人の警官へと向かう。

「へ！？お、おいく、くるなあ！」

警官がそう言っても男は止まらず、警官の肩を掴み引き寄せる。引きはがそうと警官も暴れるが男の力は異常に強く引きはがせない。

「た、助けてくれえ！！」

「しゅ、駿ちゃん！お巡りさんが！！」

「！！」

秋山は真夏の声で銃を拾い上げて男の方へと構える。

「おい、動くな！」

「秋山さん！」

「駿ちゃん！」

男はその声に反応したのか、男が警官の拘束を解き秋山の方へと向く、

「駿ちゃんって銃使えるん？」

「し、知らないわよ！」

「動くな。動けば撃つ……」

だが秋山が威嚇をしてもその男はこちら見続け向かってくる。
秋山も相手の行動の異常差に気付き始めた。

「おい、本当に撃つぞ？……」

「なんや全然引く気配がないんやけど……」

「撃たれたら…痛いんだぞ？」

「そりゃそうやろ」

そう言っただけしていると男の見る目が秋山から代わり……

「……へ？あ、あれ？な、なんやなんでウチを見とるん？」

真夏の方へとフラフラと歩いて近づいてくる。

これには真夏も怖いのか秋山の後ろへと隠れる。

「しゅ、駿ちゃん！…あの人…怖いで…」

「まなちゃん！俺の後ろに、花ちゃん逃げるんだ！」

とその時、後ろにいた警官が男に向けて銃を発砲した。

パンツ！パンツ！

だが、男は少しよろけただけで効いて無いようだった。撃った警官はそれを見た後上から降って来た別の男達によって……

「ぎ、ぎあああああああ！！！！」

男達は警官に掴みかかって襲う、その光景を来てヒツと悲鳴を上げる真夏を抱き上げた秋山は走り出す。

「どうなっただ？」

「わ、わからへん……」

そう言いながらもこちらを標的したかの様に秋山と真夏を追いかける男達、

秋山は逃げる為、地下街へと逃げた。

「……！、あらら……」

「ど、どうしたん？」

肩に担がれている真夏は秋山が走るのをやめた事に気づき声をかける。

「……シャッターが下りてる……」

「えーと…それって」

「袋のねずみだね……」

そう言つて秋山がシャッター蹴る。

「しゅ、駿ちゃんーっ、後ろ！」

「！」

「「「あ”あ”……」」」

後ろからつめき声の様な声を上げる男達、その姿を確認している
と、

「な、なんで噛まれた警官まで追いかけて来たんや!？」

「おいおい…増えちゃつてるよ…」

秋山は真夏を肩からおろして迫りくる男と警官達に言う。
真夏はすぐに秋山の後ろへ隠れる。

「あのー…穩便に話し合う気はないんだよね?…きっと」

「き、来とるで…」

「絶対…無理なんだよね?」

「も、もうそこまで……」

「そしたら悪いけど……」

「しゅ…駿ちゃん!」

「俺はこんなところで死にたくないし……」

秋山は銃を構え、真夏の方を見る。

「まなちゃんに指一本触れさせる訳にもいかないんでね!」

その日、神室町で一人の金貸し屋の男が大事な友を守る為、銃をぶつ放した。

六話や！「始まりは突然にや……」（後書き）

一夏「始まったな……とうとう」

真夏「そやね……ウチどないやるんやろ？」

一夏「そうだな……所で、名前に龍を入れるって話は？」

真夏「作者が名前を変えるエピソードを考え中や」

一夏「変えちゃうんだ……」

真夏「ん？どしたん？」

一夏「な、なんでもない（同じ夏が入ってるのがよかったんだけどな……）」

七話や！「秋山フイバーや！あとだいちゃんも」(前書き)

上手に出来ま……できたかなあ？

七話や！「秋山フィーバーや！あとだいちゃんも」

パンツ！パンツ！パンツ！

「キヤー」駿ちゃん集金取り立てる姿もカッコええけど撃ってる姿もカッコええで〜！」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！？」

秋山は撃ちながら移動し、真夏は……

「ほれほれ〜鬼さんこちらっ手の鳴る方へ〜」

「さっきまで怯えは何処に！？」

真夏がオトリになり秋山がその隙を突いて真夏に襲う”奴ら”を撃つ、

だが秋山がいくら撃つても多少は怯むが全然奴らの勢いは収まらない。

「うひょ！？あつぶなあ…もう少しで鬼になるところやったで……」

「ほんとに鬼にされちゃいそうだけどね！」

「あ”あ”……………」

「あー！もう！なんで倒れない！」

秋山はいらつく、早く無力化しなければ真夏も危ないからである。

「どうすれば……!」

「駿ちゃん駿ちゃん」

「!、な、なに?」

真夏は奴らに追いかけてまわされながらも秋山と話す、

「この手の相手はお決まりの急所があるで?」

「急所?」

「せや、急所や」

そう言つて真夏は奴らを指差して秋山に撃つ場所を教える。

「狙つて!」

「わかつたよ!」

秋山は真夏の指さす方へと銃を構え……

「ザケル!」

パンッ!

真夏は意味の分からない言葉を言う。その声に反応して秋山が撃つ

た急所は……

「あ”――――”――」

ドサッ！

ゾンビは頭を撃ち抜かれ、倒れるその後起き上がることは二度となかった。

「た、倒れた……」

「ナイススキルや」

「あ”あ”……」

一体は倒したがまだ四体いた。真夏はその後オトリを続けて秋山を援護する。

「駿ちゃん！」

「任せて！」

パンッ！　　パンッ！

秋山は正確に急所を狙い撃ち、確実に倒して行く。

「ビューティフォー………や」

「後二人………！」

そして秋山が最後の二体に向けて発砲する。

パンッ！ カチッ！

「！？」

「ん？ なんか弾切れか……？」

「クソッ！ こんな時に！」

秋山は予備のマガジンなど持っていなかった。その場で銃しか拾っていないので当たり前なのだが、

「し、駿ちゃん！？」

「！？」

秋山がどうしようか悩んでいると真夏の声が聞こえ見ると、

「まなちゃん……！」

「あ”あ”………！」

「い、いやあ………来ないでえ！」

真夏は壁際へと奴らに追い込まれ、ジリジリと後ずさる。

「まなちゃん！クソっ！！」

秋山はいても立つてもいられず真夏に駆け寄るが相手の警官を掴んで離さなかった腕力を思い出し、思いとどまる。

（駄目だ！もし俺が噛まれてあいつらと同じになったらまなちゃんを襲ってしまうかもしれない！）

秋山は必死に考える。

（もし噛まれた時の自決用の弾が……）

弾切れを起こした銃を恨めしそうに見つめる秋山、すると真夏が秋山へ向けて叫ぶ、

「駿ちゃん！」

「！、まなちゃん！？」

「これを！」

真夏はポケットから銀色の輝く何かを手を上げて見せる。

「それは！？」

「さっき駿ちゃんが倒した男のポケットから落ちて来たんや！」

それは秋山が使う銃のマガジンだった。

真夏はそれを思いっきり振りかぶり下へ滑らす様に投げた。

「受け取ってや！」

「ああ！」

秋山は真夏がマガジンを投げると同時に走って飛び込む、秋山がでんぐり返ししている途中で真夏が地面に投げる様に滑らせたマガジンを取り、銃のマガジンキャッチボタンを押して空弾装を捨て、それと同時にマガジンを銃へと挿入する。

カシャッ！ ジャキンッ！

スライドレバーを押してスライドを前後に戻し、秋山は素早く構え、こう言い放った。

「少女趣味は二次元だけに留めろっ！」

パアンッ！

「あ”っ……」

秋山の撃った弾は奴らの頭部へと吸い込まれる様に当たり、

ドサッ！

倒れ伏した。秋山は撃った体勢のまま呼吸を乱していた。
そして真夏は秋山に駆け寄り無事を確認する。

「駿ちゃん平気か？」

「あ、ああ……なんとか」

秋山は体を起して腰を叩く、

「ふうう……年甲斐もなくダイナミックショットをやるもんじゃないねえ……」

「フフ、何言うとるんや？駿ちゃんは十分若いで？」

「そうかな？」

「そうやって」

二人は笑いあう。その時花が階段から下りてくる。
花は二人を見つけ無事を確認して駆け寄る。

「秋山さん！まなちゃん！」

「花ちゃん！」

「やあ、花ちゃんも無事だった様だね」

真夏も秋山も花の無事を確認してホッと一息した。

「でも……これって……」

「……うん、そうだね……」

「いったい……これは……」

三人が倒れ伏した奴らを見て吹いていると、真夏が……

「映画の撮影には中々気合が入ってるで」

「へ？」

「え、えつと？」

真夏は秋山達から離れて撃たれて倒れている奴らをツンツンしていた。

「ホンマに上手く演技してるでえ、このゾンビ役の人たち……」

「えつとまなちゃん？」

「ん？なんや？」

「今の……撮影だと？」

「？、違うんか？」

「あゝ……えつと………そうだね。うん！映画の撮影だった見たいだね」

「やっぱりそうなんかゝそらそうやよなあホンマにゾンビなんておるはずないよなあ……」

「えっと…秋山さん？」

『シッ…下手に本当の事を言ったらまなちゃんがパニックになるかもしれない…』

『と、言うത്？』

『このまま黙ってよう。後、一度スカイファイナンスに戻って状況の整理をしたいし』

花と秋山は未だ役者だと思っている真夏は倒れている人をツンツンしていた。

また起き上がって真夏を襲いかねない奴らの側にいる真夏を見て気がでない二人は即座に行動した。

「さ、さあ！まなちゃん！今日はもう帰ろう？撮影も終わった事だし」

「ん？もう帰るんか？監督とかからギャラ貰ってへんのに？」

「あ、あとから振り込み式だから大丈夫さ！さ、帰ろう？」

「そ、そうよまなちゃん！もう遅いから私達の会社に帰りましょ？」

秋山達は必死で真夏を説得した。真夏は二人の必死様に可笑しそうに見てそれから秋山達の言う事を聞いて立ちあがる。

「そやね。もう遅いし…今日はお開きやな」

「じゃあ行こう。もう冷えてきたし」

「そ、そうですね社長！」

「?……なんや分からんけど二人とも必死やなあ……まるで何かを隠している様に見えるんやけど……」

「ドキッ」

「あわわわ……」

二人は真夏に言われアタフタしていたが、とりあえず今はこの場から離れる事にした。

「さ、さあ行こう！」

「え?あ、ちょ……」

「行きましょう！」

「い、行き成りどないしたんや？」

真夏は訳が分からず頭を悩ませていた。そして真夏は何かを思い出したようにして倒れている奴らに、

「あ!そやったわ……えっと、お疲れ様でしたー！」

そう言っただけで倒れている奴らに手を振りながら秋山に手を繋いで連れて行かれる真夏、

花と秋山はそそくさとその場を後にした。

秋山達がスリルを味わっている頃。ここは龍司が働いているタコ三味、そこに織斑兄弟の姿があった。

「一坊！一人前追加や！頼むでえ！」

「はい！」

「一夏、気合を入れろ」

「千冬姉ちゃん…なんで俺働いてるんだ？」

一夏は姉に連れて来て貰って龍司の店で働いていた。

「将来の為に成る。覚えとけ…（そうすれば龍司さんの店に気兼ねなく行ける！）」

案外黒い姉だった。一夏の将来の為に成ると聞きとりあえずは龍司から仕事を覚える。

「龍司さん！出来ました！」

「おう！」

龍司は一夏からたこ焼きを受け取り、その盛り合わせに不具合が無いか見る。

「ええ感じや…やるやないか！一坊！」

「ありがとうございます！」

一夏は龍司に頭をクシャクシャに撫でられ、少し恥ずかしそうにして笑顔になる。

「この調子で頼むで」

「はい！」

「一夏、頑張れよ」

「おう！任せとけ千冬姉ちゃん！」

そう言つてまた注文が来てたこ焼きをパックに詰める一夏、千冬はそれを微笑んで見ていた。

（中々に上手い手付きだ……今度の夕食のたこ焼きも期待できそうだな……）

千冬は少し楽しみにして二人の仕事を見ていた。
そして龍司達はあとから気づく、真夏達がある男の復讐劇に巻き込まれている事を……

オマケ・「東城会六代目、仏の顔も三度まで……の巻や！」

「おやっさん！宣伝に行ってくるで〜！」

「おう、きいつけてな」

日曜日、ウチは今町中でたこ焼き屋をやっているおやっさんとおとんと一緒に営業をしとるんや
おやっさんのたこ焼きはむツチャおいしいねん！せやから接客とかのお仕事とかが多いんよ。
でもおやっさんの店にくるお客さんは何故かまいどウチが接客や宣伝する時が多いんや、何故やろ？

「たこ三味のたこ焼きはむッチャ美味しいですよ！よってってや〜！」

ウチは少し店から離れた路上で店の宣伝を始める。

「たこ三味の店によつてな〜！美味しいで〜！」

ウチがそう宣伝するとウチの周りにはたくさんのお客さんが集まってくる。ウチはそのお客さんを店まで案内するんがお仕事や、

「おやつさ〜ん！六人様追加や！」

「おう、ご苦労さん」

そう言っておやつさんはウチの頭を撫でてくれる。
おとんもそれを見て笑ってたんや、

「えへへ〜♪」

「ほな、また宣伝頼むで…郷田！六人分追加や！」

「へい！」

おとんはおやつさんに言われて、慣れた手つきでたこ焼きを六人分の紙パックに入れていく、
その素早さはおやつさんには遠く及ばないもののなかなかの腕やつた。

「おとんも上手に焼けました〜やな！」

「まだまだや、おやつさんの腕には遠くおよばへん」

「そないなことないって」

「まあ、まだ暖簾を譲るにはまだまだやな」

「おやつさんまで……」

おやつさんは厳しいな。おとんのたこ焼きは早くてむっちゃ美味しいのに……

「ふん、おおきにな真夏……ワイもぎょうさん腕を上げるさかい。そんときやおやつさんの味を超えるたこ焼き食わしたる」

「おとん……うん！」

「へっワシの味を超えたきやワシの腕見てもっと腕を上げい」

「へい！」

「おとん！ファイトや！」

「おう！」

おとんは気合よく声を出してウチに返事をしてくれはった。

「ほら、真夏ももう行きや。客をぎょうさん集めたツてくれ」

「了解や！」

ウチは走って人の多い場所へ向かう。そして何時も通り大きな声を出して宣伝をする。

「美味しいたこ焼きありまっせー！よってってやー！」

ウチがそう言うといろんなお客さんがウチによってくる。もっと声だしてぎょうさん稼ぐでー！

「たこ三味のたこ焼きは世界一いいいいいいいい！！！！」

ア、アカン……少し気合を入れ過ぎてもうた……お客さんが引いてしもうてる……

そんなこんなで店は大繁盛、ウチとおとんはホクホク顔で家路に着いた。

「おとーん、いつちゃんの家に遊びにいつてもええか？」

「ん？千冬の嬢ちゃんの家にか？」

「そや、いつちゃんと遊ぶ約束してんねん」

ウチがそう言っておとんに頼むとおとんは笑って言う。

「ええで、でも暗くなる前には帰るんやで？」

「うん！分かったで！」

そう言ってウチはいつちゃんの家に向かって走る。

「ん？曇って来よったな……」

おとんが何言うたかは離れてしもつてよう聞こえなかったけど、ウチはおとんの吹いた言葉を聞いてやな予感がしたんや。この時、ほんまにあないな事が起きるなんて思いもせんかった……

視点・「織斑一夏」

今俺はまなちゃんとの約束があつて自分の家の前で待っていた。

「遅いな…まなちゃん」

俺がまなちゃんがくるのを待っているが、その待っている人物はなかなか現れない。

ちなみに、俺は普段千冬姉ちゃん意外はちゃん付けはしない。では何故まなちゃんはちゃん付けして呼んでいるかと言うと……

（ウチがサッカーで勝ったらまなちゃんって呼んでな？）

まなちゃんにそう言われ、俺は負けるはず無いと思つて勝負をしたのだが……結果…負けてしまった……

と言う訳で俺は真夏をまなちゃんと呼ぶ事になってしまった…これ結構恥ずかしいんだがな……

「ふう…少し様子を見てくるか…」

俺はまなちゃんの家のある方向へとかけだす、アイツが約束の時間に遅れるなんて結構珍しい……
そう思っている……

「ん？アレって……」

少し走ってから少し経つと黒服の一団がいた。

（なんだあれ？）

俺が少し近づくと黒服の人たちの奥に誰かがいた。

「あの子って…まなちゃん？」

囲まれてる？そう思っていると、

「来てもらおう」

「嫌や！離してえ！」

（！？）

ま、まさかこれって……

（ゆ、誘拐！？）

俺は誘拐の現場を目撃した。それも自分のいところがさらわれようと

している。

（な、なんとかしないと……！）

でも…俺は、その場に動けなかった……

（ど、どうすれば……）

俺が躊躇していると黒いワゴン車が黒服の前で止まり、まなちゃんを無理やり抱きかかえた男は車にまなちゃんを放り込もうとしている。その時、偶然にも男に担がれたまなちゃんと目があつた。

「！、……………」

（ま、まなちゃん？……）

まなちゃんはずっと俺を見ていた。その目は助けてと…そう呼んでいるようで成らなかった。

でも俺は、その場から動く事が出来なかった……そしてまなちゃんは車に放り込まれ、

「きゃああー！！」

「！、まな……………」

声を出しそうになったが慌てて口をふさぐ、

「ん？」

「どうした？」

「……………」

男の一人が俺に気づいた。不味い、気づかれた!?

「……………いや、気のせいかな」

「そうか、さつさと行くぞ。二階堂さんが待ってる。あっちの方も桐生一馬の泣き所をさらい終わったはずだ」

「そうだな……………」

そう言つて男達はワゴン車に乗り込もむ、

「た、助けなきゃ……………!」

だが俺の足はガクガクと震えていた。なんだよ…なんで震えてんだよ!?

その時聞き覚えのある声がした。

「ちよつと待つて貰えないか?」

「ああ?なん…バキイ!…ブべらッ!?」

「え!?!」

俺は顔を上げるすると…………

「まなちゃん、東城会の大事な人なんでね?返してもらつ……………!」

そこには神室町を仕切る……

「誰だテメエ!？」

「俺か？俺は……」

東城会六代目会長……

「俺の名は……」

「堂島大吾だ」

堂島大吾さんその人だった……

「んうゝ！んー！（だいちゃん……！）」

「まなちゃんは返してもらうつよ？」

「と、東城会だとお!？」

「そ、それも六代目!？」

「ひ、ひるむな！やつちまえ!」

ヤラレ役の台詞を言う黒服の男達は次々と襲いかかるが、大吾さんは微動だにしなかった。

「危ない！」

俺がそう叫ぶ大吾さんは相手の手を取り、

「ふんっ！」

ボキッ！

「ぎいやああああああっ！？」

腕をへし折った。それを見た黒服の相手は驚く、

「ひ、ひいい……」

「お、折りやがった……！？」

「いてえ……！」

「神がお前達を見逃しても……」

大吾さんは後ろを向き背中を指差す、

「俺の背中中の不動明王は見逃さない！」

「うっう……」

「こ、こいつ……」

「た、助け…助けて……」

大吾さんは拍子抜けと言った感じで溜息を吐く。

「今ならあまり血を見ずに終わらせてやる……まなちゃんを解放しろ」

「く、クソっ！」

大吾さんジリジリと後ずさる男達に近づく、するとまだ車の中にいた一人がまなちゃんを抱えたまま出て来て、

「動くな！コイツがどうなってもいいのか！？」

「！？」

「んー！んー！」

そこには口に布を巻かれ縛られているまなちゃんがいた。

「てめえら……！」

「へ、へへ……これじゃあ手も足も出せねえな！」

「仲間の腕折られたケジメ付けさせてやるぜ！」

そう言って大悟さんに近づいてくる男達に、大吾さんの顔が陰しく

なる。

ど、どうすれば!?

(そ、そうだ!まなちゃんを助け出せば!……でも……)

ど、どうやって!?!そうしているうちに男達と大吾さんの距離が縮まって行く。

………お、俺がやらなくちゃ!

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ!」

そう自分に念じて覚悟を決め、俺はまなちゃんを捕まえている男の元に走った。

「うおおおおおおっ!……!」

「!?!、な、なんだ!?!」

「まなちゃんを返せえええええっ!……!」

「一夏君!?!?!」

「な!?!まだ仲間がいたのか!?!」

皆が驚いているがそんな事知らない!今はまなちゃんを!

「まなちゃんを返せ!」

「なあ!?!い、いてて!コイツに足に噛みつきやがった!?!」

俺は男の足に噛みついてまなちゃんを助けようとする。

「は、離せ!」

「んー!」

「んうー! (いっちゃん!)」

「このガキイ!!」

男は思いっきり足を振って俺を蹴飛ばす、その勢いで俺は飛ばされて壁に当たったしまった。

「ぐううっ!!」

「んー!？」

「一夏君!？」

くっ!..... 負けるかあ!!!!

「まだまだあ!!!!」

「こ、こいつ性懲りもなく!？」

俺はまた再度男の足に噛みついてまなちゃんを助ける。

「いててててっ!?!このガキっ!!」

ゲシッ！

「ぐっ！！」

「んっ！んっうー！！」（いっちゃんもう止めてえ！）

まなちゃんが何か言っではいるけど俺は……

ガシッ！

「な！？今度は掴みやがった！？」

「俺は……」

俺は龍司さんに！

（一坊…ワシは昔恨まれる様な事しotta…せやから、真夏にもそれが及ぶと思うんや…）

俺はあ！！

（せやから、そんときに真夏の一番近くにおる一坊に……）

まなちゃんをお！！

（真夏を守って欲しいんや…ええか？男の約束やで？）

「守る！！死んでも離さない！！」

「こんのがキはああ！！！！」

男は足を上げ、俺を踏もうとする。

「死ねやあ！！」

「ん————！！」

「くう！！」

俺は目をつむって痛みをこらえる。だがその痛みは来なかった。

「ふうう…間髪…だね」

「な、なああ！！」

「え？」

「んんう？」

俺はゆっくりと目を開けると、

「もう大丈夫だ。一夏君…あと残っているのはコイツだけだよ」

「へ？」

「な、なにに！！」

俺はあたりを見回す、すると……

「お、お前ら!!」

向こうで血を流して悶絶している二人組の男がいた。

大吾さん…俺がまなちゃんを助けている間に倒していたんだ……

そして大吾さんは俺を踏もうとしていた足を持ち上げて男の体勢を崩し、

「んむう!?!」

「おわあ!?!」

まなちゃんだけを取り上げて男を倒した。

そして大悟さんはまなちゃんの口に着いていた布を取り安否を確認する。

「大丈夫か?まなちゃん」

「大丈夫や!いっちゃんが助けてくれてん!」

「そうか……」

大悟さんはその場でまなちゃんを下ろすと倒れている男の元へと歩みよる。

「覚悟は……出来ているんだろうな?」

「なっ……」

男は何かとてつもない者を見た様な目で大吾さんを見る。

俺にも分かる。大悟さんの後ろに不動明王が見えている様な錯覚が

……

「お前は三回の罪を犯した……」

「さ、三回？」

「まなちゃんを誘拐した事、一夏君に怪我をさせた事、そして……」

大吾さんは握り拳を作り、構える。
その構えは喧嘩殺法だ。

「女の子に涙を流させたことだあああっ……!!」

バキイイイツ……!!

「あべしい!!??」

大吾さんの渾身のパンチが男を取らえる。男は円をかく様にフツと
ばされてそのまま大地に伏した。

仏の顔も三度までってやつだな……

「……………ふうう 一夏君大丈夫か？」

「あ、はい……………大丈夫です」

俺はポカーンと見ていた様で大悟さんに声を掛けられるまで固まっていたようだ。

て、それどころじゃない！

「まなちゃん！」

「いっちゃん！」

まなちゃん俺に賭けつける。

その顔は心配と悲しみで染まっていた。

「いっちゃん！いっちゃん！平気か！？平気なんか！？」

「だ、大丈夫だまなちゃん！伊達に千冬姉ちゃんに鍛え上げてもらって無いからな」

「で、でも口から血いでとるで！？」

「え？ああ、これが……」

どうりで痛いと思ったら、蹴られた時口の中切ったかな？

「俺は大丈夫だよ」

「でも、ウチを助ける為に……」

「まなちゃんの為におった傷だ。どうってことないさ」

「……………」

まなちゃんは声を押し殺して泣いていた。そっか…誘拐されかけたんだもんな…

「……俺は救急車と警察を……むっ!？」

大吾さんは何かに気づいたらしく、慌てた声だ。何かと俺も見ていると、

「ず、ずらかるぞ!」

「「「お、おう……」」」

ボロボロになりながらも必死に車に乗って逃げる男達がいた。そして全員が乗り車は急発進して逃げた。

「まてえ!…クソ、逃げられた……!」

大吾さんは悔しそうにして顔を歪めていた。

俺も奴らが逃げた事に腹が立ったが、今はまなちゃんの無事を喜ぼう。

「まなちゃん、怪我は無いよな?」

「うん…グスッ…無いでえ…」

まなちゃんは泣きながら応える。
ほんとに怖かったんだなあ……

「まなちゃんもう大丈夫だから泣かないで……」

「ちゃう……」

「え？」

まなちゃんは声を上げて否定する。
そして顔を上げて俺を見るまなちゃんの顔は涙でぐちゃぐちゃだった。

「ウチが泣いとるんはいつちゃんが怪我したからや……」

「まなちゃん……」

「いつちゃん…もう無茶せんとして…いつちゃんにもしもの事があったら…ウチはあ…」

そう言つて俺に寄り添うまなちゃん、そうか…心配かけちゃったんだな…俺は……

「わりいすまねえ許せ……」

「そんな…謝らんでもええって…」

まなちゃんはまた泣きだし、俺の胸に顔を埋める。
それに俺はまなちゃんの背中をポンポン叩いてあやす、

（……………守ろう…今度こそ…絶対に！）

俺は生まれて初めて強くそう願った。

「……………お邪魔のようだな……………」

大悟さんは察してケータイを取り出して警察と救急車に電話した。その後警察と救急車が駆けつけて俺はタンカに乘せられまなちゃんと一緒に病院に行った。

そして病院で待ち構えていた千冬姉ちゃんに無茶をするなと抱きつかれて怒られたのは少し意外だった。

千冬姉ちゃんと一緒に駆けつけていた龍司さんは俺の頭を撫でてよく守ってくれたと言いつ俺はなんだか分からないけど泣いた。その光景を嬉しそうに見つめるまなちゃんを見て恥ずかしくなったのはここだけの秘密である。

七話や！「秋山フィーバーや！あとだいちゃんも」（後書き）

真夏「いつちゃん…ホンマに平気か？」

一夏「大丈夫だって、ほんとに口を怪我しただけだから」

真夏「でもお…」

龍司「真夏、傷は男の勲章とも言っんや。褒めたれや」

千冬「龍司さんの言うとりだぞ真夏、一夏は良い事をしたんだ」

真夏「……………そやね…いつちゃん、おおきに！」

一夏「あ…うん…（え、笑顔が眩しすぎる！！）」

八話や！「ウチは……人を……」（前書き）

遅くなつてしまい申し訳ありません

八話や！「ウチは…人を……」

「社長…あれはいつたいたんだっただんでしょう……」

「分からない…まなちゃんの言うとおり撮影だったらよかったんだけどねえ……」

「スピー〜……」

俺は今背中で寝ているまなちゃんを緒ぶって花ちゃんと一緒にスライファイナンスへ帰宅している。

あの襲ってきた連中を片づけたはいいが、どうして俺が襲われたのか分からな……いやあり過ぎて検討がつかないだけか……ともかく、俺は撃ちあつた場所から離れる事を選択して帰る事にしたんだ。

なんでまなちゃんが寝ているかと言うと歩いて帰る途中でコクリコクリと頭を揺らして寝むそうなまなちゃんを俺がおんぶする事になったんだ。まあ、俺は役得だけだね。

「……………まなちゃんってある意味大物ですよね」

「そうだね、あんな事があつたのに寝てるし……」

「うづ〜ん……えへえ……」

寝ているまなちゃんは何故かにへらあと笑ってよだれを垂らそうとしている。

ちょ！俺のスーツに掛けてしまう！？

「あー今吹きますね……」フキフキ……

「んむう……」

「ふう…危なかった」

危うくスーツが涎かけになるところだった……しかしほんとになん
だったんだろうねえあれは……

俺は本物の銃で人を撃った感触を思い出し、少し身震いした。

（まなちゃんにホントの事が分かったら人を撃った俺を責めるかな
あ……）

何故かそつちがかなり心配になる俺だった。と…着いたか…
俺は階段を上がって花ちゃんに鍵を開けてもらい中へと入った。

「どっこちらせつと……」

ポスンッ

「んうう……スウ……」

まなちゃんを起こさない様に部屋の奥に前々から用意していたハン
モック（注：以前からまなちゃんはウチの会社で寝泊まりすること
があつて用意した物だ。ソファーでもよかつたんだけどハンモック
が安く売られていたから衝動買いしちゃったんだよね……）で寝か
せ寝顔を見る。

「ホント、子供の寝顔は天使だね……」

伊達に「神室町の龍妃」、なんて呼ばれてはいないか……
ちなみになんでそんな異名で呼ばれているかと言つと、まあ……あの
人の娘だしねえ？

「そうですね……」

俺達はまなちゃんの寝顔を楽しみつつ、煙草に火を付けようとした
がまなちゃんがいたので止めた。
そしてさっきの出来事について花ちゃんが切りだした。

「あの人達つて……ホントになんだったんでしょう……」

「分からない……」

奴らがなんで俺達を襲ったのかは分からない……まあいずれ分かる
だろうさ……とその時、花ちゃんは唐突に、

「私……今夜泊つて行きます！」

「へ？」

「だって秋山さんが心配ですし……まなちゃんも……」

「……………俺は良い秘書を持ったもんだ……………」

俺はしみじみそう吐く、まなちゃんと良い花ちゃんと良い、俺は恵
まれている……

「でも襲わないでくださいね？」

「襲う？俺が？、ハ、ハハハハ……」

俺が乾いた声で笑うと花ちゃんはムスーとした表情で、

「なんです？その笑い……」

「えっと……」

花ちゃんは大丈夫として…まなちゃんは……

「まなちゃんも襲わないでくださいね？」

「いや、少女に手は出さないよ？」

「ホントですかあ？」

……えっと……

「……もういいです。私はソファで寝ますから」

そう言つて奥から毛布を持って来て花ちゃんは寝る。さて……

「俺も寝るかな……」

考える事は沢山あるが今は体を休めよう、まなちゃんの親御さんにもまなちゃんから会社で寝るかもと伝えたつて聞いたし、

「明日、何もなきゃいいが……」

俺は不安な予感と共に椅子で寝る。まさか明日にはリアルバイオハザードが起るとは夢だけにして欲しかった……

視点・「郷田真夏」

「ふあゝ……よう寝たでえ……」

ウチは目をこすりながら駿ちゃんが用意してくれはったハンモックから起きあがる。

あたりを見回すと雑誌を顔に乗せて寝ている駿ちゃんと……

「花ちゃん？」

体を震わせて毛布を体にかけてソファで寝ている。花ちゃんを見したんや、

「花ちゃん？平気かいな？」

ウチは少し心配して花ちゃんの元に駆け寄ってん、
そんでおでこに手を置くとかなり熱かったんや、

「これ…もう微熱やあらへんで……」

ウチは直ぐに駿ちゃんを起こしに行く。

駿ちゃんは相変わらぬスタイルで寝とつといた。

「駿ちゃん！起きてえな！」

「う、ううん……」

「駿ちゃんってば！」

「ううん？……まなちゃん？」

「せや、駿ちゃん起きて、花ちゃんが！」

「花ちゃんがどうかしたかい？」

ウチは立ちあがった駿ちゃんの手を引いて花ちゃんのところまで連れて行く。

駿ちゃんは震えている花ちゃんのおでこに手を当てると険しそうな顔をしたんや。

「これはもう微熱じゃないな……」

「それはウチがもう言ったで？それよかはよ花ちゃんを……」

ガチャガチャ！

「！」

「ん？なんや？お客さんかいな？」

でもなんやろう……嫌な予感がするで……

とその時駿ちゃんはテーブルの上にあった拳銃を取ってドアの横へと移動したんや、

「駿ちゃん？」

「あ、秋山さん？」

あ、花ちゃん起きたんや、

「シッ……」

駿ちゃんがそう言つとウチらは黙つて駿ちゃんの様子を見る。
カチリと駿ちゃんは拳銃のハンマーを下ろしてドアに近ずき……

「どちらさん？」

駿ちゃんがそう尋ねても返事が無く、次の瞬間……

ドオオンッ！

「！？」

「な、なんや!？」

「きゃああああ!」

ドアを突き破って血だらけを人たちが押し寄せて来よったんや……
て!

「な、なんや?まさかまだ撮影続いとんのか!？」

「まなちゃん!離れて!」

駿ちゃんがそう言うのと拳銃を構えて入ってきた人たちを迎え撃
った。

ウチは花ちゃんを庇うようにして部屋の奥へと連れて行く。クッ!
お、重いで!

パンツ!パンツ!パンツ!パンツ!

部屋の中で銃声が響く、駿ちゃんの射撃センスは良いようで次々と
入ってきた人を倒す。
せやけど人数が多いようで次第に追い込まれて来よった。

「あ”あ”!」

「!?!、不味い!」

「駿ちゃん!」

ウチはハツとして昨日撮影で拾ったある物を取り出して……

「わあああつ!?!」

「駿ちゃんから離れて!」

パァンッ!

「あ”――――”

ドサリッ

駿ちゃんに噛みつこうとした人をウチは銃を使って倒した。
それを見た駿ちゃんはポカーンとして見てはった。

「駿ちゃんボーとしてはる時やないでえ!」

「え!?!で、でも……」

「はよ!」

「は、はい!」

駿ちゃんは再起動して相手を出迎える。まったく……一日連続撮影
なんて聞いて無いで……

真夏があのに拾った密造銃で秋山と共に交戦し、奴らは何とか倒した。

「ふう……」

「まったく、ウチらの会社を使ってまで撮影するなんて…非常識や！」

相変わらずズレた発言をする真夏に秋山は、銃を使った事に怒って良いのか現実を教えるかで少しなんだ。秋山は直ぐに窓の方へと歩き、外の状況を確認…その後、電話を取って見たものの繋がらずケータイを見たが圏外だった。

「……………花ちゃん、まなちゃん…どうやら集金は無理そうだ」

「どしたんや？なんか外であつたんか？」

秋山は真夏の問いのどう答えればいいか悩んだが、花の状態が最優

先と考えた。

「その話は後だ。大丈夫かい？花ちゃん」

「はい、なんとか……」

「花ちゃんもしかして昨日の風邪が悪化したんか？」

「歩けそう？」

「はい……きゃ」

花は立ちあがろうとするが体に力が入らないらしく崩れてしまう。

「花ちゃん！」

「体の具合は？」

「寒いです…凄く」

「医者がいるな……柄本先生を呼んでくる」

「え？…でも」

花は倒れている奴らを見る。秋山も気づいて苦虫を噛み潰した様な顔をする。

「？、どしたん？」

「いや……とりあえず場所を移そう」

そう言って秋山は花を担ぎ部屋を出る。真夏もそれに続いて部屋を出た。

「どうするんですか？」

「二階にさ、ニューセレナって店があるだろう？」

「はい……」

「そこに立てこもろう」

「駿ちゃん平気なんか？」

「大丈夫だよ……花ちゃん、少し、最近痩せた？」

「おととい……一キロ、痩せました」

「やっぱりね」

「昨日…二キロ増えちゃいましたけど……」

「あつそ……」

「意味無いやん……」

秋山達は真夏を前衛にして階段を下りている。
真夏が前の安全確認をして秋山達はそれに続く、
そして二階に着くと秋山は花を下ろして階段の隅っこになる植木鉢

を退かす、

「よっこらせと……」

「お、鍵や」

「不用心なんですね…セレナさんって……」

「そうなんだよねえ……」

そう言つて秋山は扉に鍵を差し込む、

「でも助かった礼は今度言つとして……」

「せやな」

秋山は扉を開け、真夏はすぐさま中に入り安全を確保する。

「異状無しや」

「……ちよつとだけ邪魔させてもらおう」

秋山は真夏の手慣れた行動に苦笑いしつつ花の肩を担いで中へと入った。

真夏は奥から持つてきてくれた毛布でソファ―横たわる花に掛ける。

「直ぐに戻るよ。柄本先生を連れてくる」

「すみません……気を付けてくださいね……」

「分かってる、終わったら今日こそ集金に行くよ」

「ウチも付き合っで？」

「はい……」

そう言って外に向かう秋山、そしてそれに着いて行く真夏、秋山が気づき、ピタリと足を止める。

「……………まなちゃん？」

「なんや？」

「なんでついてくるの？」

「？、駿ちゃん一人で行こうとしてはるからウチが手伝おうと思うて」

「いや、外は危険だから……」

「危険って……映画の撮影なんやろ？」

「……………まなちゃん」

「なんや？突然真剣なりはって……」

秋山は決心した様に真夏の肩に手を置くと語りだす。

「昨日の時も、今日起きた出来事も……全部本当の事なんだ」

「本当の事？」

「そうだ。俺が撃ったあの人達も…ホントは役者じゃなくて、本物のゾンビ…かもしれない」

「ゾンビって…駿ちゃん死者が蘇ってホントに襲ってきた言うんか？…笑えん話やで？」

真夏は少し可笑しそうにして笑う。だが秋山が真剣な表情したまま真夏の目を見ている事に気づき、次第に目を見開いて信じられない様な顔をする。

「…ホンマなん？」

「本当だ」

「じゃあ駿ちゃんが撃った人は？」

「…死んじやった…と思う」

「じゃあ…じゃあウチが撃つてしもつた人達も…？」

「……………ああ」

真夏は手から銃を取りこぼしてその場でガタガタと震える。花も真実を告げられた真夏を心配して上半身だけを起こす。

「う、ウチ…は…ウチ、人を殺して……………」

「まなちゃん落ち着いて……………」

「ウチ…人殺しなって……」

「まなちゃん……」

「ウチい！」

「まなちゃん！」

秋山は力いっぱい真夏を抱きしめる。秋山の胸の中では真夏が息を殺して泣いていた。

「……………ありがとう」

「え？」

「まなちゃんが俺を助けてくれたから……俺はここにいて、花ちゃんやまなちゃんを助けられたんだ」

「でも……ウチは……」

「それなら俺だってそうさ……まなちゃんよりも多く人を撃つやつたしね」

「駿…ちゃん」

秋山は真夏の頭を撫でる。真夏は撫でられいく事に落ち着きを取り戻し始める。

「それに、あれは正当防衛だ。気にするなとは言えないけど、まな

ちゃんは俺達を助ける為に撃ったんだ……誰も責めやしない。ううん……誰にも責めさせない」

「うん……」

秋山は少しの間真夏を抱きしめたまま頭を撫で続ける。

真夏も落ち着いたのか涙はもう止まっていた。そして数分が立って真夏は秋山から離れる。

「……………決めたで」

「ん？何をだい？」

「ウチも行く」

「は？」

「駿ちゃんだけに行かせられへん。ウチも行くで！」

「い、いや！だから……」

「それに駿ちゃんやて銃もったんは昨日からやる？ほんならウチが教えながら先生とこまで行くやさかいそれに駿ちゃんの事が心配やねん」

「でも……………」

秋山は真夏を連れ行く事を拒むが……

（……………あれ？不安があるのになんでこんなに心強いんだ

？)

そりゃまあ真夏はガンスリンガー宜しくて銃の扱いは真島に教えて貰っているからだろう。

その指導を受ければ問題無く進める予感が秋山にはしていた。

「……………危険だと思ったら直ぐにセレナに帰るんだよ？」

「それじゃ！」

「あ、秋山さん！？」

「花ちゃんゴメン、一人で残す事になっちゃうけど……………」

秋山は申し訳なさそうにして花に話す、花もはあため息を吐いて…………

「……………もし安全な場所に出られたらまなちゃんをそこに置いて行ってくださいね？」

「分かった」

そう言って秋山は外へと出て真夏もその後に続いた。

「花ちゃん、直ぐに戻って来るわ！」

「秋山さんから絶対離れちゃダメだからね？」

「はい！」

そう言って真夏はドアを閉めて鍵をかけてる。

「はああ……凄く心配だわ……」

花は横に寝て秋山達の無事の帰還を祈りながら瞳を閉じた。

「まずは柄本先生のところに行かないと……」

「そやね、またあないな人たちと戦う事になるんやな……」

「まなちゃん……やっぱり」

「平気や、それでもウチはおとんの娘や……支えるで駿ちゃん」

「つ……ぜつたい無理だけはしないでね？」

「うん、約束や」

二人は前を向いて歩く、ここにガンスリンガーガールと金貸しの男と言つ奇妙なタッグが組まれた。

八話や！「ウチは…人を…」（後書き）

秋山「まなちゃん…俺は……」

真夏「駿ちゃん言っただやん、正当防衛やって……それにウチも撃ったんや、駿ちゃんはお門違いやしおあいこや」

秋山「まなちゃん…ありがとう」

九話や！」「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」（前書き）

真夏「うゝん職業先は東城会……」

一夏「ま、まなちゃん！？」

千冬「私達は出番無いのだな……IS作品なのに……」

作者「結構後に原作は開始されますけどね……」

九話や！「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」

ウチらは花ちゃんの風邪を直す為、解熱剤を持っている柄本先生の所に行く所や、

それでウチらは花ちゃんを残してニューセレナ出た。

「鍵はちゃんと閉めた？」

「大丈夫やで、鍵はちゃんと閉めたしウチが持ってたもう二丁のハジキも花ちゃんに渡しといたわ」

「用意が良い事で……」

にやははは……ちゃっかりしてる所がウチのええ所やで？

「それじゃ……」

「ほな……」

ジャジャキンッ！

「行こうか！」

「行きましょか！」

ウチらは柄本先生がいる医院がある泰平通り西へ歩く、そしてニューセレナ裏から出て天下一通りに出ると……

「か、神室町が……」

「一体、どうなってるんだこれは……!？」

神室町のあちこちから火の手が上がり、破壊された町やった。

「どないしてこないな事に？」

「分からない……今は柄本医院に急ごう！」

「せやな……」

ウチらは道を阻むゾンビを避けては撃って天下一通りを進む、

「ムムツ！天下一通りの道が塞がれとるで……」

「この先には行けそうに無いな……」

ウチらがバリケードの前で悩んでいると駿ちゃんが壊れた建物を見ている。

「……、？、どしたん？」

「……この建物の奥から反対側に出られるかもしれない」

「え？ホンマ？」

「うん、言ってみよう」

ウチは駿ちゃんの後について神室町西屋上上り口の中に入る、建物の中は所々損壊しており何時崩れても可笑しくは無い状態やった。駿ちゃん勇気あるでえ……

「まなちゃん気を付けて……粉じんで見えないけど、いるよ」

「了解や駿ちゃん、お互いバックアップを忘れんように、な？」

「分かってる、まなちゃんも俺から離れない様にね？」

「おk、や」

ウチらは粉じんで見えん敵を確実に排除しつつ上の階へ通じる階段を上って行く。

「良し、最上階だ……うわっ！？」

「駿ちゃん！？」

ウチらが上り終わると左からゾンビが現れ寄った。

「はいだらー！」

パンッ！

「う”あ”……」

うめき声を上げてゾンビは倒れはった、危ないところやったで……

「あ、ありがとう……」

「気い付けや駿ちゃん……行き成りドア破って出てくるんはゾンビの十八番や」

「……以後、気を付けます」

駿ちゃんは頭を下げてウチに謝る。もう……謝って済むんなら他の人やてゾンビにならへんで？

そう言いつつウチは階段の反対側にあるドアに見つけて扉の横に体を密着させる。

「扉の奥にいそうやな……」

「そうだね…お？窓がある」

駿ちゃんはドアの横にある窓を覗く、すると……

「うわ……結構いる」

「どんくらい？」

「二人じゃ対処に難しいくらい」

「困ったもんや……」

ウチらがどう切り抜けるか考えていると駿ちゃんが何かを見つけた。

「！、あれは……ドラムカン？」

「使えるでソレ……何のドラムカン分かる？」

「……………何かの燃料だね」

「なら可燃性は十分ありや、駿ちゃん」

「わかった」

駿ちゃんは窓から銃でそれを狙い、

「当たれ！」

撃った、次の瞬間駿ちゃんの撃った弾はドラムカンに当たり爆ぜた。

「うひゃあ！」

「クッ！」

ウチの横の扉が吹き飛ぶ、あ、危なかったで…巻き込まれてたら死んでたわ……

ドラムカンの横で立っていたゾンビ達は上手に焼けていたんや……
うぷっ……

「まなちゃん平気？」

「な、何とか……大丈夫や」

大丈夫な筈なのに……やっぱりウチに荷が重かったんか？
……………止めよう、今はクスリを取りにいかへんと………！

「平気や…いこー！」

「……うん」

ウチら進む、少し経ってからウチらは広い部屋へ着くと不気味な声が聞こえて来た。

「な、なんや!?!」

「なんだ…この不気味な声は?」

ウチらが辺りを警戒すると、奥の廊下から……

「!、くるで!」

「勘弁してよ!」

ウチら構える数十人のゾンビを目前にして、

「!、駿ちゃん、銃よりもこれを!」

「!、これは!?!」

ウチは駿ちゃんにある物を指差して気づかせる。

「これ、使えるで!」

そつ、お馴染みの……

「鉄パイプ!」

「これで一掃や!」

駿ちゃんは鉄パイプを持って敵へ振りかぶり怒涛の如くなぎ倒す、
うーんやっぱり駿ちゃんは棒で戦った方が見栄えするで、
そんなこんで一掃してウチらは階段を下りるせやけど……

「ちょ！行き止まり！？」

「ん？後ろか！」

後ろからゾンビが現れる。まあ、数が少なかったんで早々と退場し
てもろおたけど、

「ん？この壁は……」

「どしたん？」

「壊せそうだ……あれを壊して外に出よう！」

そう言つて駿ちゃんはウチが持ってた鉄パイプで叩いて壊し道を開
けた。

「駿ちゃん……ここ高いで？」

「まなちゃん、俺に捕まつて」

そう言つて駿ちゃんはウチをお姫様だつてして飛び降りる。
こ、これは！一度は女の子が憧れるシチュなんやないか！？

「もう駿ちゃんウチはまだ五才やで？困るわぁ……」

「ん？何が？」

「なんでもあらへんで」

「？」

駿ちゃんは首をかしげながらも飛び降りて着地する。その時コキッと駿ちゃんの腰のあたりから聞こえてきたのは黙ったところ。駿ちゃんも悲痛な顔しとったし……

「平気か？駿ちゃん」

「ど、どうってことない！」

そないな顔で言われても説得力無いで？

とりあえずウチを下ろして腰をトントンしとる駿ちゃん、

ホンマに歳は取りたくないもんや。あ、ウチはまだ五歳児やった。

第三公園を抜けてウチらは天下一通り裏路地を通り天下一通り表へと進んだんや、

その時にウチはたちちゃんがバイトしてはるコンビニを見つけたんや少し寄ってくと呻き声と一緒に違う声を聞こえた。

「おいっ！しっかりしろ！」

「うっう……」

「今の声……駿ちゃん！」

「うん、彼だね」

ウチらは急いで半壊しているコンビニの中へ入る。

するとコンビニ定員の服を来てトンファーを持つタッチちゃんとそのタッチちゃんに守られる様に蹲っている知らん人がおったんや。

「真夏！？」

「タッチちゃん！ってあれ？どないしてこっちのコンビニいんの？」

「こっちのコンビニ定員が欠落しててな。呼ばれたんだ」

「さよか」

「龍也君！無事だったか」

「ああ、何とか…でもバイトの後輩が……」

「うっう……」

真夏は蹲っている男に近付いて状態をしてみる。

「……打撲やな、運がええで噛まれてたら助からへんかったで？」

「！、そうか、なら俺はコイツを連れて安全な場所へ避難する」

「一人で平気なん？」

「俺を誰だと思ってんだよ？それに後で沙紀と合流するから心配すんな」

タツちゃんはウチに笑いかけると男の人を担いで外に出ていきよつた。

「タツちゃん……」

「まなちゃん、俺達も自分出来る事をしよう」

「……うん」

ウチらは少し心配やったけど、とにかく花ちゃんを助けんと！
そうしてウチらは泰平通り西へ向かうとそこには……

「なんやの……これ？」

「……なんつーデカイ壁だ……」

ウチらの目の前には行く手を阻む巨大な壁が立ちはだかる。
茫然とウチが立つくしていると駿ちゃんが叫ぶ、

「おい！誰かいなか！？」

「お願い！返事してや！」

「おい！」

ドンツと駿ちゃんが壁を叩いて、ウチが呼んでいると後ろから誰かに声を掛けられる。

「無駄だぜ」

「へ？」

「！」

足音が近ずき、ウチらは後ろ向くと……

「誰も答えやしねえ」

「え、えつと……」

「……………」チャキッ

「おつと」

駿ちゃんが話して来た人に銃を向けて警戒する。
この青い服来た人は手を上げる。でもその顔は何故かあまりビビッ
とらんかった。

「俺達は隔離されたんだ。見捨てられたんだよ」

そう言つてウチらそう告げた……

ウチらが黙つて聞いていると青い服を着た人がまた喋る。

「あんたの事を知ってるぜ、スカイファイナンスの秋山社長だ」

「なんや駿ちゃんしつとるん？」

「いや…こっちはアンタを知らない」

「長濱つてケチな極道だ」

そう言つて自己紹介をする長濱さんは手を下げてこっちに近付く、

「しかしなんだ？最近の金貸しや子供は……いや、子供の方は明らかに可笑的いか……」

「ウチがハジキ持ってたら変なんか？」

「……ノーコメで……昨夜あんたのご同業のを拾つたんだ」

「ならそいつはオレに寄こすのがスジってもんだ」

駿ちゃんはそれを聞いて鼻で笑う、

「本気で「ほい」てつてまなちゃん!？」

「あ？」

ウチは長濱さんに自分の銃を渡す、
それを見て驚く駿ちゃんとポカーンとする長浜さん、なんや？ウチに何か間違つてん？

「おい、何の真似だ？」

「何のつて……銃を返してるんやで？」

「ま、まなちゃん！何を言つて……!」

「ウチのおとんは元極道や」

「…………だから、なんだ？」

長濱さんはウチに視線を合わせて見る、うつうつ…ちょっと怖いかも……

「元極道でも…ウチは極道や無いけど…スジと言っんなら、それは通さなアカンねん…それが元極道でもウチはまだ極道にはなれへんけど、それでもスジだけは通したいんや」

「まなちゃん……」

駿ちゃんは心配そうにウチを見る。

堪忍や駿ちゃん……ウチはやっぱり血は繋がらへん親子やけど、元極道の娘なんよ。

「ウチはおとんに憧れて極道と触れあったんや、せやからスジを通したいんよ」

「……………」

長濱さんが途中から目を見開いて驚いた表情した後、顔を上げて大笑いした。

「はははははははっ！！」

「……………」

ウチらはそれを黙って見ている。笑い終えた長濱さんはウチが渡した銃を押し返した。

「長濱さん？」

「氣に行つたぜ嬢ちゃん、アンタ大きくなつたら度胸のある良い別嬪さんになるぜ？」

「ウチは極道志望や」

「そうだったな、良い極道になる」

ウチと長濱さんは笑いあうと駿ちゃんがヤレヤレとした感じで頭を掻いていた。

「氣に行つたついでに抜け道の案内をしてやるよ」

「え！ホンマに！？」

「極道に嘘はねえその代わりといつちやあなんだが……」

「なんや？」

「ハジキ扱つてる店を知っているそこで俺の銃を調達してくるんだ」

「俺達が？二人で？」

「今ハジキ持つてんのはアンタと嬢ちゃんだけだ」

「ハジキ……確か劇場前通りの地下のDVD店に置いてあるって真島組の人が言つてたなあ……」

なんでしつてるの？と言う突っ込みがきつたけど、まあそれはお

「いおい…な？」

「しかし、極道がどうたらこうたら言ってたけど…まったく、それが極道の台詞かねえ」

駿ちゃんは呆れる。しゃあないやん極道やてゾンビ相手の戦いなんてやった事ある訳ないじ、

「しょうがねえだろ、俺は……桐生一馬じゃねえんだ」

ピクッ

「フッ、伝説の極道、堂島の龍か」

「知ってんのか？」

「……で？ウチらはそのDVD店に行けばええんやな？」

「ああ…てなんだ？どうしてそんな睨ん目えしてんだ？嬢ちゃん」

「まなちゃん？」

「……何でもあらへん…はよい」

ウチは駿ちゃんの手を引っ張って行く。

「まなちゃん？」

「聞きたくない名前を聞いてもったで……」

「え？」

「何でも無いんや…行くで」

そう言っつてウチらは劇場前通りの地下にあるDVD店へと進む、
ホンマ……厄日や、ウチらが行こうとすると長濱さんが言う。

「ああ、あと店の前には奴らがウヨウヨいるから気を付けろよ！」

「あ、ああ！わかった！」

「……………」

……………泣けるで……

視点・「秋山駿」

俺達は途中長谷川と言う女に出会い、何故か不機嫌なまなちゃんと少しくし一悶着あったが、

まあとりあえずは依頼やら指令やらを承諾して何とかDVD店に辿り着いた。

「なんやあんまりいいひんかったなあ」

「そうだね、でも都合がよかった」

俺達がDVD店にいると後ろから足音が聞こえる。

「っ！」

咄嗟に俺が銃を向けるとそこには長濱が立っていた。

「良い仕事するな、相棒…金貸しにしとくにや惜しいぜ」

「そりやどうも……………っ！」

後ろから人影が見えて俺は拳銃を構える。

「撃つなよ、こいつらは人間だ…敵じゃねえ」

「よおアンタら助かったぜ！銃が手に入りや怖えもん無しだ」

「ああ、ハジキの保管場所はこっちだ」

レザーを来た男はレジに近づいてボタンを押す、

「ここでバイトしてた事があってよ」

そう言いながらレジに入らし終わるとカウンターが地面に沈み壁から段差の様にせり出てきた。

「この通り、暗証番号も知ってるって訳だ」

そう言って男は得意そうな顔でいる。

「ここまで来たらもうSFやな……」

「まなちゃん今は突っ込みは禁止だよ……」

そう俺達が言っていると段差の台が一つ一つ裏返し、いろんな武器が出てくる。

「へえ……」

「ほわぁ……」

俺は拳銃で一番でかい銃を手に取りスライドを下げる。

ガシャンッ！

「……ゴツイねえ……」

俺はそれに夢中で色々銃を見ていると、他の奴らも自分の銃を取って行く

「駿ちゃんそれにするん？」

「ん？まあね」

「秋山」

「ん？」

俺は長濱に呼ばれ振り向く、

「遠慮はいらねえ、アンタから好きなのえらんでくれ」

「…当たり前だろ」

そう言つてフツと笑うとしたからカチャカチャと音がする。

そして下を向こうとしたが長濱に着いてきた連中が啞然として俺の下を見ていた。

（なんだ？）

俺が首をかしげて下を見てみると……

ガチャ… チキチキ… カチャ…… ジャキンッ！

「うゝんサイティングも整備もちよつち不安やなあ……」

そう言つて標準装置や弾装を確認しているまなちゃん、え？なんで

ここまで詳しいの？

「SW S2 射撃銃……連射だとウチが使えるからこれでええかな？」

そう言つてスリングを体に掛けて背中に背負うまなちゃん、
なんでだろう……全然違和感が無いや、真島さんの影響かな……？

「ゲイちゃんも、オマエハスナイパーダ！てっ言つてはつたし」

ゲイちゃんって……

「なあ秋山……」

「……なんだ」

俺達が遠い目でまなちゃんを見つめていると長濱が……

「あの嬢ちゃん……ほんとになにもんなんだ？」

「……普段は……ほんとに極道達と戯れる可愛い女の子んだけどね……」

「いや、極道と普通に話せる時点で普通じゃねえぞ？」

「ですよー」

俺達は乾いた声で笑うしかなかった……

「この密造銃は取つといて損はせえへんな……あ、後予備の弾薬と調

整も……」

ホントに凄いや……まなちゃん………

九話や！」「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」（後書き）

真夏「桐生……一馬……」

秋山「まなちゃん？桐生さんがどうかしたのかい？」

真夏「何でも無いんや……何でも……」

龍司「真夏……おめえ……」

十話や！「やっと外に出れたでえ……」**（前書き）**

感想まっています。はい

真夏「……………そんだけ？」

十話や！「やっと外に出れたでえ……」

ウチらは準備を整えてDVD店から出てすっぽん通りにある出口へと向かう。

まず駿ちゃんと長濱さんが前衛をしてウチが後衛でスナイピングして援護する形や、

それのお陰か直ぐに地下から出れたで、

「地下から出たで」

「よし、直ぐにすっぽん通りに向かおう」

ウチらは迫りくるゾンビを撃って倒し、すっぽん通りの前までこれたんやけど……

「なんやこのデカルチャーは……」

「おいおい、なんだあこいつは……」

「クソ、変なまできやがって……！」

駿ちゃんがDVD店の武器でもう一丁見つけたマケドニアシューターで二丁撃ちで攻撃したんやけど、全然効いてへん、

「な！効かない！？」

「どうなってんだ！？」

「効かんとなると……」

ウチはお揉むろに狙いを定め、弾丸を発射した。
そして撃ちだされた弾丸はまっすぐデカイ図体をした巨人の顔に当たり、低い呻き声と共に倒れ伏した。

「……………」

「なんや結構簡単やな」

ウチはそれに続いて他にもいるゾンビを倒していき、やがてはすっぽん通りのゾンビは全て倒してん、

「よっしゃ、オールクリアや……ん？駿ちゃん？」

「……………ハッ！な、何かな？」

駿ちゃんは我に返ったようにウチの言葉に気づいて返事をする。

「まあ、何かなやないで？駿ちゃん……ウチだけに任せんといて欲しいわ」

「う、ごめん……」

「ホントにこいつぁ……なにもんなんだ？」

なんや長濱さんはえらく首をかしげてウチを見つめる。
ウチい何かしてはったか？

「と、とりあえず行こう……もう脅威は無い様だし……」

「俺にはこの嬢ちゃんが脅威に見えるぜ……」

二人はトボトボとゾンビの屍を越えてすっぽん通りの奥へと進む、
なんや？悪い事したんか！？

そうしている間にもウチらは巨大な壁に塞がれ、ガレキが誓っている前まで来た。

ウチらはとりあえず側に自衛隊の支給品らしき物を見つけて補充した。

そんなとき長濱さんが手にボールを持ってしゃがみこむ、

「ここだ」

「準備が良いんだな？」

「せやなあ」

「こんな所、さつさとおさらばしたいんでな」

長濱さんがそう言いながら蓋を開けて中に入る。
ウチらもそれに続いて入る、

「暗いわぁ……」

「大丈夫？まなちゃん」

「へ、平気や、どつって事無いで」

ウチらは下まで降りるとそこは闇の世界やった……

視点・「秋山駿」

「この先がバリケードの向こう側になっている。ここにも、連中がウジャウジャいるからな。気を抜くんじゃねえぞ」

「はいはい。わかったよ」

「ほーい」

「それにしても暗いな……」

まあマンホールの地下なんだから当たり前か……

「心配すんな。あまり良い品では無いがコイツを使え」

長濱が渡してきたのはバリや傷、ヒビが入ったLEDライトだった。なんだか少し不安だが明りを付けて見る。

「お、結構明るくなったな」

「そやねえ」

「今度は使つかもしれないからな。そいつはお前にやるよ……さあ、先へ進もう」

そうして俺達が進もうとすると急に後ろが明るくなった。

「な、なんだ？」

「お前も持ってたのか……」

「せや、ゲイちゃんがくれた軍用ライトや、確かC4テクノロジー
スーパージェットっていったなあ……」

なんでそんな高級品持ってるの？

……まあ良いか、まなちゃんも持っているなら有効的に使わせて貰おう。

「それじゃあ行こう」

「了解や、ウチ地下のマンホールの中入るんは初めてや！」

冒険や探検も良いけど今は実戦だからね？

俺はまなちゃんにそう言っただけで歩き出す、少し歩いて行くと暗い道にゾンビがいてまなちゃんが遠距離からの狙撃で対処したり直ぐ近くにいた奴とかは俺と長濱が担当した。

そして俺達が進んでいくと……

「……まあ変なのがいるぞ……」

「なんやあの女の人……怯えてる？」

「どっちにしろゾンビだ。早く片付けちまおう」

そう言つて長濱が銃を向ける瞬間、

「きゃあああああああああ……！！！！！！」

「！！」

「うひゃあ！？叫んだで！！」

「なんだアイツは！？」

俺達がうろたえていると何処からともなく……いや、そこらじゅうからゾンビが出てきたり這いあがったり落ちてきたりとその叫んだゾンビの近くに出てきた。

「駿ちゃん！！」

「長濱！まなちゃんが遠くにいる敵を倒す！取りこぼした奴は俺達の担当だ！」

「任せろ！」

俺達は直ぐに銃を構え、まなちゃんは狙撃してゾンビを倒し俺と長濱は近づいてきた敵を倒して行く。

そして何とか倒し終え一息ついた所にまたあの女のゾンビが叫ぼう

とする。

「！、不味い！」

「駿ちゃん！これを！」

「！？、そいは！」

俺はまなちゃんが持っているスチール缶の様な物を握ってる事に気づく、それって……

「負けられへん！行くで！」

そう言ってまなちゃんは両手で持つ多数の手榴弾を思いっきりあの叫んだゾンビへと投げる。
俺は咄嗟に狙いを定め……

「そこだ！」

パアアンツ！

狭い地下内で銃声が響き、その放たれた弾丸はまなちゃんの投げた手榴弾に当たって……

ドオオオオオオンツ！……！！！！

「きゃああああ………」

女の悲鳴を上げたゾンビを吹っ飛ばされ、二度と立ち上がる事はなかった。

「ナイスや駿ちゃん」

「へっ、これぐらい朝飯前だよ」

「そうやなあて、ウチらまだ朝ご飯食べてへん……」

まなちゃんのお腹が鳴る。まなちゃんは少し顔を赤くしてモジモジし、俺達はその腹の虫を聞いて少し笑った。そのさい笑われたまなちゃんにド突かれたが……

そんなこんなでマンホールの出口に着いて俺達はハシゴを上り上のマンホールを開けた。

秋山がマンホールを開けて外に出る。その時、通行人の人がマンホ

ールから出てくる秋山を見て不思議そうに見た後に通り過ぎる。真夏も長濱を出て来る。

「秋山」

「ん？」

「借りが出来たな」

「いいさ」

「お陰助かりました」

「別にいいさ……それと、お前らはこれからどうするんだ？」

「医者に用がある」

「なんだと？まさかどこかやられたのか？」

「ちゃうって、駿ちゃんの子が熱出したんや」

「そう言う事」

真夏と秋山が説明すると、長濱は険しそうな顔をする。

「またあの中に入るのか？」

「付いて来てくれるのか？」

「まさか……俺は桐生一馬じゃあ無い」

「ふっ……そうだったな」

「……………」

真夏はまた少し不機嫌な顔になった。二人は気づかないが、それから二人は長濱にモグリの武器屋がある事を聞いて、柄本医院に向かった。

その道を歩いていると太った男が話しかけてくる。

「や、やあ、秋山さんまなちゃん……久しぶりですね」

「おお、おお。えっと……誰だっけ？」

「誰やったっけ？」

「か、上山ですよ。い、一年前に、会ってるです」

秋山はポンと手を叩き、思い出した様な素振りを見せる。

「あ、あー。思い出したよ、武器を改造してくれた……」

「おー見た事あるっと思うたら上山はんでしたわ」

「あ、そ、それ兄の方、です。お、俺は防具、担当でした」

「あ……えー、そう。ごめんごめん」

「か、堪忍や……」

とりあえず謝って気を取り直し長濱が言っていた事を聞く、

「そういえば……長濱って奴が言っていた銃を改造してくれる上山ってのはもしかしてそのお兄さんの事？」

「そ、そうです」

「そっか……なんだ、情報料支払わなくてよかったよ」

「せやなあ」

「え？な、なんです？」

上山は秋山の言った事を疑問視した。

秋山は首を振って逸らす、

「あ、いや、こっちの話。そっかまだ改造屋やってたんだね」

「は、はい。い、いや、むしろこんな時こそお、俺達の出番です」

上山は何かを知っているらしい事を言う。

「……フツ。もうこの町に起きてる事分かってるようだね」

「え、ええ、まあ、ば、化物が出てま、町は無秩序になってるくらいは……な、なので、武器の改良はお、俺たちにお任せ下さい！い、今はトラックで、仕事してるです。こ、こ、こんな状況なので移動出来た方が、べ、便利」

「こりゃ……凄いね。ハハ」

「ホンマやなあ……」

「あ、案内します。あ、兄もそこにいるんで」

そう言つて秋山と真夏は上山に付いて行き、さっきの通りまで戻る。

「こ、ここです。ど、どうぞ」

そう言つて後ろのトラックのドアを開けて中に入る三人、するとそこには……

「いっぱい銃が並んどるで……」

「へえ、結構な設備だね……戦争でもするのかい？」

「お、俺は戦争に見たいなもんになると思ってます。あ、秋山さんなら、薄々分かつてる、はず」

「……………」

「……………」

真夏は顔を伏せるその顔には少し悲しさが満ちていた。

「い、今は、このトラックも、お、大袈裟に見える、と思うけど、きつと役に立つ、です……あ、秋山さんは、む、昔からの幼馴染。う、ウチが色々お手伝いを、しますよ」

「……………手伝い？」

「は、はい。今まで通り、ぶ、武器のチェーニングや装備品の販売、させてもらいます。そ、それだけじゃ無く、買い取りもさせてもらいます。い、いらなくなった物、何でも買い取りますよ」

「質屋見たいなもんかい？それは、便利だな」

「まんまガンショップやな」

「え、ええ。質屋じゃ買い取らない様な物でも改造に使えそうであればうっ、ウチが、高額で引き取りますよ」

「ほんなら質屋で売った方がええのと、こっちで売った方がいいもんがあるっちゅう事か？」

「そ、そうですね。そ、そんな感じです」

「なるほどねえ……」

秋山がフムフムとしていると服の裾を引っ張られる。

「ん？なんだいまなちゃん」

「駿ちゃんそろそろクスリ……」

「……………あ！そうだった！」

秋山は今思い出し、慌てて外に出る。

「もう……………ホントにしっかりしてや」

そう言つて真夏は上山に別れを告げてトラックを出ようすると……

「ま、まなちゃん」

「ん？なんや」

「む、昔の約束、お、覚えてる？」

「約束う？」

真夏は首を捻つて思ひだそうとする。だが中々出てこない。

「ふ、服の約束だよ。お、俺が用意した服を着てつて約束」

「……………おお！そないな約束した覚えがあつたなあ！」

「そ、それで、い、いいかな？」

「うん、ええよ！良い洋服を着れるんなら何でも着るでえ」

「わ、わかつたよ、そ、それじゃあ今の問題が終わつたら何時でもき、来てね」

「分かつたで」

そう言つてトラックから出る真夏は秋山を追い、柄本医院へと向かう。

「……………け、計画通り」

上山は嚴重に箱詰めされた段ボールの蓋を開けて中身を見る。

「ら、ラブシャインなまなちゃんまであ、後少しだ……」

少し気持ちの悪い笑みを浮かべる上山、真夏自身に手を出さない自制心だけは褒めるべきか？

真夏が外に出てくるとそこには……

「なんやまた長谷川さんかいな……」

「なんだその言い草は……まあいい付いて来い」

「ほーい」

そう言つて真夏は連れていかれ、長谷川から「神室の盾」と呼ばれる自警ボランティアをしている赤石と言う男を紹介され、隔離エリアの入り口、「フリー・ルート」の情報を秋山に教える様言われる。真夏は二つ返事で了承し、秋山の元へと向かう、だが……

「へ？」

「ダカラモウその人はクスリ持ッティツチャッタヨ？」

「ええーとつまり……」

「ソレト伝言ネ」

「伝言？」

「ウン、…「外で待ってなさい。もしくは家に帰る様に」ッテ…マナちゃん？」

「……………やん」

「ン？」

「駿……ちゃんの」

「??？」

「駿ちゃんのアホ……………!!……!!」

真夏は秋山に置いてかれた。それに腹を立てて叫ぶ真夏だった。そして怒りながら外に出て怒った様な歩き方で徒歩を進める。

「まったく駿ちゃんも白状や…ウチを置いて行くなんて……………!!」

とにかく秋山に置いてかれた事を怒っている真夏はどうしようか悩む、

「どないしよう…ウチだけ行っても少し危ないやし……………」

ホンマどないしようかなあと思っていると……

「まなちゃん！」

「ふえ？」

前から迷彩柄のズボンをはいた外国人が現れる。

「ゲイちゃん？どうしてこないな所に？」

「まなチャンが戦ッテイルと聞イテキタンダ。秋山さんモサツキマデ訓練ヲサセテタカラナ」

「駿ちゃんも！？」

「ソウダ、ダカラお前モ鍛エテヤル。付イテ来イ！」

「サーイエツサーや！」

そう言つて真夏は元軍人ことゲイリー・バスターズに本格的な指導を施された。

どこまでかけ離れた幼稚園児……いや、もうすぐ小学生だから、どこまで行く気なんだこの小学生は……

「モット大キイ声を出セ！」

「サーイエツサー……！」

「良シ！行クゾ！」

そうして真夏はワンマンアーミー真夏へと成った……………

オマケ・「その頃一夏は……」

「ここだ、私が通っている道場は」

「……神社？」

それもあると言って歩き始める千冬に一夏は追う、そして神社の横にある家のドアを叩く、

「織斑千冬です。弟を連れて来ました」

その声に応える様に中から声が聞こえてドアが開く、

「よく来たな千冬君」

「はい、それで弟の件なんですが……」

「構わないぞ門下生が増えるのは良い事だからな」

「助かります」

一夏は訳が分からず首をかしげるとそこにその男性の奥から一夏と
同じ年くらいの女の子が立っていた。

その女の子は一夏を見た後にプイツと顔を逸らして廊下の奥へと消
えた。

『？、誰だろうあのポニーテールの女の子は……………』

「……………？、どうした一夏」

「えっと……………さっきの女の子は……………」

「ん？ああ、娘の事が」

「娘？」

「そうだ。君はこの門下生になるから後で自己紹介をして貰おう」

「え、えっと？門下生？」

「聞いていなかったのか？」

「はい、付いて来いと言われただけです……………」

「ふむ、まあいい」

え？いいの？と言う一夏の言葉はスルーされてとりあえず家にお邪魔し、道場の方へと向かう一夏であった。この出会いがきっかけで

あのツンデレ幼馴染が生まれたとさ……、

『千冬姉ちゃん、一言くらい言って欲しかったよ……』

そう思う一夏につゆ知らず、千冬は一夏を連れて男の後に付いて行き道場へ向かうのであった。

一夏はまだ、真夏が神室町で戦っている事を知らない……

十話や！「やつと外に出れたでえ……」（後書き）

真夏「駿ちゃんのアホー！ウチを置いて行くなんて！ゾンビに噛まれてゾンビになってまえ！」

秋山「ちょ！？それ洒落にならない！」

束「束さんより篝ちゃんが出るなんて……」

篝「普通では？」

作者「少し早く出し過ぎたかな？」

十一話や！「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」（前書き）

真夏「なんでこないに遅かったんや？」

作者「新潟で用事がありました……」

真夏「そうなんかあ…結構高速道路込んでたやろ？」

作者「……吐いた」

真夏「……ご愁傷様や」

十一話や！」「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」

秋山に置いてかれ、怒っていた真夏は今ゲイリーズ・ブートキャンプの訓練を終えて外に出てワークス上山にいた。

「ふう…やっと終わったで、ゲイちゃんホンマに激しすぎや…ウチの体が壊れてまう所やった…」

「は、はは激しく……こ、ここ壊れる……」

上山は息を荒くして真夏の声を聞いていた。真夏は少し心配そうに見る。

「秋山はんどうしたんや？なんや息が荒いで？」

「な、なななな何でも、な、なないよ」

「そか、ならええんやど……」

「そ、そそっそれより、こ、これからどつするの？」

「うゝん…どうないしょう…」

真夏は置いてかれてしまった為、どうするべきか迷っていた。

「訓練もしたし武器は……」

真夏は自分が持ってきたライフルと拳銃を見る。

「ライフルは整備不良で、拳銃は密造やから心配やなあ……」

うーんと唸なって考える真夏に上山は……

「ん、なら今こ、ここにある武器をも、もも持ってていいよ?」

「え? ホンマに?」

「う、うん、これなんてど、どどう?」

上山は真夏の前に大きな物を差し出す、

「なんなんやこれ? でっかいコンセント?」

「ち、違うよ、こ、こここれはお、俺が開発した電気ショックガンだよ」

「電気?」

「そ、そう…名付けて、「ラブシャイン・スパーク」!!」

ドドーンツと効果音の様な物が聞こえた様な気がした真夏と自分で作った自身作を真夏に見せる上山、

「ラ、ラブシャインスパーク?」

「そ、そう文字通り、でで、電気ショックで相手をた、た倒す武器だよ」

上山は真夏に説明をする。

「こ、これは強力な電撃で攻撃する、ぶぶ、武器で。」

スタンガンと違って、ち、小さな電極を、と飛ばして離れた相手にもで、でで電流を流す事が出来るんだ。でで電流は強力で、ぞ、ゾンビを感電死させる事も可能だよ」

「えっらく恐ろしい武器やな…これ」

真夏は上山にラブシャ…長いのでスパークショットを受け取り、構える。

「大きさはライフルとおんなじで、重さはライフルよりも軽めってとこかいな……」

真夏はとりあえずスパークショットを機動させて充電させる。ウィーンと音がした後、緑のランプが点灯している。

「じ、充電は、もう完了してるから、い、何時でも撃てるよ」

「さよか」

そう言つて真夏は電源を切り、肩に乗つける。

「あ、そや後ブローニングとかあったら貰えへん？」

「う、うん、ははいこれ」

「サンキューや」

真夏は上山からブローニング・ハイパワーを貰って腰に刺し、準備

は万端だ。

「お世話になったで、上山はん」

「う、ううん、お、俺にはこれくらいしか出来ないから、きき気を付けてね？」

「うん、ほな行ってくるで〜」

そう言つて真夏はスパークショット、「ラブシャイン・スパーク！
！」を肩に掛けてトラックから出た。

視点・「郷田真夏」

ウチは上山はんからラブシャ、長いからスパークを貰つてトラックから出る。

「さて、駿ちゃん床に行かなあ」

まったく、うら若き乙女を置いていくなんてどういう神経しとんねん、駿ちゃんは！

「ウチかて戦えるんや、駿ちゃんも見たはずやのに……ん？」

突然ウチの携帯が鳴っていて、ウチはそれに出る。

「もこもこっこりっ？皆のアイドル真夏やで？」

（切るぞ……）

「堪忍や〜」

ウチの携帯に掛けて来たんわタツちゃんやった。

「どしたんや？タツちゃん、なんかあつたんか？」

（ああ、実は……）

ウチはタツちゃんの要件を聞いた。

タツちゃんが言うには今隔離エリアの中にいて身動きの取れない後輩と沙紀ちゃんがおるんや、

そんでタツちゃんが一人じゃ無理そうやから誰かに助けて貰おう思うたんやって、

（じゃねえ沙紀が俺一人じゃ無理だと言って電話させたんだ）

「そやねータツちゃんなら一人でやろう思っってしまうもんない」

（俺一人でどうにか出来る）

「そやけど一人より二人の方が何かと良いで？」

（ガキのお前に頼む時点で大人としてどうかと思うんだがな……）

まあガキっちゅうのは認めはるけど……

「安心しい…パワーアップしたウチの力見たる。んで何処にいるんや？」

（あ、ああ…俺が欠員で働いていたコンビニだ）

「コンビニ？さっきそこから逃げはったんやないの？」

（逃げた所も危なくなってきたからな…それでコンビニまで戻ったんだ）

「なるほどなあ……」

ウチはとにかくタっちゃん達を助ける為に今一度あの地獄へ戻る事にした。

「よっしゃー！ウチが迎えにいくさかい、さっちゃん達は無事なんかな？」

（ああ今となりにいる）

「さよか、とりあえず行くからまってな」

そう言って電話を切る、さてと……

カチ、キューーン……

スイッチを入れてスパークショットの電源を入れる。
どんだん充電され、電気が溜まって行く、

「さて…ダチを助けに行きましょか」

そう言ってウチは肩にスパークショットを担いでマンホールの所まで歩く、

その足取りは力強かった。

ここは龍也達が逃げていた場所だった所……

「おらあ！」

バキッ！

「あ”……」

龍也が鉄パイプでゾンビを殴って倒す、
沙紀達は襲ってくるゾンビ達から逃がす為に先に逃がしてここにはいない。

「邪魔じゃボケエ！！」

龍也は殴っては蹴って倒して行くが切りが無い。
そうこうしている内に龍也の持っていた鉄パイプが……

ポキッ！

「はああ！？」

龍也は折れた鉄パイプを見つめて叫ぶ、
ゾンビ達がどんどん群がり、どんどん迫ってくる。

「畜生！ここまでか……！！」

龍也が真夏が来る事を聞いてはいるがこの数に勝てるかどうかと言

えば……無理だ。

「噛まれてでもこいつらを減らさねえと……！」

龍也は覚悟を決めて突っ込もうとしたその時！

「伏せるんや！！」

「！！」

龍也はその声を聞いて伏せる。その時、龍也の頭上にレールガンのような閃光が走り、周りのゾンビは電撃にやられ燃えた後に黒こげになって倒れた。

「なんじゃこりや……」

「危なかったなあ、タツちゃん」

「ああ？」

ゾンビの屍なんのその、それを跨いで龍也の側に近付く影、

「……真夏か」

「お呼ばれに従い参上、てな♪」

ハアア…と地面に顔を伏せる龍也、それを見てケラケラ笑う真夏、とりあえず龍也は真夏に礼を言った。

「とりあえず助かった、ありがとな」

「気にせんでええで？ウチらの仲やん！」

「どういう仲かは気になるがな……」

フツと笑い、胡坐をかく龍也に真夏が近寄って顔を支える。

「ホントに大事無いん？怪我や噛まれたりしてへん？」

とたんに心配そうに顔を覗きこむ真夏、その顔と顔の近さにテンパる龍也、

「だ、大丈夫だ！心配ねえ！」

「さ、さよか？それならええんやけど……」

そう言っつて少し離れる真夏、そして二人が落ち着き真夏は状況を聞く、

「そんで…なんでタツちゃんだけなんや？サツちゃんや定員さんは？」

「先に逃がした、無事だといいいんだが……」

「そやな、とりあえずタツちゃんは一旦戻らんと……」

そう言おうとした時、

「ソノ話俺二任セロ！」

突然声がして二人は周りをキョロキョロしていると、

「此処ダ！」

その声を聞いて二人は上を見ると……

「なんだアレ？」

「エアボーンとは……ヤルやないかゲイちゃん」

ゲイちゃんことゲイリーがヘリからのエアボーンをしてこちらに下りてくる。

「フンッ！」

ゲイリーは着地の瞬間にパラシュートを切り離してゴロゴロ転がって目の前に止まる。

「コレヨリ…バーチャスミッションヲ…」

「もうええって」

ゴスッ！

真夏は何処からともなく取りだしたトンカチでゲイリーの頭を叩いた。

叩かれた場所からは血がドボドボと出ていたが龍也は黙っている事にした。

「マナチャン、行き成りノ突ツ込ミハ酷イデス」

「今は緊急時や、ふざけるとする場合やないで？」

「ソウデスネ、トリアエズ……オイ、ソコノウ〇コ垂レ」

「あああ！？行き成り人をクソ呼ばわりたあどういいう了見だ！？」

龍也は行き成りそう呼ばれた事に腹を立てた。
その権幕を無視して話す、

「お、落ち着いてタツちゃん、この人の話し方はこれが普通なんや
！」

「だからって許せるか！」

「ヒッ……」

「あ、いや、すまん……」

「マツタク、女ノ子を怯エサセルナンテ最低デスネ」

「うがー！コイツ殺す！」

殴りかかるうとする龍也を止めようとする真夏とそれ見て呆れるゲ
イリー、

とりあえずは収まり、ゲイリーは龍也をゲイリース・ブートキャン
プへ袋詰め運び、

それを苦笑いしながら一緒に行く真夏がいたとき、

「フガフガー！（離しやがれー！）」

「暴レルナ、コノクソツタレ」

「あははは……」

ある意味人さらいである……

十一話や！「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」（後書き）

龍也「あの野郎！人をさらいやがつて！」

真夏「まあまあタツちゃん抑えて」

ゲイリー「怒リッポイ人ダナ」

龍也「テメエのせいだろがーーーーー！」

真夏「ホンマの気にしたら負けやで？タツちゃん……」

十二話や！」「タッちゃんは大ックマゲナム！」（前書き）

でけた…感想お願いします。

十二話や！」「タッチちゃんはビックマゲナム！」

ここはゲイリーズ・ブートキャンプの射撃場……

そこでは龍也が真夏とゲイリーの猛特訓を受けていた。

「タッチちゃんちやうって！それじゃあ弾丸が下に行つてまう！」

「お、おう！」

「ナンドソノへっぴり腰ハ！モット肩ヲ上ゲロ！」

「テメーは黙つてろ！俺は真夏にやつてもらつてんだよ！」

と口うるさくも訓練に励む龍也は良い人である。

そして真夏とゲイリーの特訓が終刊に差し掛かった時、龍也の携帯が鳴る。

「あん？……！、沙紀からだ！」

「なんやと？」

龍也は急いで電話に出て話す、

「沙紀か！何処にいる！？無事か！？」

「ちょ、タッチちゃん落ち着いて」

「戦場デ冷静サヲ失ツタラ死ヌゾ？」

「頼むから黙ってる！」

そうして龍也は電話に集中する。

『龍也君……』

「沙紀！無事なのか！？」

『うん、平気…後輩君も無事よ…でも……』

「でも…なんだ？」

『そ、それが「ガシャンッ！」キヤアアッ！？』

「！？、沙紀！」

『！、……いやあああ！！……』

「沙紀！おい！……クソ！切れやがった！！」

達也は切れた電話を握りしめ放り投げかけたが、真夏がそつと龍也の手を両手で握って制した。

「タツちゃん落ち着いて…」

「……………」

龍也が携帯を放り投げかけた腕をピタリと止め、下ろす、それを見て真夏は安心してゲイリーに言う。

「そろそろ潮時やな……」

「ソウダナ……新兵」

「……俺の事か？」

「ソウニ決マッテル、コイツヲヤル」

ゲイリーは腰からバカでかいリボルバーを龍也に渡す、

「これは……」

「我が祖国アメリカガ誇ルマグナムリボルバー、トールス・レイジングブルダ」

「ホンマか！？初めて見たわ…しかもそのタイプって…」

「500S&Wマグナム……現時点デ最強ノマグナム弾ヲ撃チ出シ、防弾スラ貫通スルマグナムダ」

「これが……」

龍也はゲイリーから渡されてそれを掴む、ズッシリくる重量感、シルバーに輝くガンダニウム…じゃなくてチタニウム合金の輝きが龍也の男心を擽る。龍也はそのグリップを握り感想を吐く、

「お、おめえ……」

「そらそうや、重いに決まっとるわ……タツちゃん」

「なんだ？」

「それは人を撃つ銃やない」

「は？」

「奴らを倒す銃や、そして……元は神室町の住人やった人達を撃つ銃や…」

「！！」

龍也はハツと思いだした、自分が沙紀達を守る為殴ったり蹴ったりした人達は元は何の罪の無い人だからだ。

「……………」

「せやからタツちゃんにはその認識をちゃんと……………」

「おい……………」

真夏が喋ろうとした矢先、顔を伏せていた龍也がお揉むる顔を上げて真夏を見る。

その顔は何処にも暗い感情がなかった。

「タツちゃん？」

「沙紀の為だ……覚悟は出来てる」

「タツちゃん……………」

龍也は苦しそつでも真夏に見せる顔は苦笑いに似ていたが笑っていた。

「……………ハハ…やっぱタツちゃんは強いんやなあ…ウチなんて泣いてはったのに」

「バーカ、オメーはまだガキだろうが」

「そやったわ」

二人は何時も通りの調子を取り戻し、ゲイリーに向き直る。

「そろそろ行く、世話になった」

「ソウカ…気ヲ付ケロヨ？」

「ウチがおるから平気やで？」

「ソウダナ、新兵ノ子守…頼ンダゾマナチャン」

子守られるつもりはねえー！と叫んだ龍也、それを見て笑うゲイリーと真夏、

龍也はゲイリーから貰った腰に着ける皮のホルスターを貰い、トールスを収め。真夏もブローニング・ハイパワーの皮のショルダーホルスターを貰い銃をセットして肩にスパークショットを肩に担ぐ、

「ほなーーーー」

「ああ……………」

「行ってくる！」

「行ってくるで！」

「オウ、死ヌナヨ二人トモ」

そう言つてゲイリーは二人を見送り、真夏達は地獄へと下つた。

「…………サテ、ソロソロ秋山サンモ相棒ヲ見ツケテイル頃ダナ」

そう言つてゲイリーは別の扉から出て自らも地獄へと下つた……

ここは神社？道場？である篠ノ之家と言つ家がある所、
そこに織斑姉弟がいた。千冬は篠ノ之家当主柳韻と話をしており、
夏はその娘の箒と道場にいた。

「……………」

「……………あの」

「……………なんだ？」

「あ…えっと…お、織斑一夏です」

「……………しってる」

「そ、そうか」

「……………」

「……………（か、会話が続かない！）」

一夏は極道少女真夏？との関係で普通？の女の子である筈とどう話せばいいか分からずにいた、普通の男の子より大人の世界や事情を知って感覚がおかしくなったのがいけなかったらしい。

「え、えっと…剣道をやってるのか？」

「……………見ればわかるだろ」

「そ、そうだな」

「……………」

「……………（駄目だ…全然会話が続かない！どうすれば！？）」

「おい」

「な、なんだ？」

「お前も剣道をしに来たのだろう？」

「あ、ああ……」

「ならば竹刀を持って素振りでもしたらどうだ？父さんからお前に剣道のやり方を教えてやれと言われたからな」

「そ、そうかわかった、よろしく頼む」

「……行くぞ」

「へ？」

一夏はポンつと投げ渡された竹刀を受け取った瞬間、箒が打ってきた。

「ちょ！まつ……！？」

パシィンツと打ってきた箒の一撃を何とか受け止めて後ろに跳び引く、

「やるではないか」

「行き成りなにすんだよ！？」

「教えるのは面相だ、体で覚えさせる！」

そう言ってまた打ってくる箒に何とか避けては受け流しながら耐える一夏、

それを何とか止めようとする一夏は箒に打たれながらも話かける。

「ちょ、ちよつと待て！ホント待て！行き成りは不味い！」

「ええい！ちょこまかと逃げるな！」

「無茶言っな！」

そうして一夏の初の剣道は過激な物になった。

一夏は剣道がこんな怖い物だと知って恐怖した。

「助けてくれまなちゃん！」

「男が助けを請うな！」

「理不尽だ！」

一夏が真夏の戦いを知るのはあともう少しである……………

オマケ・「真夏、ホストクラブに行く」

「さてと……たこ焼き屋のお仕事も終わった事やし、かず君とユウちゃんのお店にでもいこか」

神室町にあるホストクラブ、スターダストに少女真夏がいた。

そして真夏は店前にいる客寄せにヒラヒラと手を振り、その客寄せは手慣れた手つきでお辞儀をして店の中へと入れた。

「ご指名は？」

「何時もの人でお願いしますわ」

「畏まりました」

そう言つて客寄せの定員は奥の部屋へと入り、真夏は通らせた席へと座る。

少し立つてから白のスーツと紫の服を着た男二人が来る、

「まなちゃんまた来てくれたんですね」

「というか普通にいいのか？これ……」

「ええやんホストは客はえらばへんもんやんか」

「だからって五歳児がここに……」

「ユウヤ、お客様の前です」

「あ、す、すみません」

「ええって、ほな楽しみましょか！」

「はい、それでは注文は何時ものオレンジジュースとポッキーで？」

「おkや」

そう言つてスターダストの店長一樹が定員を呼び、注文をする。

「頼んだよ」

「分かりました」

そう言つて奥に消えてつた定員を見送り、ユウヤと一樹は席に座る。

「今日も疲れたでえ…店にくるお客さんが何時もぎょうさんなんや、なんでやる？」

「それはまなちゃん目当てでくるからじゃないかな？」

「そうなん？」

「それはそうだろ、看板娘がいた方が売れ行きは良いに決まってるし」

「ふん、ウチがねえ…」

「まなちゃんもたこ焼きを作ったりしてるんだよね？どお？調子は」
「まだまだやな…ひっくり返すタイミングがまだ甘いつておとんが言うとするし」

「そうかな？前にまなちゃんが持ってきてくれたたこ焼きは美味しかったけど？」

「それでもまだまだや、もっと腕上げてかず君やユウちゃんにむっちゃ美味しいたこ焼き食べさせて上げるわ」

「うん、楽しみにしてるよ」

「今度はチーズ入りがいいな…」

「わかったで、楽しみにしとってや！」

真夏はホステスクラブで一樹とユウヤと一緒に話したりポツキーゲームしたりと夜更かしをした。

その事で父、龍司や東城会の面々は怒るのを通り過ぎて呆れていたと言う。

まあ、あまり行かない様にと注意されるだけで終わった。階段だが真夏がホストクラブに入っているのを警察に目撃されてはいるがその度に谷村や伊達が関わっているとかいないとか……真夏の夜は続く…

「『カンパ〜イ！』」

十二話や！「タツちゃんはビックマゲナム！」（後書き）

真夏「はあゝ楽しかったわ、またいこうかなあ」

一夏「ホスト…か、俺も……」

千冬「頼むからお前が行くなよ？争奪戦になる」

一夏「え？なんで？」

千冬「なんでもだ」

龍司「親として怒るべきか…大人に成ったとして褒めるべきか…」

作者「いや、普通は怒らなきゃ……」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」（前書き）

真夏「長らくお待たせしましたー！見たってや♪」

一夏「やと出番が来たよ……」

真島「わしの時代が来たでー！！」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」

ゲイちゃんと別れ、ウチらは今神室町地獄の一丁目へと足を踏み入れていた……

まあホントは劇場前通りなんやけどな。

「吹き飛ばやー！」

キュイーンとスパークショットから機械音が鳴り響き、その瞬間バチィッ！と音がした後、
ウチらの前にいたゾンビはカリカリ君へと変貌した。

「死ねやボケえ！」

ズガアアンッ！

タツちゃんがそう言って両手で持ったマグナムをぶっ放し、近くにいた敵の頭を数体吹き飛ばした。
その際、タツちゃんは後ろにすっ転ぶ、

「うお！？」

「タツちゃん今つこうとるんわマグナム弾や、普通のパラベラムや無いんやから反動考えなあ」

「わ、分かってる！だがこいつは強力過ぎだぞ！？」

そらそうや、近距離ならアンチマテリアル並みなんやから、戦車やて紙装甲やで？

タツちゃんは立ちあがっては反動で倒れ、その都度腰を痛めると言うなんともお間抜けな事になってたんや、コントやな……まあウチは倒れたタツちゃんに近付いてくるゾンビを倒して何度も難を逃れてんやけどなホンマ世話焼けるで……

「サツちゃんが逃げはった方向は分かるん？」

「いててて…ああ多分あのコンビニのはずだ」

ふむ……となるとすっぱん通りの横にあったあのポツポ店やな、ウチは変えのバッテリーを確認してラブスパ（注：ラブシャインスパークです）を再充電して歩く、

「タツちゃん行くでえはよサツちゃん達を助けな！」

「お、おう！」

そうしてウチらは劇場前を走る、待っててや…サツちゃん！

一方一夏は篠ノ之箒による修練？を終えて帰宅しようとしていた。

「あ、そうだ…まなちゃんにも紹介しないと」

そう言つて一夏は姉の千冬に真夏に箒を紹介したいと言つて別れ、神室町に向かう。

「篠ノ之とまなちゃんを合わせて大丈夫かな？まったく正反対…いや案外似てる？」

箒と真夏はスジを通すと言う分野では一致している部分があり、仁義もある。

割と息が合いそうだと一夏は考える。

「早くまなちゃんに言つてあげよう！」

一夏は早足で神室町に向かう、そこが今ラークンシティになっている事を知らず……

そして一夏は電車に乗り、少しあるいて神室町に到着したが……

「なんだあれ？警察に自衛隊…あ、消防隊員までいる。いったい何が起きたんだ？」

一夏は神室町が慌ただしくなっている事に気づき、警察の一人に聞いて見た。

「すみません」

「ん？何だい？僕」

「何かあつたんですか？」

「ああ、それが……」

言いかけた警官が口をつぐみ苦虫を噛みしめた様な顔になった、
一夏はそれを不思議そうに見ていると警官が喋りだす、

「ゴメン、俺でも分からないんだ。それと今神室町は慌ただしくな
っているから早く帰るんだ。いいね？」

「え？あ、はい……」

「良い子だ」

そう言つて一夏の頭を撫でてもう一人の警共にその場を後にする、
一夏はこれは何かあると思い急いで公衆電話へと向かい、真夏に電
話する。

「……………早く出てくれ……………」

少し焦らしながら待っていると真夏と繋がり一夏は話し出す、

「真夏か？平気か？」

『いつちゃんか？悪いんやけど今とりこみ中で……………あー！も
う邪魔せんといて！』

「ま、まなちゃ「ドゴオンッ！」な、なんだあ！？」

電話越しから爆音が響き、一夏は驚く、
真夏は焦る様に一夏に話しかける。

『いっちゃん！いいか！？神室町から離れるんや！ほとぼりが冷めるまでぜったいやで！』

「まなちゃん！？」

『今——…神室町は……危険………せやから！』

「ま、まなちゃんどうするんだよ！？」

『ウチらはサツちゃんを——助けんと！』

電波が悪いのか、電話はじょじょに繋がりにくくて成って行き……

「まなちゃん！！」

『！……真夏！早——くし——と！』！？……！！……
『……！！』

「まなちゃん！！まなちゃん！！！！」

一夏は必至に呼ぶが雑音だけしか聞こえずにいたその時、出た言葉で電話が切れた。

『まったく戦場は地獄やで！フハハハハハハ！！』

ブツツ…ツーツー……

「は？」

一夏は呆気にとられその場に固まる、数秒後再起動してどうするか考える。

『ま、まなちゃんは今危険な事に巻き込まれてる！？』

真が自分から危険に飛び込んだともしらず心配する一夏はある意味、いや普通の子より良い子である。

『俺一人じゃどうしようも……そうだ！真島さんなら！』

一夏は急いで真島の事務所がある神室町ヒルズへと急ぐ、今真島なら暇だと言ってそこでくつろいでいるはずだと、

「待ってるまなちゃん！直ぐに行くからな！」

一夏はひた走る。大事ないところを守る為に……

またまたその頃、真夏の父親こと郷田龍司は家で寝そべりながら元弟分から渡されたメモを見ていた。

「何しようとしてるんや……テツ……」

ポツリとそう吐いて龍司は寝返り打ち、真夏の帰りを待っていた。龍司はどこか寂しそうにして部屋を見渡す、

「……ハッ、ワシは何時から真夏依存症になったやんやたくつ……」

そう言っで持っていたメモを胸ポケットに入れて胡坐をかく、

龍司は部屋に干された洗濯、綺麗に片付けられた部屋、

そして龍司と真夏が写っている写真と元はお皿の上にラッピングされていたおにぎりの皿を見る。

（今日は早く神室町へ行ってきます、せやからご飯はおにぎりや！
堪忍な〜）

「朝食作ってくれはるだけで感謝してるわい、バカたれ……」

そう言っで龍司は起き上がりおにぎりが乗っていたお皿を流しへ持っで行き洗う、

その後に洗濯物をカゴに入れた後に畳み、真夏と龍司のタンスに分けていれる。

そして部屋に掃除機をかけてホコリを吸い込んだ後、片付けをして

座った。

「……………これを真夏が全部やっとなんやな……」

龍司は食事管理や部屋の整理とかの家の仕事をちゃんとこなす真夏に色々と感謝していた。

そして何よりも龍司が感謝しているのは何時も笑って家の出迎えをしてくれる事だった。

「……………なんや…わしって駄目亭主やな……」

その事に気づいてガツクリと肩を落とす龍司、今度の誕生日にはどこか連れて言つてやろうと誓う龍司だった。そしてふと気付く事があった。

「……………真夏の奴が遅いなあ……」

今真夏がある意味激戦区になっている事もつゆ知らず、龍司は秋山の所に行くと聞いていたので安心はしていたのだが……

「もしや真夏によからぬ事を……」

親バカを炸裂させた龍司は、首を振りそんな事は無いだろうと考え寝転がる。

一息ついた所で目を瞑り真夏が帰ってくるのを待つ事にした。

「誕生日には何処連れて行こう…そや…真夏はキャンプに行きたい言つとな…今度キャンプセット勝手こなあ……」

そう言つて龍司は眠り付く……龍司の戦いは、近い！

場所は戻り此处、ミレニウムタワーにたどり着いた一夏は中に入る。
そこでは受付の極道がいた。

「……お？織斑のぼつちゃんじゃねえか！どうした？」

「あ、あの！真島さんはいますか！？」

「ん？親父なら事務所にいるぞ？」

「ありがとうございます！」

「あ！おい！タワーの中では走るなよ！」

分かりましたー！と言って早歩きになる一夏、
その姿はどこか酷く焦っている様でその極道を不安にさせる。

「ぼっちゃん…なんか焦ってたな…大丈夫か？」

そう言っているとその極道の前に帽子を被り、ところどころ穴や血が付いて不気味だった。

「は？だ…誰だデメエ！」

そう言って近づいて行くと野球帽の男は顔を上げる。その瞬間！

「な！？ぎゃああああああつ！！！」

行き成り噛みつかれ悲鳴を上げる極道の男、男は倒れ伏し、野球帽の男はコホオ…と声を出してあたりを見回す、

「……………甘美な…死を…」

そう言って野球帽の男は歩きだした。一夏は直ぐにエレベーターに乗っていてこの惨状は聞こえていなかった。そして噛まれた極道の男はビクツとした後、静かに起き上がりノロノロと歩きだす、

「あ”…あ”……………」

ゾンビになっちゃった元極道は他に噛まれた極道達を引き連れ階段へと向かい、あるきだしていった……そして一夏は真島の事務所に着いた。

「真島さん！」

「んおっ！？な、なんや一坊やないか…どしたんや？ワシは今ゾンビ映画見取ったんやけど……………」

「す、すいません……じ、実は……」

一夏は真夏との電話の会話を話をつた。
そしてそれを聞いた真島は少し目を細めた後にニヤアと笑う。

「なんやあ……真夏ちゃんおもしろい事してはるなあ……わしも混ぜて欲しいわあ……」

「ま、真島さん……」

一夏は真島がそう言う性格を理解してはいるがやはりどこか不謹慎だと少し思ってしまう。

「キツヒビヒツまあ一坊にはまだ早い感情や、もっとおもしろい事を経験したら理解出来るって」

「そう言うもんなんでしょうか……」

「そう言うもんや」

真島はケラケラと笑う、一夏はとりあえずどうすべき聞く、

「真島さん……俺はどうすれば？」

「そやなあ……」

真島はテレビに映ったゾンビ映画を見て笑う、

「キツヒビヒ……やっぱたまらんなあ」

「……はあ……」

一夏は肩を落とすすると一夏はテーブルにあった写真を見つける。

「……あれ？龍司さん？」

ここはある大部屋……そこに東城会の幹部がいた……

「一昨日、都内で撮られた物です」

「それが？」

「こっちのスーツの男……」

「関西近江連合直参、二階堂哲雄」

それ聞く10人の東城会幹部がソファ―に座り、聞いていた。

「近江か…確かに気になるが、緊急で召集をかけるほどか？」

「ですが、こっちのハチマキの男は皆さんもよくご存知のはず……」

「……なんだまなちゃんの親父さんじゃねえか」

「元極道だつて聞いたが有名な奴なのか？」

「この頃食つてねえなあ…まなちゃんのたこ焼き……」

「あーそう言えばそうだな、今度食いに行くか」

「ついでに酒でも持って行こう、まなちゃんには世話になってるしな」

「……話を戻します…六代目、いかがで？」

話を振られ、問いを待つ、その問いかけられた人物は……

東城会六代目会長…「堂島大吾」ドドンッ……

「近江連合、郷龍会会長……」

「郷田龍司……」

大部屋にいる幹部達が大きくどよめく、

「な、なんだと？まなちゃんの親父さんって……」

「で、でもその男は死んだはずじゃ？」

「おい、安住、どないなっとんのや」

幹部達は安住どういう事が聞く、説明をしている安住は話を続ける。

「……五年前のウチと関西の抗争……ご存知の様にアレの糸を引いていたのがまなちゃんの父親の郷田です。その後、姿を消していたんですが……」

「キヒヒヒ……たこ焼き屋のおっちゃんになってたんやなあ……気づかんかったわあ」

いや気づけよ……と幹部の心がシンクロした。

「……何にしてもタイミングが良すぎる、二日後には神室町ヒルズの振興セレモニーです」

「東城会の幹部もまなちゃんはもちろんの事、全員が顔を揃えます」

「冴島は中国で商談中だろ？」

「そしたら…全員とちゃうなあ」

「……ほぼ全員です」

「思い出したわ、その二階堂……、今はイケイケやけど元はまなちゃんの父親の弟分やった男です。まなちゃんの父親が消えた途端、関西で頭角を現しおった男ですわ」

「問題は…何故今この二階堂が東京にいるのか……何か、臭いませんか？」

安住はそう言い幹部を見渡すが……

「いや、普通に元兄貴分に合いに來ただけじゃ？」

「いや、まなちゃん目当てかもしれないぞ？」

「待て待て、たこ焼き目当てかもしれへんぞ？あそこのたこ焼きはテレビでも出とったし」

幹部の全員が思う事を言つて場はその話で盛り上がる。

安住は頭を抱えながら唸る。

（毎度毎度、まなちゃんの話になるとなんでこう盛り上がるんだ……）

安住が頭を抱えていると六代目が話しを進める。

「真島さん」

「んあ？」

「ヒルズの振興セミナーには、東城会の威信がかかっています…
…」

「ん…せやなあ」

「他の組とも連携して警備の強化を……采配は、お任せします」

「…ハッ……………」

「……………」

「あ、あの真島さん…早くしないとー」

すると突然部屋に組の一人が入って来た。

「お、親父いいい！」

ドンと棚にぶつかり、棚に置いてあったDVDが床に落ちる。

「こらボケえ！何やっとなじゃ！？……ん？」

「え？」

真島と一夏はテレビとこちらにくるゾンビを交差に見る。

「……………」

「……………」

そしてまたこちらにくるゾンビとテレビのゾンビを交差に見る。

「……………」

「……………」

そして少し経つと真島が、

「ムホッ！やっぱりホンマもんは迫力がちやうなあ」

「そつですねえ」

二人は冷静に見ていると別の方向から飛びかかってきて真島を襲う、

「！？、真島さん！」

「ん？」

「があ”あ”あ”！！！」

ドンッ！！

唸り声を上げながら真島におい被さるうとするゾンビにショットガンの銃口を口に突っ込む、

「最高や」

「ま、真島さん…それ、どこから？」

真島はニヤリと笑いゾンビを見る。

「まさかゾンビとやりあえる日が……来るとはのう」

ニタアと笑った後、部屋に銃声が響きゾンビは頭を撃ち抜かれ倒れ伏した。

「へ……………」

一夏は状況が分からず、ただ混乱するだけだった。そしてまた組の者が現れ、二人に脱出を促す、

「親父！織斑のぼっちゃん！早く下へ脱出を！…う、うあああああ
ああっ！？」

「行くでえ」

ガシャンとショットガンに弾を送り込み肩に担いで立ち上がる真島、
今ここに狂犬が唸りを上げて起きあがった。

「がっかりさせんなや！！」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」（後書き）

真夏「ところで作者はん、他にウチの相棒って出るんか？」

作者「出そうと思います、はい」

真夏「さよか、で？誰や？」

作者「秘密です」

真夏「そんな殺生なあ……」

十四話や！「パーティーーやなくてパーティの始まりや！」（前書き）

作者「二話連続辛い……」

真夏「よう頑張ったなあ…千夏ちゃんトコもあるのに」

真夏「まだ見てくれる人がいますからねえ…頑張らないと！」

真夏「その意気や」

十四話や！「パーティーーやなくてパーティの始まりや！」

「…………ハッ！？今いつちゃんが組み合わせてはいけない人と一緒におる！」

「何言つてんだ？沙紀達も助けた事だしさっさとずらかるぞ」

ここはポッポ店前の路上、そこには頭や体が半分にされたゾンビ……それに無数のカリカリ君が横たわっていた。

「……そやねえ、サツちゃん怪我無いか？」

「う、うん……まなちゃん凄いな……たった二人で数十人もいたのに物の数分で片付けちゃうなんて……」

「あははは、まあ慣れてはるからなあ。タツちゃんも凄かったやろ？」

「…………うん、凄く……カッコよかった」

「んな！？」

龍也は沙紀にカッコいいと言われ、顔をもの凄く赤くした。

「な、なななな何言つてやがる！？」

「ほほう？タツちゃん」ニヤニヤ

「龍也君……」クスクス

龍也は地面に不可解を覚えて下を見たが、マンホールがあるだけで何もなかった。

「……………気のせいかな」

「タツちゃんかわええなあ」

「ほんとだね」

「もうからかうんじゃないよ!?」

そして龍也は真夏と沙紀の追跡を開始、ゲイリーはその五分後別のマンホールから出て来て沙紀は真夏の相棒になった……………

視点・「真島吾朗」

キツヒビヒビ、まさかゾンビが現実におるなんてなあ！

「コイツが一棒の言っていた事かもしれへんなあ」

まったく真夏ちゃんも人が悪いでえ、こおーんなおもしろい事を黙々とくなんて、

「おっしや！いっちょ真夏ちゃんのとこにでも行こか！」

わしはそう言って部屋のゾンビを片付けた後に行こうとしたんやが

……

「……………ん？、どしたんや一坊」

「あ…………あ……」

一坊はあーあー言いながら口をあぐり開けたまま固まっていたんや、どないしんやろ？

「一坊？どないしたんや、そんな鳩が豆鉄砲食らった様な顔は……………」

「真島さん！」

行き成りワシに向かい名前を呼んで来よった。んんう？どしたんや
いつたい……

「こ、こここの人達って……………」

「ん？ん？こいつらウチの組や神室町の住人に見えるなあ……………」

「え、えっと……この人達って……………」

「……元は神室町の人間や無いのか？」

「だ、だったら何で躊躇なく撃ったんですか！？もしかしたらただの遊びで……」

「一夏」

「！」

わしは一夏を待ったを掛ける、たく、無駄に正義感あるガキやなあ。
ま！そう言う一夏は嫌いや無いんやけどな！

「なら一夏、こいつらをそのままにして奴らに食われろっちゅうんか？」

「そ、そう言う意味では……」

「それにな、お遊びでもこれはリアル過ぎるで？」

「う……」

「確かに元わしの組のもんや神室町の住人を撃つのは………気が引けるで？」

「なんですか今の間は…それに何故疑問形？」

「細かい事は気にせんでええ、ウチが言いたいのは一夏が噛まれるかもしれへん事や」

「！、それは……」

一夏め、自分が食われるかもしれへん事を忘れておったな……

「もしお前が噛まれてゾンビにでもなってみい、わしはお前を多分撃てんでえ、それにな……」

ワシは一呼吸して一夏の目を見る、五歳児の目はこんなにも汚れの無い純粋な目をしとったんやなあ……おっと今はそこやないな。

「ん、んん！……真夏ちゃんも、絶対ゾンビになったお前を撃てへんで？下手したら自分も一緒に……」

「そ、それはヤダ……！」

「そやる？せやからワシはお前を守る為に銃を撃ったんや……」

「……………え？楽しんでませんでした？」

「ドアホ！今わしがカッコいい事言つとんのにチャチャをいれんやない！」

「す、すいません……」

「……………まあええ、せやからわし……………まあ楽しんでるのは本音やせやけどそれよりも大事ななんは一夏を守って無事に真夏ちゃんと合流させる事や」

「え？外に俺を出すんじゃ？」

「真夏ちゃんを助けにきたんやろ？なら……………」

わしは一夏の前でしゃがんだ体勢を解いて立ちあがり、ドアの前へと移動する。

「わしに着いて来い、真夏ちゃんを助けに行くで！」

「……………はい！」

ワシはドアを開けてミレニアムタワーの廊下へとでる。さあ…お楽しみ的一幕開けや…！

「ふう…無事に沙紀ちゃん達を届けたし、……………あ、おとんに電話するのすっかり忘れてたわ…」

テヘッと自分の頭をコツンと叩く真夏、龍也達は一旦後輩の定員を柄本の両院へと送った後にゲイリースブートキャンプへと行った。

「はよ電話せな……」

そう言つて五才の誕生日に堂島に買つて貰つた携帯で電話する。

「これって確かVOROU社の携帯つて言つとつたなあだいちゃん……」

どこかで聞いた事ある様な携帯で電話する真夏、だが電話はしたが一向に掛らない。

「……寝てるんかなあおとん……」

そう言つて携帯を切り、ポケットにしまふ真夏、さてこれからどうしようと思つて悩んでいるとある事に気づく、

「……そう言えばだいちゃんに誘われていたセレモニーの事すっかり忘れてたは……」

今から行けば間に合うかなと喫茶店アルプスでくつろぎながら考える。

そして真夏は会計を済ませて外に出て大吾達がいる神室町ヒルズへと向かった。

「そう言えばヒルズもなんや高い壁の裏にあつたなあ……どうやって入ろう?」

悩んでいると後ろから声を掛けられる。真夏は振り向くとそこには長濱がいた。

「よう、まだこんなところでウロチョロしてたのか」

「長濱さんもどないしてここに？」

「俺は…まあ金稼ぎだ」

「へえーそうなんか、とそうや長濱さん」

「ん？なんだ？」

「また壁の向こう側へ行きたいんやけど、どうやったらいけますう？」

「はあ？何死に行く様な事言つてんだ？」

「大丈夫やウチにはコイツがあるで」

そう言つて肩に担いでいる布に巻かれたラブシャをとりだして長濱に見せる。

「……………五歳児が持つ武器じゃねえよこれ……………」

「へへへ…まあええやないですか、そんで……………」

「あ、ああ壁の向こう側への行き方だな？それなら赤石って奴に頼んでみる」

「赤石い？」

「神室の盾つてつうボランティア団体を組織している奴だ、奴なら中への入り方を知っているはずだぜ。聞いてみな」

「ホンマか？おおきに♪」

そう言つて真夏は長濱に礼を言つて去る。

「奴らはあのデカイ壁にいるから話掛けろよ！」

「おおきに〜！」

真夏は長濱に手を振つて歩き出す、一夏との再開は……近い！……かも？

オマケ・「ダチはカメラマン！」

「なんでレゾナンスにこないにいつぱいおんねん！」

そう言つて真夏（注：この真夏は13歳です）は銃砲店から拝借し

たショットガンを撃つ、

「しょうがねえだろ！ショッピングモールなんだから！」

そう言ってバールを振り上げゾンビの頭を力チ割る一夏（注：未来の一夏、13歳です）、

「はよりッちゃん迎えにいかんと！あの子泣いてる！」

「弾も早く見つけねえと何するか分からないからな……」

友達の心配をよそに敵であるゾンビ達は一夏と真夏を目指して進軍する。

「くっそう、ラブ亜門レールガンがあれば一発やのに！」

「無茶言つな！あんなもん何時でもどこでも持ち歩けるか！」

二人は喋りながらもゾンビを倒していくとその時！

ドゴォーンッ！！

「！？、なんやー！」

「次はなんだよ！？」

そう言ってゾンビの遙か後方から爆発と共にゾンビが粉碎されていく、

「生存者かいな!？」

「だがこの状況だとありがたい!」

そう言つて二人は倒しながらゾンビを蹴散らし、爆発があつた方向へと走つてゆくと爆煙の中から人があるいてくる。

「だ、誰や？」

「生存者…だよな？」

一夏と真夏はお互いの武器をその人影の向けながら警戒する、そして煙幕は晴れてその人物が見えた。

「………はい？」

「なん……だと……？」

二人は信じられない者を見た……

「結構苦戦してるな?一夏、真夏」

そこには二人の良く知る人物だつた。

一夏と真夏は別人であつて欲しいと願つたがたやすく打ち碎かれた。そう、そこには……

「………弾ちゃん？」

「おう、無事で何よりだ二人とも」

「ほ、本当に…弾…なのか？」

「当たり前だろ？親友の顔を忘れたか？」

二人は啞然としていたそれは何故か？

「「へ……………」」

「ん？」

そう……弾の格好は今……

「変態や—————！！」

「変態だ—————！！」

女性物の服を着て頭には馬キャップ、そして首にはカメラをぶら下げた弾がいたからだ。

「ちょ！おま！変態って！？」

「い、いやああ！？近づかんといて！」

「だ、弾！い、いくら親友でもま、まなちゃんに近付くとゆ、許さないぞ！？」

真夏は腰を抜かしてへたり込み、一夏はそれを守ろうとしているが足が震えていた。

「お前ら何やってんだ？」

「それはこっちのセリフだ！、や！」

弾は未来、最強のゾンビハンターになっていた……オワレ、

十四話や！」「パーティーーやなくてパーティの始まりや！」「（後書き）

真夏「未来で弾ちゃんが……嘘や……」

一夏「俺だっと思ってた……」

弾「何がいけないんだ？」

一夏「お前の格好だ！」

真夏「アンタの格好や！」

作者「あのファッションって誰が思いついたんだろ？」

十五話や！」「なんでウチが？」（前書き）

早々十五話目！感想待ってます！

十五話や！」「なんでウチが？」

ここはミレニアムタワーの出口前、そこではショットガンを肩に担いで堂々と歩く真島と拳銃を持ちながらオドオドしながら真島の服にしがみ付きながら歩く一夏がいた。

「キヒヒヒ！いやゝあないにぶつ放したんは初めてやあ！爽快やで！」

「……………」キョロキョロ

「ダイジョーブや一坊！そないにキョロキョロせんでも平気や、わしが付いとる」

「は、はい……………」

とは言っているがタワー内では一夏そつちのけでゾンビを狩りまくり、一夏を涙目にさせていた。
それもあつてか、一夏は真島から離れようとしなない。

「一坊、そろそろ離れんか？男やろ？」

「で、でもお……………」

「せやけどなあ…………ん？」

真島が一夏と話していると近くから悲鳴が聞こえる。
そして真島と一夏の前を逃げていく人達が走ってゆく、
その一人が真島達を見つけて声をかける。

「おいアンタ達逃げろ！とんでもねえ化物が来るぞ！」

そう言っただけでまた再び逃げた。

一夏は不思議そうにして真島に聞く、

「化物って……？」

「しわんわい、せやけど……なんや、ゾンビとちゃうのがおるんかい」

そうして二人は歩き出し、道路に出ると近くからまた悲鳴が上がっていた。

「ま、また悲鳴……」

「あそこの車からや」

真島が指差す方向を見ると白いワゴン車が止まっていた。前の座席にいる人はエンジンをかけようとしている。エンストした見ただけだ。だがその指差した方向にいたのはそれだけじゃなかった。

「な、なんだあれ！？」

「……………なんやゴリラの一種か？」

真島達がそう言っているとその巨大なゴリラらしき化物が悲鳴上がるワゴン車を両手で掴んだ。

「た、助けて！助けて！」

「ま、真島さん！」

「こりやどえらい楽しめそうや……」

そうこうしている内に巨大ゴリラは車を持ち上げてあるうことが真島達の方へと……

「え！？」

「おほっ！」

分投げた、真島は一夏の首根っこを掴みステップして避けた。
そして投げられたワゴン車の中にいた人たちはもがきながらも外に出ようとする。

だが投げた巨大ゴリラはそれ良しとせず、こっちに走ってきた。
隣にあった戦車を殴ってふっ飛ばしながら……だがこちらもそれを良しとせずにいる男がいた。

「ドアホ！お前は……」

真島は一夏を離し、化物の前へと出る。

一夏はそれを止めようとしたが……

「わしの獲物や！」

バキッ！！

「……うそ……だろ……」

一夏は信じられないのを見た、あの巨体を誇る巨大ゴリラを真島はゴリラの顔を殴り、静止させたのだ

。ゴリラは目をまん丸くして真島を見ていた。

「キツヒツヒツヒツ！」

その笑い声が癪に障ったのか、ゴリラは顔を怒りに変えて雄叫びを上げる。

「せや！そうこなアカン！」

「……まなちゃんゴメン……俺帰りたい」

ガクツと頂垂れて現実逃避をする一夏であった……

視点。「郷田真夏」

「――――ハッ！？いつちゃんが別の意味で危ない！？」

「まなちゃん！こっちの応援頼む！正面のゾンビの猛攻が激しくて！」

「！、了解や！」

ウチは今何とかヒルズに辿り着いたんやけどそこもやっぱりゾンビがいて東城会の幹部が襲われておったんや……ウチは東城会幹部の人達と共にヒルズに来店していたお客さんと非戦闘員の幹部の部下達を避難させてる所や。

「非戦闘幹部はお客の避難を！安住組は他の組と連携してゾンビを店内に入れんなや！」

「ウツス！」

「ライフルを持ってる人は上からの狙撃を！間違ってもダチに当てるんや！」

「合点だ！」

「それから――！、ダイちゃん何やってるや！？下がっといて！」

「い、いや俺も戦わないと！」

「アホ言つなや！総大将が前に出てどうすんねん――！」

まったくいつちゃんと同じで正義感強いわあ、まあそこがダイちゃんのええ所なんやけど……

「クッ！熊谷はん！安住さん！」

「おう！」

「どうした？」

「ダイちゃんの警護を！前に出ようもんならフンじばっても止めて！」

「わかったぜまなちゃん！」

「任せろ」

「お、おい！お前ら！」

ダイちゃんは熊谷はんと安住さんに両脇をガッチリ拘束されて避難している人達と共に連れて行かれる。

「六代目、すみません…まなちゃんのお願いですので…」

「六代目が死んだら東城会は終わりですからね」

「だ、だからってなんでまなちゃんのお願いが優先されるんだ！？」

「まなちゃんだから」

「どんな理由だそれは！？」

「安住さんはお願いしますう、ウチは他の組引つ張って奴らを殲滅せんといけまへんから」

「わかった…行くぞ熊谷！」

「おう！六代目、失礼します！」

「ま、待て！ホントに待ってくれ！」

まなちゃん！と声を上げながら奥へと消えるダイちゃん、
まったく、総大将が前に出る戦なんて無いで？

「まなちゃん！ゾンビ共が防衛線を突破！至急救援を！」

「！？、思ったより早い…非戦闘幹部はそのままお客を店の奥に…
……真島組！！」

ウチが呼ぶと直ぐに声が来てウチの前に数十人の真島組の親衛隊が来た。

流石はごーちゃんの組や、まだ誰も掛けてへん。流石はレンジャー連隊にも引けを取らない強さや……

ちなみに、何故かウチの親衛隊なんやけどな。

「及びで？」

「親衛隊はありったけの武器を持って最終防衛ラインを死守！後残ったもんはウチと一緒に前戦行くでえ、ウチに着いて来い！」

「」「」「オウツー！！」「」「」

ウチは極道の人達にお願いして幹部達を連れてゾンビ共を迎え撃つ、
「こりゃホンマ物の戦場よりもたちが悪いで……」

ウチはラブSPAを持って最前戦へと走る。もうウチのダチは殺させ
へん!!

場所を代わりここは神室町に向かう電車の中、そこに白いコートを
着ている厳ついオッサンがいた……

「……………」

郷田龍司である、
龍司はコートのポケットから携帯を取り出して電話をかける、
掛けた先は真夏である。

「……………やっぱり繋がらへんなあ」

そう言っただけでポケットに携帯をしまう龍司、何故龍司が神室町へと向かっているかと言つと……

「真夏が行つた神室町ではけつたいな封鎖がされているとテレビで言つとつたが、真夏は巻き込まれておらんだろうなあ……………」

龍司の心配もむなしく東城会の指揮官してバリバリ巻き込まれている真夏であつた。

神室町まで電車で後四十分、龍司にはそれが長く感じていた。

「真夏……………無事でいろや……………」

そう言つてまだ遠くに見える黒煙を出している神室町を龍司は険しい目で見ている……………

ここはミレニアムタワー最上階、そこに椅子に座る二階堂とDDと言われる日系アメリカ人がいた。

「真夏ちゃんと言う郷田の娘の誘拐には失敗したね」

「ああ…まさか東城会六代目が助けにくるなんてな……」

二階堂にとっては予想外の伏兵だった事は言うまでも無い。

「……………あの男を使うかい？」

「……………林か…………」

DDは二階堂に元兄貴分に当たる林を使い、真夏を誘拐させようと提案した。

「彼はまだちゃんと命令に従って動いてくれるし、適任じゃあないかな？」

「……………そうやな…奴を使おう」

二階堂の了承を得た後、DDは携帯を取り出しどこかに掛ける。

「……………ああ僕だよ、指示通り真夏ちゃんをここに連れて来てくれ」

そう言った後携帯を切りしまふDD、

「そつだ、さっき映像で見たけど彼女の戦いには驚かされるね」

「……………流石は兄貴の娘や、一筋縄ではいかんっちゅう事やな」

真夏見たいな子供がいっぱいいたらバトルロワイヤル宜しく、大人達に宣戦布告しかねない。

「次いでにヒルズにアラハバキを送つといたから、連れてくるのはたやすくなると思うよ?」

「アレを送ってもあんまり心配しないのはなんでや?」

「君の兄貴の子だからじゃないかい?」

「……………否定はできひんな」

二階堂は溜息を吐き、とりあえず林や送ったハラハバキの心配しか思い着かなかった二階堂とDDであった。

オマケ・「悪霊山脈の悪夢！」

「いっちゃん走って！」

「フルスロットルで走ってる！」

真夏と一夏（注：14歳です）は悪霊が住むと言われるアークレイ
ーでは無く悪霊山脈にいた、
絶賛肉の剥げた犬共に追われているが……

「なんで犬に追われなあかねん！？」

「しるか！てか追っかけてくる犬ってアレもう普通の犬じゃねえよ
！」

とにかく走る真夏と一夏、少し走っていると遠くに建物の様な物が
見えてくる。

「いっちゃん建物や！あそこに入るで！」

「お、おう！」

二人は全速力でゾンビ犬との距離は離して走り、何とか建物内へと
逃げ込んだ。

「はあ……はあ……はあ」

「ぜえ……ぜえ……ぜえ」

二人は息を切らして建物の中であるエントランスに寝転がる。

「はあ…はあ…はああああ…こないな事になるなら探検なんてするんやなかった…」

「ぜえ…ぜえ…あああああ…悪霊に興味を持ったまなちゃんがいけないんだろ？」

「そらそうやけど…いつちゃんだって探検って聞いて目えキラキラさせとったやん」

「そ、それは…」

悲しいかな、男の探検心を借り立たせたばかりにこの様な眼に合う真夏達であった。

「まあええわ…とりあえずこの旅館？見たいな所に住んでる人に事情を説明して泊めてもらわな…」

「同感だ…とりあえず人を探さないと…」

「せやな」

そう言うては二人は立ち上がり、旅館のエントランスを見渡す。

「……ここって…旅館…やよな？」

「だと思っんだが…人がいない？」

ここが旅館ならいるはずの受付嬢や接客する旅館人が何時までたっても来ない事に疑問を抱く二人、

「まさかここって廃館なんじゃ……」

「でも電気は通ってるぜ？しかも廃館ならここまで綺麗じゃ無いだろ」

「確かにそうやなあ……ん？なんやこれ」

真夏は足元に転がっていた金属の丸い物を見つける。

「これって……」

「薬莢……だよなあ？」

「せや……9ミリ弾……パラベラムの薬莢や、せやけどどうしてこんなところに？」

二人はこれを見てやな予感がした。

「……いっちゃん、手分けしてこの旅館を散策するんや」

「お、おい！いくらなんでも危険だぞ！？」

「わかってる……せやけどここで留まっても何も得られへん。ウチは向こうのドアに行くからいっちゃんは反対側を……」

「……わかった、気を付けてな？」

「誰に言ってるんや？」

「そうだったな」

二人は手分けして旅館を散策する事にした。これから訪れる悪霊よりもたちが悪い相手にして……

続く！……かも、

十五話や！」「なんでウチが？」（後書き）

真夏「ウチらつてもしかして……」

一夏「うん、とんでもない旅館に来てしまった見たいだ……」

作者「自分、ゾンビ物大好物です！PSPで新作出してくれませんかねえ……」

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」（前書き）

真夏「ええなあ……ごーちゃん、あないな化けモンと戦って……」

一夏「え？普通怖がらない？」

真夏「怒ったおとんの方が怖いわ」

作者「地震、雷、火事、親父……て言いますもんねえ」

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」

「キヒヒヒヒ！ええでえ！岩ゴリラア！もっともおーと突っ込んでこんかい！」

「ヒイイイイ！？お助けー！！！」

一夏と真島は岩ゴリラことオンラキと死の鬼ゴツコをしていた。真島は一夏の首根っこを掴んで背中に背負いながら後ろから追いかけてくるオンラキにショットガンをぶっ放す、

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

「うひゃひゃひゃひゃあ！楽しいなあ！」

「ヒ、ヒイイイイ！？う、後ろから！後ろが見えるから余計怖い！？」

「じゃかしいわあ一坊！そんな情けない所を真夏ちゃんに見られたら嫌われるでえ！」

「まなちゃんだって絶対怖がります！」

「アホ抜かせ！まなちゃんならわしと同じでこの状況を楽しむに決まっとるわあ！」

「なんで俺は極道少女に惚れたんだーーーーー！」

と今更後悔はするが真夏への想いは諦めない一夏はある意味凄
と思う……

「たく、コイツはあ……ん？一坊！」

「は、はいい？……へ？うわああああー！？」

真島は行き成り一夏を戦車の上にブン投げた、一夏は放物線を描きながら戦車の上に落ちてへブツ！と言う情けない声を上げて悶絶していた。

「い、痛い…ふえ…」

「泣いてる暇はないで一坊！ソイツを使ってコイツの岩剥がすんや！」

五歳児に酷な事を言う真島だった。

「ふえええん…まなちゃん…」

「だー！もう！まなちゃんに泣きいれんなや！男になるチャンスやで！？」

「うつう……？男に？」

真島は追いかけられ、撃ちながらも一夏に言う。

「真夏ちゃんに一坊の武勇伝聞かせて惚れさせるんや！」

「ほ、惚れさせる?」

「せや!今がこの時や!」

真島に言われ一夏は泣いてグチャグチャになった顔を引き締める。

「……グスツ…ズズー!、真島さん、俺…やるよ!」

「その意気や一夏あ!ぶっ放したりい!」

一夏は覚悟を決めて戦車の砲主に乗り込む、真島は時間を稼ぐ為一人でオンラキと対等する。

「さあーてえ…岩ゴリラア!わし一人でヤツたるけど堪忍なあ!?」

そう言いながらも心底楽しそうに顔をほころばせる真島、

一夏は急いで大砲の操作を覚える。

「……よかった!戦車の設計はゲイリーさんに乗せて貰ったエイブラムスと類している。これなら!」

一夏は素早く操縦をし、砲身をオンラキへと向ける。

「真島さん!行きます!」

「いいでえ!食らわしたりい!」

そして一夏はトリガーを引く、そして砲身から……

ドオオオオンッ！！！！

砲身から弾が発射されてオンラキに直撃する。

「G A A A A A A A A A A A ツ！！??」

「一夏あ！！」

「はい！第二弾装填！」

一夏は戦車を捜査して弾を排出、弾丸を再装填した。

「目標う！。岩ゴリラ！」

「発射！」

ドオオオオンッ！！！！

また弾丸が発射され、オンラキの体にまわり付いていた岩が碎かれ徐々に剥がれて行った。

「ええでえ！一棒！次や次い！！」

「はい！……あ、あれ？」

「ん？どしたんや？」

「……………弾切れです」

「なんやとお!?!」

一夏が乗っている自衛隊の戦車の大砲の弾が弾切れを起こしていた。

「じゃあない……………わしがフィニッシュ決めたる!」

「真島さん!?!」

「行くでえ!?!」

真島は走り出し、オンラキそれに気づいて腕を振り上げ横薙ぎに振り下ろすが……

「これがヴァンキッシュや!?!?!」

真島はギリギリで滑り込み、それを回避した後に……

「雑魚ボスの弱点はお決まりやさかいな!」

そう言つて真島はオンラキの腸あたりにある光るコアに銃身を押し付ける。

「そこや!?!」

ドオオオオオオオオンッ……………

手に持つショットガンが火を噴き、コアを破壊オンラキは声にならない悲鳴を上げながら仰向けに倒れた。真島はそれを見届け、立ち上がり一夏に笑い掛ける。

「ナイスファイトや…一夏あ……」

「……あ、ありがとうございます……」

ふう〜と息を吐きながら砲主席にヘタレる一夏、真島は今の戦いを思い出して高笑いしていた。

「にしてもコイツはいつたい……ん？」

真島は岩の剥がれたオンラキを見て気になる物を見つける。

一夏も何事かと思い、戦車から下りて近くで見に行く。

「……真島さん、これって……」

「ああ……これは、どないな設定やねん。マニアックなゾンビやなあ」

二人はオンラキの右肩に付いている人工物を見て疑問に思っていた。

「さて、これどうし……ん？」

真島は自分の携帯がなっている事に気づき、その電話を取ってみると……

「真夏ちゃんからか……」

「え！？まなちゃん！？」

真島は電話を取り、電話に出た……………

「やっとバリケードと中に入ったゾンビを一掃出来た……………ふうう……………」

真夏はスパークショットを地面に置いてよっこらせっと言って腰を下ろす、実に爺臭い。

「さて……………安住組！被害報告よろ」

「ウツス！と言っても被害が多すぎて……………推測ですが、かなりやられたかと……………」

「さやか……………真島組の被害は？」

「ありません、皆生き残りました。真島組とまなちゃんがいなければこの倍は……」

「いわんでええ……どっちにしても、ウチは守れなかった……」

そう言つて肩を落とし両手で膝を抱える真夏に組の幹部は慌てふためく、

「い、いえ！まなちゃんがいなければ俺だつて生きていたか！それに六代目だつて危なかったと思います！」

「せやけどなあ……」

「そうそう、そう落ち込む事は無いと思つぜえ？まなちゃん」

「うゝんそうなんかなあ……ん？」

真夏は隣で腰を下ろす人物を見て驚く、

「うひゃああああ！？なんでここにまー君が！？」

「んな！？マツポが何時の間にここにいやがる！？」

幹部と真夏は驚き、警察のである谷村が何故かいた。

「そりゃあ俺がここの調査に来たからさ」

「ち、調査あ？」

「そ、調査、東城会が経営するって言う神室町ヒルズなんだから警察が警戒するのは当たり前だろ？」

「ま、まあ確かに…せやけどなんでここにまー君が？」

「俺がここに派遣されたんだよめんどくさいけどさばれそうだし、まなちゃんと暇出来そうだしな」

「あ、あははは…まー君ホンマに自由人や……」

「こんなのが警察で喜んでいいのか悪いのか……」

幹部と真夏は複雑な心境だった。

とりあえずヒルズの防衛は終わり、一休みした後には大吾の所に戻るうとすると、

「あ、俺も言っでいいか？」

「ああ！？駄目に……」

「ん？ええでえウチがダイちゃんに話しくわ」

「まなちゃん！？」

「おー助かるう」

二人は店の奥に向かい、ポツンと残された幹部は啞然としたまま立ち尽くしていた。

「俺が…俺が可笑しいと言うのか!？」

そんな悲痛な叫びは誰にも聞こえなかった……

ここはヒルズの店の一角、そこに大勢の生存者が避難していた。
そこにいた安住に声を掛ける真夏、

「アズにゃーんお客一名来たでー」

「……アズにゃんは止めてくれ」

「えー？カワエエのに……」

「はあ……ん？その男は？」

「どうも」

そう言っ頭を下げて挨拶をする谷村に安住は首をかしげる。

「ソイツは一体……」

「マツポのまー君」

「なんかその言い方警察のマスコットキャラになってないか？」

「別に間違ってへんやろ？」

二人が話していると店の奥から大吾が現れる。

「まなちゃん！無事だったんだね！？」

「ちょっと疲れたけど、怪我はしてへんから安心しい」

「そうか……ん？君は……」

「マツポの谷村っす、以後良しなに……」

「ああ、確かまなちゃんが言ってた麻雀仲間の……」

「せや、警察の人なんやけど……アカンかな？」

「いや今の状況じゃあ警察も何も関係ないからね、こっちは人手が増えて助かるよ」

「だそうや」

「はあ……やっぱ働くんた……」

「当たり前や、マツポなんやから、それに今回はマジでしゃきつとせな……死ぬで？」

「……わかってる……ちゃんとやらないとあの世の上司に怒られちゃうから……」

「うふふ……頑張つてな、まー君」

真夏はケラケラ笑い、堂島も釣られる様に笑って場を和ます。と真夏はある事に気づく、

「そう言えば……ごーちゃんは？」

「真島さんはここにはいないよ」

「たく……あの人は……」

堂島と安住は困った様な顔をする。

「……サボリ、か……」

「サボリだねえ……」

「忘れてるだけだと思っうよ？」

「アイツ、何様のつもりだ。まったく……」

「まあええわ、ウチが電話を掛けて見ます」

そう言つて真夏は携帯を手に取り、電話を掛けて見る。

「……………あ、ごーちゃん？ウチやウチィ」

「ウチウチ詐欺？」

「…うん…うん…え？一夏も一緒なん？」

「一夏君も一緒なのか……」

「真島さんに付いていたとは…運が無い」

「まああの人振り回されたら命がいくつあっても足りないねえ」

人のいない所で好き勝手言う幹部とマッポ、

「……え！？マジで！？やゝんごーちゃんズルイ！ウチもいつちゃん見たいにぶっ放しかつたで！」

「ぶっ放す？」

「真島さん一夏と何をやったんだ？」

「とりあえずは過激な事で間違い無いねえ」

またも人のいない所で勝手な事を……いや事実か…

「うん…そつかそか、それじゃあ直ぐにこっちに来てなあ。あ、いっちゃんに代わってくれへん？」

「お、一夏君に代わるみたいだ」

「よく無事だったもんだ」

「一夏もついてるねえ」

一夏の無事を喜ぶ一同だった。

「いつちゃん？…え？な、なんやいつちゃん泣いてるん！？どうしたんいつちゃん…ん、ふむ…そかそか、そりゃあ可愛そうに…うん…うん…もう大丈夫やで、ウチがごーちゃんとO H A N A S H I するから…変わってくれへん？」

「！？（な、なんだ！？急にまなちゃんの周りの温度が下がった！？）」

「ま、まな…ちゃん？（こ、これは一体！？）」

（あゝあ…怒らせちゃった…）

三人は真夏の急な温度差にビビっていた。そして…真島に代わり、真夏が喋りだす、

「……真島さん」

「！、まなちゃんが名前で！？」

「こ、これは…死んだか真島！？」

（骨は拾ってきますよ……）

「なーんでいつちゃんを泣かせたんかなあ？いつちゃんを戦わせんでも一人でやれる筈やったやろ？いつちゃんはまだ五才やで？銃も持つ歳でも戦車乗る歳でも、ましてや化物とやり合う歳や無いんや…そこんところ分かってるやろ？」

（こ、これは……）

（な、なんて……）

（……骨も残らないかもなあ）

（（マジで怖い！！））

三人は真夏の低い声とハイライトの消えた目に恐怖し、真島の心は絶望的だと悟った。

「……ウチはどうなんやと？今ウチはいつちゃんの話をしとるんやで？話を変えんで欲しいんやけど？……それでええんや、そんで…
…返答は？……まあええやろ、何時までも怒ってもしかへん、早くいつちゃんを戦わせず、安全に、エスコートしてやねごーちゃん
へ」

ピツと携帯を切り、ふうと息を吐き三人はやつと重空気が解放された。

「まったく、ごーちゃんはなんでこう加減を覚えてくれへんのやろ。困った子や……」

「……安住」

「はい……」

「……よし」

「「まなちゃんを絶対に怒らせないようにしないと」「」

三人は固く決意したのだった……

「……まー君」

「な、なんだ!？」

「とりあえずまー君を隔離エリアから出して、警察にこの場所を教えて欲しいんや」

「お、おう」

「そんで、その護衛にウチが行くからまー君は武器持つてる？」

「い、いや……俺の銃は弾切れで……」

「さよか」

真夏は腰から自分のブローニング・ハイパワーを谷村の前に出す、

「これを使って、ウチはこっちがあるからそれじゃあいこか」

「い、いまから？」

「早い方がええ、お客さんも心身ともにまいって来てる……反乱を

起るのは防がなあ」

「わ、わかった…」

谷村は真夏から銃を受け取り、腰に収める。

「ほな行くで」

「え、えつと…真島さん達は待たなくて？」

「まー君送ったらウチは直ぐ戻るから平気や、いっちゃんは泣いてはったけど根は強い子や」

そう言つて谷村に笑いかけながら歩く真夏、それにオドオドつて行く谷村……真夏の暗黒面は誰だろうとビビらせる迫力があつた。

「この事件終わったらごーちゃんとお話せな」

「真島さん…生き残ってくれ」

その後、真夏達がヒルズを離れ、その入れ替わりに真島達が到着。真島は入って来た直後斜め四十五度の綺麗なお辞儀に似た謝罪が店に響いたのを真夏達は知らない……

オマケ2・「旅館検索」

真夏は一夏と別れ反対側の部屋へと進んでいた。

「ここにやちわ……誰かいませんか？」

真夏（注：13歳）は呼んでも返事が無い、そしてさらに進むと大きな部屋に辿り着く。

「ここは…食堂か？」

そこには大きなシャンデリアと横にのびるテーブルに椅子が沢山ある部屋だった。

奥に進むと暖炉がありそこに近づく。

「……これは…？」

暖炉のそばには赤い染みといくつもの葉莢が転がっていた。そしてもう一は……

「物騒やなあ…拳銃が落ちてるで」

真夏はそれを拾い上げ、確認する。

「……弾切れかぁ……お、マガジンがある」

真夏はマガジンも拾い上げ、拳銃の空弾奏を抜いて弾の入ったマガジンを挿入する。

「なんやろなーこれ、結構カスタムされてるし……このグリップの星のマークはなんやろ？」

真夏は拳銃のカスタム化されてる事に疑問を抱いていたが、とりあえずはスライドを引いて初弾を装填する。

「弾は12発……ちよつと心細いけど、何とかなるやる後で見つかりそうやし」

そう言つて真夏は拳銃の具合を確かめた後、床に飛び散っている赤い染みを確認する。

「……血……やよね、これって……アカン、ホンマに危ないかも、この旅館……」

真夏は一夏にこの事を知らせようとしたが、

「まだ奥に部屋が残ってる……少し奥に行つてから報告しよ……」

そう言つて真夏は立ち上がり歩き出す、そこで捕食者に出会つとはしらずに……

「ここは廊下やな……明りが少な「グチャ……」ん？」

真夏は奇妙な物音に気付き、音の発生現と思われる廊下の一番奥に向かう。

「人か？」

真夏はゆっくり近づいていき、確かめる。

そして真夏は床に寝ている人とそれを支える様に側にいる人を見つける。

「あの…この人ですか？」

真夏は呼びかけたが、一向に返事が無い、そして真夏が近づいてゆくと……

ブシュ！ゴロン……

行きよいよく床に赤い液体が流れ床を染め上げる。
そしてその後ゴロンと転がってくる物体があった。

「へ？……ひい！？」

真夏は瞬時に飛び引いた。なぜならそれは……

「な、なな生首！？」

真夏の大声に気づいた人物はゆっくりと真夏の方へと顔を向ける。
その顔は口は血で汚れ、目は生者の目をしていなかった……

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」（後書き）

真夏「うふふ…ホンマごーちゃんはオイタが過ぎるわぁ……」

一夏（まなちゃん…目が怖いー！）

作者「真夏と一夏のバイオ編……初代のアレの振り向き様の演出はホントに印象に残りますね……自分、小さい頃父親に抱きつきながら一緒にプレイしました……」

十七話や！」「トラの狩りが始まるでえ！」（前書き）

あの方の出番が決まりました！見てください！

十七話や！」「トラの狩りが始まるでえ！」

ウチはまー君を警察署では無く、突然現れたゲイちゃんによってまー君はゲイリーズ・ブートキャンプに拉致られ、ウチは一人神室町の隔離エリアの外にいた。

「まさかゲイちゃんが待ち構えていたとは……まー君もご愁傷様や……」

離せー！俺はまなちゃんとサボるんだー！と言って引きずられながら連れてかれたし……
ゲイちゃんも積極的やなあ……

「……アッー！な展開にならなきゃええけど……さて、ウチもヒルズに戻るかいっちゃんやごーちゃんがまつてるはずやし」

ウチはとりあえず必要な物を買う為にドン・キホーテと無事な方のポツポ店に向かう。

お金はちよつちゾンビから拝借したからお財布はパンパンや……追いつきとか盗人とかやないで？ヒルズの人達の為に使うんや、ゾンビになった人達も許してくれるはず！……多分。

視点・「????」

「どないなつとんねん……これは」

わしは中国の商談が早く終わって神室町にいたんやけど……

「なんやエライ騒ぎやなあ…テロでもおこったんかい？」

商談相手が真夏ちゃんの知り合いで商売が滞りなく進んだんわええんやけど、

まさか外国にも真夏ちゃんの知り合いがおりとは……

「確か、上山とか言う奴から聞いてそれで知り合ったとか言うつとたな……」

商売相手はなんや派手な衣装を着た人形を頼ずりしてはったし正直気味が悪かったわ……

（しかもその人形が真夏ちゃんに似てた様な似て無い様な……）

まあええわ、それよりもどうやって開催セレモニーがやっている神室町ヒルズに行くかな、

六代目や兄弟もおるはずやし、

「真夏ちゃんもきつというはずや」

「ウチがどないしたん？」

「うお！？」

「ちょ！どないしたんやトラちゃん？そんな大声上げて……」

わしが喋っている途中で後ろから声を掛けられてビックリしたんけど……真夏ちゃんかい……

「ま、真夏ちゃん？」

「そやでーてトラちゃんは小龍はんと商売の話で中国行ってはったんやろ？終わったん？」

「あ、ああ真夏ちゃんのお陰で商売は上手く行っただ？」

「さよか、そりゃよかったわ小龍はんも話の分かる人やなあ」

「ああ、こんなに上手く行っただのは初めてや」

「そかそか、あ！そういえばその人に中国に来て見んかって話があったんよ」

「そないな話が？」

「せやで、なんやこつちに来てご奉仕せえへんか？って来たんや」

「ご奉仕やと！？ま、真夏ちゃん！それって！！」

「トラちゃん……」

「な、なんや？」

「ご奉仕ってなんや？」

ズドンッ！！

わしは頭からまっさかさまにずっこけた。 イッテエ……

「トラちゃん？」

「……え、ええか真夏ちゃん、絶対中国に行ったらアカン！」

「？、なんでえ？」

グッ！この純粋な瞳が汚される所やった！危なかったで……

「ええか真夏ちゃん、これはウチとの約束やご奉仕つちゅうもんをまだ教えられへんけど何時かは真夏ちゃんにも知る時がある。せやけどなあそれは心に決めた人にだけするもんや」

「心に決めた人？」

「せやいるやろ？その…す、好きな人とか…」

「うん、いるで」

「ど、誰や？」

「トラちゃん」

「は？」

な、なんやと？わ、わしが！？

「トラちゃんは優しくて、時々見せるお茶目な所がカワイエんや」

「……………」

「そんでもって腕っ節が強くてカッコよくて……………」

「……………」顔真っ赤

「ウチの大事な……………」

「だ、大事な？」

「友達や！」

ドオオオオオンッ！！

わしは地面を陥没させる勢いでドたまを打ちつけた。

「トラちゃんだけやないでダイちゃんもごーちゃんも駿ちゃんもまー君もタツちゃんもサツちゃんもたっちゃんや伊達はんやサイの河原の人達と東城会の幹部の皆、そしておとんやちー姉ちゃんといっちゃんも大好きやで」

まなちゃんは指で数えながら神室町の人達の名前を言う。

「は、はははは…さ、さよか」

「うん！」

アホかわしは…何を五歳児に期待しとんねん…これじゃあ真夏ちゃんを襲ってきたロリコンと一緒にやないか……

「……はあ、とにかく中国に行きたい時はまずわしと兄弟と後これれば六代目や親衛隊が連れていきい……（てか中国マフィアってなんで真夏ちゃんを欲しがらんや？）」

「???、トラちゃんが言うんならそうするわ」

よし、とりあえず拉致監禁は防いだで、六代目に言ったら中国との商談を即効で破棄しようやし……

「わしの苦勞が水の泡になりそうやしな……」

「トラちゃん？」

「なんでもないんや気にせんでええ」

そう言つてわしは真夏ちゃんの頭を撫でる、少し驚いていたが直ぐにされるがままに撫でられている。

ホンマに可愛いやつちゃ……

「さて…そろそろヒルズにいかなあ」

「あ、そやったわ…ゴソゴソ…はい！トラちゃん」

「ん？なんや？」

真夏ちゃんはお揉むろに後ろの腰から……て拳銃！？

「ま、真夏ちゃん！？それは！！」

「ヒルズに行く途中は危険やからこれ貸したるわ」

おいおい…いくら神室町が危ないからって拳銃はいらんやろ……

「いらんと思うで？真夏ちゃん」

「絶対必要やって…それに撃てないんならウチがやるし」

「な、何言ってるんや！真夏ちゃん！？」

真夏ちゃんがわしの代わりに撃つやと？人を撃つ怖さしらんのかい！……いや知る訳ないかこんな五歳児に……

「真夏ちゃんあのな……」

「トラちゃんはよいこ！皆が待ってるで！」

真夏ちゃんはそのままわしに拳銃を押し付けて手を引っ張る。

「神室の盾に頼めば入れてくれる筈や、はよういかな！」

「お、おい真夏ちゃん!!」

わしは引つ張られるまま真夏ちゃんについて行く、わしはこの時しらなかった……

真夏ちゃん言う拳銃が必要な意味を……

視点・「織斑一夏」

「弾幕薄いでえ!何やってんや!!」

「は、はい!」

俺は群がるゾンビをヒルズの二階からスナイパーライフルで狙い撃つ、

「クソ!クソ!なんで神室町の人達を撃たなきゃいけないんだ!」

「今はゾンビや、ためらうんやない！今は後ろにいる奴らを守る事だけ考えい！」

「っ…………はい！」

俺は撃つ、後ろにいる人達を守る為に銃を握り、狙いを定め、引き金を引く……

まなちゃんが守った人達を守るんだ！絶対に突破させない！

パアーンッ！

「助かったで一坊！」

「あまり前に出ないください真島さん！」

「わしが前に出んで誰が出るんや！」

「真島さんがゾンビになったら誰が倒せるんですか！！」

「うひゃひゃひゃひゃ！そうやったわ！」

ホントに楽しそうにゾンビにショットガンをぶちまける真島さん、まなちゃんが出て言った後にそれを狙った様にまたゾンビの群れが押し寄せてくる。

（真島さんが奮闘してくれたお陰で前線が保たれているけど……このままじゃもたない！）

俺の他にも幹部の人達が援護しているけど、ほとんどが銃をあまり扱って無い人だから戦力は俺と真島さんの部下のまなちゃん親衛隊だけだ…後どのくらい持つか……

「親父！」

「！、不味い！」

真島さんがゾンビ達に囲まれている！助けないと！

俺はスコープを覗き、真島さんに群がるゾンビを撃とうとするが……

「駄目だ…俺の腕じゃ真島さんに当たる！」

「畜生！どうすれば！？」

こんな時にまなちゃんがいれば……！！

その時、キューーンやバチバチツと音が聞こえた。

「な、なんだこの音？」

「こ、この音は！」

そう言った瞬間ゾンビの群れの一部が吹っ飛び体を炎に包まれながら沈黙した。

真島さんの前に退路が広がった。

「なんだよ…これ？」

俺がゾンビを一瞬で半分まで減らした電撃に驚いていると、聞きなれた声が聞こえる。

「だあかあらあ！銃は必要やって言っただやん！」

「わかったわかった真夏ちゃんの言う通りやったって」

「わかりやあええんや、ほないこか」

そう言っただけで出て来た煙から小さい影と大きな影が見えた。

「あ、あれって！」

「まなちゃん！冴島さんもいるぞおー！」

幹部の人達は歓喜の声を上げる、俺もいここが無事でホッと胸を撫で下ろす。

「よお兄弟！なんや楽しんでるやないか！」

「キツヒヒヒヒ、まあなあゾンビを撃てるなんて夢の様な！」

「まあ、夢だったらよかったんやけどな……」

「せやねえ……」こーちゃん

「んんう？なんや？」

「さっきの電話でした話……続きがあるからこいつらカタアつけたら……分かってはるな？」

「……………はい」

こ、こえー…一瞬まなちゃんの周りの空気が凍ったぞ！？何故かゾンビもまなちゃんから後ずさりしてるし……

「いつちゃん！」

だが直ぐに顔を笑顔にして俺に向けて手をふるまなちゃん、癒される……

「一坊！無事やったんやなあ！」

「はい！お陰さまで！冴島さんもお帰りなさい！無事で何よりです！」

「おおきになー！」

お礼を言つて手を振ってる冴島さん、中国の商談が終わったんだ…あれ？早すぎじゃないか？

「……………ま、まなちゃん！兄弟！再開は後にいい！こいつらを片付けるでえ！」

「そうやった、真夏ちゃん！やるで！」

「了解や！」

まなちゃんは巨大なコンセント見たいな銃をゾンビに向けてバチバチツと音が鳴った後、雷撃が放たれる。冴島さんは拳銃を撃つ的確に頭を撃ち抜いて行く。真島さんは相変わらずショットガンをぶ

っ放していた。

「凄い…圧倒的だ！」

「親父い！」

「いいぞー！」

幹部の人達も応援する中、まなちゃん達の戦いは一方的な戦いで終わった。

オマケ・「フルメタルジャケットとホローポイント……どっちで撃たれたいん？」

「はいはいいつちゃん怖かったなーもう大丈夫やでーウチがいるから安心しい……」

「うん……」

ウチとトラちゃんとゴーちゃん、でヒルズの外にいるゾンビを倒してヒルズに入り東城会の幹部の人達に喜ばれながらウチらがあるいているといっちゃん、がウチの前に現れて泣きそうな顔でウチに抱きついてきたんや、少し驚きはったけどいっちゃん、が少し泣いてはったからウチはいっちゃんの背中をポンポン叩いてあやしてるところや。

「外のゾンビはウチらが片付けたからもう安心や、せやからもう大丈夫やで？」

「……うん」

ウチはいっちゃんの頭を撫でて落ち着かせる。
やーん今のいっちゃん、力ワエエなあ。

「一坊も苦勞したんやなあ……」

「せやねえ……」 ナデナデ

そんなウチらの光景を見ている幹部の人達もどこかほんわか、な雰囲気になっっていたんや。

そんな中、ケツを上げて倒れている人が約一名おった。

「……………」 チーン……………」

「お、親父…大丈夫ですか？」

「だ、駄目や…完全に落ちてる」

「こりゃ…復活するのに時間掛るんじゃないかねえか？」

「そりゃそうだろ、だって……」

「ごーちゃんの部下の人達はごーちゃんの状態を声をそろえて言う。」

「……ケツにネギをぶち込まれたらなあ……」「……」

お尻を抑えながら部下の人達は言う、ごーちゃんがいつちゃんを泣かせたお仕置きでウチが服ひん剥いて刺した結果がこれや、ちなみにネギの先にはタバスコを付けてたのは内緒や。

「兄弟……哀れやなあ……」

「確かネギをお尻に刺す治療法があつた様な……」

「六代目、それは嘘ですから……」

ダイちゃんやトラちゃん、あずニャンもそう言いながらお尻を痛そうに擦る。

「いつちゃん…もう平気やから泣きやんで？な？」

「うん……」

ちなみに弾丸で言うならネギにタバスコを塗る方がホローポイント、ネギを奥深く突き刺すんわフルメタルジャケットや。アーマーピアッシングは……分かってるやろ？

十七話や！」「トラの狩りが始まるでえ！」（後書き）

真夏「いっちゃんが風邪ひいたらごーちゃんにやった治療法で治したるね」

一夏「い、いやいい！普通に頼む！」

大吾「あの治療法って為した事があるのか？」

冴島「確か…真夏ちゃんのお父さんに為したとか……」

安住「……ご愁傷様」

真島「ケツが……ケツが……」

作者「真島さん…お悔やみ…申し上げます」

十八話や！」「東城会はホンマにええなあ！」「（前書き）

感想待ってまゝす。

十八話や！「東城会はホンマにええなあ！」

俺は金村興業若頭の城戸武だ。前は若衆だったんだが兄貴がムシヨに入って後また出て来て兄貴が組長に就任、俺が若頭として金村興業を動かしている。俺もムシヨに入っていたんだが何故か脱g出所して神室町にいる。

よくわからないが須藤とまなちゃんのお陰らしい……どうやって俺を出したんだ？

ちなみに兄貴の方は最初は出るのを断つたらしい、スジは通すつて奴だな俺だつて最初は断つたんだぜ？でもまなちゃんが……

『金村興業を守るんは二人しか出来へんで？たけちゃんと新井はんだからこそ金村興業や』
♪

俺はその願いを聞き入れて俺は若頭になった。まなちゃん…俺、頑張るよ……

まあそんな事があつてここにいるんだが今の状況が最優先だ。俺は今まったく動けない状況にある。

「……………（なんなんだよあの赤い目をしたゾンビは！？それに人食つてたしよ…………）」

と言う状況に陥っている、俺は興業の仕事が終わって神室町を歩いていたんだが突然周りから悲鳴が上がって人でごった返している神室町がさらに逃げる人で埋め尽くされて俺はもみくちゃにされたんだ。

そして人がいなくなつた神室町になつたいや……”人ならざる者”なら残っていた……

（何時までもドラムカンの中に隠れていられねえ……どうすれば……）

俺はすぐに隠られる物に隠れ、状況を把握して逃げだそうと試みたがまわりにいるゾンビ？達が一向に消えねえから出るに出れなくなっている。くそ……早くどこか行ってくれ！

（なんで神室町にゾンビがいるんだよ、こんなのまなちゃんが見せてくれたゾンビ映画で沢山だ！）

そう愚痴って今の状況を打破すべく頭を使う、だがどうにもこんな状況がくるとは思わなくてまるで考えがつかない。ヤクザやチンピラ相手なら手立てはあるんだがこいつらは人間じゃねえ人を襲う可笑しな連中だ、さっき見たがあいつらに掴まれた人間は暴れて振りほどこうとして全然振りほどけなかったところを見ると奴らは相当の腕力があるらしい、その掴まれた奴は首を噛まれて奴らの仲間入りになっちまった。

（くそう……こんな時まなちゃんがいれば！）

癒され……じゃなくて何か思いつくんだが、てか五歳児に頼る俺って

……

と、とにかく！ここから出て安全な所にいかねえと！

俺は意を決してドラムカンから出ようとしたが運悪く足が滑ってドラムカンの中に逆戻りして尻を打ちつけ角に鼻を強打したのち悶絶した。

「いってえええええっ！！！！！」

声を上げて俺は痛みに耐える、その声に気づいたのか数人のゾンビがこちらにやってきた。

不味い！今の声を聞かれて寄ってきやがった！？早く逃げねえと奴らの仲間入りしちまう！

急いでドラムカンの中から出ようとしたが、アホか俺は……また足を滑らせてドラム缶に逆戻りしまったケツを打ちつけその拍子にドラムカンが倒れて目の前にゾンビ達があ” - あ” - 言いながら近づいてくる。

「よ、よるなショッカー！ぶっ飛ばすぞ！」

奴らにそう言っても聞かず、俺に近付き血だらけの口を大きく開けて迫ってくる、お、俺を食っても美味しく無いぞ！！てそんな事言ってる場合じゃない！どうするよ俺！？絶体絶命だぞ！？俺はドラムカンの中でもがいているとギシギシ音を立てていたドラムカンが動き出した。

ゴロツ

「へ？」

ゴロゴロツッ！

「ちょ！っわ！待てって！！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロツッ……！！

これなら今の神室町から脱出できる、俺はそう思い未だに転がるドラムカンの中で歓喜の声を上げる。

「ははははははっ！こいつは良い！これなら脱出も出来「ガンッ！」「ぶべっ！？」

俺が喜んでいるとドラムカンがあるう事が壁にぶつかり俺はタイミング良く顔を壁に強打して動けないドラムカンの中で鼻血を垂らしながらまた悶絶する。いつてえ……ちくしょう一緒に回るから前が一瞬しか見えねえ…早くUターンしてここあらオサラバしねえと、そう言つて俺は体を揺らしてドラムカンを動かして移動するだが目の前に待ち構えていたのかゾンビの群れがやって来た。

「あ”あ”あ”……」

「うあ”あ”あ”ゝ…」

「あ”-……」

「…………へっ上等！」

今の俺とドラムカンに怖い物はねえ！行くぞ！！

「おらおらおらぁ！ドラムカンのお通りだ！！」

ドカドカドカドカドカッ！

「あ”-……」

「い
” - - - -」

「う
” - - - -」

「え
” | - - - -」

「お
” - - - -」

俺達の突進でゾンビ達はボウリングのピン見たいに跳ね飛ばされて行った。

何人こようが俺達の敵じゃねえ！どんどんこいやー！

ところ変わってここは神室町ヒルズ……そこで東城会四代目堂島大悟と安住、そして……なんとか復活した真島達が話していた。

「真島さん……今更だがアンタ、今まで何やってたんです？」

「あゝ尻がまだ……ん？なんや…また、お前かいな……安住」

「あんた警備担当だろうが！何人死んだと思ってるんだ」

安住が怒鳴りながら真島に問い詰める、だが真島はどこ吹く風で。

「あ？わしのせい、言うんか？ドアホ、そら、お門違いやで」

「じゃ誰のせいだって言うんだ？あ？」

「そら、お前、ゾンビを送り込んで来た奴らやろ」

「てめえ……おちよくってんのか！」

安住が真島に掴みかかろうとしたが真夏と六代目が仲裁に入る。

「よせ……そんな事してる場合か」

「あずニヤン落ち着いてなあ」

「し、しかし……」

「あ、安住さん、俺たちもここに来る途中ゾンビ達の襲撃にあって……」

「な、なに！？」

一夏はここまでの経緯を話す、それを聞いた安住はどうやらそつち

もそつちで大変だった事を知った。
安住はどこか腑に落ちない顔をする。

「ま、そう言うこっちゃ」

「そんな大事な事、どうしてあの時の電話で言わなかったんだ!？」

「あずニャン落ち着いて…今はごーちゃんといっちゃんの無事を喜んでほしいんや…ダメ？」

真夏は目をウルウルさせ安住を見る、安住はその目に耐えられないのか目をそらしながら言う。

「わ、わかった、わかったからそんな目で見ないでくれ……」

「おおきに♪あずにゃん!」

「だからあずニャンは止めてくれ……」

「……いろんな意味で、ご無事で何よりでした、真島さん」

「……………六代目もや」

真島は尻を擦りながら言う、安住と六代目はあの時の光景を思い出したのかまた同じように尻をさすっていた。

「この一見で古参の幹部も半数近くやられました。まなちゃんのお陰で生き残りは大幅に増えましたが、今の東城会……いや、神室町その物が崩壊寸前です」

「見たいやなあ……」

「それと、一つ気になる話が……」

「ん？」

「神室町中にある東城会系の組事務所、今回の襲撃はそこが発端になったようなんです」

「そっぴゃあ……ウチが初めてゾンビにおうた時も、確かあそこの二階って組事務所やったなあ……」

驚いて気づかなかったわあと言ってうんうんと首を振る真夏、六代目は話を続ける。

「つまり……誰かが意図的に東城会を狙ったと」

「ああ、さっき二階堂とか言う小僧が挨拶にしてきたわ」

「俺も会いました」

真島と一夏が二階堂と言う男の話を聞いて安住は言う。

「決まりだ。今回の事件の首謀者は二階堂……。それにもしかしたら、誰かが奴のバックについてる可能性が高い……」

「しかし……狙いがウチとして、こいつはもう極道の抗争なんかじゃない。近江がここまでやるとは……」

「そんな悠長な事言っただけでしょーが!」

安住が大きな声で言う。その言葉に皆が安住へと視線を集中する。

「すぐに報復の準備をするんです！」

「あずニヤン……」

「安住さん……」

「極道が舐められたら、それこそ……！」

安住が喋っている途中で間島が安住の顎を掴み、喋れなくする。

「あがぁ！？」

「よう動く舌やなあ……どないな作りになっとんねん？、ああ？」

「あ……あが！……あぐあぁ！」

安住は必死に離そうとするが真島の腕力に勝てずされつがままになつていた。

「もうすぐ夜やで……次のパーティーの話はまだ早すぎとちゃうか？」

「………せやな……あずニヤン、報復とか簡単に言うけどな……これはもう極道同士の抗争なんて簡単な話とちゃうねんで？これは……神室町全体を巻き込んだ、一大バイオテロや！」

真夏がそう言った後、真島は安住の顎から手を離して解放し店の窓際へと移動する。

「おう、お前ら！」

真島が大きな声でお客や避難してきた人達に聞こえる様に叫ぶ、

「死にとうなかったら店の棚を窓に寄せるんや！女子供は奥！食いもんと水は数揃えて配給制や！」

「あ！お年寄りが一番安全な場所に移ってや！元気な人は歩けん人を助けて上げて！」

真夏も指示をするだが避難してきた人はボーと立っているだけで何もしない。

「あ、あれ？」

「……………さつさと動けやボケ！」

「……………は、はい！……………」

真島に怒鳴られ避難してきた人達が慌ただしく動く女性と子供は奥に、男達は水と食料を運んでくる。

「さすがやな、ごーちゃん」

「ハッ！当たり前や」

真島はそう言つて窓の外へと視線を向ける、外はもう夕方になっていた。

「ウチはちょっとダイちゃんと話をしてくるやさかい、後は任せただ〜」

「おう」

そう言つて真島のを離れ六代目の方へ走る真夏、この後真島は真夏意外の女の子と話して調子を狂わせらるのはまた別の話……

視点・「郷田真夏」

「…………ハッ!? いまさらやけど今たけちゃんが無双してるビジョンが!」

「ううん……まなちゃん?」

「ああ! ゴメンないっちゃん、起こしてもうた?」

「ううん起きてたから平気だよ」

「さよか、ならもう夜やし寝ててや」

「まなちゃんは？」

「ウチはいつちゃんが寝たら寝るから、早よ寝なさい」

「うん……」

いつちゃんはまた瞳を閉じてウチの膝枕で寝る、今日はいつちゃんにかなり負担を掛けてもうたしなあ……まあ五才のいつちゃんが経験する事やないんやけど……ウチらはヒルズに立てこもってから数時間、外は夜でいろいろダイちゃんやあずニヤンのお願い聞いたりごーちゃんの猛烈な謝罪を聞いたりとちよつちウチも疲れてもうたしなあ中に入ったゾンビを駆逐する為にウチといつちゃんがカップル役をやつてゾンビをおびき寄せたりして大変やったわ……せやけどいつちゃんウチとカップル役をやつてくれとダイちゃんに頼まれた時モロむつちゃ顔を赤くしてはったけど……どうかしたんかな？もしかして嫌やつたんかなあ……

「まあ……ゾンビをおびき寄せる餌になんて好き好んでやる人なんておらんわな……」

ウチは寝ているいつちゃんの頭を撫でて寝付かせる、ホンマ……お疲れ様や、いつちゃん……

撫でているといつちゃんから寝息が聞こえて来た。どうやらいつちゃんも寝てくれはった様や。

ほならウチもそろそろ寝るとしましょか、こことん所ゾンビ相手に立ちまわって疲れててもうたしお客や避難してきた人達のアフターケアに急がしはったからもう眠くて眠くて……

「ふああ…むにゆう…お休みいっちゃん…」

そう言つてウチはいっちゃんの耳に騒音防止様の耳せんを入れて膝枕したまま眠りに着いた、明日からまた忙しくなるでえ……とそうは問屋が卸さへんのが世界の残酷なとこやなあ…

「な、なんだありや!？」

「!」

「世界は何時やってこんな筈じゃ無い事ばかりや……」

外から車のクラクションが鳴る、ウチはいっちゃんの頭をそつと膝からどけて起こさん様に立ち上がり外を見る。外にはゾンビをふっ飛ばしながら二台のトラックがヒルズめがけて突っ込んでくる様子が覗えたんやてちょ!!あないなスピードで突っ込んだらヒルズのシャッターが!!

ドガーーーーンッ!!!!!!

トラック二台はヒルズのシャッターに衝突、そしてトラックの荷台から東城会の極道と思われる人達が回りに集まって来たゾンビ達に一斉射撃を食らわせる。

「会長!ご無事で!？」

「もう大丈夫です!!」

トラックに乗って来た極道達はそう言っではるが…アカン！射撃が下手すぎや！

「なんじゃこいつら！？」

「死ねえ！！」

「バカな……これじゃ奴らが入って来ちまう」

あずにゃんがそう言っで深刻そうに言う、トラックの衝撃でひしゃげシャッターに大穴があいてゾンビ達が入ってくる。

「おい不味いぞ！入って来ちまってる！」

「……………仕事増やしてどうすんねん」

「真島さん……………！」

「クククツ…やっぱ東城会はアホばかりや……………大好きやで」

ごーちゃんはホンマに荒行大好きっ子やなあ…まあそこがごーちゃんらしいんやけど、

「同感です」ジャキッ！

「せやな」

ま！ウチらもそうなんやけど！ダイちゃんは散弾銃片手に一階へと下りて行った、ウチも続いて拳銃を持って行く。

「ん？真夏ちゃんあれはどうしたんや？」

「あれって？」

「ほら…なんやったかなあ、あのビリビリやのうて…スタンガン見たいな奴」

「ああそれは今充電中で使えのや、せやからこれっこうてやらなあアカン。まあこれだけでもやれへん事は無いんやけどな」

「さよか」

ウチはごーちゃんと話終えて下に行く、クツ！もうしたは占領されてるんか！！しゃあない…的確にドたま撃ち抜いたるわ！

「悪いんやけどもういっぺん死んどけ！！」

ヒルズでの第二回攻防戦が始まりよった……

オマケ・天啓・「サンドコンボの極み」
テンケイ

ウチ（今は十五歳）は神室町を歩いているとバイクに乗って騒いでいるカップルを見つける。

「ん？あれは……」

「マサ！早く行こうよ！」

「おう！飛ばして行くぜ！」

バイクを唸らせ、走ろうとした矢先、

ツルッ

「あ」

運転手の男の指がバイクのブレーキから滑らせ、バイクは急発進する。

「のおおおおおっ！！??？」

「きゃあああああっ！！??？」

そしてバイクは前輪を上げて持ち上がり、二人とバイクは一回転し

た後……

男は地面と後ろにしがみ付いていたヘルメットの女性に挟まれる様にノーヘルの男の頭部に直撃し……

「ガハッ！」

男は落ちた。

「……………！、ヒラメイカ！」

真夏は木のまな板を取り出し、そこに、

「フンッ！…！」

ドンッ！と粘土を乗せてこねる。

「フッ！ホッ！ヤアッ！」

粘土を捏ねてどんどん形を作り上げる。そして！

『天啓が……………！』

ラブシャインの粘土が出来上がった。

「……………むうつアカン」

ポイツとその粘土模型を投げ捨てる真夏、天啓失敗！

テイク2

「閃いた！」

またまな板と粘土を取り出してこねあげる真夏、

「……………我、天啓を得るや！」

そう言つて天高く出来あがつた技の粘土模型を掲げる真夏、思いついた天啓は……………

相手に突撃し、頭を掴んで膝打ちをした後にそのまま後ろに落とし地面へと相手の頭を膝で叩きつけるサンドコンボの極みが生まれた。

「……………あれ？ウチは誰にこの技を使えばええんや？」

神室町のアイドルになっている真夏に、チンピラや極道達は喧嘩売りにくるどころか普通にアイドル目当てで近づいてくるだけであり喧嘩に発展しないのである。

「意味無いやん！！！」

天啓、ある意味失敗！！

十八話や！「東城会はホンマにええなあ！」（後書き）

真夏「アカン…ウチ天啓得ても誰に使えば……」

一夏「そ、そのうち見つかるよ（願わくば、一生出てこないでくれ！）」

真夏「実際やつて見たいんやけどなあ……」チラッと一夏を見る

一夏「へ！？お、俺は無理だよ！？」

真夏「ええ～……ケチ」

一夏「ケチの問題じゃないよ……」

作者「なんて言うか…皆さんの技ってえげつない物ばかりですよね…なんででしょう？」

十九話「こーちゃんばかりズルイ！」（前書き）

真夏「ゆーちゃんの小説まだかなあ…早よ見たいわあ…」

一夏「そう直ぐにアイディアが出る訳無いだろ？」

DD「作者の最新速度が異常なだけだよ」

二階堂「せやな」

作者「ここぞって時に出ますね…お二人さん」

十九話「こーちゃんばっかりズルイ！」

「どうなつてんじゃこりゃあ？」

わしは真夏ちゃんに頼まれて近くのポップ店へと足りない物を調達しに行つてたんやけど……

「なんで真夏ちゃんと兄弟が戦つてんねん？」

「おー！トラちゃんお帰り！」

「よお兄弟！もうパーティーは始まつてるでえ！」

パーティーつて……んな呑気な事言つとる場合か！
わしは両手に持ったポップ店のビニール袋を捨てて拳銃（六代目から貸して貰ったんや）を取り出し兄弟達に加勢する。

「真夏ちゃん、ヒルズにいる人達は無事なんか？」

「平気や、下の奴らはウチが片付けたしいっちゃんも今頃寝てるはずや後はこいつらの注意を引いてバリケード作りの形成の時間を稼ぐだけや」

「さよか」

ほんなら……こいつらを成仏させなアカンな、
わしはまた人殺さなアカンのか……

その時不意に手に柔らかな感触が伝わりわしは下を向くと、

「真夏ちゃん？」

「トラちゃん平気か？」

真夏ちゃんがわしの手を握って心配そうな顔を浮かべる、

……ふう、五歳児に心配されるとは、わしも年を取ったかのお。

「平気や真夏ちゃん」

「でも……」

「今回は多くの命が掛つとる……せやから、わしら皆を守らなアカン」

「トラちゃん……」

そや、今わしは命を守る為に銃を握つとる。六代目、幹部達、兄弟、そして真夏ちゃん、

「迷わへんよ、笹井の親父から仁義と覚悟をもらつてゐるからな」

「……さよか、なら……派手に行くでえ!!」

真夏ちゃんは掛け出し近くにゐるゾンビを確実に倒して行く、真夏ちゃんってホンマに五歳児なん？

と言つかなんでこないにいんねん？まさか奴らはワシらの匂いや音を感じてこつちに來たんやろか……

「アカン……考えても答えが出えへん」

今は考えてる暇はなさそうやな…とにかくヒルズの周りのゾンビ共を蹴散らさなあ。

わしは再度拳銃を奴らに向けて撃つ、二十六年前の事件を思い出しそつになりそうやけど…今のわしにはへでもあらへん！

「守るもんが多すぎるからのう！」

「うひゃひゃひゃひゃ！ええのう、兄弟と背中合わせて戦えるなんて夢の様や！！」

わしは兄弟と背中を合わせゾンビ達を一掃する。今度は後悔の残らない戦いにする！絶対や！！

視点・「織斑千冬」

「遅い……」

一夏はいつたい何をやっているのだ！姉を心配させて！真夏のところに行くと言ったきり帰ってこない。

私は心配になって電話をかけてみたが一向に繋がらず、真夏にも電話はして見たが圏外だった。

まったく、この頃の子供はキャバクラやホストクラブに出入りしすぎだ！

だが私が怒っても一夏が帰ってる訳でも無くとりあえず真夏の父親である龍司さんに携帯を掛けた。

「……………もしもし、織斑です」

『千冬嬢ちゃんか』

うむ、龍司さんには繋がった様だ。よかった……私は一夏がそっちに行つて無いかを聞く、

「龍司さん、一夏がそっちに行つてませんか？」

『なんや帰つとらんのか？』

「はい、そちらで遊んでいるかと思ひまして……………」

『こつちには来てへんなあ……わしも真夏を探しに神室町へ来とるんやけど……なんや警察の検問やとかで行けへんのや』

「検問？」

神室町で何かあったと言う事が……また真夏と一緒に厄事に巻き込まれなきゃいいが……

『よう分からんけど、神室町にゾンビが現れたっちゅう話や』

「ぞ、ゾンビ？」

『せや、ゾンビや』

龍司さん、からかっているのだろうか？……いやあの人がからかうとか想像出来ない、というよりかしないと思う。それじゃあ本当なのだろうか？まああのウサビツチならゾンビを作れそうだが……

（アイツがそんな事はしない……一体誰がゾンビを？」

『どうかしたんか？嬢ちゃん』

「ああいえ、なんでもありません……それで、検問で神室町に行けないと？」

『そうなんや、しかたあらへんからコイツっこう思つてんのやけど……』

電話越しからキューーンとかガシャガシャと何かが変形する音がする……まさか！！

「り、龍司さん！いくらなんでもそれは……」

『でもものう……真夏や一坊が向こうにいるかもしれへんし……』

「わ、私も向かいますからそこで待つていただけますか？」

『嬢ちゃんもくるんか？』

「はい、一夏が心配ですので」

『わかったで待つとるわ』

「お願いします」

そう言つて私は携帯を切り、急いで仕度をする。とりあえず木刀と
かを持つていこう後両親に――

「……………いやこの頃歸つて来てないから言つ必要はないか」

私と一夏の両親は家にはあまり歸つてこない、音信不通も珍しくは
無いのだ。

「頼りになるのは私だけか……………」

大事な時に両親は一体何を！

だが私は、この後両親が二度と歸つてこないとは思ひもしなかった
……

「うつん…あれ？まなちゃん」

寝ていた一夏は起き上がり、周りを見渡すと避難してきた人は皆窓際へと移動していた。

「？、何かあったのか？」

一夏は起き上がり皆が見ている物を確認する為、窓の外を見て見ると……」

ピンッ！ポイツ……ドゴオオオオンッ！！！！

「んな！？」

真夏と真島、そしていつの間にか帰って来た冴島がゾンビ達と戦っていた。

ちなみに今の手榴弾を投げたのは真夏である。

「ど、どういう事だ？どうしてまなちゃん達が！？」

一夏は混乱していた、少したってやっと正気を取り戻しライフルを担ぎ急いで一階へと下りる。

「まなちゃんどうして起こしてくれなかったんだ！」

走りながらも愚痴る一夏、そして一階に着き出口へと向かうと東城会の幹部らが急いでバリケードを築きあげていた。

「大吾さん！」

「！、一夏君、起きたのか」

「はい、これはいったい？」

「悪いね…仲間がはしゃぎすぎちゃって」

「……あゝ、納得です」

一夏は苦笑いする、六代目と話していると幹部の一人が叫ぶ、

「六代目！バリケードが完成しました！」

「御苦労！皆はバリケードを守ってくれ、私はまなちゃん達の所に行く」

「で、でも！ゾンビの数が多すぎて……」

「心配するな、生きて帰る」

「六代目……お気をつけて！」

そう言って幹部は頭を下げ部下を連れてバリケードの道を開ける。

「大吾さん、お供します！」

「一夏君？」

「まなちゃん達が戦ってるんです！一人だけ何もしないのは嫌なんです！」

「……俺の側から離れるなよ？」

「はい！」

一夏は六代目と共にバリケードを越え、戦場へと向かった……

視点・「真島吾朗」

「クソが！」

わしは噛んできた老ゾンビの頭を殴り吹き飛ばす、クソ！噛まれて

しもうた！

「どないしたごーちゃん！？」

「！、な、なんでもあらへん！気にすんなや！」

「で、でも……」

「！、真夏ちゃん後ろや！！」

「へ！？」

真夏ちゃんが振り向いた時には遅かった、ゾンビはもう真夏の目と鼻の先まで飛び込んでいてわしのシヨットガンじゃ真夏ちゃんまで吹き飛ばしてまう、とその時じゃった。

ズガンッ！！

銃声が響き、真夏ちゃんの目と鼻の先にいたゾンビは頭を撃ち抜かれて吹き飛ばされおった。こいつは……

「兄弟後ろじゃ！！」

「！？」

わしが考えているとわしの後ろからも飛びかかってくるゾンビが現れるじゃがその時も誰かがゾンビを撃って危機は回避されたんじゃ、

「真島さん、三人でおいしいとこ持っていく気で？」

「まなちゃん平気！？」

そう言つてこちらに来たのは六代目と一坊やった、へっ！このぐらい朝飯前や！いや今は夜やから夜飯前か？

「ハッ！なんや今頃気づいたたんかい？」

六代目はわしの背中に回りバリケードの形成は完了した言つた、ほならこれぐらいでお開きにしようか……

「六代目死なわけにはいかへんしなあ…真夏ちゃん！兄弟！六代目と一坊を連れて離脱するでえ！」

「「おう！」」

「！、あれつて……」

一坊が何かに気づく、それはゾンビの奥のマンホールからライトの光をわしらに当てて何かを合図している様やった。

「真島さん」

「ああ…野郎ども着いてきい！」

わしは六代目と兄弟、そして真夏ちゃんと一坊を連れて光を当ててくるマンホールの男の元に走るが……

「な、なんだコイツ！？」

「い、今見えなくなつたで!？」

「光の屈折を利用して消えてる? いや反射を利用してはるのかな？」

「なんや消えたり出てきたりする奴がわしらの前に出て来よつたわ、
なんやアレって真夏ちゃんに貸してもらうたゲームの化けモンに似
とるなあ。確か…リッコーとか言つたか? なんや女の名前見たいな
名前やな、まあええわおもしろい奴がまあた出寄つたんやから！」

「ええでええでえ、ちょうど食い足りんかつたんや」

「俺もそう思つたてたところですよ」

「上に同じくや」

「わしもや」

「もう勘弁して……」

「一坊は根性が無いのう、まあしゃあないか…さてコイツの相手は……」

「六代目、兄弟、真夏ちゃん、一坊! ザコどもは任せたでえ!」

「真島さん、また良いとこどりだ!」

「ホンマずりいわ!」

「貸し一つやで!」

「またこんな人数を相手に!？」

わしはザコども六代目達に押し付けて化けモンを対峙する、ガツ力
りさせんでくれや?行くで!

オマケ・「使いたくないわあ…この極み…の巻!」

「ん?あれは……」

ウチの向こうにヤクザがひ弱そうな青年を追い詰めていた。

「おいこら…ぶつかつといて詫びも無しかああ!？」

「ひい!?!す、すいません!！」

青年は必至にヤクザに謝まತ್ತるが、ヤクザは許そうとはせず青年
を壁際で挟むあないに謝つとるのになんて血も涙も無いやつちゃ!

「どうやら痛め付けねえと反省しねえようだなあ……」

「ご、ごめんなさい！許してくださいい！！」

そしてヤクザが殴りかかる。

「ひ、ヒイイイイツ！！??」

青年は頭を抱えて伏せた後ヤクザの拳は空を切りそのまま拳を壁に打ち付けてるう。

「イツテエツ！？」

そして痛がるヤクザに急にヤクザの悲鳴が聞こえた青年は顔を上げて驚いくとちょうどその頭が……察してなあ……まあヤクザの息子に当たったんよお、

「ハウツ！？」

ヤクザはその痛さに飛び上がり上に設置してあった店の看板に……

「ひでぶっ！！」

頭をぶつけ、気を失った。

「……………！、閃いた！」

またウチはまな板を取り出しそこに粘土を置いて捏ねて造形する。

「んしょっ…んしょっ……」

そしてどんどん形作られはった。

『天啓が……来た!』

そして出来あがった模型を片手に持ち天高く掲げ満足する、うゝんええ感じや!

ウチが編み出した天啓……それは相手をしかけさせ来た所で腹に一発与えた後に……息子を掴みそのまま持ち上げて天井か上に設置されとる看板へと叩き上げる天上頭突きの極み、我、天啓を得るや!

「……………ウチい…掴めるんかなあ……」

お、おとんのは見た事あるんやけど…む、難しいで……

「あんま使いたく無いわあ……」

自分で作つといてなんやけど……

オマケ・「真夏のオリジナル古技流」

「死にさせええ!!!!!!」

レディースの一人が真夏に木刀を上から下へと振り下げ真夏へと切りかかる、そして真夏は二つの警棒でそれ下へと受け流し木刀を地面へと突き刺せた後その木刀に乗りレディースの後ろへ飛ぶと、

「はああっ!!」

真夏は飛ぶ力を利用し警棒で身を回転させながら連続打ちをする。

「グハアッ！！??」

レディースの女は回転の乗った連続打撃で背中を強打され地面へと沈む、

これぞ相手の攻撃を防ぎ後ろに飛び回り回転切りを放つ技、自速天回切り！

十九話「ごーちゃんばかりズルイ！」（後書き）

真夏「ごーちゃんはホンマに良い所取りやなあ…お仕置きや必要か
もしれへん」

真島「！！？？」

大吾「あ、あの真島さんが！？」

冴島「ごつつ震えとる！？（兄弟…そないに怖いんか…）」

千冬「私は龍司さんと行動するのか？」

作者「どうでしょう？ストーリーの進行状無理かん、あ、待って千
冬さん！古技流は止めて「ズバッ！…！」……」

龍司「死によったな…アレは…」

二十話や！」「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやろ？」（前書き）

遅くなりました。すんません！

二十話や！」「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやる？」

「全然減らへんなあ…神室町に入ってこんなんおったっけ？」

そう言いながら大吾から受け取ったグレネードランチャー（火炎弾）を再装填し、ゾンビが密集している辺りに発射してゾンビの大軍を焼き払う真夏と。

「昨日は開催セレモニーとかでお客や見学者が多かったからな、他の町から来た人達とかが多いんだろう」

「

真夏に話しかけながらワンショットでゾンビをツーカーする一夏、

「食らええ！！」

冴島は雄叫びを上げながらバイクを振り回してゾンビを蹴散らして行き、

「こんな大事な日に大事件が起こるなんて！！」

散弾銃をぶちまけながら愚痴る堂島、この四人は真島が化物アラハバキを倒すまでの時間稼ぎをしていた。

「うゝんもうそろそろごーちゃんが片付け終わってるはずなんやけど……」

真夏はチラッと苦戦しているであろう真島が戦っているだろう場所に目を移す、

「キツヒビヒビヒッ！！また消えたで！ホンマおもろいやつちや！！」

案外、いや逆にイキイキと化物と戦っていた、真夏は羨ましそうに溜息をつく。

「あつちに入りたかったわあ……」

「あんなのと戦うなんて洒落にならないからな？まなちゃん」

「とりあえずこつちを片付けないと……」

「死にさせええ！！！！」

冴島の投げたバイクがゾンビ共を蹴散らし、その衝撃でバイクに引火して大爆発を起こす。

「豪快やなあトラちゃん」

「ホントだな、てどんどん増えて無ないか！？」

「外のシャッターが壊れたままなんだ。だからいくら倒しても湧いてくるってことか」

「そうらしいなあ……」「ギシャアアアアアアアアアッ！！！！ん？」

真夏は甲高い音を聞いて真島が戦っている方へと視線を向けると…

「なんやもう終わりかいな… あっけないやつちゃ」

真島が化物を倒し、つまんなそうにして倒れている化物を見ていた。大吾もそれに気づき真夏達にさっきマンホールからライトを照らしていた人物の方へと向かうよう指示する。

「皆！真島さんが奴を倒した！向かうぞ！！」

「はい！」

「はいなー！トラちゃん終わりやでー！」

「おう！」

大吾は皆を連れてマンホールへと向かう途中真島と合流してマンホールへと向かうのだが……

「グ、グルルルル……」

「！？、コイツまだ生きて……」

一夏が気づいてライフルを向けるがそれより先に真島に飛びかかるうとするアラハバキが真島に強襲した。

「死んだふりかいな！」

「兄弟！！」

「真島さん」

皆が銃を向けるが真島とアラハバキの距離はもうほとんど無く、真島はアラハバキに銃口を向けるが間に合わない。その時……

「させへんで!!」

あるうことが真夏がアラハバキの背中に飛びかかりそれに驚いたアラハバキは急停止した後背中についついている真夏を体をゆすって振り落とそうとする。

「まなちゃん!!」

「なんちゅう無茶を!!」

「まなちゃん!!」

「くそ!わしの銃じゃ真夏ちゃんも撃つてまう!!」

真夏は必死に離さんし、アラハバキは飛び跳ねてヒルズの外へと向かってしまう。

一夏達は撃てないままアラハバキと真夏が外に出て行くのを黙って見ているしかなかった。

「まなちゃん!!」

一夏は追いかけようとするが真島がそれと止め、一夏を腰で抱きかえながらマンホールへと向かう。

「離してください!!」

「ドアホ!今の状況じゃあわしらも危ないんじゃない!!」

「この人数を相手に戦えない！一旦引かなくては！」

「でも！！」

「一坊！真夏ちゃんならまだ生きとる！今はここから逃げるんだ！」

そう言つて大吾達は一夏をおぶつてマンホールの穴の中に入り難を逃れた、一夏は真夏の名前をアラハバキと外に飛び出した空へと呼び続けた…………

視点・「郷田真夏」

「ちょ！？これきつい！！」

ウチはごーちゃんを守る為にアラハバキに飛びかかり守つたはええんやけど今は化物でロデオをしているところや。

「うお！ちょ！暴れ！ん！なあ！！」

背中に乗っとるウチを振りおとそうとする化物にウチは沸々といらつく。

「ああもう！！大人しくせい！！」クルクルチャキツ！

ウチは腰からバタフライナイフを出して化物の頭めがけて……

「チェストローイ！！」

サクッ

「！？、ギシャアアアアアアアアアッ！！！！」

化物のドたまにナイフを突き立て化物を苦しむ、どや！ゲイちゃんに教えてもろうたナイフ裁きを！

そして化物は前のめりに倒れ、ウチは投げ出される様に地面を転がる。

「プギヤツ！？………いつつう……」

うゝ…膝擦り剥いてもうた…もう暴れん坊は將軍だけで結構や！ウチは立ち上がり化物が息絶えた確認した後にナイフを抜いて腰にしまう。

「ヒルズから出てもうたなあ…今戻っても皆おらへんやろうし、どないしよう？」

ウチはとりあえず化物が七福パークまで来てもうたからこのまま隔離エリアから出る事にした。

「ついてないでえ…ホンマ」

そう言ってもしかたあらへんけど、ウチは隔離エリアから出て行つた。

「はあ…外は平和やなあ…さて、ホンマにどないしよう」

ヒルズの戻っても中に立てこもってる人しかおらへんし、戻ろう思うてもあの数のゾンビを相手にするんわきつついで……

「……そや！さっきマンホールから顔を出していた人って賽の河原のホームレスの人やん！」

それやったら確かいつちゃんとかよく昼間遊ぶ児童公園から行けるはずや！

ウチは直ぐに目的地に向かう為、走り出す。

「確か合言葉いらへん言うてたなサイのおっちゃん」

なんでウチだけいらへんのやろ？もしかして子供だから覚えられへん思つたんかな……

（むう…なんや子供扱いされた気分や…）

ま、ウチはまだ子供なんやけどな！

ウチは千両通り北から泰平通り東に行き、その後ピンク通り北へ進

んで七福通り東を抜ける。

「空は真っ暗やなあ…早よいかな!」

七福通り西に辿りついたウチは児童公園へ足を運ぶ、

「このマンホールやったな……」

ウチは公園にあるマンホールへ近づきノックする。
少したってからマンホールから声が聞こえた。

「誰だ?」

「ウチやウチ、真夏やで」

「ん?まなちゃんか……ちょっと待ってろ」

そう言つてマンホールの蓋が開けられ、中からホームレスの男の人が出て来た。

「福山さんか、中に入ってええか?」

「ああいいぞ旦那もまなちゃんを心配してたぜ?」

「心配かけてえろつすんませんなあ……」

「いいってほら、早く入った入った」

「お邪魔しまゝす」

ウチは中に手招きをされ中に入り、蓋を閉めた。
賽の河原へ行くのは久しぶりやなあ、ディーラーやったんは何時ごろやる？

視点・「織斑一夏」

俺は大吾さん達に連れられここ賽の河原に着いた、道の途中でかなりのゾンビ達がいんだけど何とか切り抜けてここまで辿りついた。だけど俺は……

「まなちゃん……………」

「一夏君……………」

「一坊……………」

「……………」

冴島さんと大吾さんが床で頂垂れている俺を元気づけようとしてくれているけど、俺はまなちゃんを置いて逃げてしまった事を酷く悔んでいた。

「おい、一坊何時までもクヨクヨせんとらんとしゃきつとせなあ」

「でも……」

「真島さん、一夏君はまだ子供です……」

「兄弟……一坊にはまだシヨッキングな出来事やったんや、そないに急がんでもええんやないか？」

「せやけどなあ……」

「……いかなきゃ」

俺は立てかけてあったライフルを手に取り立ち上がる。

「一夏君？」

「一坊？」

「どないしたんや？」

「……まなちゃんを迎えに行きます」

俺は歩きだし、来た道に戻る。

「い、一坊！？向かえにつて、アホか！一人で行く気か！？」

「はい」

「無茶や！」

「一夏君！止めるんだ！」

「だからつてここで悔んでも無意味です…それに」

「それに？」

「まなちゃんを守るつて約束したんです…！」

「一夏君………冴島さん」

「な、なんですか？」

「一夏君の護衛を…お願いします」

「六代目………」

「大吾さん？」

大吾さんはふううと息を吐き仕方ないと言う表情で俺に言う。

「もし一夏君にもしもの事があつたらまなちゃんに顔向けできないからね………」

「大吾さん………」

「フッ…せやな」

「そやなあ…」

皆もそれもそうだなって顔をしている、そして冴島さんが俺に近付いてきて。

「ほな、いこか？一坊」

「……はい！」

俺と冴島さんは歩き出す、まなちゃんを救う為に……

「行きおつたな……」

「ええ…まったく、強い子です。一夏君は……」

真島と大吾は一夏達の後ろ姿を見ながら感想を吹く、

「せやなあ…もう見えへんところまで走って行ってもうたわ…」

「そうですねえ…」

「せやなあ……」

「「……………んう？」」

真島と大吾は声が聞こえた後ろ下を見ると…………

「……………な、なんでここにおんねん……」

「なんでって…ここに皆いるう思うてきたんやけど？」

「ぶ、無事だったのかい？」

「当たり前や、ウチが死ぬう思うたんか？」

真夏はさも当然と言うような感じでその場にいた、大吾と真島はこればかりは驚く。

「……………そうだね」

「全然想像も出来へんわ……」

あの化物と一緒に外に飛び出したのに平気な顔してそこにいるのだ

からもう異常である。

そして大吾が急に思いだした様に声を出す。

「そ、そうだ！―夏君！―夏君達を呼び戻さないと！」

「せ、せやけど、もう外の入り口近くまで来てる頃やで？」

「？、なんやなんか買い物に行つたんやないの？」

「君を向かえにいつたんだよ――！」

「お前を迎えにいつたんや――！」

と突っ込みを入れる真島と大吾であつた……

オマケ・「その頃城戸ちゃんは……」

「気持ちワリイ……」

城戸はドラムカンで無双し続けること早三十分……冴島とやり合った男でも高速回転し続けるドラムカンでも限界があったようだ。

「クソッ……もういいっての！ドラムカンの凄さは分かったから早く抜けてくれ！」

そう言つてモゾモゾ動くか全然抜ける気配が無い事にイラつき、暴れても見るもビクともしない。

「この！抜ける！抜けてくれ！抜けるやこら！」

さらに体を揺さぶるが抜けない、どうしようかと考えていると声を掛けられる。

「何してるんだ？お前……」

「ああ？……て、兄貴！？」

「おつ」

そこには金村興業の組長、新井がいた。

「お前町中で何ドラムカンに入つて遊んでるんだ？」

「え、え〜と……ゾンビがいて……」

「ゾンビ？何処にいるんだ……」

「い、いや直ぐそこに…あれ？」

城戸は辺りを見回すと見慣れた平和な神室町が映る。

「あ、あれ？ゾンビは？破壊されてる筈じゃ……」

「何を寝ぼけているんだお前は…行くぞ仕事だ」

そう言つて新井は城戸の首根っこを持ち上げてドラムカン事引きずる。

「ちょ！？あ、兄貴！止めてくれ！そのまま引きずらないで！上半身と下半身がお別れしちまう！」

「こっちは忙しいんだ、遊んでいる暇はないぞ？」

「い、行きます！行きますからは、離し！あ…アッーーーーー！
ーーーーー！」

城戸は新井に引きづられ、ドラムカンには下半身を持っていかれそうになりながら金村興業に向かったとさ……

二十話や！」「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやろ？」（後書き）

千冬「これがすれ違いか……」

龍司「一夏も運がないのう」

作者「千冬の姉さんも運が無い様に思えます……」

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」（前書き）

真夏「オーズさんのゆうちゃん女装、めっちゃよかったわ！やっぱケツk「バキッ！」ごふう！」

第「しつこい！」

一夏「……………」

龍也「まあ…頑張れ」ぼんぽんと手を肩に乗せる。

作者「男の娘は正義です。はい！」

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」

一夏と冴島が賽の河原を出て行ってから数分が経った頃に真夏が無事帰還、

冴島と大吾が一夏達に連絡を取ろうとするも県外であり真夏の無事を伝える事が出来なかった。

「じゃあない、とりあえず今は花屋に会いに行こうや」

「そうですね……」

「なんかホンマすんません……」

いってと言いながら大吾達は歩を進める、そして一番大きい屋敷に入ってしまった。

「花屋のおっちゃんの家ってホンマデカイわあ……」

「せやなあ……無駄にするんわ脂肪だけにしてほしいわ」

「真島さん……」

三人が話しながら扉を開けるとお辞儀をしている女性が目の前に現れる。

大吾はその女性を見て驚く、

「！あなたは、確か峯の秘書だった……」

「片瀬のおばちゃん!!」

ズルツと片瀬と言う女性はズッコケた。
気のせいだろうかこめかみに青筋が出来ている。

「わ、私はまだ……！」

「あー、そう言うんは後にしてくれへんか？だーれもアンタの年齢
聞いとらんし、さっさと花屋に案内してや」

「っ……、わかり、ました……」

片瀬はプルプル震えながらも仕事を全うしようとおしこらえた、
そして真夏は大吾に耳打ちする。

「あのおばちゃん、ここで働いてたんやな。しらなかったわ」

「よく出入りしてたんじゃない？」

「何時もおっちゃんが一人で会いに来てくれはったから気づかんか
ったわ」

「そうなんだ…それとまなちゃん」

「？、なんや」

「あの人はまだ若いと思うからおばちゃんは不味いと思うよ？」

「どういつこっちゃ？」

「……とりあえずそれは禁句ね？おばちゃんに見えても言っちゃダ

メだよ?。」

大吾がそう言った瞬間、前から強烈な殺気を感じ大吾は背筋を凍らせる。

よく見ると片瀬が血走った目で大吾を見ていた。大吾は命の危険を感じ目をそらした。

「地獄耳やな」

「そ、そうですね……」

大吾は小さくなった、そして立派な机があるところまで案内されると突然大吾達と共に床が下がっていく。

「これぞ秘密基地、やな」

「ホンマに手が込んで……」

「あはははは……」

そして下に着くと大吾の目に複数のモニターが見える。

「こいつは……」

そうして驚いていると真島と真夏は椅子に座ってモニターを見ている男に話しかける。

「久しぶりやな……花屋」

そう言うと椅子に座っている男がフンツと鼻を鳴らす、

「お久しぶりです花屋さん…ゆつくり挨拶したいところですが……」

「そうも言ってもらえん状況ですな」

そう言つて花屋は振り向く、その時真夏が走り出し。

「おっちゃん！」

ポヨヨンッ

「おっと」

花屋のお腹に抱きついた。

「お久しぶりや！」

「ああ、真夏も無事だったか」

花屋は自分の腹に乗って来た真夏の頭を撫でる。

「えへへっ」

「……………」ピキピキッ

「ま、真島さん、こらえて……」

花屋は一通り真夏の頭を撫でると真剣な顔をして大吾に話す、

「さて、真夏…少し六代目と話があるから席を外してくれ」

「えゝ？ウチ抜きでー？」

「すぐに終わる、ホームレスの奴らに無事な姿を見せてやれ」

「はあゝい」

そう言われた真夏は花屋の腹から下りて上の階へと行った。

視点・「郷田真夏」

「ホームレスの皆はんは無事かな？」

そう言いながら外に出ようとすると後ろから呼びとめられた。

「なんでウチを置いてったあ!？」

「おおおおおお……」

駿ちゃんは蹴られた顔面と打った体の激痛で喋れへん様やった、せやけどウチはまくしたてる。

「応えんかい!!」

「む…むちゃくちゃだ…」

「あ”あ”!？ウチは駿ちゃんの心配聞いとるんや無いんや!なんでウチをおいてったんや!？」

「そ、それは危ないからで……」

「ウチを心配してくれはるんわかるけど、だからって勝手はいやや!」

「い、ごめん……」

駿ちゃんは鼻血を出しながら謝る、うゝん…ちょっとやりすぎてもうたなあ…

「あゝ血い出てもうた?堪忍や…」

ウチはポケットからハンカチを取り出して駿ちゃんの鼻に当てる、あ、アカン!直ぐにハンカチがバラ色に!

「ど、どないしよう、止まってくれへん！」

「だ、大丈夫だよ、直ぐに止まるから」

「で、でもお……」

ウチは涙目になりながら駿ちゃんの鼻血を懸命に止めようとするも、全然止まってくれへん……

「直ぐに収まるさ、だから平気だよ」

「ううう……ホンマにゴメンな？ 駿ちゃん」

「！、だ、大丈夫だって！ な？」

「……うん……」

「……そ、そうだ！ お詫びにバッティングセンターに連れてってあげるよ！」

「バッティングセンターに？」

「そ、後で真島さんも誘おうと思うんだけど、いいかな？」

「うん、ええよでもなんで急に？」

「ううんちょっと面白い事がありそうだから、かな？」

「ふーんわかったで！ それで何時行くんや？」

「真島さんが来たら直ぐに」

「わかったえ」

駿ちゃんは立ち上がりスーツを整える、せやけど……

「駿ちゃん……」

「ん？なんだい」

「スーツ…血だらけに…」

ウチが顔面蹴ったせいで鼻血を拭きながら倒れたせいでスプラッタ
ーな格好になってもうた。

「……まあ、平気さ」

「見る人は平気や無いって……」

ところ変わってここはヒルズ内の避難している人達がいる所……

「俺と同じくらいの女の子見ませんでしたか!？」

「い、いや見て無いな」

「そう、ですか……」

「一坊…真夏ちゃんは大丈夫なんやないか？あの子の事やからひよっこり帰ってくるんやないのか？」

「で、でも……」

一夏は真夏が心配らしく、まだ探していた。真夏の使っていた武器は見つかったが真夏本人は見つかってはいなかった。ちなみに一夏が真夏の武器を預かっている。

冴島はかなりの時間ヒルズの周りや中を見回って少し疲れていた。

「とりあえず今は帰ろうや、兄弟や六代目も心配してる筈や」

「……………はい」

一夏はガツクリと肩を落として帰る事にしたが……

「……………別の隔離エリアにいるかもしれない」

「なんやと？」

「冴島さん！俺、向こうの隔離エリアに行ってきます！！」

そう言つて一夏は走り出し、外へと行つてしまった。

「ちょーい、一坊！……行つてもうた。はあ……まったくアイツの真夏ちゃんへの想いは負けるでえ……」

冴島はやれやれと言いながら一夏を追いかけて行つた。

オマケ・「真夏の交流奥義」

「クツ！コイツ中々やるで……」

真夏（注：十五歳）は口から出た血を袖で拭き取り相手を睨む、相手は相当の格闘家の様で真夏も苦戦していた。

「行くわよ！」

そう言つて相手は真夏に接近する、すると横から真夏に声を掛けられる。

「真夏！！」

「ほえ？」

そこにいたのはポップ店のアルバイト達也が真夏に向かって何かを投げる。

パシッ受け取ったそれは……ワインボトルだった。真夏はそれを思いつき相手の頭に振りかぶり、

「おりゃあ！！！」

バキヤアンツ！！

「ぐはあ！！！」

相手はボトルで殴られ、割れた拍子に目に入ったワインに染みて苦しんだ後真夏はボトルの口で後ろを向いた相手にの……

「チエストー！」

「ギイヤアアアアアアッ！？！」

以下省略、を突き刺し、相手はたまらず飛び上がった後に地面に沈んだ。

「どや！」

ちなみに、バリエーションは秋山と同じです。

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」（後書き）

真夏「は、鼻が…ウチの鼻が折れた…」ポタポタと鼻血が出る。

秋山「ありやりや…大丈夫かい？」

真夏「ずずずー！大丈夫や！あ、それと昴ちゃん！ウチとは友達やのうて今から親友や！」

作者「ウチの真夏ちゃんをよろしくお願いします。昴さん」

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」（前書き）

遅くなっちゃった…風邪引いちゃったし…続けられるかなあ…

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」

ここは神室町の児童公園、そのマンホールから出てくる子供がいた

……

「はあ…無事なのはわかったけど、無事なら連絡くらいくれよ。まなちゃん……」

「わしらとんだ骨折り損やな……」

一夏と冴島は真夏を探しに別の隔離エリアへ行った後、賽の河原へ戻り真夏の安否を確認出来た。

何故分かったかと言うと真夏と仲のいいホームレスがさっきまで此処にいたと言っていたからだ。

「まなちゃん……」

（一途やな…）

と呆れながら思う冴島であった。

とりあえず真夏が無事だと言う事が分かり、ここで待っていれば会えるだろう思い冴島は待つ事にした。

「まなちゃん……」

「……ホンマ疲れたわ…（歳かのお…）」

「なんや…えっらい店内はピリピリしとんなあ……」

「せやな」

真夏、真島、秋山はバツティングセンターに来て見るとそこには定員どころか客と呼べる人はおらず、黒服の男数人しかいなかった。

「おう、ご苦労さんやなあ」

「……………」

真島がそつ声を掛けるが男はこちらに視線を移すだけで喋らない。

「……………二階堂、どこや？」

（二階堂？確かおとんに会いにきた人も二階堂やった様な……？）

男はクイツと顎を上げてバツティング場の方へと向ける、そこには男が二人いた。

真島と秋山はバッティング場へと足を運ぶ、そして二階堂も気づき三人に声を掛けた。

「よう此処が分かりましたなあ！真島さん」

「アンタのごつつい体臭のお陰や！直ぐにわかったでえ！」

手をヒラヒラさせながら臭そうに歩く、真島。

（体臭って……そないな匂いしてたかなあ？）

と可愛く首をかしげる真夏、

（うわぁ……これはこの後嫌な予感が……）

やれやれと言った感じガツクリする秋山であった。

「……せつかく来ていただいたんですがねえ……アンタを相手にしとる程ヒマやないんですわ」

「連れへんのう……ノリの悪い関西人やなあ……」

「……………二階堂はん」

「……………真夏のお嬢ちゃん……」

真夏は前に出て二階堂に話す、

「二階堂はん……なして神室町をこないなヒドイ事をするんや？」

「……………」

「神室町の人達が何かしたんか？」

「……………」

「神室町の皆が、二階堂はんが来ないな事をするぐらいヒドイ事をしたんか？」

「……………」

「二階堂はんがどうしてこないな事をするのは分からへん……東城会や、近江連合とかの事だとゆうんわ分かる……せやけどこれはやり過ぎや！」

「……………」

「そりや……神室町の人達の中には悪い人もおる……せやけど……せやけど……ど！」

「皆生きとんねん……！」

「真夏ちゃん……」

「まなちゃん……」

真夏は泣きそうで、それでいて悲しそうな顔で二階堂に言う。

「二階堂はん……どないしてこないするんや！？答えて！！」

「……………それはお嬢ちゃんには関係ない話や」

「関係無くなんかあらへん！！神室町の皆は友達や！」

「友達…ねえ…」

「ポップ店のタツちゃんやさっちゃんも、金貸しの駿ちゃんも…マッポのまー君も…そして東城会の皆も！」

「……………」

「皆友達なんや！！この事件のせいで警察や自衛隊…東城会の幹部も…つつ悲しい思いをしたんやで…家族とも呼べる人を…人を…どないしてそんな簡単に奪えるんや？！」

「……………わしには関係あらへん話や」

「なんやとお！？」

「どれだけ俺の客が死ん…人達が死んだと思ってるんだ！アンタは

「！」

秋山が何か言いかけた気がしたが気にしない、ちなみに秋山の金を貸した客の多くが神室町にいた為未だ未返還だったりする。

「…………そろそろ話はしまいですわ……」

そう言つて二階堂は真夏達の後ろ上を見る、つられて秋山がその視線の先に目をやると……

「！、まなちゃん！真島さん！」

ドスウウンッ！！！！

「うひゃ！？」

「！？」

上からまるでカマキリの様な六本の腕を持つ巨大な化物が真夏達の後ろに現れた。

「そいつがお相手しますよって、堪忍してください」

「……………」

真夏は固まり、真島と秋山は銃を構え臨戦態勢に入る。その隙に二階堂と隣にいた男は姿を消した。

「びびっとんのか？」

「は、ははは……びびってなんか、いないっすよ?」

「ええ心がけや……」

真島はショットガンの弾を薬室に送る。

「行くでえ!!」

「おっしやあ!!」

そう意気込んだが、真夏は未だに固まったままだった……

「……ん?どしたんや真夏ちゃん」

「まなちゃん……?」

「……い」

「?」

「いや……」

「まな……ちゃん?」

真夏は化物を見た瞬間プルプルと震えだし目に涙が溜まっていく、
そして真夏は何かに耐えられなくなり……

「いやあああああああああああああ————!!!!!!」
虫いややあああああああああ!!!!!!」

真夏は真島の足にしがみ付き顔を埋めてへばり付く。

「ま、真夏ちゃん！？どしたんや！？」

「ハッ！？思い出した！そういえば俺がカマキリを取ってまなちゃんの見せたら大泣きして全力で花ちゃんにしがみ付いてたんだ！」

「どないしてそんな大事な事を黙ってたんや！？」

「いやだって人の弱みを言いふらすと駄目かと思ひまして……」

「ええい！どないするんや！？わしは足にしがみ付かれて動きにくいで！」

「ふ、ふえ……む、虫……虫いややあ……」

「ど、どうしよう……」

「と、とにかくや！わしが真夏ちゃんを担ぐからお前は前に出るや！」

「えええ！？そんな無茶な！！」

「文句言つとらんで早いけえ！」

「ゴフツ！」

秋山は真島に蹴られ、化物の目に出される。

「こ、コイツ、もしかして……」

秋山は化物の顔部分と思われる部分を見て絶句した。

「グルルルルル……………ポッ」

「えええええええええ！？まなちゃん目当て！？」

秋山はまたも絶句する、まさかこの化物にそんな感情があるとは思わない。

（まなちゃん…君はフェロモンでも出しているのかい？）

はあっ…と疲れた目で化物を見る秋山、秋山の言った事は案外間違っていない……かも、

オマケ・「天啓って何人でやってもええんかな？」

真夏は今一夏と弾と組んでチンピラとケンカしていた。

「おらああ！！」

チンピラが一夏に殴りかかり、一夏はそれをかわして腕を持ちそのまま後ろに押し返す、

「はああっ！」

押し返されたチンピラは弾の所まで来て弾に後ろから手を回されてはがいじめにされた後チンピラの腕を背中に回し腕の骨を外す、

「おりゃ！！」

そしてチンピラを離して真夏に押し付ける様に渡すと真夏はチンピラの頭を鷲掴みにし、そのまま持ちあげた後思いつきり地面へと叩きつける。

「ハッ！」

ズドンと地面に叩きつけた後に真夏はチンピラの顔を上げて一夏がチンピラ目かけて走りだし……

「行つくぞおっ！！」

一夏はチンピラの頭を思いつきり蹴りあげ、チンピラは宙に浮き放物線を描きながら地面へと堕ちた。これぞ三位一体の極み！

オマケ2・「ペンは銃よりも強し…や！」

「ん？あれは……………」

真夏（注：15歳や？）が神室町を夜歩きしているとまだ小学生と思われる子供達が輪ゴム銃で遊んでいた。

「へっへー！次はコイツを飛ばすぞ！」

「な、なあ、それは流石に危ないんじゃない……………」

ガキ大将と思われる子供が輪ゴム銃の上にペンを置いて飛ばそうとしていた。

「大丈夫だって！」

「や、やっぱり危ないって！」

そう言ってもう一人の子供が止めさせようと手を出して二人は言い争う、

「大丈夫だって言ってるだろ！？離せよ！」

「駄目だって！」

二人が輪ゴム銃を取り合っていると偶然ガキ大将の人差し指にトリガーが掛り……

バシュ！ズボツ！

「フガッ！？」

「うおっ！？」

見事にガキ大将の鼻の穴にペンが刺さり、子供は驚いて手を離すとバランスの崩れたガキ大将はそのままのけ反る様にブリッジ状態になった後……

ゴンッ！

「がはあ！！！」

「う、うわあ！！た、大変だ！！！」

ガキ大将は頭を冷たいコンクリの地面に強打し、ピクピク痙攣しながら意識を落とした。

「ふむ……」

真夏は考える……

- 1「危ない遊びはご法度やなあ…人の事言えへんけど……」
- 2「見事なブリッジやなあ…タツちゃんの技思い出したで…」
- 3「ちょ！鼻の穴にペンって（笑）」

「……………！、閃いた！」

真夏は何処からともなく板と粘土を取り出してこねあげた。

「天啓が……………来た！！」

真夏の考えた天啓……………それは手に二つのペンを指の隙間に挟む様にして持った後、相手の鼻の穴へと入る様にアッパーを炸裂させる技……………名付けて、ペンの極み！

「これはいつたいでえ……………鼻血は絶対吹かすはな」

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」（後書き）

真夏「虫いやぁ……」

一夏「お、落ち着いてまなちゃん」

龍也「アイツでも苦手なもんがあるんだな……」

沙紀「だからってそれで虐めちゃダメだよ？龍也君」

龍也「バツ！？虐めるわけねえだろ！！」

作者「皆さんには苦手な物ってあります？ちなみに、自分は頭使ってます」↑駄目人間

二十三話や！「ウチかて…苦手なモンはある！後篇」（前書き）

真夏「作者の調子が戻った気が！！」

作者「まだ戻ってませんって……」

龍司「バカは風引かん筈なんやけどなあ……」

作者「バカじゃないもん！！」

真島「じゃあアホか？」

龍也「マヌケか？」

沙紀「おたんこなす？」

作者「皆ヒドス……」

そして真夏は半場強制で秋山とタッチダウンした。
その後真島が横からショットガンを乱射し、ツチグモは体勢を崩してひっくり変える。

「ギシャ!？」

「よし今や!！」

「はい!」

「きゅっくっくっ………」

真島と秋山は銃を構え、ひっくり返ったツチグモに攻撃し真夏はやつと下ろされ、目を回していた。

「ちい!固いで!」

「俺達の銃じゃ歯が立たない!？」

「ギシャアアアアアアア!!!!!」

ツチグモは怒ったのか体を大きく揺さぶり体を起こした。

「アカン、元に戻りよった!」

「このままじゃジリ戦つすよ!！」

「ギシャアアアアアアア!!!!!!!」

真島と秋山は覚悟を決め、二人でツチグモと対峙しようとしたが…

……

「……ふふふふ……」

「！」

「ま、まなちゃん？」

「ギシャ？」

突然聞こえた笑い声に二人と一匹は声を発した人物へと視線を向ける。そこにはリングに出てくる様な呪の女が立っていた。顔はボサボサになった髪で見えず周りの空気が凍った気がした。

「……おどれらあ」

「お、おおおお……」サアと顔を青くする。

「あ、あは、あはははは……」やり過ぎたと思い、顔を汗でダラダラと流す。

「ギ、ギシャア……」ガクガクブルブル

「ウチを散々ボール扱いしよつてえ……覚悟は出来てるんやろつなあ……？」

「そ、それは……」

「だねえ……」

[illegible]

ピンツとグレネードのピンを抜いて美しいフォームで手榴弾を秋山へとブン投げた。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！？」

秋山はマトリックスの如く体を曲げてグレネードを避ける。そしてその後ろにいた真島に手榴弾が飛んできた。

（！、チャンスっ！）

真島がショットガンをクルッと回して逆手に持ち、構えて……

「もらった――！！！！！！」

カキーンッ！

真島の打った手榴弾はまっすぐツチグモの……

「グモッ!？」

口に入り……

「ングッ」ゴクリ

飲み込んだ、そして……

ドゴンッ!!

「よっしゃあ!！」

「ぐほっ!？」マトリックスをやって頭をぶつけた。

「ほえ？」

三人の息のあったコンビネーションでツチグモは撃波された。

「よくやったで真夏ちゃん!」

「え?あ、ええ?ウチは今まで何を……」

「………今ので我に返ったか……」

秋山は元の真夏に戻った様で心底安心した様でそこにどっかりと大の字になって呼吸を整えて寝転がった。

（てかあの化物よりまなちゃんが怖いってどうよ……）

その時、後ろから複数の足音が聞こえた。

「「「「「あ”あ”……………」」」」」

「はあ…はあ…あ、あれれ？」

「はあ…はあ…なんやまだいるんかいな」

「うゝ！なんやしらんけどせつかくあの化物もやつつけたのこりやないでえ……………」

真夏はウンザリそうにして腰から銃を構える、だが真夏はそれを取りこぼしてしまい銃を落とした。

「あ、あれ？なんで？」

それどころか立っているのもままならずそのまま経たりこんでしまった。

「まなちゃん！」

「ど、どうしたんや！？」

「わ、わからへん…急に力が入らへんのや」

実は真夏は連日に続く戦いで体が限界に達していた、五歳児が普通此処まで戦える筈が無いだが真夏は戦ってきた。此処まで戦えたのはひと思いに友達や自分が愛した神室町を守りたいと言う信念だけで体にムチ打って戦ってきたからだ。

「た、戦わなあ…神室町を…皆を…」

「まなちゃん！もういい、後は俺達が…」（クソ！考えてみればまなちゃんはろくに休んじやいない！？なんで気づかなかったんだ俺は！！）

「真夏ちゃん…」（こないな子供にまで…わしらは何をやってたんじゃ、クソ……）

自分たちの軽率な行動で真夏を追いこんでた事に苦虫を噛む思いの二人だった。

「真島さん、まなちゃんをここから脱出させないと！」

「言われんでもわぁーとるわ……せやけど」

真夏達の前に群がるゾンビの数が異常でとてもじゃないが二人だけで、ましてや真夏を抱えて切りぬけるのは不可能だった。

「……………！、クソ……………」

真島は噛まれた腕からしたたり落ちる血と痛みに耐える、だがゾンビはお構いなく真夏達を襲う。

「あ”あ”あ”あ”あ”!!」

「クソッ!？」

「まなちゃん!」

「駿ちゃん!？」

真島はショットガンを目の前のゾンビに構え、秋山は真夏と守る様に抱きしめる。その時だった……

ドゴオンッ!!

「」」」」!？」」」

突然目の前に横から降って来たゾンビにゾンビ達はドミノ倒しの様に倒れ、ゾンビ達は一斉に静止する。
何事かと思いその飛んで来た方向に目を向けると二人の人物が立っていた。

「な、なんやと?」

「」
「……………あ」

真島が驚き、真夏が声を上げる。その先にいたのは……………

「真島さん、あの人達……………」

「そや……関西の龍、真夏ちゃんの親父の――――」

「郷田龍司や……」

「と千冬ちゃん？」

「私はいですか!？」

オマケ「ゴミはゴミ箱に捨てるのがマナーやで？」

「おらぁー!」

真夏（注：ウチは十五歳♪）は行き成り問答無用で男に殴り掛けられた。

「ちょ!? ひゃあ!？」

真夏は間一髪避けて難を逃れる。

「行き成り何するんや!？」

「黙れ! この悪女め!」

「あ、悪女おゝ?」

「隠しても無駄だ! 俺の女を病院送りにしやがって!」

「な、何の事や……」

「昨日、俺の女をボッコボコにしたじゃねえか!」

「…………… ああ! そう言えば金出せってカツアゲしてきた女がおった様な……………」

「そうだ!」

「完璧あつちが悪いやん…」

「やかましい！とにかく倒させてもらうぞ狸女！」

「カッチーンッ！誰が狸や！！この世紀末モヒカンハーブ！！」

「んだところあ！！」

東城会七代目代行 VS チンピラ
郷田真夏

「アンタ覚悟しいや！」

「おおおおお！！！！」

男は殴りかかり真夏はそれを避ける。

「くそっ！」

「悪いんやけど即効でカタあ付けさせてもらうで？」

真夏はそこらへんに落ちていたビール瓶を拾い構える。

「それで殴ろうつか!？」

「そんなヒドイ事はせえへんって」

「嘘つけ!」

男は再度殴りかかろうとするが真夏は男の伸ばした腕を掴みもう片方の手に持っていたビール瓶を……

「おりゃ!」

「ふごっ!？」

相手の口に突っ込んだ後右腕を下に下ろして……

「空やけどウチのおごりや？」

バキヤアアンツ!!

思いつきり振り上げた真夏の拳は男の顎をとらえビール瓶と共碎いた。

「ぎゃあああああああつ!!!!!!」

男は顎と口を押さえながら倒れ、血塗れのままその場でのたうち回る。

そして真夏は碎けたビール瓶の口の部分をゴミ箱の中に捨てた。

「女の仇見つける前にその女の罪を見つけるんやな？」

真夏はそう言い残しさって行く……これぞ空き瓶を使って相手の顎と口を粉碎する『空き瓶の極み』！！

「ゴミはちゃあんと捨てなアカンで〜」

二十三話や！「ウチかて…苦手なモンはある！後篇」（後書き）

一夏「真夏ちゃん……」

大吾「無理をさせ過ぎちゃったね……」

冴島「むしろ大人何をしとったんじゃ！？」

作者「そうですね」……↑元凶

此処んとこ真夏ちゃん为天啓がエグイ方向に……読者の皆様の考えた天啓…もつと見てみたいですねえ…（チラリ

二十四話や！」「セーラー服と……ガトリング？」「（前書き）

真夏「次はデンドロビウムが出そうな予感」

一夏「そんなの出したら直ぐに終わってるよ……」

作者「真夏ちゃんのISも考えないと……」

二十四話や！「セーラー服と……ガトリング！？」

「おとん……ちー姉ちゃん……」

真夏は秋山に抱かれながら小さく吐く、その声はどこか安心感を得た様な声だった。

そして標的を龍司へと変えたゾンビ達が龍司に襲いかかる。

「ふんっ！……」

そして龍司はあろうことか右手を出してゾンビの噛みつき攻撃を受けた。

「！？、お、おい！！」

「大丈夫や、駿ちゃん……」

「え？」

真夏の言った言葉に首をかしげた、そして龍司は不敵に笑みをこぼして噛みついたゾンビを他のゾンビへぶつけて振りほどき、

「うおりゃあっ……！！」

そして噛みついたゾンビと共コートの袖が破れその噛まれた腕が露わになる。

「……鋼の……義手？」
オートメイル

「唯の手やない……あれは……」

キュイーンと龍司の右腕の義手が唸り始め、そして龍司が手握ると同時に腕が変形し始めた。

「鋼鉄の竜砲……」

そして龍司の腕が変形し終わった。

「黒金丸や……」

大型のガトリング砲が姿を現した。

「なんだあ!？」

「あれがおとんの腕や（あれ？教えてへんかったっけ？）」

その変形が終わると次に動き出したのが千冬だった、ゾンビ達も動きだし千冬にも襲いかかろうとする。

「千冬の嬢ちゃん!!」

「千冬ちゃん!!」

危険と判断し真島と秋山が叫んだが……

「ふんっ!!」

千冬は背中に掛けてあったデカイ袋を振りましてゾンビ共をなぎ倒した後袋を掴みビリビリと破って中の物を取り出す、

「私は射撃が苦手だな？これで我慢してくれ」

そう言つて千冬が取り出した物は……

「……マジかいな」

「うそーん……」

「下手な銃も数撃ちや当たるっちゅう事が、でもそれは規格外やで……ちー姉ちゃん……」

龍司とは違うが、千冬が持っていたのは金色に輝くガトリング砲……カグツチだった……

「久しぶりや……」

「ゾンビでは役不足だが……」

「暴れさせてもらつて！」

「暴れさせてもらつぞ！」

多銃身の砲火がこの場に響いた……

所変わって此处神室町隔離エリア内劇場前通り、そこに一夏はいた。

「うゝん…まなちゃんの事だから隔離エリアでゾンビ狩りしてると思っただけど……」

真夏を訪ねて神室町……一夏は真夏を探し続けていた、一緒にいた冴島は六代目の護衛をする。残っている。

「ここにはいないか……うゝんどうしよう」

一夏は頭をひねり真夏の行きそうな場所を考える。

「スターダスト？いやこんな時に行くわけ……行くよな、まなちゃんなら……ボーリング？いやまだ解放してないし……ドン・キ・ホーテか？うゝん、どこだろう……」

一夏が考えていると近くから悲鳴が聞こえた。

「！、悲鳴？……女性の声……まさか！？」

一夏は悲鳴が聞こえた方へと走る、

（無事でいてくれ、まなちゃん!!）

一夏は掛け出し、悲鳴の聞こえたポツポツ店近くのでデカマツチヨに迫られている少女を見つける。

「まなちゃん!!」

一夏は急いで肩に掛けていたライフルを構え、弾丸を放つそして弾はデカマツチヨの背中に当たる。

「グオオオオオオオッ!!!!!!」

「ヒ……」

「クソ! やっぱかてえ!」

デカマツチヨは少女から一夏へと標的を変えて迫ってくる、だが一夏は焦らずにライフルの標準を合わせる。

（まなちゃんの言ってた通りに……引き金は引くんじゃ無く絞る様に狙う……!）

ズガンッ!と一夏が放った弾丸が放たれ吸い込まれる様にデカマツチヨの急所である顔に当たり……

「グオオオオオオオオオ……」

ズドンッ言っ地響きと共に倒れ伏した。

「……………プハア！……はあ……はあ……」

一夏はライフルを構えている間、息を止めていたのか荒い息でライフルを下ろす。

「……………ふう……撃つ感覚は何時まで慣れない物だ……………」

そう言つて一夏はライフルを肩に掛け直し、少女に近付くそして一夏はある事に気づく。

「あれ？」

一夏はどんどん近づいてゆくとその人物は真夏と思っていた者が違う者であつたと言つ事に気が付いた。

「誰？」

「あ……………え、えつと……………」

その少女は青い髪をした同年代と思われる短髪でミニツインテイルの女の子だつた。

「……………まなちゃんじゃなかった？」

「え、えつと……………まなちゃん……………て？」

はあゝと息を吐いて肩を落とす一夏、少女を助けたのはいいが探していた人とは違つ事に落胆する一夏であつた。

「……落胆しててもしかたねえか…」

「あ、あの……」

「とりあえず、この子を隔離エリアの外に連れていかないと」

「え？あ、あの私……」

「怪我してねえか？歩けるか？」

「あ……う、うん…大丈夫…」

「そうか、なら行こう」

そう言つて一夏は少女に手を差し出す、少女はおずおずと一夏から差しのべられた手を握り立たせて貰った。

「ふう…まあこっちに来てよかったよ、俺がこなかったらどうなっていた事が」

一夏は笑い、少女は一夏の笑顔を見て顔を赤らめる。

「あ……え、えつと…あの…あ、ありが……」

「おっとそろそろ行かねえと、銃声でゾンビが集まってくる」

「！？、ぞ、ゾンビ……！」

少女はさっきの事を思い出したのか一夏にしがみ付き震える。

「あゝえつと…大丈夫だ心配するな」

「……………」フルフル

「……………怖かったよな」

「……………え…」

一夏は少女の頭をポンと撫でる。

「よく生き残ってくれたよ、ホント…助けられなかったら、まなちやんに顔を合わせられなかったよ」

「あ……………うん…」

一夏はあやす様に少女の頭を撫で続ける、撫で続けられた少女はじよじよに顔を赤らめて行く。

「さて！もう大丈夫か？」

「え？……………」

「もう怖く無いか？」

「あ……………」

何時の間にか少女は自分の恐怖心が消えた事に気づき驚く、

「大丈夫そうだな……………それじゃあ脱出しよう何。安心しろ……………俺が安全な場所まで一直線に連れてってやるから」

「……………うん」

そう言つて一夏は少女の手を握り隔離エリアの外まで少女をエスコートしたのであった……

視点・「郷田真夏」

ウチは目の前の戦場、もとい惨状を駿ちゃんに抱かれながら見守っていた。

「なんて人だ……まったく」

「あの二人に勝てる人つて絶対、いや一人おるな……」

認めたくないんやけどな……

「キツヒビビビ、なんや凄腕やないか真夏ちゃんの親父は」

「てか義手って聞いてたけど……」

「ん？あのガトリングの事言つてへんかった？」

「義手ってのは聞いてたけど、ああなるなんて聞いてないよ」

アカン、言い忘れておったか？ともう片付いた様やな……

「終わったな（…お前は、何しようとしとるんや…テツ……）」

「ええ、ほとんどは片付きましたね……」

そう言つておとんとちー姉ちゃんは武器を下ろす、これじゃ規格外
やのうて鬼畜外や。

「……真島さんやな？東城会の」

「そや」

「……テツは…二階堂はワシが止めるつもり」

「なんや仲間割れかい」

「ワシは近江連合を破門にされた見や、極道やあらへん」

「一人でやんのか？」

「そのつもりや」

「龍司さん！私も……」

「千冬嬢ちゃんを巻き込む訳にはアカンのや」

「で、でも……」

「なんやおとん一人でやるつもりかいな……」

「それと……真夏」

「うん？なんやおとん」

おとんが近づいてきてウチは駿ちゃんから下りて立つとおとんが目の前まで来て……

「……………フンッ！」

ドゴンッ！

「ぶぎゃー！！??」

「あ」

「おー痛そうやな……」

（あれは痛い……）

いきなりウチの頭頂部にドゴンという鈍い打撃を受け、おもわずし

やがみ込んでしまったんや。

「~~~~~!?!」

目の前にバチバチと火花が散ったような錯覚、頭頂部を触るとポツコリとタンコブができてきて……。

頭がジンジンしだしてだんだん激痛が増してくる。
目からポロポロと涙が流れる。

「い、いひゃい………」

「このドアホ!!」

なんでウチが拳骨がまされるん!?

「やっと出れた………」

「はあ……はあ……」

「大丈夫か？」

「う、うん……平気……」

一夏は無事少女を隔離エリアから脱出させた、少女は少し疲れたのか肩で息をしている。

「此処までくればもう大丈夫だろう……」

一夏達がいるのは喫茶店アルプス前である、一夏は前まで無事だったエリアが隔離エリアになっている事に驚いたが、なんとか少女を脱出させる事に成功した。

「それじゃ俺はこれで」

「あ！……」

「ん？」

少女は突然一夏の裾を掴んだ。

「あ……え、えつとお……」

「？」

「あ、あの！……そのお……」

「……ん？ケータイが……！」

一夏は表情を変えて焦りだす、

「わりい！友達が見つかったから俺いかねきゃ！」

「え……」

「じゃあな！」

「あ、あの……！」

「な、なんだ!？」

少女は顔を真っ赤にして何かに伝えようとする。

「な、名前……名前……教えて……」

「……一夏だ、織斑一夏だ。じゃな！」

「あ……」

一夏は急いで走り隔離エリアのある方へと走って言った。

少女は一夏の名前を何度も言っただけで忘れぬ様に胸に刻みつける。

「織……斑……君……織斑……君……一夏……君」

自分で一夏の名前を呼んで顔を赤くする少女、そして少女はある重大な事に気づく。

（……私の名前……教えてなかった……）

少女は残念そうに肩を落とし、すでに見えなくなっている一夏にポツリと吐く。

「……私の名前は……簪……更識、簪……」

簪は自分の名を言って既に隔離エリアにいるであろう一夏^{ヒーロー}を見続けていた……

オマケ・「天国と地獄の大技」

「うおりゃあああああああー!!」

真夏（ウチは15…もう面倒や）はまたそこらへんのチンピラに喧嘩をふっかけられた。

「はあっ!!」

真夏はそれをかわした後大きく飛び太ももで相手の頭を挟む、

「ふんどっ!!」

「うおっ!!」

そして相手のチンピラは立ったまま真夏の太ももで上を向く感じで顔を固定される。

「何発耐えられるか為したる!!」

そして真夏の連続パンチが炸裂する。

「おりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやりやり!!!!!!」

「あばばばばばばっばあっばばばばっばばばっばばばばばばばばばばば!!!!!!!!!!」

真夏の連続パンチは顔を固定されており必然的にチンピラの顔を正確に殴り続ける。

「りゃあ!!……最後に言い残す事はある?」

「……………ふ、太もも最高……」

「死に晒せや」

ドゴンツと最後に強烈なパンチで体ごと沈ませた。

「まったくレディの扱いがなつとらんで……まったく！」

真夏はブンブン怒りながらその場を去る、これぞ太ももで相手の頭を固定してヘッドリンチする天啓『太ももの極み』！！ただし女子限定。

「あゝ股がヒリヒリするわぁ……」

二十四話や！「セーラー服と……ガトリング？」「（後書き）

真夏「いっちゃん誰やあの可愛い子ちゃんは!？」

一夏「い、いや名前聞く前に別れちゃって……」

真夏「それに惜しみなくニコポ、ナデポ出しおってからに……ムキ
イー……!」

一夏「まなちゃん!？」

作者「さて出ました原作に女の子……どうかかわっていくだろうか
……ご期待に添えられるよう頑張ります!!」

二十五話や！」「おとんの心配する気持ち伝わったで……」(前書き)

龍也「今回もまたすれ違ったな…一夏達」

沙紀「そうだね、一夏君も苦労してるね…」

作者「さて……一夏は何時真夏に会えるやら……」

二十五話や！」「おとんの心配する気持ち伝わったで……」

「い、行き成り何すんねん！？おとん！！」

「何すんねんや無いわボケ！ろくな連絡寄こさないで何言つとんやまったく！」

「う……れ、連絡はしよう思つとったんや……せ、せやけどゾンビとかでそれどころじゃ……」

「……………」

龍司は真夏を見る、その目は睨んでいるように嘘を許さないと言つ目であつた。

「……………」ごめん……なさい……………」

「……………」はあ……………」

龍司は溜息を吐いて真夏の頭を撫でながら抱き上げてその存在を確かめる様に抱き寄せる。

「……………」ホンマ……無事でよかったわ……真夏……………」

「……………」じゅ、ごめ……ごめんな……うう……」

真夏は耐えられず龍司の顔に抱きつき静かに泣きだした、秋山はその光景を微笑みながら眺め真島はエエハナシヤナーと言いなながら嘘泣きをし。千冬はどこか羨ましそうに見ていたいのか……

「……………ほな、行くで…真夏」

「うふう…グスッ…何処にや？」

「ちとな…」

龍司は真夏を肩に乗せて歩きだし、千冬もそれに付いて行く。

「なんや真夏ちゃん連れて行くんか？」

「コイツ一人にしたらどこか行つてまいそつやからな」

「むう……ウチはそんな子供じゃ……」

「ちゃんと連絡も寄こさん奴がか？」

「う……！」

「ふん…ああそうや…。真島さん秋山さんワシが来るまでの間、真夏の面倒見てくれてた事…礼言うとくわ」

龍司は頭を下げ、礼を言う秋山は驚き、真島は……普段通りに返す、
「キツヒヒヒ、わしらが好きでやってたんや礼を言われる程でも無いわ」

「そ、そうですよ！俺達がまなちゃんを守りたいから銃をとった様なものですし」

「それでもや、ほな……」

龍司は別れを告げ、千冬と真夏と共バツティング場を後にした。

「……あー真夏ちゃんとお別れかー寂しいもんや……」

「そうですね……でも、父親である龍司さんと一緒に行った方がいいと思いますよ?」

「せやな、ほなわしらもいこか」

「はい」

視点・「郷田龍司」

「……このももつ駄目やな……」

「そんな……ここまで隔離エリアが……」

「おとん、神室町は…大丈夫やよね？」

ウチは不安げにおとんに話す、

「大丈夫や、お前の好きな町やで？こないな事で屈したりせんわ」

「……………うん」

ウチは元気の無い声で返事をしてまう、おとんは心配になったんやけど今はとりあえず隔離エリアから出うる事にしたんや、

「……………」無言でポケットから何かのメモ取り出す

「うん？なんやそれ？」

「テツがワシに渡したもんや」

「テツちは誰なんですか？」

「二階堂の事や」

「二階堂はんならさっきまでバッティング場におったで？もついな
いけども」

「さよか……………」

おとんは無言でそのメモをクシャリと潰して歩きだした……

回想中……………

ここはある町中…そこにタコ三味の定員の服を着た龍司と……

「どうしてもあかんのですか？」

二階堂がいた。

「テツよ…何度も来てもろて悪いが、ワシは近江連合を破門にされた身や」

「兄貴にその気さえありゃわしはなんとでもします、遠慮は無用ですわ」

「…なんで、そんなワシにこだわるんや？」

「わしやあ東城会を……そして兄貴をこないにした桐生一馬を……このままでは済ませられんですわ」

「……桐生の事は、もうええんや、ワシはあの男に勝てれへんかつ

た……ただそれだけの話や」

龍司がそう言うと二階堂は否定する。

「嘘や！兄貴がそないなつまらん事を「おとゝん！」

突如、二階堂の声は遮られ龍司の足元に子供がひっ付く、真夏である。

「どしたんや？真夏」

「おやつさんが呼んでたで！」

「さよか直ぐに……」

「おーい、郷田！何時まで油売ってんだ！？」

龍司の声も突如遮られるタコ三昧の店主、おやつさんである。

「師匠に働かせる弟子がどこにいたよ！？」

「すみませんおさっさん、今行きますわ」

「ウチも戻りまゝす！」

真夏と龍司はそう返事をしておやつさんは二階堂に声を掛ける。

「おい、おめえも客じゃねえんならさっさと行っちまいな」

二階堂はおやつさんの態度が気に入らないのか、睨みつけておやつ

さんに迫ると二階堂の肩に手を乗せて止めさせる。

「もうワシの事は忘れろや…テッ」

そう言って肩から手を離し、言い聞かせる様に言う。

「わしゃあもう極道やない」

二階堂は龍司と向き合い、ポケットから紙を取り出す。

「気が変わったら来てください」

龍司は二階堂からの紙を受け取る。

「……………もうすぐや、大丈夫……………兄貴も絶対その気になりますわ」

そう言っつて二階堂は龍司に頭を下げてその場を去った。
龍司はその去つていく姿をずっと見続けていた。

「……………」

「誰やったん？」たこ焼きモグモグ

「こら！何気になに店のたこ焼き食ってんだ！」

「あーん！おやっさん堪忍して、ウチまだ夕飯まだ何よー！」

（……………アカン、後ろが全然シリアスやない…）

回想終了

「……………」

「おとん？」

「何でもあらへん、ん？なんやこれ？」

龍司が地面に落ちているメモを拾う。

「なんやこれ？」

「んうゝ？ゲ、長谷川のねーちゃん」

「長谷川？」

「ゾンビ倒すとご褒美くれるっちゅう女の事や」

「ご褒美、ねえ……」

そう言つて龍司はメモをポケットにねじ込み、真夏を担ぎ直す、

「わ、わ…」

「とりあえずあの壁の向こうに行くで」

「はい」

「出発や」

龍司達は歩き出す、この地獄からの一時離脱の為に……

視点・「織斑一夏」

「ええー！？まなちゃん達はもう行っちゃったんですか！？」

「あーすまへんなあ一坊」

「あはは、すれ違いで来ちゃった見たいだね」

「そ、そんなぁ……」

俺はまなちゃん、千冬姉ちゃんと龍司さんが既にいない事にガックリと肩を落として膝をつく、

「やっと会えると思ったのに……」

「そう気い落とすなや一坊」

「そうだよ、死んだ訳じゃないんだから」

「……はい」

とりあえず俺は立ち直り、直ぐに追いかけようと走り出したが。

「ちょい待ち」

「ゴホッ!？」

真島さんに首根っこを掴まれ首がしまつてむせてしまった。

「ケホケホ…な、何をするんですか？」

「お前はわしらと少し休憩や」

「で、でも」「コッ」「え……」

真島さんが急に俺の頭をコツンと叩くと俺の体はフラッと地面に腰を下ろしてしまう。

「あ、あれ？」

「お前も体が限界なんやな……」

「一夏君……」

か、体が限界？そんな筈は…まだ疲れてなんて…

「人っちゅうのは大事な事になると疲れ知らずで戦えるんや、リミッターって奴が外れたせいやろ。そして一坊の体のリミッターも限界に達したんやな」

「体の限界……」

「一夏君、君の体はもう限界なんだ。分かるね？」

「……………」

…休んでる暇なんて無いのに……クソ…

「一坊、休んだ後に真夏ちゃんと合流しろや、それでええな？」

「はい……」

俺は早く行かなければと言う衝動を抑え、秋山さんにおぶられながら河原に戻った……

オマケ・「世界は変わってもうた……（妄想編）」

世界はISによって変わった……IS、それは現代の兵器の理論を覆す女性だけが扱える最強の兵器……神室町の大事件での織斑千冬の活躍によりISは世界に知れ渡り認められた。各国はIS開発に執着し他の兵器開発は全て凍結した、それにより男性軍人、そして凍結されてしまった兵器開発の研究者は職を失なった……だがそこで彼らを雇った女性がいた……

「代行：ポイントまで約二百です」

「さよか」

装甲車の中で女性と複数の完全武装の男達が乗っていた。その男達は皆外人でいろんな国の人間がいたそして女性は立ち上がり皆に号令を掛ける。

「全員、装備チェック…」

ガチャガチャと音を出して男達は己のエモノをチェックする。
そして全員が点検し終わると、女性に点検を完了した事を報告する。

「全員の装備チェック完了…」

「よろしい………」

そして装甲車は止まり、ドアが開いた。

「第一目標は広場に設置されたジャミング兵器の破壊！第二目標は要塞化された大阪城の制圧や！ウチに付いてきい！近江から大阪は分捕るんや！ロックンロール！！」

郷田真夏…多国籍の退役、ISによって不要になった数多くの兵士を引き連れ激戦区となった大阪へと足を踏み入れた…ここに、東城会と近江連合の第二次極道抗争が幕を開けた……

「ちゅう小説書いたんやけど…どやる？」

「止めてくれ…話がマジでありそうで怖いからな？」

真夏は今、レゾナンスに事務所は構えている一夏に自分で書いた小説の感想を聞きに来ていた。

「だな、ホントにありそうで怖い」

弾がそう言ってクツクツと笑う、その横で一夏の幹部達も苦笑いを返していた。

「てか弾、集金行かなくていいのかよ？花さんがまた怒るぞ？」

「いやー社長の癖が付いちやってなあ……」

「癖って…真似るなら服装だけにしたほうがええで？」

「俺も直そうとは思っただけだなあ……」

頭をポリポリ掻きながらバツが悪そうに言う。弾は今幾つもの会社を抱える大社長の下に付いていた。

「まあええわ、それよかウチの小説どうやった？」

「これからの未来を小説にしてどうする」

「え？」

「小説が予言になってるぞ?」

「い、いや予言って……」

「お前ならホントに抗争が始まったら大阪に自ら兵隊引きつれて近江連合を潰しに行ってもおかしく無い、てか絶対行くな」

「ちょ!?!ウチはそないに血の気は多くないで!?!」

「前に暴走族が連合組んだ時単身で三百人相手に突っ込んだ奴がよく言っ」

「うぐっ!?!……い、いっちゃんはその事……いわへんよな?」

「……………」顔をそむける

「いっちゃん……………んっ!?!」

真夏は自分の周りの人間に絶望した。そしてこの五年後、真夏が十五歳の冬に東城会、そして真夏は多国籍の軍人と共に近江に喧嘩売った事は誰も知らない……

二十五話や!」「おとんの心配する気持ち伝わったで……」(後書き)

真夏「うう……ウチって小説書くのに向いて無いんやろうか……」
作者「ファンフィクションって難しいですねえ書くのは楽しいんですけど」

オマケのフィクションのフィクション……現実にならなきゃいいけど……

二十六話や！「嫌な予感ビンビンや……」(前書き)

遅くなってしまった……仕事がつくて……感想待ってます。

二十六話や！「嫌な予感ビンビンや……」

「ふう………」

「大丈夫なんか？一坊」

「はい、少し休めば大丈夫です」

「ならええんやけどな」

「真島さん、そろそろ………」

「駄目や」

真島は即効で手でバツテンを作り立とうとした一夏の足をはらう。

「あいた！？」

「まだ体力戻つとらんのに河原から出す訳にはいかんで？」

「そ、そんなぁ………」

一夏はガクリと肩を落とし、真島はヤレヤレと言った感じで呆れる。

「だいたい真夏ちゃんの安否は確認出来たやろ？それにあの関西の龍とお前の姉ちゃんもいるんやから少しは安心しい」

「うっう………」

「真島さん！てあれ？どうしたんですか？一夏君」

「また無理して真夏のところに行こうとしたから足はらっただけや」

「真島さん、相手は子供ですよ？優しくしないと」

「わしが優しくするんわ女の子だけや特に真夏ちゃん」

「ちなみに花ちゃんは？」

「対象外や」

「それ本人に聞かれたら殺されますよ？」

「せやから陰口で言っとんねん」

「そうっすか…一夏君はい、タウリナーマキシアムでよかった？」

「た、助かります……」

キリツと蓋を開けてゴクゴクと一夏は飲み干し、プハァ！と言って口を袖で拭く。

「生き返る……」

「まるで親父やな」

「まだ子供なのにねえ」

「俺五歳児なんですけど……」

そうやったとケラケラ笑う真島、そして一夏は体を動かして体が大丈夫かを確認をして再度立ちあがる。

「ん……よし！」

「何が良しやねん」

「俺はもう大丈夫です、早く真夏ちゃんと合流したいので行きますね？」

「体は大丈夫なのかい？」

「平気です、自分鍛えてますから」

そう言つて一夏はサイの花屋から餞別として貰ったサブマシンガン『雀蜂』手に取り作動と初弾装填を確認して歩きだす。

「ホンマに平気なんか？」

「平気ですって、それよりも……………」

「ん？」

「真島さん……腕の方が心配ですし……」

「！、……気づいたんか？」

「腕を庇ってるのが分かりましたから……」

そう言つて一夏は心配そうに真島を見つめ、真島はそれをケラケラ笑つてごまかす。

「キツヒヒヒ！心配すんなや一坊…わしはまだ死ねんからのう」

「真島さん……」

「……じゃあない行け」

「え？」

「真島さん？いいんですか？」

「漢が女を助けに行くうゆうとるんや、邪魔すんのは無粋やと思つてな」

「真島さん……」

「はあ……ま！真島さんがそう言つなら仕方ありませんね……一夏君」

「あ、はい！」

「これを持って行つてくれ」

「これって……」

秋山が渡したのは秋山がDVD店で手に入れたオートマグナムだった、しかし……

「黄金……」

「そう…黄金銃だ、一夏君なら反動制御も出来るしね」

一夏は伊達に真夏に連れられて来たゲイリーのグリーンベレーさんからの射撃場で訓練した訳ではない。

拳銃、散弾銃、自動小銃に爆発物、そして兵器らの運用方法と言った知識をゲイリーによって叩き込まれているのだ。子供に教える知識では無いのだが……

「そついや前にオスプレイとかって言うへりを飛ばしたって真夏ちゃんから聞いたなあ……」

「あははは、はい結構難しかったですけど…なんとかマスターしました」

（オスプレイって…確かティルトローター機で一番扱いが難しいヘリだってまなちゃんが言ってたけど……それをマスターするって、やはり血筋って奴なのかな……）

「真夏ちゃんは一カ月前にハリアー飛ばしたって聞いたで？」

「はい、次はライトニングを飛ばして見たいって言ってましたし」

（ハリアーは確か短距離離陸垂直着陸機だっけ？てか俺も軍オタになつたなあ…まなちゃんの影響か？）

秋山が少し困った様に唸っていると、一夏は真島との話を終えて河原から出る。

「じゃあ行つてきます！秋山さん、銃ありがとうございます！」

「気にしないでいいよ、気をつけてね」

「間違つても逝つてくんなよ？」

「逝きませんよ！？てか不吉な事を言わないでください！」

「わあーたからさつさへ行けや」

「ホントに気をつけてね一夏君」

「はい！」

そう言つて一夏はズボンに黄金銃を突っ込みハーネスの付いた雀蜂を肩に掛けて走り出した。

「……………いったな……………」

「行きましたね…それじゃあ真島さん腕の治療の方を……………」

「まだ大丈夫や、気にすんなや」

「でも……………」

「……………治療して治せんならとくにやっとなるわ」

「……………」

真島はそのまま河原の奥に引っ込み、秋山もそれに続いて歩きだし

た。

（まなちゃんが知ったら……悲しむだろうな……）

「どしたん？」

「…いえ、なんでも行きましょう」

「ああ…」

真島の最後は……近い…

視点・「郷田真夏」

「！？、なんや…今の胸騒ぎ……」

ウチらがバッティング場から出て後、胸が急に締め付けられる感覚

がしてやな予感がしたんや、

「……………どしたんや？真夏」

「何かあつたか？」

「…………おとん、ちー姉ちゃん…なんでもないわ」

「さよか」

「具合が悪いとかじゃないんだな？」

「うん、大丈夫や…にしてもこの地図に書かれたバツテンんって…
…」

ウチはおとんの言っていた二階堂はんに来てくれって言われた場所
なんやけど……

「ん？おい真夏、二か所だけバツが抜け取る所があるで」

「あ、ほんとや……………ここって東新ビルと…たけちゃん達がいる場所
やん」

なして金村興業の事務所のところに？それに……

「他のバツ印の所って……………」

「まあええわ、二つあるんなら一つつつ回ればええ事や」

「あ、ウチは金村興業の事務所があるホテル街に行くで？新井はん

が無事が確認したいし」

「一人でか？」

「それは危険だぞ？」

「平気やおとん、ちーねえちゃん、ウチはこれでも戦えるし、おとんにおんぶしてもらうたから元気百倍や！っそれに……」

ウチはウフフッと笑ってちー姉ちゃんを見る。

「お二人の邪魔したらアカンしなあ」

「！？」

「ムフツ」頑張っとな」

「お、おい待て！！」

ウチはまわれ右をして出口へ向かって走り、ちー姉ちゃんは面白い位に顔を真っ赤にして慌ててたんや。

青春や…青春やのう…歳が問題なんやけど、ちなみに今分かった事やちー姉ちゃんのアレは……

「さつてと…新井はんの無事を確かめに行こか」

ウチは既に隔離エリアの中にある新井はん達の事務所に向かった、新井はんだけちゃん無事でいてな！

オマケ・「美少年って不便やねえ……」

ISが世界に普及して七年……世界に女尊男否が浸透し始めた頃ある事件が勃発する、ある特別な男性が誘拐され人身売買に掛けられると言う悲惨な事件が立て続けに起きた。

これに警察は捜査を開始したが未だ証拠と実体は掴めず、思う様に進まず事件は困難を極めていた、

そこで須藤警視総監はこの事態の打開策として、東城会七代目代行「郷田真夏」に協力を要請、代行真夏はそれを承諾し東城会から選りすぐり戦力とサイの河原からは有力な情報を提供した。

次に真夏は特殊な犯罪者に対抗する為、警察、極道の連合部隊を設立、これを「東条九課」と名付けた。そしてまたの名を……

「シャイン1、配置に着いた突入する…準備はいいか？」

（ええでシャイン1、皆も配置に着いたで表では警察も包囲網を張り終わったてるってまー君が言うとなし）

ここはとある廃工場、そこに完全武装した特殊部隊員が武器を構え

て無線機からの突入の合図を待っている。

（ほな逝こか♪）

「よし……突入！go！go！」

古びた扉は爆破され雪崩の様に突入する隊員達は即座に発砲、次々に犯罪者を無力化する。

「敵、無力化！トラック確保！」

（上出来や、各隊員は敵の拘束、後の残りはトラックの中を確認して対象を”保護”や」

「了解まなちゃん」

（すまへんなあいつちゃん、学校あるのに付き合わせてもろうて）

「それはお互い様だろ？まなちゃんもちゃんと学校行かなきゃだめだぜ？」

（終わったらちゃんと行ってくて♪）

「ん……トラックを確認する」

（ブービートラップに引っ掛からんといてな？あの時はホンマ心臓止まり様やったし……）

「もう引つかからないよ」

そう言った一夏はガスマスクを外し、トラックの中身を確認する。

「……………まなちゃんの読み通りいたよ……………小さい男の子達が」

（やっぱりな……………）

そう……………真夏達が”保護”したのは……………

「ロリコンならぬシヨタコンとはな……………こいつら……………」

そう言っただけ倒れ拘束されている敵、もといシヨタコンの女性達を嫌そうに見る一夏、

そが一夏達はシヨタコンを狩る者……………シヨタコンハウンドの隊員達である。

（ISが普及した事で男の価値が下がってもうたからなあ、そのせいで男の子を生んだ家庭が少年を捨てる事件が多いんよ）

「だからって子供を売るのは許されない事だ……………」

（せやね……………これでまた施設が賑やかになるなあ）

「また養護施設を建設しないとな……………アサガオとひまわりに連絡は……………」

（既に連絡済みや、ハル姉ちゃんも園長さんもOKを出してくれたで）

「そうか……………よかった、それじゃあ俺はこの子たちを連れていくな？」

（後でウチにも会わせてな）

そう言つて真夏からの通信は切れ、一夏は売られた子供達を一度警察所に届けた……

「……………ちゅう話が昔にあつたんやな」

「あゝあの時は大変だったよな……………」

「いっちゃんが助けた子供たちに兄貴って呼ばれて困つてたんは笑えたわ」

真夏は当時の事件を思い出してケラケラと笑う、一夏は少し恥ずかしそうにして頭を掻く。

「笑うなよ………そーいやこの頃は九課はどうなってるんだ？」

「弾ちゃんが指揮取つて動かしてくれとるわ、ウチらはIS学園にいなきゃならんから任せつきりなんやけど……………」

「しかたないさ俺達の立場上、下手に動けないし」

「せやね、さていつちゃん次は三次元機動に付いて話すで？」

「まだやんのか？」

「当たり前や、いつちゃんには早よう覚えてもらわんと幼馴染に守られる事になるで？」

「う……それはちょっと……」

「せやったらちやつちやと覚える！ほなやるか？」

「へいへい……」

一夏はIS学園の寮の自室で真夏からの勉強を開始した、一夏、真夏の活躍によりシヨタコンはじょじょに駆逐されていったのである……

二十六話や！「嫌な予感ピンピンや……」（後書き）

真夏「謝れや、読者の皆はんに詫びを入れろや」

作者「なして行き成り！？」

真夏「遅くなつたからやろ？調子も取り戻してへんし……指切れや」

作者「ご、ご勘弁を！！」

真夏「いっちゃんごーちゃんからドス借りて来て」

一夏「お、おう」

作者（ヤバい！真夏ちゃんなら腕事立ち切れる！？）

遅くなつてすいません……仕事が夜遅くまで……

二十七話や！「頼ったってええんや…それが”人”やもん」(前書き)

ちよつとシリアスになっちゃったかな？感想待ってます。

二十七話や！「頼ったってええんや…それが”人”やもん」

「なんでたけちゃんドラムカンにハマってるん？」

「えつとだな……」

真夏は無事ホテル街にある新井達の事務所に到達する事が出来た、新井達の事務所は既に隔離エリアの中に入ってしまった為、到達するのに時間を食ってしまった。

「まあええわ」

「え？いいの？俺このままでいいの？」

「ええやんドラメン見たいでええで？」

「そ、そうか…（ドラメンって？）」

「新井はん、無事で何よりや」

「ありがとう真夏ちゃん」

城戸を置いて新井と真夏は話を進める、他の部下は城戸と新井意外は真夏に言われてバリケードを形成している。

「新井はん、ここは危険やウチと一緒に隔離エリアまで脱出せんと」

「どうしてだ？バリケードとドスにチャカは充実してるんだから大丈夫じゃーーーーー……」

と城戸が話しに入りこんできた、だが真夏は……

「アホ、ゾンビよりも危ない奴がいるんや。そいつならバリケード張っても紙切れ同然や」

「そ、そうなのか？」

城戸は顔をひつかせ、汗を流す。他の幹部も自分がやってる事が無意味に近い事に手を止めてしまう。

「手が御留守だぞ？早くバリケードを作れ、時間稼ぎにはなるんだからな」

「…………へ、へい！……」

「そやから早く荷造りして出て行かんといかんねん、皆！バリケードが終わったら荷物もってトンスラするで！」

「…………おう！……」

「こいつら……（なんで真夏ちゃんの命令は忠実に実行するんだ？俺がボスなのに……まあ別にいいんだが）」

「そんで問題なんわ……」チラッと城戸を見る

「な、なんだ？」

「このドラ息子どないすんねん……」

「とりあえず正面のからのは無理だから全員で窓から出るしかないな……城戸は……とりあえず下にマットを引いて落とすか」

「ちょ！？兄貴！それはヒドイっす！！」

「しかた無いだろ、部下数人でも抜けなかつたんだぞ？」

「大丈夫やって♪それに下に落ちててもドラムカンが守ってくれるわ（まあ落ちる時ミキサー状態になりそうやけどな……）」

「そ、そうだなドラムカン俺を守って来てくれたから大丈夫だよな！」

（計画通り！）ニヤリ

(このアホ舎弟……)

（若頭…ご無事で！）

この後、ドラムカン事落とされた城戸武は一番手で窓から落とされ、下に引いたマットにバウンドした後周りにいたゾンビ共を巻き込みながら新井達の活路開いたのであった。

「流石たけちゃん！予想外の働きや！」
↑元凶

「城戸！お前が俺の舎弟で誇りに思うぞ！」
↑ 悪乗り

「さす! さすがです! 若頭!」

↑便乗する幹部達

「目が回る――！！？？」
 転がる

隔離エリアの戦車通りまで転がって行く城戸であつた……

「きーもーちーわーるー！ー！ー！」

「たけちゃんファイト？」

「すまん、城戸……」少し罪悪感が湧いた

「……」若頭……「……」皆静かに合唱する

城戸……転がる男は今日もドラムと共に無双するのであつた。

視点・「織斑一夏」

「はあ……はあ……やっぱり武器を三つも持つと疲れる……」

実は俺はまなちゃんの武器、「ラブシャインスパーク」を背中に担いで手にサブマシンガン「麻雀」を持ち。腰には「黄金銃」を指し

ている。これ持って歩くのは五歳児の俺には重労働だ…え？なんで置いていかなかったかって？それは…

（これ持つてると…安心するんだろうな……）

一夏は手を後ろに回し、真夏の武器に手を当てる。

「早く会いたいなあ…まなちゃん……」

「あ”あ”あ”……」

俺がまなちゃんの武器に手を添えていると前からゾンビ達が迫ってくる。

「…………俺の邪魔を…………」

俺は麻雀を構え、ゾンビを睨む。

「すんじゃねえ！！！！」

俺は麻雀をぶつ放す、大切に…大事ないところに会う為に……

「てカッコ付けてる自分を殴ってやりたい」

俺は妄想しながら戦車通りまで来たはいいが絶賛ハエの様な化物に追われてホテル街まで逃げ走っていた。

「なんだよあれ！？なんなんだよあれはよおおおおおおおお
！！！！！！」

俺は走る！風のように！……ゴメン無理だわゝてガラでも無いことやつてても意味が無い、やはり五歳児に武器三つはきついです……

「なんなんだよあのハエ見たいな奴は！？ドーパントか！？グリードか！？ゾディアーツですかこんちきしょおおおおおおおっ
！！！！！」

頼む！！いるならWでもオーズでもフォーゼガールでもいいから助けてください！！ちなみに俺が好きなのはG3-Xです、カツコイイよなーあれって機械的なのがさ。

「てそんな感想言ってる場合じゃない！コイツ俺が撃っても簡単に避けやがる！！」

俺は後ろにウチながら撃ってはいるが、まったく当たる気配が無い。そしてそのハエ見たいな奴はじょじょに俺との距離を縮めて行く。その時、ハエ野郎は俺に目がけて何かを吐きだして俺は咄嗟に避ける。

「うわぁ！？」

だが俺はその反動で転んでしまい、相手のとの距離を縮めてしまった。

「やられるか！！」

俺は麻雀を倒れた体勢で構えて撃とうとしたが……

カチッ！

「!?!、弾切れ!?!」

俺は弾切れを起こした麻雀を捨てて黄金銃を腰から取り撃つ、

ドオオンッ!!

「うわああ!?!」

だけど慌てていたせいか反動制御を忘れていたため俺は地面に転がる形で吹っ飛ぶ。

「いつてえ……」

俺は痛みを耐えて相手を見るがかすりもしなかった事に気づく。

「駄目だ……これじゃあ当たらない!?!」

当たらなければどうという事はない!?!という格言を聞いた事はあるが、やはりどんな協力な武器も当たらなければ意味が無い。

「やべえ!?!」

相手のハエ男は俺に向かって突進する、避けられない!?!?

(やられる!?!)

俺は手を前に交差させ防御する様に身構え目を瞑る、すると突然無数の銃声が響いた。

ドドドドドドドドドドッ！！！！！

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

ドンッ！シャコッ！ドンッ！シャコッ！ドンッ！シャコッ！

パラパラパラパララッ！！！！！

「キシヤアアアアアアアアアアアア！！？？」

「へ？」

俺は突然の銃声に驚いて目を開けるとハ工野郎は後ろから一斉射撃によって穴だらけになりながら地に落ちて言った。

「いったい…何が？」

そして俺が状況が分からないしていると聞きなれた超が聞こえる。

「撃ち方止め！！新井はんはウチといっちゃんを助けるで！他の人は周りを警戒！！」

「わかった」

「…………了解、まなちゃん！！…………」

その人物はそう言っているんな武器で武装した黒服の人達に指示を

出し周りを警戒させ、残った二人は俺に近付いてくる。

「いっちゃん怪我ない？大丈夫なんか？」

「ま、まなちゃん……」

「一夏君、怪我はないか？」

「あ、新井さん……」

俺はまだ呆けたままでリベレーターを肩に掛けたまなちゃんは俺の体をペタペタと触り、怪我が無いか確かめる。

「……………ホッ、よかったで…ウチが新井さん達を連れだして来てよかったわ…………」

「そうだな、まさか一夏君とここで会うとは…………」

二人が俺の再会を喜ぶ、だけど俺は体を体育座りにして顔を膝に隠した。

「……………？、いっちゃんどないしたん？」

「どうしたんだ？一夏君、怪我をしてるのか？」

そう言って二人は俺を心配してくれる、だけど……

「俺は…………守られてはっかだ……」

「い、いっちゃん？」

「一夏君？」

「俺は何時も姉や…皆に守られてばっかだ……！」

「そ、そりゃしかたあらへんよ、ウチらまだ五才やし…」

「でもまなちゃんは一人で戦ってる！それどころか新井さん達を率いて戦って守ってる！！」

「そ、それは……」

いとこに吐き散らすなんて最低だっけ分かってる…でも大好きな女の子に守られるのは、……苦しいんだ……

「なんで俺ばっか…守られてばっかなんだ………なんで俺は――――」

弱いんだよお………

視点・「郷田真夏」

「いっちゃんは顔を顔を埋めて泣いとる……いっちゃん、そないに苦しんでやったんやな……」

「……………いっちゃん……」

「……………」

「ウチな、一人で戦った事なんて一度も無いんやよ？」

「……え？」

「いっちゃんは顔を上げてウチを見る、ア、アカン……泣き顔のいっちゃん可愛すぎや……」

「おとんの子供にしてもろうへんかったら今頃ウチは施設で一人ぼっちやった……せやからウチは一人や無く、おとんに……皆に、そしていっちゃんに助けられたんや」

「俺……に……？」

「せや、いっちゃんがいてくれへんかったらウチはおとんの娘になったとしても、多分一人になってたわ……」

「俺は……まなちゃんを守ってなんか……」

「守ってくれたでいつちゃんは…だって、いつちゃんが幼稚園で声を掛けてくれはらなかったらウチは幼稚園でも孤立した筈や」

「そんな事………」

ある訳ない…まなちゃんは誰でも仲良く………

「ウチな…怖かったんよ…」

「怖かった？」

「うん…ウチな、自分の両親がウチを捨てて蒸発したんわ。ウチが良い子やないと思ったからや」

「良い子じゃない？」

「そや……ウチは…虐待されてたんや、両親に…」

「!？」

「なんだって……」

俺と新井さんは驚いた、まなちゃんの両親がそんなヒドイ事を……でも、どうしてそんな話を？

「ウチはあの時幼かったから分からへんかったんやけど、ウチが良い子になってへんと何時も打たれたり飯抜きにされたんや。せやから良い子にしてりゃあ両親も優しくなってくれはると思っとったんや」

「そんな…事が……！」

新井さんは拳を震わせながらまなちゃんの話聞いていた。

俺も新井さんと同じでまなちゃんの両親に怒りが湧いているだろう。

「でも…結局両親は二歳になったウチを蒸発したんや無くて山奥に捨てて行きおったんや…あの時の事はよく覚えてへんけどウチが餓死寸前の所で道路まで戻って、通り掛った人に助けられんたんは覚えとるてかなり奇跡やな」

「……なんで…その話を今話すんだ？」

俺は真夏に問いかける、俺の話と何があるのか……

「………いつちゃん、ウチらはまだ子供や」

「そんな事は分かって………」

「分かつつとらんで、いつちゃんその黄金銃は誰から貰った？」

「え？えっと、秋山さん」

「じゃあさつき撃つてたマシンガンは？」

「…花屋さん」

「そう言つこつちゃ」

「……意味が分かんないんだが……」

「つまりや、ウチらは絶えず人に頼ったり守られたりしとるんや、それだけやないいっちゃんがいるから今のウチが守られておるんや」

「今のまなちゃんを…俺が？」

「せや…ウチは施設での生活が始まった時も怖かったんよ」

「なんで？」

「嫌われない為や…皆に愛想振り回して、必死に嫌われん様に頑張ったんや…たぶん両親との関係のせいでウチは何時からか両親のご機嫌とりが当たり前になってそれでウチは我がままになれへんかったんやろつな…そしておとんの話に合わせて話してたらおとんは突然ウチを養子にするって言うて園長さんと話して養子縁組をしようったんや、あの時はホンマビックリやで……」

「……………」

「そんで…ウチはおとんの前でも自分を殺して良い子を演じた、せやけど…おとんには直ぐにばれてもったわ。ウチはおとんに言われて自分を隠さんでもワシはお前を捨てたりせんって言うてくれたんや、それどころか我がままの方が似合ってるって言うんやで？おとんは意地悪やで……でも、それでもウチは怖くて自分を騙してた…」

「……………」

「そんでここからが重要や」

「？」

「ウチがおとんと過ごしてから一年立った頃や、ウチはおとんが通わせてくれた幼稚園で昔のウチを今のウチに変えてくれる存在に出会った……」

「……誰…なんだ？」

「織斑一夏」

「え？」

「いつちゃんの事や…」

俺が？まなちゃんを変えた？

「いつちゃんがウチの中に詰まった鬱憤を晴らしてくれたんや、覚えとるやろ？ウチが友達も作らず一人ぼっちで砂浜で遊んでた所をいつちゃんが無理やりウチの手を引いて友達の輪に入れてくれたんわ」

「それは…」

えつと…そうだったけ？

「その時ウチは反発して喧嘩になったんよな、あの時はキツク手を握られて痛かったでえ……」

「う！……悪い」

「ええって、そのお陰でウチは…温かみを知ったんや」

「温かみ？」

「そうや、だーれもウチに見向きもしないのにいつちゃんだけウチを見て、ウチを孤独の世界から…ウチからは地獄と呼べる底から引きずり出してくれた…」

「俺が…まなちゃんを？」

「うん……いつちゃんがウチを孤独から引きずりだして、自分で自分の本音を吐きださせてくれた…ウチはそれに救われたんや、ウチはもう良い子で無くてもええって、ウチは自分自身でいてええんやって、教えてくれたんわいつちゃんなんよ？」

俺がまなちゃんを救った？

「いつちゃんがいるから今のウチがある、いつちゃんがいたからこそ自分自身に正直に生きられたんや……いつちゃん」

まなちゃんは急に俺の首に手を回して自分の顔を俺の顔に近づける。て近！？近いよまなちゃん！！

「ま、まなちゃん…近いって」

「ありがとう」

「へ？」

「ありがとういつちゃん、ウチを守ってくれて、ウチを救ってくれて……ウチの最初の友達に…そしてウチのいところであって……」

「……………」

「おおきにな、いつちゃん？」

俺はその言葉を聞いた時体の中から熱いものが再度ぶり返す。

「う…うえ…」

「いつちゃん、ウチらは守られててもええんよ？それは恥やないんや」

「そうだぞ？一夏君」

「グズツ…新井さん」

「俺も…君や真夏ちゃんがいたから俺や城戸は神室町に戻れた…一夏君、君のお陰だ…ありがとう」

新井さんは俺の頭に手を置いて撫でてくれた。それが俺にはたまらなく嬉しくて……

「……………」ポロポロ

「いつちゃん、覚えといて…いつちゃんはウチなんかよりもいい、はい！人を守って、救って、助けてるんやよ？そのお陰で東城会や神室町の皆とも仲良うなれたんやから、もう苦しまんという…いつちゃんが苦しんだり悲しんでたら皆も…ウチも心配してまうから

な？」

俺は真夏にそう言われ、目をこすり涙を拭くそうだ…俺は子供だ、だからこそ強くなつてまなちゃんを守れる大人に…漢になるんだ！！

「……グスツ…ああ！」

「お？もう泣きやんだんか？お早いなあ…さすが男の子や！」

「……ハツ、何時までも泣いてられねえよ（もうまなちゃんを心配させたくないからな……）」

「さよか、ほな……皆移動や！総員集合！」

「……合点だ！！」「……」

そう言つてまなちゃんは皆を集合させる。

「ほい、いっちゃん」手を差し出す

「さんきゅ」手を握つて立ちあがる

「全員警戒を怠るなよ？」

「……ウツス！」「……」

新井さんは皆に指示を出して歩き始める、そして俺はまなちゃんと手を繋ぎながら歩いた。

「もう守られてるだけとか思つてへんよな？」

「大丈夫だって…俺だって守れてたって分かったし」

「ならええんやけどな、無理したらあかんで？」

「わかってるさ」

俺は歩き出す、この手に握る温かみと安らぎを守りたいが為に……ん？

「新井さんがいるって事は……城戸さんは？」

「……………あ”」

「そう言えば……………」

「……………」ずっと転がったままですね「……………」

うおおおい！？それでいいのか組として！！てか転がるって！？

その頃の城戸は……

「うおおおおおおおおおっ！……！」「コロコロコロコロコロコロコロッ！……！」

「ゴアアアアアアアアアアアッ！……！」「コロコロコロコロコロコロコロッ！……！」

城戸は絶賛イワダルマと己のプライドを掛けて競争中であつた……

「走り抜け！俺のドラ魂い！」「コロコロコロコロコロコロッ！……！」

「ゴア！？ゴア！？（コイツ！？さらに早く！？）」「コロコロコロコロコロコロッ！……！」

城戸のドラムカンが赤くなり（ただ転がり過ぎて表面が過熱しているだけ、）さらに転がるスピードを上げた。

「俺の…勝ちだ！」「コロコロッ！」

「コロゴアっ！……ゴアッ！……（まだだ！……まだ終わって無い！……！）」「コロコロコロコロコロッ！……！」

「イワ男おおおおおおおっ！……！……！」「↑勝手に付けたイワダルマの名前」

二人は熱く激しく転がり続けた、そして新井達が城戸を発見した時には既にドラムカン我真つ赤になり城戸はその暑さに暴れ、イワダルマは「良い勝負だったぜ……」と言う言葉？を残し息を引き取った。

後にこれは話題となり神室町の名物となるドラムカン転がし祭りが開催され、それは全国のドラカー（ドラムカンに入る者たちの通称）を熱くさせたと言う。ちなみに真夏はまったくもって意味がわからん大会であつたと言っている。

オマケ・「ブルドーザーって脆いわあ……」

「こおのポンコツ！なんでこないに早く壊れんねん！」

ゲシゲシと煙と炎を出すブルドーザーを蹴る真夏、元は砂や土砂を運ぶ為の物であつてゾンビ引き様では無いのだ。

「チッしゃあない歩いて行くか」

真夏は歩いてミレニアムタワーまで行く、その直後ブルドーザーは大きな音を立てて爆散した。
そして真夏がミレニアムタワー前までくるとゾンビを引きながらこちらにやってくる車を見つける。

「な、なんや？」

真夏が身構えて銃を構える、そして視認出来る所まで来た車は……

「……………フォークリフト？」

真夏の目の前で止まった車はゾンビを引いてスプラッターカーになった血みどろのフォークリフトだった。

「まなちゃん！」

「いつちゃん！？」

「そうだぜ」

「これどないしんたん？」

「道端ので拾った」

（人はそれを盗む言うんやで、いつちゃん……………まあええけど）

真夏は一夏の乗ってきたフォークリフトに乗り込み、一夏の後ろに座った。

「ほないこか！」

「おう！」

がちゃがちゃと操縦してフォークリフトを走らせる一夏、真夏達が隔離エリアに出るまで一夏と真夏は目に見えるゾンビ達を引いて行ったという。一夏、真夏…恐ろしい子！！

「にしてもいっちゃんがフォークリフトの免許持ってたんやな」

「免許？」

「そや、もつとるやろ？」

「それって食えるのか？」

「……………ここで下ろしてええな」

「え”？」

無免許運転はやめましょう。

二十七話や！「頼ったってええんや…それが”人”やもん」(後書き)

真夏「なんでブルドーザーよりフォークの方が耐久度が上なんや」

龍司「知らへんなあ……」

真夏「てかそれだとブルドーザーの存在意味が無くないんやないか？作者もブルよりフォーク使ってカー無双しとるし」

龍司「そうやな……ブルの意味はあらへんなあ」

真夏「出す意味あったんか？」

作者「無いかもしれませんが……ホント」

どうしてだろ？

二十八話や！「爆弾って猛毒らしいで？」（前書き）

作者「仕事が忙しすぎる……」

真夏「しゃあないやん、仕事は忙しいもんやもん」

もういや……

二十八話や！「爆弾って猛毒らしいで？」

真夏達は今、戦車通りで脱出を図っていた……………

キュイイイイツ…………バヂイイツ…………ドゴオオオオオンツ
……………

真夏が一夏から渡された愛用武器、「ラブシャインスパーク」で群がるゾンビ達から一夏率いる工作員幹部を援護していた。

「撃つんや！絶対いっちゃんに達に近付かせるなや、いてこましたれ……」

「…………おう……」

「セムテックスの設置を急いでください！奴らはまなちゃん達が足止めます……」

「急ぐぞおまえら……」

「…………ウツス……」

真夏も一夏、新井も全力で事に当たっていた。

「必殺、ソニックドラム……」

………………………………………………

城戸がドラムカンで並みいる敵をなぎ倒して行く。そして一夏達がセムテックス…プラスチック爆弾を壁へと設置し終える。

「設置完了！」

「離れるぞ！急げ！」

一夏達は離れ、真夏達も避難して爆破を待つ、

「爆破！！！」

「ハッ！」カチッ

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！！！！！

自衛達が設置した壁が爆破され、そこに一人が入れる穴があいた。それを見ていた幹部達は喜びの声を上げる、真夏は幹部達を連れて穴のあいた壁へ走る。

「騒ぐんは後や…皆！行くでえ！！！」

「……………よっしゃあ！！！！！！！！！！」

「新井さん！城戸さん！」

「おう！」

「行くぜ！！！」

こうして、真夏と一夏…金村企業の新井と城戸、そして幹部達は地獄から脱出した……

その頃龍司達は……

「なんで穴があいとんねん……」

「私達の苦労って……」

龍司達は厚生会の頼みで人助けをしたその報酬で戦車の弾を運ぶ為のフォークリフトの鍵を貰い、弾を運んでいたんだが……

「……まあええわ、とりあえず出るとするか……」

「そうですね……」

龍司達はとりあえず外に出る為その穴に入るがその時穴を塞いでいた自衛隊と一悶着あったという。

「離さんかーい!!」

「コラ暴れるな!!」

「私に触るな!!」

「グホッ!？」殴られる

「……………浅木、こいつらはいつりたいなんだ？」

「えーとお……………」

自衛隊隊員浅木との出会いはこんな感じだった……………その後隊長各の男が仲裁に入り、解放されたと言う、何とも閉まらない展開だった

……………

視点・「織斑一夏」

「あれ？今外が騒がしい様な……」

「いつちゃんのポテトもーらい！」

「甘い！」

「ああ！？ウチのナゲットおー！」

「微笑ましいな……」

「ですねえ」

「……癒されます……」

俺とまなちゃん、そして金村企業の皆でスマイルバーガーで食事をとっている。まあ皆武器はあったけど食料はあまりなかった様だからな。

「いつちゃんヒドイ……ウチが残してたのに……」

「お前が俺のポテト取ろうとしたんだろ……」

「だってだって……ウチもポテト食いたいにゃもん……」

「にゃもんじゃないよ……」

欲しいなら欲しいって言えばいいのに……

「じゃあない、ほら」

俺はポテトを手に持ち真夏に差し出す、

「え？くれるん？」

「いらないのか？」

「い、いる！いるで！そ、それじゃ……あゝん」

「は？」

まなちゃんは何故か口を開けてあゝんと言う、え、えっと……これは？

「あゝん」

「え？」

もしや……

「あゝん！」

「なに？」

もしかして！

「あゝん……！」

「……………」

食べさせろと!?

「あ~~~~ん!、てさつさと食べさせろや!~!」

スパアンツ!!!

「あいたー!?!」

俺はまなちゃんに思いっきり叩かれた、イテエ…ほっぺ叩かれた、俺がなにしたって言うんだ……

「いっちゃんのイジワル!!食べさせてくれるって言ったやん!!」

「え!?!俺が食べさせるの!?!」

食べさせるって…俺がかよ…

「もうええ…いっちゃんなんてしらへん」

「あゝ悪い、悪かったから…食べさせてやるから許せって……」

「……ホンマ?」

「ホンマ」

「ホンマにホンマ?」

「ホンマだって」

「……………あゝん」

う…………瞳を閉じて口を開けてポテトを待つまなちゃん…………エ、エ口
い…………

「い、行くぞ……………」

「うん……………」

い、入れるぞ……………てなんか変な展開に!?

「パクッ」

「うわぁ!?!」

コイツ俺の手ごと食いやがった!?

「アムアム……………」モゴモゴ

「や、止め…………止めろって!口を……………」

止める!俺が別の意味ゾンビになる!?!手が耐えられない!?!

「ま、まなちゃん!?!」

「アムアム…………プハ……………」

まなちゃんは口を開けて下唇を舐める、な…なんか色っぽい…

「ジュルリ……まいっ」

「ソレハヨカッタネ」

「ん？どしたん？いつちゃん？」

「ナンデモナイヨ？」

「でも顔が赤いで？」

誰のせいだと思っただよ！？てかそんな無駄に色っぽくするな！俺が狼になる！……なっちゃってもいいけどね！

「そう言えばおとん達は大丈夫やろか？」

「……………あ」

忘れてた……まあいつか、龍司さんと千冬姉ちゃんに適うゾンビなんていないし、てか適う訳ない。

「……とりあえず、食べ終わったら探しに行くか」

「そやね」新井さん達はとりあえず神室町から出来るだけ離れるんや、皆を危険な目に合す訳にゃあアカンし」

「真夏ちゃん、それは……」

「まなちゃん……」

「『『『『『まなちゃん……』』』』」

新井さん達は納得してない様だ、そりゃそうだよな女の子残して逃げれる訳……

「オクシブリデース!!」

と突然何処からともなくゲイリーさんが来店して来た。

「いらつしゃいませ!ご注文は何にしましょう?」

「ア…キングスマイルバーガーセットデ、オ持ち帰りデお願いシマス」

「かしこまりました!」

来店したゲイリーさんに注文を受け付けた定員は直ぐに奥へと消えた。

「…………サテ、金村ノ皆サンには私ノ訓練所デ……………」

「フンツ!!」

ゴドンツ!!

「ゴハアアツ!!??」

ゲイリーさんが喋ろうとした矢先、まなちゃんがゲイリーさんの腹にストレートをかまして沈めた。

「えっと…真夏ちゃん？」

「…………とりあえず、皆はゲイリースブートキャンプに行って来て欲しいんやけど…………」

「あ、ああ…わかった」

「お、おう」

「…………了解っす…………」

金村企業の皆はとりあえず食べ終わり、ゲイリーさんと頼んでいたバーガーセットを運んで訓練所まで輸送した。哀れだ……

「ふう…いっちゃんウチらもそろそろ出ようか？」

「そうだね…………」

俺達は立ち上がり、店から出た…………龍司さんを探そうかな？

オマケ・「納豆！ナトウ！ナトー…NATO？」

核……それは人類が作った過ちや…ISによって核弾頭は不要の産物となり各国は核の廃棄、核に関する技術は全て廃棄された…せやけど…核のカタストロフ事態は消える事は無い、アメリカのディビークロケット、ロシアのソユーズ…デポドン…それは未だに残り、テロリストに売られ今まさに悪用されようとしている。これを重く見た各国は北大西洋条約機構…通称「NATO」を開く、大統領の面々は国では対処仕切れない事態と把握し、ウチら…東城会に白羽の矢が立った、英国のSAS、アメリカ第一レンジャー部隊が事態の収拾に急ぐ。そしてテロリストのテロ防止実働部隊「カムロフォース」を派遣した。

「ポイントまで三百」

「了解や」

ここは真夏とカムロフォースの隊員達が乗ったチヌーク、隊員達は初の出動に武者震いしていた。

「おどれら！今回の作戦でウチらの存在意義を示せ！」

「…………イエッサー…………！」

「降下ポイント到着…………武運を…………！」

「よっしゃあ！行くでー！！」

真夏と隊員達はロープにつかまりペイロープした……テロリストとの激戦が…今、始める。

「ちゅうお話や」

「もう止めて……現実滋味てるぞ……」

何時か本編に入れようかな？

二十八話や！「爆弾って猛毒らしいで？」（後書き）

一夏「ありそうで怖い……てか大統領まで知られているとは……」

真夏「まあフィクションなんやけどな」

作者「これから友達多くなる真夏ちゃんならありえる……」

友好関係は偉大だね！

二十九話や！「アカン……むっちゃおもしろい！」（前書き）

遅くなりました！すみません……

二十九話や！「アカン……むっちゃおもしろい！」

真夏と一夏は新井達、金村企業の面々をゲイリーズ・ブートキャン
プへ行かせた、そして真夏は中央通りを歩いていると……

「はあ……どうしょ」

「ん？なんやあの人、あんな溜息吐いて……」

「どうしたんだ？まなちゃん」

「ん？んにゃちよつと……」

真夏は赤いジャケットを着た男が溜息吐いて頂垂れている所を見て
少し気になったようだ。

「声掛けて見ようか」

「大丈夫なのか？」

「心配はないやろ？」

そう言つて真夏は中央通りで頂垂れている男に話しかける。

「あの〜どないしたんですか？」

「ああ！？……て女の子か、なんでもねえよ……」

「でもお何か思いつめた様な表情でしたで？」

「だからなんでもねえっていつてんだろ!!」

「な…人がせつかく心配して話してるだぞ？」

「ああ！？なんだとガキ…舐めた口聞いてると……」

「わわわっ!？」

一夏は男に胸倉を掴まれ睨まれる、だが真夏は……

「お兄さんお兄さん、そないに怒らんでもええやんウチらに話して見てえなあ」

「だから関係な「カチャリ」へ？」

真夏は腰から上山からお願い？してトラックに埋もれてホコリを被っていた旧式のリボルバー「シングル・アクション・アーミー」…通称「SAA」を抜いて男の顎に付きつける。何故彼女がこれを選んだのかというと何処からともなく聞こえた声とフィーリングとか言う物らしい。

「お・は・な・し・して♪お兄さん？」

「はい!!全てお話します!!」ソニック土下座

(うわあ……男のプライドとかねえのかよ)

女尊非男じゃなくても真夏は強かった……二分後……

「自分、木根って言う名前でジャーナリストをやっています」地面に正座

「ジャーナリスト、ねえ……」

「は、はい……そうです」

「ま、まなちゃん……そろそろ許してあげようぜ？周りの視線が痛い……」

「それもそうやな……もう立ってええで？」

「あ、アザッス！」

そう言っつてゆつくりと立ち上がった木根はホッと胸をなでおろす。

「そんで、そのジャーナリストはんが何道の横で溜息なんか吐いてんのや？」

「そ、それはですね……実は、神室町の地下に誰も知らない秘密の地下が隠されてるんです！！」

「誰も知らへんつて……じゃあなんで木根はんは知ってんねん？」

「え？えーとそれは……」

木根は項垂れて何と説明したらいいか迷っている。

「なんやうつさんくさい話やなあ」

「クツ！このガ「カチャリ…」い、いえ！本当の話なんです！！秋山さんや真島さんに行ってもらいましたから！！！！」

「え？秋山さんに真島さん？」

「もしかして駿ちゃんにゴーちゃんに事か？」

「え？あ、はい…そうです」

「ふん……」

真夏は腕を組んで考える。そしてニヤリと表情を変えて木根に言う。

「駿ちゃんもゴーちゃんも行つとるんだったらさぞおもしろい所なんやろなあ…」

「まなちゃん？」

「えーと？」

「よっしゃー！ウチらも言つて見ようで、いつちゃん！」

「はあ！？」

「ええええ！？あ、危ないですよ！？」

「大丈夫や、コイツらあんなから」

そう言つて腰と背中と肩に掛けているSAAとリベレーター、そしてラブシヤを叩いて見せつける。

「ウチら二人なら問題ないえ」

「で、でもまなちゃん、ほんとに危ないかもしれないぞ？」

「なんやいつちゃん…怖いんか？」

「な！そんな訳ないだろ！！」

「なら…決まりや、木根はんそこに行く為の入口は何処なんや？」

「あ、はい…えーと……………」

木根は地図を取り出す、

「……………ここ、ここにマンホールがありますから行ってみてください
いい」

「厚生会の所か…隔離エリアの中やな……………ほな行こか」

そう言つて真夏は一夏の手を引いて歩きだす、

「ま、まなちゃん？ホントに行く気か？」

「心配せんでもええつて、ウチが付いてるでそれに……………」

真夏は一夏に向き直り、微笑む。

「ウチが危ない時は助けてくれるやろ？」

「！、……ああ！もちろんだ！」

「ウフフ♪いざ！地下へ！」

そう言つて二人は走つて隔離エリアの中にあるマンホールへと向かつた……目的忘れて。

「……大丈夫かな、あの子たち……」

木根はそれだけが心配だつた。

一方その頃……

「いやあゝまさかあなたがまなちゃんのお父様だとはつゆ知らず、ささ！どうぞ！直ぐに組長に繋いでエレベーターを呼びますね！」

「あ、ああ……頼むわ」

「龍司さん…これはいい……」

「分からん…せやけど、これが真夏のお陰やっちゅう事は分かる」

「……………そうですね」

龍司と千冬は東新ビル着いて何故か手厚い歓迎を受けていた、最初
は別の手厚い歓迎を受けそうになったが、龍司が真夏の名前を漏ら
すと態度を変えた様に……この状況である。

「まあええわ…おう兄ちゃん、アンタも上来てくれ」

「へ？俺もですか？」

「ああ…全員に聞いてもらわなアカン事や」

「はあ……分かりました」

そう言っで見張りの男は上に連絡を入れてエレベーターを開き、龍
司達と共に事務所へと向かった。
そして事務所に着いて入ると……

「よう来てくれましたな、ソファアにでも掛けてください」

組長が前に出て頭を下げながらソファアに座る様進め、幹部一同は
頭を下げていた。

「……………極道って……いい……」

「もうこれはワシの知らん極道になつとるで……」

二人は訳が分からないと言う表情で進められたソファ―に座るしかなかった。

「それで……真夏ちゃんの親父さんはどの様なご用件でウチの事務所に？」

「あ、ああ……警告や」

「警告？」

「そや、あんたらも見ただやろ？神室町にそびえるデカイ壁が」

「ええ……確かに」

「あの向こうでは……ゾンビがうごめき、得体のしれない怪物もおるんや」

「ゾンビ？」

「せや……信じられへんかもしれへんけど、事実や……せやからアンタらは直ぐに避難した方がええ」

「なるほど……ゾンビ……」

組長は考え込み、後ろに控える幹部達も動揺が走る。

「……………話は分かりました……自分達は一旦ここを離れます」

「信じるんか？こんな突拍子も無い話を？」

龍司は驚く、ゾンビがいるから避難しろと言っではいそうですかと言っただけで素直に従うのはおかしいと思った。

「確かに、突拍子も無い話でした……」

「せやったら……」

「ですが、真夏ちゃんの親父さんのお話……信じる意外無いと思います……それにアンタ程の男が、関西の龍うと呼ばれた漢がここまで来て危険を知らせてくれたんだ。真夏ちゃん同様、ワシらも信じる」

「……さよか（真夏よ……極道に信用されるお前はいつたいなにもんや？）」

「あ、ありえない……（真夏……お前はホントに何者なんだ？）」

二人は自分達の知らない所で確実に東城会への信頼を勝ち取っていたとは知らない。てか知る由も無い。

とその時、龍司は事務所に取りつけられている監視カメラのモニターを見て険しい表情をする。

「急いだ方がよさそうやな……」

「龍司さん？」

千冬もモニターを見てみると、龍司と同じ表情をする。

「……組長、荷物捨てて今すぐ非常階段から逃げるんや」

「え？」

「客が…来たで」

龍司は黒金丸を展開、千冬はガトリングガン「カグツチ」取り出してエレベーター前に構える。

「嬢ちゃん…覚悟はええな？」

「龍司さんがいるなら…何時でも」

「ハッ！ええ度胸や…早う逃げい、お前ら！」

「お、おう！無事でな！お前ら行くぞ！」

「……う、ウッス！！」「……」

組長とその幹部達は一目散に非常階段を駆け下りていった、そして事務所に残ったのは龍司と千冬のみ。そして……

ポーン！

エレベーターのチャイム音が鳴り扉が開く、

「……………」

「……………誰もいない？」

エレベーターはもぬけの殻だった、次の瞬間！

ドンッ！！

「！！！！」

エレベーターの上から野球帽を被った男が落ちて着地し、龍司達に猛烈な速さで迫る。

「クッ！！」

「早い！！」

龍司と千冬は一斉射撃を開始し、撃ちまくるが相手が早過ぎて当たらないそして相手は千冬に飛びかかり千冬を地面に叩きつける。

「ぐあっ！？」

「嬢ちゃん！！」

男は口から長いしたを出して千冬の首に噛みつくところとする、千冬ももがくがさっきの地面に叩きつけられたダメージで思う様に振りほどけない。

（噛まれる！？）

千冬がそう思った瞬間、黒金丸の砲火が唸る。

「うおおおりゃああああああっ！！！！！」

ブルアアアアアアアアアッ！！！！！！

千冬に押し掛かっていた野球帽の男は即座に離れて回避する、その時野球帽が取れて顔が露わになる。

「！、お前は……林！？」

「……………甘美な……」

「ああ？」

「つつ……コイツ！」

「甘美な……死を……」

「何を言っ取るんや？」

「……………」

林と呼ばれた男はそう言い残し、走り出した。

「逃がさへんで！！！」

龍司が撃つが林は素早く窓ガラスを割って飛び降りた。

「クソッ！……嬢ちゃん、平気か！？」

「はい…何とか」

「ちと見してみい」

そう言つて龍司は千冬に近付き顔をじつくりと見る。

「り、龍司さん！？」アカアカ

「背中は大丈夫なんか？どうなんや？」

「え、えつとですね、そ、そのおお……」アセアセ

「まさかどこか噛まれたんか！？」

「だ、大丈夫です！平気ですから！だ、だからその………顔をが
近いです…」プシュー

「あ、ああ…すまへんな」

そう言つて龍司は離れ、千冬はあ…と残念そうにしていた。

「……………林…なんでお前が……………」

「り、龍司さん知り合いなんですか？」

「ああ…昔のな」

龍司は窓ガラスが割れた窓を見続けた。

「…………ふう…嬢ちゃん、歩けるかいな？」

「あ、はい…大丈夫です」

「手え貸すで」

「あ、ありがとうございます……………」

千冬は龍司に差しのべられた手を掴み、立ち上がる。

「…………真夏達、平気やるか……………」

「自慢の弟が付いています、大丈夫ですよ」

「そやな」

そう言って二人はエレベーターへと向かう、その時二階堂からの電話があったのはその直後であった。

その頃真夏は地下へと下りて……………

「アハハハハハハハ！！」

「ヒイイイイイツ！？」

ゾンビの大軍と一騎当千していた。

「通路が狭いから密集してて一網打尽や！」

「そんな事言ってる場合かよ！？そこらじゅうから湧いて出てくるぞ！？」

「心配ないや……………！！！」

キユイイイイイ……………バチッ！！！！ドゴオオオオオオオ
ンッ……………！！！！

「さいっこつやー！！」

「助けてくださーい！！！」

一夏は真夏に必死に付いて行きながら最下層まで目指し、そして最下層に着くと亜門の妻の怨念だとかと対決し、色々とお宝や亜門の妻だとかの遺品をゲットした真夏達は地下から無事抜け出したと言
う。

「そのゲームの名は……」

「名は？」

「龍が如く、極道無双!!」

「こ、極道無双う？」

「そや、〇ーエーさんと協力して作った痛快!爽快!活劇!破天荒無双アクションなんよ!!」

「そ、それは面白そうだ……」

「初代、二代、三代、四代……そしてジ・エンドの歴代のボス達が神室町を舞台に暴れ回って、それを東城会や警察、そしてあの男が帰って来て無双するんや!!」

「おおおお!!!!」

「なんと予約特典はあの伝説の極道のフィギュアが付いてるオマケ付き!!」

「それは買っしかない!!!!」

「限定版は数に限りがありますから予約はお早めに!!」

「お電話待ってます!!」

「ちゅう夢を見たんよ」

「や……やりてえ……!!」

自分もマジでやりたいです! 出ないかなあ……

二十九話や！「アカン……むっちゃおもしろい！」（後書き）

真夏「とりあえずこの極道無双は月光丸はんとオーズはんに送ろうかな？プロトタイプやけど」

一夏「バグ修正はしたの？」

真夏「……………元から龍が如くのキャラってバグキャラやん」

一夏「確かに……………」

作者「ヤベえ！マジで出ねえかな！オラワクワクしてきたぞ！」

どうなってんでしょうね？あの人達の超人パワーって…………正義超人？

三十話や！」「それ餌やない！起爆スイッチや！」（前書き）

真夏「今日は神室町の名物、名産の紹介やで！これで視聴率は頂きや！..」

一夏「嘘はいけなからな!？」

作者「シリアスだつつうの」

三十話や！」「それ餌やない！起爆スイッチや！」

真夏達は無事、煉獄マンホールのゾンビパラダイスを楽しんで？ジャーナリストの木根に渡すものを渡してアルプスで休んでいた。

「あー楽しかった♪」

「……………」真っ白に燃え尽きた

真夏は満面の笑みで椅子にどっかり座りながら抹茶コーラを飲み、一夏はカレーラムネを白くなりながらもチビチビ飲んでいた。

「……………まなちゃん…楽しそうだな」

「うん！むっちゃ楽しかったで！」

「うん、それは……………よかった」

一夏は苦笑いしながらも真夏が喜んでいると言っ事でまあ行っちゃったかな？と思うのである。

「ん…ホイじゃ行こか？」

「そうだな…そろそろ行こう」

二人は立ち上がり店を後にする。

「ツケで頼むで」

「かしこまりました、またのご来店をお待ちしています」

（ツケっておい……）

真夏は神室町にある全ての店でツケ払いで会計を済ませられるのである、もうVIP扱いである。

「そいじゃあいつちゃん、とりあえずはワークス上山に行こ？弾を持っていかなアカンし」

「そうだな…それに防具も欲しいし」

「うちもこれ少し上山はんに整備してもらわなアカンしな」

そう言つて真夏は腰からSAAを抜き、手なれた手付きでクルクル回している。

（すげえ…本物のガンマン見たいだ）

本物です、歳は低いけど……

「クルクル」と「ツルツ」あ……」

ゴッ！

「ギャンッ!？」

「あ」

真夏はリボルバーを滑らせ、銃は空中を舞い真夏のデコに直撃した。

「ッ!!.....いひゃい...」

「慣れない事をするから.....」

「ひーん!!」

一夏は真夏のおでこを撫でた後、落ち着いた真夏を連れてワークス上山に向かった。

「大丈夫か？」

「おでこが痛い.....」

そうして一夏達はワークス上山に着いてトラックの荷台を開けると

.....

「なあ！頼むよ！！銃を貸してくれ！！」

「あ、アンタ...お金持つてなきゃだ、駄目だよ.....」

上山とホストの様な格好をした男が何やら深刻そうに頼み込んでいた。

「なんやあれ？」

「さあ？」

「まったく…困った人や、こんな危機的状況の中で……」

「あ、あの…ま、まなちゃん？」

「上山はん、ウチらの弾撃ってくれへんか？ツケは東城会からでええから」

そう言つて真夏はトラックの荷台の奥にある弾薬庫に向かって弾を補充し始めた。

「あ、う、うん…わかった………ほ、ホントは違うんだけどね……」

「え？何が違うんですか？上山さん」

「じ、実はこの人、し、舎弟を助ける為に銃が欲しいってい、言っただよ……」

「………え？それってもしかして……」

「う、うん…まなちゃんのか、勘違いだと思う」

（見知らぬホストさん……哀れ）

「いつちやゝん弾持つて行くから手伝つてゝ」

「あ、うん分かった（まなちゃんに言つた方がいいかな？でも地下での戦闘でかなり時間をロスしちまつたし…やっぱり、ここは龍司さん達に合流しないと……）」

一夏は真夏に呼ばれ、弾薬庫ぬ向かう……その後、亜細亜街から脱

出しワークスにきた龍司達によつてこのホスト「ジュンヤ」は武器を手に入れ千冬を口説き防具が欲しいと抜かして千冬に頭を力チ割られたと言う。”欲は良く無いね”。

「さて…弾も持ったし、そろそろ行こか？」

「ああ…」

カシヤカシヤつと真夏と一夏は己のエモノに初弾を装填して準備を整える。

「ふ、二人とも…き、気をつけて」

「おおきに」

「ありがとうございます」

そう言つて二人はトラックから出るそして千両通りから龍司達行つた東進ビルのある泰平通りに東に向かおうとしたが……

「え……」

「壁が…出来てる」

二人の目の前に大きく立ちはだかる自衛隊が設置した壁が立っていた。

「そんな…中におとん達や北島はん達がいるのに……」

「ど、どうしよう…これじゃあ中に入れないぞ！」

「他の入り口を探さへんと……ピンク通りから向かって見よう!!」

「おう」

二人は駆け足でピンク通りから泰平通り東へ行き、目的地に向かうとしたが……

「なんやこの人ばかりは……」

「何かあったのか？」

二人が人が集まっている事に注視していると野次馬の一人が声を出す。

「な、なんだよ……あれ？壁が……」

その言葉に一夏も真夏も泰平通り東にそびえ立つ壁を見ると……

「壁が揺れてる？」

「……こりゃあ……マズイで……!!」

真夏が言った瞬間自衛隊の立てた壁の隙間から幾つもの手がはみ出してくる。

そしてその壁を警護していた自衛隊の一人が言葉を吐く、

「なんて事……」

「……逃げろ!!皆逃げろ!!!!走れ

視点・「郷田龍司」

ワシと千冬嬢ちゃんは今、亜細亜街から抜け出しテツがいるエイジアと言うショーパブに着いた……だが……

「お前は……」

「龍司さんあそこに縛られている人を知ってるんですか？」

「確か……」

そして思いだそうとしていると、テツの声が聞こえたんや。

「見覚え……ありますやる？」

ステージの控えからテツが出て来よった。

「五年前に会ってる言う話やないですか」

（五年前？確かまだ龍司さんが極道だった時代じゃ……）

「この娘は堂島の龍……桐生一馬の泣き所ですわ」

「！-」

思い出したわ……確か桐生と一緒にいたお嬢ちゃんか……

「どういづつもりや？…テツ」

「東条会はもうほつといても終いです、せやけど…まだ桐生が残ってる」

「……………」

「この娘は、桐生を奴をおびき寄せる餌ですわ」

「テツ……………」

「兄貴……ワシと一緒に…昔の郷田龍司を取り戻しましょうや」

「アイツ…何を言って……………」

「今の近江連合はもうあきまへん、せやけどウチと兄貴が組めば近江連合も変わる！！……兄貴はタコ焼いてガキ育ててる様な男じゃないでしょう？」

「……………」

「……………そんな事の為に……………！」

「……………くだらんわ」

「は？」

「ワレえ…そんな事で理由でこないふざけた事しとんのか？……………外見てみい！！どんだけ人が死んどんねん！！近江も東城会もないやろが！！！」

「そら私一人ですさかい、東城会潰す言うたら手段なんて選んられまへんわ…せやからこうなったんわワシのせいちやいまっせ。指一つ動かさん近江連合と……………兄貴のせいですわ」

「クツ…話に「何が昔の郷田龍司さんを取り戻しましょうだ……………」嬢ちゃん？」

「あん？なんやこの娘は？」

千冬嬢ちゃんが前に出てテツを睨む、

「お前は自分の兄貴の嫌いな手段使ってる事すら分らないのか？」

「なんやと……………」

「お前が求めている昔の郷田龍司は唯の幻想だ、龍司さん…タコ三昧の後継ぎ、それが今の郷田龍司だ！」

「千冬嬢ちゃん……」

「……………」

「人に責任押し付ける奴に…龍司さんが付いて行くわけが無いだろ
う！」

「クッ……………」

テツは凶星を突かれた様で顔を苦ませてとる……フッ言つようにな
ったやないか……千冬……

「テツ……その子を離すんや」

「…………交渉決裂つちゆう訳でつか？」

「交渉なんかあらへん、ワレが一人で駄々こねとるだけや」

「まだ目え覚めへんつちゆう訳やな……」

「寝言ほざいとんのはワレだけや」

「ほな……兄貴には頭冷やさしてもらいますわ」

「ああ？」

「？」

テツがそう言い何かあると警戒するが……何もおきへんやないか、
すると千冬が何かに気づき後ろを振り返った。

「!!、り、龍司さん!」

「どしたんや? 千冬……」

ワシも後ろを振り返るとそこには……

「? ……!?, おやつさん!」

ワシの師匠おやつさんがいた……せやけどワシの目の前にいるおやつさんは肌が変色して青白くなり目は赤く光ってたんや……

「な、なんで…おやつさんが、ここに?」

「……もう一度考え直してください」

「テツう! ワレえ……!!」

テツはそう言い残し桐生の娘を連れて行き、テツ自身も部屋から立ち去った。

ワシはおやつさんに向き直り……

「……おやつさん……!?」

「な!?」

ワシが声を掛けると同時におやつさんの体に異変が起きた…頭部の後ろは異常に膨れ上がりまるでタコの頭部の様に大きくなって行く、そしてその後ろからは八本の触手が生えた……

「な、なんなんだあれは……!?!」

「!?!、嬢ちゃん!?!」

おやつさんから生える触手の一本が千冬を攻撃しようとしワシは千冬を庇う為押し倒した。

「グウツ!?!」

「ガアツ!?!」

「!?!、龍司さん!?!」

千冬を庇いワシは壁際まで吹き飛ばされた、千冬は直ぐに起き上がってワシを立ててくれたんや。

「おやつさん……ワシのせいで……こんな……」

「龍司さんのせいじゃありません!アイツが!」

「こんな……!?!」

ガシャツ!! キュイイイインツ! ブルウウウンツ!! ガキンツ!
!!

ワシは黒金丸を解放しておやつさんに向ける、ワシがビビっとった
ら千冬が危険や!

「……堪忍や……!!」

ワシは千冬を…おやつさんを楽にする為、戦った……

時同じくして此処、泰平通り東は今激戦区になっていた。

「さっさとくたばれや!!」

キュイイイイインツ…バチィツ!!!!ドゴオオオオオオンツ!
!!!!!!

「倒れてくれ!!」

パラパラパラパララッ!!!!!!

「キシヤアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

真夏と一夏の怒涛の防衛攻撃によって大軍だった化物は一掃され、避難させた住民は最小限の被害ですんだ。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…ぜえ…」

真夏と一夏の体力は限界に達していた。それでもなお武器は手放さず背中合わせで周りを警戒する。

「いつちゃん…弾は？」

「まだある…そっちは？」

「神雷が最後の電撃でオーバーヒートや……」

真夏が持つ改良されたスパークショット「神雷」の上部は真っ赤に加熱していた。

「……なあまなちゃん」

「なんや？」

「近江ってここまでやるのか？」

「ウチは東城会と中国マフィアにしかダチおらんから分かんへんっ

て」

「あっそ……リロード」

「バックアップは任せい……」

「夏はマガジンを交換するところからともなく声が聞こえる。」

「――な……死――――」

「ん？」

「どしたん？」

「いや……今声が……」

「甘美な……」

「ほらまた！」

「生存者があるんやろうか？」

そうして二人が回りを見渡すと男が一人後ろ向きでたたずんでいた。

「生存者か……いっちゃん周りを見てウチが連れていくさかい」

「わかった」

そう言って真夏はその男の元へ近づき避難する様促す。

「あの！ここは危険ですから、早く逃げて……」

「甘美な……」

「え？」

「甘美な…死を…」

「甘美な…死い？」

男が言った言葉の意味が分からず困惑していると男は真夏に振り替える。

「えーーーーー」

その顔はおでこに穴が開いて目が赤くなっている……林だった。

「甘美な死を…」

ドスッ！

「グウッ!？」

真夏は腹に拳を食らい、意識が遠退いて行く。

「なん…で……」

ドサツと真夏は倒れ、林は倒れた真夏を抱きかかえる。そして異変

に気付いた一夏が振り返る。

「え？……まなちゃん？……まなちゃん！！」

一夏は咄嗟に銃を男に構えて真夏を離すように言う。

「お前！……まなちゃんを離せ！」

「……………」

「聞こえないのか！？離せ！！」

「……甘美な……」

「え？」

「甘美な……死を……」

「何を言っ……！！！」

そう言った林は真夏を抱きかかえたまま走り出した。

「クソッ！！」

一夏も銃を構えるが……

（駄目だ！麻雀じゃあまなちゃんに当たっちゃまう！！）

一夏は駄目もとでおっかけたが化物になった林と五歳児の一夏では勝負にもならない。そして真夏は……

「まなちゃん!!まなちゃん!!クソおお!!」

一夏は壁を殴り怒りを露わにする、真夏は化物と化した林に連れ去られてしまった。

「…………クソツタレ!!ちくしょおおおおおおおおおおお
お!!!!!!!!!!!!!!」

一夏は腹の底から叫び、神室町の夜にこだました……

オマケ・もしもシリーズ・「駿ちゃんがおとんの場合」

「起きろや————!!」

「いぶう!?!」

ウチはソファ―に寝ている駿おとんのお腹に飛び乗って叩き起こす、

「な、何するんだ真夏……」

「おとんが起きないせいや」

「だからってこれは無いだろ……」

「この起こし方しか起きひんやん、それにおかんに見つかったらまた文句言われんで？」

「あゝそうだった……はあ、起きるか」

おとんは起き上がり、ウチを抱きかかえて立ち上がる。

「そんじゃあ集金や、行こ？おとん」

「はいはい……」

そう言っで行こうとしたら入口のドアが開いて誰か中に入ってくる。

「あ！おかん！」

「お？お帰り」

おかんが帰って来てウチらは三人でお仕事の集金へ向かった、だらしないおとんやけどウチとおかんはそんなおとんが大好きや！つつ事で……別の世界のウチは今も家族三人で元気にお仕事してます♪

三十話や！」「それ餌やない！起爆スイッチや！」（後書き）

己の師との対決に苦戦する龍司と千冬……

力及ばず大切な思い人をさらわれ苦悩する一夏……

林に囚われた真夏の運命は以下に……

そして神室町にやってくる伝説の極道は、全てを救う事が出来るか？
こうご期待！！

泰平通り東の激戦とおやつさんとの激闘を並行して書きました。す
こーし原作がちがっちゃいましたけど……

31だ！「悲しみの連鎖は……続くのか？」（前書き）

かん そう まて ます

一夏「こええよ！？なんの真似だ！？」

アレのまねだ

31だ！「悲しみの連鎖は……続くのか？」

ここは神室町のエイジア……そのショールパブで辛い戦いに身を投じている。龍司と千冬……

「クソオオオオオオッ！！！」

龍司は怒りと悲しみで黒金丸を乱射し……

「はああああああっ！！！」

千冬は的確におやつさんからのびる触手を撃ち抜く、だがその内に秘めた怒りは隠し切れていなかった。

「グオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！」

おやつさんは龍司達の一斉射撃に溜まらず吹っ飛ばされる。

「はあ……はあ……クッ！おやつさん！」

「な、何とか……止まった……」

龍司達はおやつさんが止まった事に安堵した束の間、おやつさんの触手がまた再生を始める。

「なんやと？……おやつさん、もう立たんといってくれ……！」

「龍司さん……」

龍司は悲痛に声を出す、だがおやっさんにその声は届かない。

「どうすりゃあ…（カラアアンツ…）」ん？」

龍司は足に当たった固い感触に気づき、足元を見るとポールダンスで使われる先の尖った折れたポールが転がっていた。

「……………」

龍司はそれを拾い上げる、そしてそれと同時におやっさんの……師匠の教えが脳裏に蘇る……

回想中……

「郷田、真夏よ良く見とけ」

おやっさんはタコをまな板に載せる。

「タコをしめる時にはな、急所を一息の突きさしてやんだ」

「「急所？」」

「ああ、下手に加減したりすりやかえってタコを苦しめちまうからな」

「ほえゝ……」

「いいか？目と目の間だ…そこを………フンッ！」

「ひゃ！？」

おやつさんはタコの急所があると言つ目と目の間に突きさす、

「こつやつて、愛情込めてな」

「へい」

（ほ、ほゝい（愛情つて…いろいろあるんやな…てか突き刺す愛情つて…））

「これが一発で決められる様になったら一人前だ……お前らも早く覚えて何時か俺の後、継ぐんだぜ————」

「タコの……急所……一息に……突き刺す……」

「龍司さん？………！？、キャア！！」

「！？」

龍司がおやつさんの教えを思い出していると、千冬が触手に捕まってしまう。

「嬢ちゃん！！」

「クツ！アグツ！！」

千冬を捕まえた触手はじょじょに締め付けられる。

「龍……司、さん！……早く……逃げ……」

「クツ！………おやつさん」

龍司はポールを構える。

「今………楽にしたる………」

「ウア”ア”ア”ア”ア”ア”………」

「―――堪忍や!!」

そして龍司は走り出し、おやっさんの目と目の間に目がけて……

「うおりゃああああああああああああ!!!!!!!!」
「!!!!!!!!」

突き刺した……

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!!!」
「!!!!」

おやっさんは目と目の間にポールを突き刺され激しく暴れた後動かなくなり千冬を解放した……

「キャア!?!」

「フンツ!」

龍司はポールから手を離し、千冬が落ちてくる場所に移動して千冬をキャッチした。

「うっう……!、り、龍司さん……」

「大事ないか?嬢ちゃん……」

「だ、大丈夫です……」

「さよか……」

龍司は動かなくなったおやつさんを見る。

「おやつさんの味は……ワシと真夏がキツチリ……」
「後……継ぎます」

龍司は千冬を抱きかかえたままエイジアを後にした……

視点・「織斑一夏」

「…………クソ……」

俺はまなちゃんを連れ去られ、ただ茫然とまなちゃんを抱きかかえ連れて行ってしまった”奴”の去った方向を見ていた。

「どうしよう……まなちゃんが……」

俺はどうすれば……

「君！大丈夫！？」

「え？」

俺は後ろから声を掛けられ振り向くと、自衛隊の服を着た女性が走って近寄ってくる。

「君、大丈夫？ここで修羅の如く戦ってる子供達がいたって聞いて戻ったんだけど、もしかして君？」

「えーと…戦ってたのは確かです」

「へええ…凄いのね…あんな大軍を………あ！それもあるけど今は私と一緒に避難しましょ？」

そう言って自衛隊の人は俺の手を引っ張って連れて行かれる。

「え、あ、あの……」

「どうしたの？」

「貴方は？」

「そう言えば名前がまだだつたわね…私は浅木美涼^{あさぎ みすず}陸上自衛隊二等陸曹よ」

「浅木さん？」

「ええ…君の名前は？」

「お、織斑一夏です……」

「一夏君ね？それじゃあ早く脱出しましょう」

「……………すみません、それは出来ません」

「え？」

俺は立ち止まり浅木も立ち止まる。

「…………… 大事なところを、取り戻さないといけませんから」

「取り戻す？でもここはもう危険だから早く抜け出さないと……」
「……………」

「それでも……………逃げたく無いんです…大事なところを取られたまま
逃げる訳にはいかないんです！」

俺は手を離して”奴”が走って行った方向に走り出す、

「あ！ちょ！ああもう！」

俺が走り出すと浅木さんも俺を追っかける形で走る、

「待ちなさい！！」

「待てと言われて待つ人はいません！！」

「いう事を聞きなさい！！」

「嫌です!!」

俺は走り続ける、まなちゃんを…真夏を取り戻す為に……

「ま・ち・な・さ・い!!」

「い・や・だ!!」

ここはとあるビルの一室、そこは真つ白な部屋で手術台の様な物に乗せてられ幾つものコードに繋がれた少女がいた。

「……………うつん……………ここは？」

真夏である、真夏は起き上がり周りの状況を確認する。

「ウチい…いったいなんで寝てんのや？それに、この服って……………」

真夏が来ている物は私服だは無く、フィフスエレメントのミラ・ジヨボビッチが来ていた様な服だった。

「なんちゅうセクシな服やな……」

五歳児ある事が惜しい。

「……………てかウチの服って……………ツウツ……！」

腹に急な激痛を覚え、お腹を押さえて蹲る。

「……………お腹痛い………なんやこれ………青アザ出来てるやん」

下を向くとお腹には腹に広がる青いアザが痛々しく残っていた。

「これってあの人がやったやつやよな？……むう……女の子の玉の肌に傷付けおつてからに……！」

真夏は怒り、バタバタしていたが痛みがぶり返してまたも蹲るおバカ、

「いひゃい……てこんな事しとる場合やない！ウチの記憶が正しければ誘拐されたんやよな……そんなら早うここから出えへんと！」

そう言つて真夏は台から下りようとしたが、何かが頭と体に引つ掛かつて動けない。

「あれ動けへん……なんで……や……？」

真夏は別の台に乗っていた包帯を手に取り、今着ている服？を脱ぐ。

「うっう…全裸で包帯って何処のプレイヤ……」

とりあえず傷に巻き終わり、包帯と一緒に置いてあつた大人用の医者が来ている様な白い服を着る。

「ん？名前が書いてある……DD？誰やねん……」

とりあえず真夏は出口がある方向へ向かう。

「開くかな……な分け無いか…」

扉は固く閉ざされていた。

「うっん……そや！あの手で行こう！」

真夏は自分が寝かされていた手術台へ行つてある物を取ってくる。

「この注射器を…」

扉の横にあるカードをスライドさせる装置のカードリーダーに注射器を刺して……

「こうやって……フンツ！「バチッ！」あいたー！？」

装置はショートし扉は開いたが、真夏はショートしたさい放電した電気に注射器を通して痺れる。

「あわわわわわ………」

真夏は体ユラユラしながらも扉から出る。

「……………薄暗いわなあ……………」

白い部屋から出た真夏は薄暗い廊下に出る。

「なんや何か出そうやなあ……………」

真夏は慎重に進む、少し歩いていると廊下の先に半開きで開いている部屋を発見する。

「お？何かありそうやな……………」

そう言つて真夏はその部屋に入る、そこには机とベットにクローゼット、そして本棚があった。

「机を調べて見よか……………」

そう言つて真夏は机の中を調べ始めるすると……………

「お菓子に資料……………それに……………拳銃？」

机の棚の中には、少し古ぼけたりボルバー、「チーフススペシャル」があった。

「弾はある……………装弾数は……………うげ、五発やん……………まあ無いよりましやな……………にしてもウチが抜け出したんに何も無いってどうしてや？」

普通なら警報やら警備の者が来てもおかしくないと思った真夏は不思議がっていた。

「ふうん…他には…うん？これは……」

真夏は机の棚の奥にある古ぼけた日記を見つける。

「ちょっと見して貰おうと……」

真夏はプライバシーを無視して読み始める。

May 9 . 1998

夜、警備員の松田と浅田、研究員の西井とポーカーをやった。
西井の奴、やたらついてやがったがきつといかさまにちがいねエ。
俺たちをばかにしやがって。

May 10 . 1998

今日、研究員のおえら方から新しい化け物の世話を頼まれた。
皮をひんむいたゴリラのような奴だ。
生きたエサがいいってんで豚を投げこんだら奴ら足をもぎ取ったり、
内臓を引き出したり遊んだあげく、やつと食いやがる。

May 11 . 1998

今朝の5時頃、宇宙服みてえな防護衣を着た松田に突然たたき起こされても宇宙服を着せられた。なんでも、研究所で事故があったらしい。研究員の連中ときたら夜も寝ないで実験ばかりやってるからこんな事になるんだ。

May 12 . 1998

昨日からこのいまましい宇宙服をつけたままなんで背中がむれちまって妙にかゆいが何故か気分が良い、だがいらいらするんで、腹いせにあのゴリラどもの飯を抜きにしてやった。いい気味だ。

May 13 . 1998

あまりに背中がかゆいんで医務室にいったら背中にでっけえバンソウコウを貼られた。それからもう俺は宇宙服を着なくていいと医者がいった。

おかげで今夜は気持ちもよく眠れそうだぜ。

May 14 . 1998

朝起きたら、背中だけでなく足にも腫物ができてやがった。ゴリラどものオリがやけに静かなんで、足引きずって見に行ったら数が全然たりねえ。めしを三日抜いたくらいで逃げやがって。おえら方に見つかったら大変だ。

May 16 . 1998

昨日このビルから逃げ出そとした研究いんが一人射さつされた、てはなしだ。

夜、からだ中あついかゆい。気もちいいのに、なんでだ？

胸のはれ物 かきむし たら 肉がくさり落ちやがた。

いたいおれ どうな て

May 19 . 1998

やと ねつ ひいた も とてもかゆい きもち いい

今日 はらへったの、ゴリラ のエサ くら

May 21 . 1998

かゆい かゆい まつ だ きた

ひどいかおなんで　ころし　きぶん　いい
うまかつ　です。

4

かゆい

うま

かん　び

な

「ここで日記は途切れ取る……………」

真夏はこの日記を見てここがかなり危険な場所だと分かった、
そして日記を閉じてチーフスの状態を確認して撃鉄を起こす。

「早よここから出た方がええな……………」

そうして方針を決めていると後ろのクローゼットが揺れる。

「ん？」

真夏が後ろを向いた瞬間　-　-　-　-　-　-　-

ドンッ！あ”あ”あ”あ”あ”あ”！！！！

クローゼットを飛び出してきた人影、ゾンビが真夏目がけて襲いか

かってくる。

「ここにもおるんか!？」

即座に銃を構え――――

ドオオンッ!!!

撃った……

真夏がさらわれ、一日が立った……神室町は朝を迎えた……そして
隔離エリアの外では……

「責任者、出てきてくださいよ!！」

「こんな封鎖違法でしょうが!！」

「あんたら分かってんのか!？」

「町がゾンビに襲われてるって事実なんでしょう!？」

「許されないぞ!こんな事！」

「日本は政治国家なんだぞ！」

野次馬、記者達が壁に前で警察や自衛隊への野次を飛ばしていた…
…そして後ろから、あの男が来た。
そして記者の一人が気づく、

「……………?!、おいアレ……………」

「え？」

そして一人、また一人気づき後ろを振り向く、

「東条会の……………」

「でも、確か町を出たんじゃ……………」

記者と野次馬はその男の道を開けて行く。そして警官の一人が気づき
静止させようとする。

「おいそこの!止まれ!！」

「よすん止めとけ……………」

もう一人の警官が止めた。

「はあ？何なんです…アイツ…」

「……アイツは、堂島の龍だ」

「え！？」

「神室町の…伝説の極道………」

「桐生一馬だ」

その男、桐生は壁の前で立ち止まり壁を見上げる。

「……………」

そして少したってから携帯を取り出しある人に電話を掛けるが……

『お呼び出しの番号は電波の届かない所か現在使われピッ……』

桐生は無言で携帯を閉じる、そして……

プーーーーーッ！！

「な、なんだあれ!？」

「突っ込んでくるぞ!？」

「逃げろお!!」

野次馬達がクラクション鳴らしながら突っ込んでくるトラックに気づき逃げ、警察や自衛隊もそれに気づいて退避する。

ドオオンッ!!!

トラックは桐生の横スレスレを通過して壁に激突して止まる、中に乗っていた極道と思われる人物が這い出て……

「よ、四代目……神室町……頼みます」

「ご苦労だった」

「き、貴様あ!こんなでたらめーーーーー」

警官の一人が桐生の肩に手を置こうとしたが桐生に手を掴まれる。

「今の俺に触るな……何をするか分からねえぜ」

そう言ってギリギリと腕を締め付ける。

「ぐうつう!？」

桐生は手を離し、隔離エリアに入っていく。

「四代目……まなちゃんを…助け……」

そう言っただけの男は気を失った。そして桐生は中に入りゾンビ達が入り乱れる中に入るとその時桐生の肩に一人のゾンビが当たった。

「おい……」

「う”あ”あ”……」

「何処に目をつけてんだ?……………うらああ!……!」

バキッ!…ドゴンッ!…!

ゾンビは桐生に殴り倒され、数人のゾンビを巻き込んで転倒する。ゾンビ達は桐生の存在に気づき近づいてくる、桐生は指をバキバキと鳴らし……

「かかってこいや……まとめて面倒見てやるぜ!」

ここに……堂島の龍、伝説の極道……桐生一馬が神室町に帰って来た……

31だ！「悲しみの連鎖は……続くのか？」（後書き）

一夏「堂島の龍……あの伝説の……」

真島「そや…あれが桐生ちゃんや」

冴島「アレがお前の目指す背中や、一夏」

作者「誰だって目指したい背中だよね……」

32だ！「伝説の龍との遭遇」（前書き）

作者「タイトルが何か違う様な…」

一夏「俺がタイトル予告を出す事になった」

作者「あゝそーいや真夏ちゃん不在だもんね」

32だ！「伝説の龍との遭遇」

「まったく！君が逃げるから一日中追いかける羽目になったじゃない」

「だったらほつといてください……」

「ほつとける訳無いでしょ？私は人として、大人として、自衛隊として君を保護しなきゃいけないの」

一夏と浅木の逃走劇は一日を掛けて終結、浅木の勝利で終わり浅木は一夏の人探しに協力する形で保護した。

「もう足はパンパンよ……」

「俺ですよ……」

ハア…とため息を付く二人、そうして歩いていると行き先の戦車通りで何やら騒がしくなっていた。

「何かしら？今大きな音が聞こえた様だけど……」

「何かがぶつかる音でしたね……」

二人は何かあると思い急いで戦車通りに向かうと……

「あれは！……」

「人がゾンビに囲まれてる！……」

白いスーツを着た男がゾンビ開いてに素手で奮闘していた。

「何アレ？」

「人間？……あ、今ゾンビが飛んだ……」

「凄いわね……二メートルは飛んだんじゃない？」

「ふえゝ……じゃなくて助けないと！」

二人は男の救援に向かう……そして一夏は、生きる伝説に出会う。

視点・「郷田真夏」

「うっくん……うっくん………とりゃ！」

ドンッ！

ウチはロッカールームの倒れたロッカーの中で仮眠を取り、ドアを蹴破って中から出る。

「ふうん……よう寝たはあ………」

まあ仮眠どころか熟睡してたんやけどな、にしてもロッカーの中ってなんやえろっ快適やなあ、なんかこう…人間はこうあるべきだとか、本来の姿だとか…安らぎの様な物を感じたわ……

「まあ好きで入る人なんていやしないんやけどな」

とりあえずウチはロッカールームの鍵を開けて廊下を出る窓から見える朝日に照らされる。

「一日たったんやな……早ようここから出えへんと………」

手術台で見つけた大人様の白衣を着直し、廊下をひた走っているとウチはある扉ってちゅうか金庫とかに使われてそうな強固な扉があった。

「なんやこれ？でつかいわあ………」

近づいて見ると扉の横に何やらボタン式の端末があった。

「ほおほお…これに数字を入力して扉を開けるんやな」

せやけど、ウチ解除コードなんて分からないわあ……

「ここはスルーした方が「ズキッ」いつつ……」

急に両目に痛みが出てきたんや、てか無茶痛い！

「つうー……なんやったんや？さっきの痛みは……」

ウチは両目から手を離して目を開けると不思議な事が起きた。

「なんなんやこれ？ボタンの上になんか浮き出てる」

さっきまで唯の端末やったんやけどボタンの上には何やら諮問の様な物が浮かんでいたんや、

「……………これの通りに押せば開くんかな？」

とりあえず押してみよ……

「1、6、3、5…ハズレ、6、5、1、3…外れ、5、3、1、6…「ピー」あ、開いた……」

おお！？開いたで！なんや分からんけどラッキーや！
ウチは中に駆け足で入り、中を見て見ると……

「こゝ、これは……」

扉の向こうには世界中から集められた様な……

「なんて夢の様な……！」

美しく黒光りする……

「ウエポンズなんや……！」

兵器らが収められていた。

「ここって武器庫やつたんか！道理で嚴重な筈や！」

ウチは飛び跳ねる様に掛け周り壁のいたる所に掛けられている武器を取る。

「AKにクルツ……それにガリルやステアー、オマケにファマスに……おほ♪キャリコやトミーガンまであるやん♪」

まるで夢の様な所やあ……マニアにはたまらんで！

「奥にはタクティカルベストやホルスターまであるやんなんや用意がええなあ！」

ウチは装備品ベースに走りよる。

「これって確かドラゴンプロテクター？ウチと同じサイズやん……もーらいっ」

白衣を脱いで近くの棚にある戦闘服や下着なのがあったてウチはそれを着て装備品を付けたしていく。

「ん…サイズはバッチリや！……せやけどなんでウチのサイズがあるんや？」

不思議やわぁ……ん？

「あれって……ウチの武器やないか？」

一番武器庫の奥に飾られている様に置かれている神雷を見つけて取ってみると、

「重！？なんやのこれ…強化されとる？」

せやけどこれは重いわぁ…これじゃあ自由に振り回せえへん……

「大人でも扱いが難しそうやぁ……」

「私のエレクトロマスターはお気に召さなかったかい？」

後ろから声を掛けられ、即座に武器庫で見つけた虎撃銃を構える。

「誰や？」

「おやおや、物騒だね……」

ウチの後ろに立っていたのは、白衣を着た男性やった。

「物騒なんはこのビルや、で…誰なんや？」

「人に名前を聞くならまず先に自分から名乗るのが礼儀じゃないか

い？」

「……………郷田真夏」

「私はDDと呼んでおくれ」

「DD？確かウチが来てた白衣に縫ってあった様な……………」

「まあ自己紹介はこれぐらいにしよう」

「そうやな……………そんで、なんか様なんか？」

DDと言う男はクスクスと笑いながらウチに近づいてくる、ウチはDDの脳天に照準を合わせる。

「撃つのかい？人間の僕を？」

「ゾンビも元は人やった……………覚悟は出来てるつもりや」

「そうかい、とりあえず銃を下ろしてくれないかい？」

「はい、分かりましたって言つて下ろすと思う？」

「それもそうだね、でもね……………君は僕のお願いを聞いてくれる」

「何を言つて……………」

DDはニヤリと笑い、言葉を口した瞬間

「銃を下ろしてくれないかい？……………イザナミ」

「はい……………！？」

ウチ今なんて言った？

「銃をしまっんだ、イザナミ」

「はい……………」

ウチの考えとは裏腹に勝手に口と体が答えて銃をしまっ、な…なんやの、これ！？

「ありがとう」

「な、なんで？なんでウチはあんたの命令を！？」

何でウチはアイツの言うとおりにしとるんや、なんで！？

「アンタ……………なにもんや？」

「僕かい？僕は唯の武器商人さ」

「武器商人？」

「フフフ……………もう少し君とお喋りしたかったけど、二階堂にばれるところさいからね……………起きなさいイザナミ」

「？……………つつっう！?!？」

DDの言葉に反応したかの様にウチは頭に激痛が走り、目も痛くな

りだしよった。

「あああああ！！！！」

「ふむ…まだ調整途中で起きたから洗脳が甘かったかな？まあいいか……時期に楽になれるよ？」

「ふう！…うぐああ！！！」

ウチはその場で頭を押さえて蹲る、そして目の痛みが引くと両目を開けるそこにはキレイに磨かれ自分の顔が地面に移ってたんや、せやけど……・

「め、目が……」

「やっと覚醒しだしたんだね？調整の途中だったから心配だったけど」

「う、ウチの目が……金と赤の…オッドアイ？」

あ、アカン……頭の痛みでどんどん意識が……

「なに……を…したん…や……」

「林が君を連れて来た時、少し血液検査をさせて貰ってね君が適合者だったから投与して見たけど貴重なデータが取れたよ」

「……………！！」

「まあそう恨まないでくれ、君の事は知っている」

「なに……を……?」

DDはウチの顎を持ち蹲っている状態で顔を上げさせる。

「桐生一馬が……憎いかい?」

ウチはその言葉を最後に意識を失った。それと同時にウチの中から嫌な物が膨れ上がって来た……それが後に復讐心やとわかったのは直ぐの事やった……

「銃は子供のオモチャじゃない」

「えっと……」

「この状況でよくそんな事が言えるわね?」

一夏と浅木が助けた男、桐生は安全な場所に着くと一夏の銃を取り上げたのだった。

「今の神室町にはそれは必要よ？分かってるでしょ？」

「だからと言って子供に武器を持たせる訳にはいかねえよ」

「で、でも…それが無いといとこを助けられなくてですね……」

一夏は東城会の人間から聞いた伝説の龍だと知り、慌てふためいてはどう返してもらえばいいか迷っていた。

「……………」

「だから…そのお……（こ、こええ……）」

「返してあげれば？じゃないとこの子がゾンビになる事になるわよ？」

「……………」

桐生も今の神室町の現状がかなり危険な状態だと分かっており、やむを得ず一夏に返すのだった。

「お前、名前は？」

「あ、はい織斑一夏です」

「一夏…お前が握ってんのは、人の命を奪う為の物だ……その覚悟はあるのか？」

「…………正直、よくわからないんです…ただ俺はいとこが危険な目にあってると思うといても立ってもいられなくて…………」

「…………そうか」

「それよりも…はいこれ、上げるわ」

浅木は桐生に拳銃を渡す、だが…

「いや、必要ない」

「え？」

「…………撃てないって事？ゾンビになった人達を？気持ちは分かるけど…でも彼らはもう…………助けられない…そんな事を言ったら、貴方…死ぬわ」

「…………いらねえ世話だ」

「え？…あ、あの何処に行く気ですか？（えゝ…俺に覚悟を聞いたのにそれですか？）」

「女の子を探している」

「娘さん？」

「娘も同然だ」

「アテはあるの？」

「いや……」

「なら神室町ヒルズに、生存者が集まってるらしいわバリケードを張ってね…そこでなら何か分かるかもしれない」

「ヒルズ………冴島さん無事かな……」

「？、一夏…冴島を知ってるのか？」

「え？あ、はい知って「パンツ！」！！」

突如銃声が聞こえ、一夏と浅木が銃を取り出す、

「銃声？…下！？」

「神室中央パーキングからです！」

「行くわよ！一夏君！」

「はい！」

一夏と浅木はパーキングの階段を下りて向かう、そして桐生もその後を追った。

32だ！「伝説の龍との遭遇」（後書き）

一夏「ま、まなちゃんが……」

作者「外道め！二階堂に黙って真夏ちゃんにあんな事やこんな事を
！」

DD「そう言う趣味は無いよ？」

33だ！「桐生さんの覚悟、そして危険な引っ越し」（前書き）

作者「今年最後の最新じゃあああああ！！！！」

二階堂「気合入ってるなあ……」

DD「まあ最後だからね……新年も皆私の活躍を期待してくれたまえ」

二階堂「誰も期待なんてせえへんって……」

33だ！「桐生さんの覚悟、そして危険な引っ越し」

神室中央パーキングに着いた一夏と浅木そして桐生は倒されたゾンビと足を引きずって倒れている青い服を着た男を見つける。だがまだ生きているゾンビがいる為一夏と浅木はそれを排除する。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

パラッ！パラッ！パラッ！

「あ”…”」

「あ”あ”…”」

「……………止める」

「もうすんだわ」

「……………」

一夏と浅木は銃を下ろし、倒れている男の元へと行く。

「あなた、大丈夫？」

「あ、ああ……………なあ、アンタもしかして…桐生さん？」

「え？」

男は立ち上が

「俺、長濱つてモンです…桐生一馬さんだろ？」

「知ってるんですか？」

一夏が聞いて、浅木も目線で問いかける。

「……いや」

「一方的なファンさ…伝説の極道………堂島の龍」

ホントに有名人だなあ…と呟く一夏と、

「へえ…ホントに有名人なのね」

「俺あ…アンタに憧れてえ…この街に着た様なもんだ………」

「ん？…！？」

一夏は男の背中に噛みつき後を見つけ素早く麻雀を抜く、

「桐生さん、離れてください！！」

「何？」

「一夏君！？…あれは！！」

浅木も銃を男は向ける。

「ああ………」

ドサツと男は倒れる。一夏は桐生の前に出て銃を構える浅木も銃を構える。

「長濱さん…貴方、噛まれたのね？」

「あ…ああ…き、気持ちいい…!!」

ガクツと首を倒し長濱は息絶えた。

「…………手遅れよ」カチャ

「待て」

桐生は一夏のを下に下げさせ浅木の拳銃を握る。

「離して!この人はもう、人間じゃない…」

浅木が説明しているよ長濱の手がピクリと動き、やがてその体を起こし始める。

「体の中に入りこんだゾンビの毒は、やがて人を死に至らせる……そして死者は…歩き始める」

長濱は起き上がったが、長濱の顔は血の引いた青白い肌と赤い瞳に代わっていた。

「離して」

「撃つな」

「でも！」

「そ、そうですね！あの人はもう――」

「一夏、浅木」

桐生は一夏と浅木の前に出て長濱を見据える。

「手を出すんじゃないえ」

桐生は長濱に構える、そして長濱は……

「……う
” お
” お
” お
” お
” お
” お
” お
” お
!!!」

悲しき長濱の雄叫びがパーキングに響く、そして長濱だったゾンビが桐生目がけて襲いかかるが、

「オラアア！！！」

バキッ！！

「あ……」

桐生の腰の入ったパンチに長濱は吹っ飛ばされる。だが長濱は何事も無かったかの様にその場から立ちあがる。

「桐生さん！ゾンビに素手じゃ無理ですよ！」

「一夏は麻雀を構えて加勢しようとするが……」

「邪魔すんじゃないねえ!!これは俺と長濱の喧嘩だ!!」

「っ…………でも!!」

「見てろ」

「え？」

「俺達を見てろ……一夏」

「……………」

「一夏は無言で銃を下ろし、桐生と長濱の戦いを見守ること五分……」

「はあ……はあ……………お前……」

「あ”……あ”あ”……」

「フンッ！」

バキンッ！

「はあっ！」

バキンッ！

「せあっ！」

ドゴンッ！

長濱は桐生に殴り飛ばされ、宙を舞う…そして桐生がたたみ掛け様としたが……

「もう止めて！……もう十分でしょ？」

「浅木さん……」

桐生が浅木に向く、一夏もこれ以上見たくないのか桐生を見る。

「楽にしてあげようよ……ごめんね…長濱さん……」

そう言つて浅木は銃を長濱に向けるが桐生がそれを前に出て塞ぐ、

「待て」

「嫌よ！まだ分からないの！？この人はもう……」

桐生は急に浅木の握っていた銃を奪い、それを手に取る。

「え？」

そして桐生は長濱にゆっくりと銃を向ける、

「桐生さん……」

「……」

一夏と浅木はそれを黙って見守る…そして…

「長浜……」

「う”あ”あ”……」

立ち直った長濱は桐生に歩き、じょじょに走りだして桐生に襲いかかる。

「……先に……逝っててくれ」

パンツ！と言う銃声がパーキングに響いた、そして桐生は銃を下げ倒れ伏した長濱の目を閉じる。

そして桐生も瞳を閉じて何かを決意した様に再び目を開けて一夏と浅木を見る。

「……行きましょう…神室町ヒルズへ」

「……」

そう言つて浅木はパーキングの出口、隔離エリアの外に繋がる道へと行く。桐生と一夏はそれに続きこの場を後にした。後に一夏は桐生の瞳には…覚悟の光が宿っていた後から言う……

一方桐生達が目指していた神室町ヒルズは……………

「冴島組長！！防衛ラインは持ちません！これでは市民にも被害が！！」

「わあつた！ワシが加勢する！兄弟、ここは任せるで！！」

「おう！行つてこいや！！」

大吾率いる東城会は避難して来た市民をサイの河原に移動させる作戦を開始していた。

「真島組は防衛に徹しろ！安住組は一般市民の避難を急がせるんだ！！私の部下は冴島組と真島組の援護に向かわせる！！」

「……………ウツス！！……………」

（クツ！！市民の誘導は順調だが幹部達の被害が大きい……真夏ちゃん見たいに上手くは行かないか！）

大吾は苦虫を噛みしめた様な表情で指示を飛ばす、

「六代目！正面から新手大軍です！」

「クソッ！！私が行く！お前達は早く避難民をサイの河原に！」

「ろ、六代目自ら!？」

「いいから急げ!!」ここでやられたら真夏ちゃんに泣かれると思え

「う、ウッス!!」

六代目に報告した幹部の一人は市民達を一刻も早くの目的地のサイ
の河原に避難させる。

「……もう一踏ん張り、だな！」

大吾はショットガンを構えゾンビが押し寄せる前線にへと向かう。

「真夏ちゃんが守った人達に手はださせねえ！！」

決意固く銃を握りしめた六代目は幹部達と合流してゾンビを撃ち始める。

「六代目え！！あんまり前に行かなや！」

「分かってますよ!!」

二人の散弾銃が砲火を上げてゾンビを蹴散らし、冴島はバリケードの破片を振り回してなぎ倒して行った。

[illegible]

え！！！！」

「兄弟も張り切ってるのお…ワシらも負けてられへんわ！！」

「同感です！！」

真島と六代目はショットガンを撃ち続ける、その先に生還があると信じて……

「フッフ……あの子のデータはホントに良質だねえ……ドイツの変態達と培った研究が役にたったよ」

一人の白衣を着た男が薄暗い廊下を歩く、

「変異種をいともたやすく倒しアラハバキをナイフで倒してしまうとは……彼女の細胞はソルジャー遺伝子の可能性があるね、それに部下が施した洗脳を解こうとするあの強固な精神……波の子供が持

つ物では無い。タナトスを直接打たずによかった」

男はクツクツと笑いだす、

「彼女なら良い実験が出来るが、せっかく見つけた試験体でもったいないし……どうしようかなあ……」

男が考えるそぶりを見せると何か思い出した様にポンツと手を叩く、

「彼女には確かいとこがいたねえ……確か……織斑と名乗ったか、あの子達も研究に使えるそうだ……」

男は新しいオモチャが見つかったかの様に鼻歌を歌って廊下を歩いて行った……

オマケ・「後悔はしてる！反省はしてる！が！やりたいからやる！……仮面ライダーシャイン！燦上！」

神室町の惨劇……それは死者が歩きだし人を食らうと言う悲惨な事件やった……

せやけどある伝説の……四人の戦士によって解決された筈やった……タナトス、それは人をゾンビ、化物に変える悪魔のウィルス……それはまだ駆逐されてはいーひんかった。

タナトスは世界中のテロリストに渡り人々に恐怖を与えてたんや。それと同時にそのタナトスを改良し強化された新型ウィルス「ヒュブノス」の開発によってさらに深刻になったん……

ヒュブノスは人の中に入ると直ぐに細胞に初歩して体の遺伝子を変え、人を化物化させる即効性のウィルス……人型を保ちつつ体は大きくならざるで怪人の様な容姿に変貌して人々を襲い仲間を作る習性を持つ、警察と自衛達はこの怪人「デストルドー」を殲滅しようとしたんやけど、全然歯が立たなかった……そしてここ神室町にも、そいつは現れたー……

「きゃあああああああ……！！！！」

「グオオオオオオオオオオオッ！！！！」

一人の女性がデストルドーに追われていた。

「誰か！助けえー！」

女性は必至に助けを呼ぶが皆デストルドーに怯え助けに行けなかった。そして女性は壁際に追い込まれてしまった……

「あ……いや……いやあ……！！」

「グオオオオ……」

怪人デストルドー、「ハサラマード」は手にくっ付いている両手のハサミをジヨキンジヨキン！と鳴らせにじりよる。

「誰か……だれ……か……」

「グオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「助けて――――！！！！」

女性は大きく助けを呼び、そして……

「そこまでだ！」

「
え
-
-
-
-
-
-
-
」

「グオ？」

ビルの屋上に立つ一人の男……

「神室町の人々に手出しはさせねえ！」

その男はビルから飛び降り女性とハサラマードの間に着地する。

「お前らに神室町を……いとこが愛した神室町を好きにはさせねえぞー!!」

そして男はジャケットのポケットから太陽の形をしたベルトを取り出し、腰に装着する。

「この俺、織斑一夏がな！！変身！！！！」

『SHINE UP！！』

ベルトから機械の音が聞こえ、一夏の周りに粒子が渦巻き、一夏に触れると体全体が黄金のアーマーが装着され顔は太陽を象った仮面が装着される。篠ノ之博士が真夏に頼まれて作った変身ベルト、その名は「仮面ライダーシャイン」！！

「今日も燦々と輝くぜ！！」

一夏は腰からシャインブレードを取り出し、構えハサラマーダに切りかかる。

「ハッ！」

「グオオオッ！！」

ハサラマーダ切られ、一夏は連続攻撃をする。その度にハサラマーダは切られる事に体から火花を上げながら後退する。そしてハサラマーダは状況が不味いを思い大声を上げる。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！」

「！！、仲間を呼ぶ気か！？」

ハサラマーダの声に反応したのか何処からともなく次々とデストルドーがやってくる。

「クツ！？まなちゃん！！！」

「はいな♪」

とおっ！掛け声を上げて一夏の近くに着地した色が派手なフリフリの服を着た……

「ラブシャイン、デスペラード！参上や！！」

そう言って参上したのは郷田真夏だった。

「まなちゃん！後ろの奴らを頼む！」

「お任せあれ♪」

そう言って真夏はラブシャインステッキを取り出して行きよいよく振り上げる。

「ヤクザル♪ドスカル♪イテコマル♪」

呪文の様な言葉を発していると真夏の前に粒子が渦巻、そこに”何か”が形成される。

「多連必殺のおお……ラブシャインバルカンじゃあああああああああああああああああ……！！！！！！！！」

真夏は呼び出されたラブシャインバルカンを構え、デストルドーに向けてぶっ放す。

仮面ライダーもどきとラブシャインもどきは何とも怖いヒーローと
ヒロインだった……

33だ！「桐生さんの覚悟、そして危険な引っ越し」（後書き）

作者「オマケはツツコまないで……著作権とかで訴えられちゃう……」

二階堂「じゃあねんで出したんや？」

作者「……オーズさんや月光丸さんの影響で……」

DD「このオマケって本編に出るのかな？」

作者「さっき言ったお二人に許可が出れば……なあと？」

二階堂「小心者め」

DD「小心だねえ……」

作者「うつさい……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589v/>

IS いとこが如く

2011年12月31日18時47分発行